光よあれ

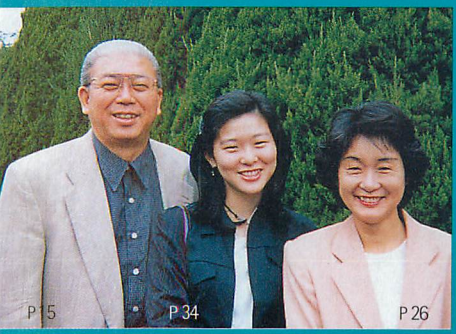
私たちは主のもの 144人の証し シリーズ第9集

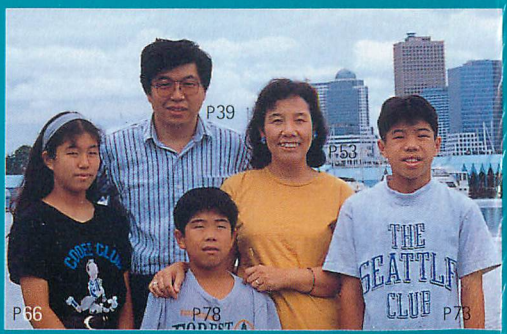


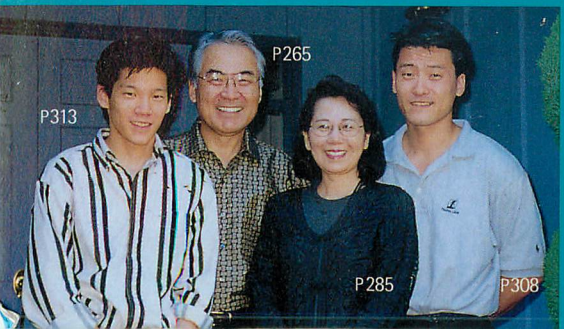














光よあれ

私たちは主のもの 144人の証し シリーズ第9集

キリスト集会

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、
あなたの恵みとまことのために、
栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。
（詩篇　115・1）

光よあれ

私たちは主のもの　百四十四人の証しシリーズ第9集

キリスト集会　編

はじめに

ゴットホルド・ベック

またここに、新しい証し集「光よあれ第9集」が生まれました。なぜ、このような証し集が次々に生まれてくるのでしょうか。それは、毎日、毎日、人々はイエス様に出会って生きる希望を持つようになり、また信仰を持つようになり、その結果、自発的に自分が経験した救い主イエス様のことをを心から紹介したい、と望むようになるからです。

ここに登場する人々は、解決されない問題に苦しんでいても、病気がいやされていなくても、すべてが真っ暗闇に見えても、「喜ぶことができる人々」です。彼らは、現代の不安で不確実な世の中にあって、心配せず、前向きに生活できるようになった人々です。そして彼らは確信しています。「死は終りではない。私たちの国籍は天国にある」と。

これらの人々は、何かの「組織」に属しているわけではないし、ある「宗教」の会員になっているわけでもありません。ただ、「私の罪の債務は赦されている。主イエス様は私のことをいつも考えて心配してくださり、こんな私でさえも愛してくださっている」と、知っている人々です。

何でもできるお方、イエス様によって愛されていることは、まことの幸せです。

現代に生きる人々は、お説教など聞きたくもないでしょう。しかし、主イエス様が、あらゆる心配から、不安から、束縛から、恐怖から、解放してくださるお方だという事実を聞くと、耳を傾けないわけにはいきません。主イエス様は、この世にある多くの「組織されたキリスト教」と

は関係のないお方です。すなわち、本来、無「宗教」のお方です。
この本で証しを書いている皆さんについて、次のように言うことができるでしょう。

（彼らは助けを得た。）それは、彼らがその戦いのときに、神に呼ばわったからである。

彼らが神に拠り頼んだので、神は彼らの願いを聞き入れられた。

（Ⅰ歴代史　5・20）

人はこの世の生涯の終り、葬儀のときにいろいろなことを言われるでしょう。「彼はがんばって、努力して、成功し、大金持ちになった」。または、「彼女はいつも問題を作りだし、いっしょに住むのはとてもむつかしかった」。または、「彼は仕事の鬼で、家族の孤独など顧みたこともなく、仕事についてしか考えられなかった人だった」…。

私たちは生きている間に、よく考えてみなければなりません。私たちの生涯の終りは一体どうなるのでしょうか？　永遠に残る「実」があるのでしょうか。それとも私たちの生活は、結局まったく的外れのものに終ってしまうのでしょうか。

この証し集の中で証ししている人々はまた、「祈る」ようになった人々です。

彼らは神に呼ばわった。彼らは神に拠り頼んだ。

これらの人々は皆、主イエス様の御名を呼び求めるようになり、主イエス様に絶対の信頼をお

くようになった人々です。これらの人々は、祈りが聞き届けられることをとおして、生きておられる主イエス様の「助け」を経験したばかりでなく、「主イエス様ご自身」を深く知るようになったのです。

彼らは助けを得た。

主イエス様に祈らない人々には、希望がありません。ですから主イエス様は言われます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

三千年前に、ダビデ王は次のように主に告白することによって、多くのものを主からいただきました。

罪を犯したのは、はなはだしい悪を行なったのは、この私です。（Ⅰ歴代史　21・17）

私たちも、「主イエス様。私たちのわがままのために十字架につけられ、私たちの代わりに罰せられ、私たちの代わりに罪の代価を支払ってくださったことを、感謝します」と、心から祈ろうではありませんか。

目次

はじめに　ゴットホルド・ベック　7

光よあれ　私たちは主のもの　一四四人の証し　第9集

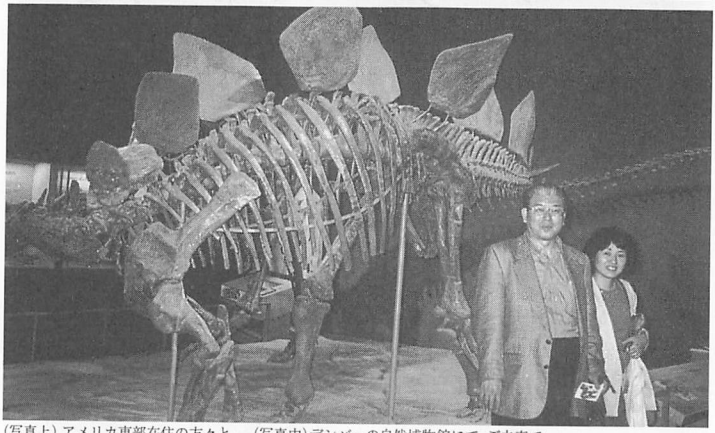
1「それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした」　岩崎　洋二　15
2 神がこのことをされた　岩崎　直美　26
3 主の用意された道　岩崎　愛　34
4 旅の途中で　野田　房男　39
5 別の名を「愛」というお方　野田　洋子　53
6 ともに歩まれた主　野田　牧子　66
7 イエス様の恵み　野田　尚広　73
8 いつも神様がそばにいてくださった　野田　恵太　78
9 主はあなたの道をまっすぐにされる　井出　和雄　82
10 イエス様助けて！　そして、ごめんなさい　井出　智子　94

11　イエス様に導かれて　カナダにて　南場　良光　108
12　イエス様が手を取って　私たち家族を成長させてくださいます　南場　京子　121
13　大好きなイエス様　南場新太郎　136
14　主にあって喜ぼう　岩本　秀造　142
15　心のふるさと　岩本　範子　156
16　奇しい御わざに支えられて　ストーバー勝子　173
17　すべてのことをなしとげてくださる主　酒井　正人　187
18　弱さの内に現われてくださったイエス様　酒井　美恵　198
19　主の愛を分かちあう喜び　福元謙六郎　211
20　主のいつくしみ　福元登茂子　223
21　イエス様との出会い　福元　亜紗　230

22 主は、わが岩、わが砦　緒方　健　235
23 あなたこそ私の神　緒方　啓子　249
24 試みと恵みを通して　中津　泰明　265
25 私の思いをはるかに越えて　中津巳美子　285
26 みんなにも知ってほしい　中津　泰英　308
27 イエス様の愛の中で　中津　泰治　313
28 愛の神に救われて　グラハム喜代子　318
29 与えられた真理への道　浅野　寛治　333
30 真理を教えてくださったイエス様　浅野　温子　409
31 歩み始めた一歩　中上　和弘　426
32 主はまことの救い主　中上こずゑ　432
33 不思議なことばかり　松島　悌二　442

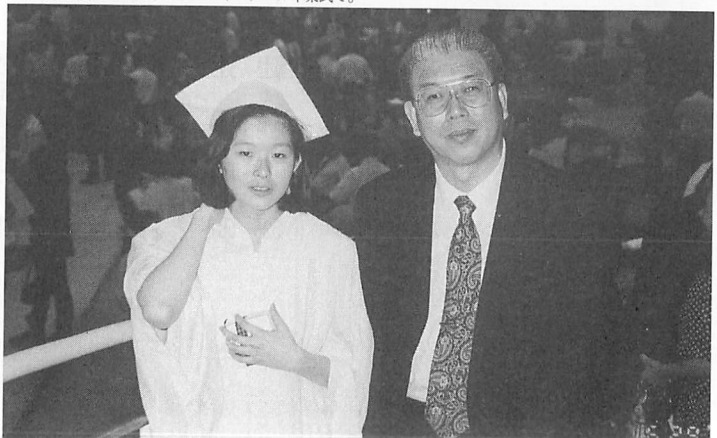
34 すべてを益として　松島真知子　455
35 賛美する身へと変えられて　堤　堅太　469
36 麗しい天国への小道　堤　道子　483
37 主によって練られ、建て上げられる　辻　陽一郎　501
38 尽きることのない主の憐れみ　辻　純　526
39 すべてを主から　飽戸　安子　553
カラーページ　一〇五人の証し　353〜408
基礎的なみことば　562
キリスト集会出版物のおすすめ　564
世界のキリスト集会のご案内　573





(写真上) アメリカ東部在住の方々と。 (写真中) デンバーの自然博物館にて。ご夫妻で。

お嬢さんの愛さんのグリニッチハイスクール卒業式で。



「それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした」（詩篇56・13）





（写真上）1995年ロス「よろこびの集い」で。

岩崎洋二

一九四四年東京都大田区に生まれる。川崎市立玉川小、玉川中校、神奈川県立川崎高校、東京工業大学電子工学科を卒業。一九六七年に住友商事株式会社入社、主として電力プラント輸出を担当。一九七〇～七三年米国ニューヨーク、ロスアンゼルス駐在、一九八〇～八四年南米コロンビア駐在、一九九〇～九六年再度米ニューヨーク、ロスアンゼルス駐在を経て、現在は住商テレコム㈱社長、住商情報システム㈱常務取締役。杉並区久我山在住。家族は妻直美さん、長女愛（めぐみ）さん。

一九六七年四月に、現在も勤めている会社、住友商事に入社しました。理工系の大学を卒業したので、そのまま行けばどこかコンピューターメーカーに就職していたかも知れませんが、いきさつがあって今の会社にお世話になることになりました。そして、一九七〇年から三年あまりニューヨークとロスアンゼルスに駐在しました。帰国して直美と結婚し、長女の愛が生まれて五歳の時に二度目の駐在地である南米のコロンビアに発令になり、一九八〇～八四年の四年弱をボゴタに駐在しました。後にニューヨークで救われた同じ会社に勤める伊藤一秀さんが、八三年末にボゴタに赴任してきて、半年ほどいっしょに働きました。

キリスト集会に導かれる

そしてコロンビアから帰国して二年後に、吉祥寺のキリスト集会に導かれ、イエス様の救いにあずかりました。初めて吉祥寺キリスト集会の礼拝と福音集会に出た時のことは忘れません。それまで集っていた教会とは異なり、イエス様に導かれるままに男子の信者が次々に立って主に感謝のお祈りをし、聖歌のリクエストがされ、皆で聖歌を歌って主を賛美する。そして、福音集会では、それまで聞いたことのないようなわかりやすいお話でした。それも聖書のみことばを他の聖書のみことばで学ぶ主からのメッセージで、吸い込まれるように聞き入りました。メッセージをしてくださった方はどこの牧師さんだろうかと後で聞いたら、自分と同じ普通のサラリーマンで、このキリスト集会ではベックさん以外には宣教師もおらず、メッセージは集っている普通の人たちがしていると聞いてまたびっくりしました。

私はそれまで集っていた教会を出て、吉祥寺のキリスト集会に毎週集うようになりました。春と夏には軽井沢で「よろこびの集い」と呼ばれるバイブルキャンプがあり、そこに集う方々と仲よく語りあうのが楽しくて、ひとりでも出かけていきました。なぜか聖書が読みたくなり、創世記からヨハネの黙示録まで一気に読み、また、飛び飛びにもう一度最初から読み返しました。以前は聖書の文字は字ずらだけが目の前を過ぎていく感じでしたが、乾いた土に水が染み通るように読みふけりました。

その頃です。キリスト集会に集うにつれて何か息苦しさを覚えるようになりましたが、やがてそれは自分の罪を自覚するようになったからだと知りました。そして一年ほど経った市川キリスト集会での礼拝で、初めて立って主に祈りました。「自分は良い人間だと思っていましたが、実際はそうではなくて罪のかたまりのような人間です。その私の罪はどのようなことをしても自分では償うことができません。その罪を私の代わりにすべて背負って十字架の上で死んでくださり、罪をあがなってくださって、イエス様、ありがとうございます」。そのように感謝しました。そして不思議なことに、その一年の間に、以前は毎日のように飲んでいたアルコールが自然と遠ざけられ、生活の中の価値観も変えられていきました。イエス様が中心となり、平安の中に喜びのある生活になりました。仕事は主から与えられるものであり、さらに責任感をもって当たれるようになりました。生活の糧を得られる仕事も、家族も、住む家も、毎日食べることも、歩くことも、休むことも、ひとつひとつが感謝できるようになりました。

それ以来、毎週日曜日にキリスト集会の礼拝、パン裂き（これは聖餐式とも言いますが、イエ

ス様の十字架のあがないを忘れないためにパンとぶどう液を聖書に従っていただきます）、福音集会、そして皆様と語らう楽しい時間を過ごすようになりました。

天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。…わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

（詩篇　103・11、2～5）

ニューヨーク駐在へ

吉祥寺キリスト集会と市川キリスト集会に集って四年目の一九九〇年十月に、三度目の駐在発令を受けました。場所は二度目のニューヨークでした。

その頃は、集会の喜びの輪の中にどっぷりと浸って毎日が平安と喜びの連続でしたから、そこから抜け出て、パン裂きも礼拝も家庭集会もない場所に移されることに大きな不安感を覚え、祈りました。「なぜ、今喜びと平安に満たされている毎日から、遠いニューヨークに移り住まなければならないのでしょうか。その意味は何なのでしょうか」。祈りつつ、会社の帰りに吉祥寺のベックさんのお宅を訪ねて相談しました。

「パン裂きはどうしたらよいのでしょうか。イエス様を信じる者同士のつながりと語らいがなくなってしまうのではないかと不安で仕方ないのですが、どうしたらよいでしょうか。近くの教会

に行くべきでしょうか」。こうたたみかけて質問する私に、ベックさんは全く問題ないという表情をされ、「聖書には、パン裂きも礼拝もこうしなければならないという決まりなど何も書いてないよ。どうしても集会に行きたいならニューヨークにもアメリカ人が集まる集会もあるよ」と、住所などを教えてくださいました。

ベックさんと話して不安感は半減しましたが、救いにあずかった家族三人だけの小さい群れが、一体どのような主のご計画の中にあるのか、わからないまま十二月初めにまず私が赴任しました。そして約一ヵ月遅れて十二月末に妻の直美と娘の愛がニューヨークに着きました。

駐在地での住む場所は、ニューヨーク市内ではなく、不思議な方法で、すぐにコネチカット州のグリニッチに決まり、家を与えられました。勤務地はミッド・マンハッタンでしたが、そこからコミュータートレインでたっぷり一時間乗り、駅からまた車で七、八分のところにある、緑が多く、大西洋につながる海にも近い高級住宅地です。数年後にここで、初めての、それも三百人もの人が集まるニューヨーク「よろこびの集い」が行われるとは思いもしませんでした。

仕事はそれまで任されていた営業部門から、新たに開発部門をやるように言われました。ここでも、着任早々力を入れ始めた開発の仕事が、半年も経たないうちに不思議な形で大きなプロジェクトの成約に結びつき、しかも、駐在している約六年の間に、同様の成約が続いて数件まとまりました。

今思い返してみると、そのために仕事面では安定した駐在期間を過ごすことができたのです。そして、この連続成約のおかげで何度も日本に出張することができました。日本で、仕事が終わっ

た夜や週末休みに、キリスト集会の皆さんと共にいるときをもつことができ、ベックさんはじめ集会の皆さんにその都度ニューヨークの様子を知らせることができたのです。米国はクリスチャンの国と思っていたけれども、ニューヨークのような大都会に住む人たちの心は冷えてしまっていることや、ニューヨークには七万人前後の日本人が生活をしているけれども、ほとんどの方はイエス様を知らないことなどをお話しました。日本の各地のキリスト集会でニューヨークのために祈りが始まりました。

ベックさんに教えていただいた米国の集会には結局一度も行きませんでした。最初の頃、家の近くの教会に行きましたが、やはり日本のキリスト集会とは違っていました。集う方々は皆人の良い方々でしたが、主イエス様を中心とした集いではありませんでした。

ニューヨークでの家庭集会

ニューヨークに来てから三年ほど経った一九九三年十月末、紅葉がまだ残っている頃に、ベックさんと十人ほどの吉祥寺キリスト集会に集っている方々が、初めてニューヨークに来られました。わが家での家庭集会は夢を見ているように楽しく、晩秋に入り寒くなったニューヨークとは思えないほど主の暖かさで満たされました。そしてそこでカナダのオタワから集われた井出和雄さんが電撃的に救われ、集った方々と手を取りあって一緒に主の救いの恵みに歓声をあげました。井出さんはわが家のバスタブで洗礼を受けられました。

「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御

使いたちに喜びがわき起こるのです。」（ルカ　15・10）

一九九三年十月のニューヨークでの初めての家庭集会の後、ベックさんたちは一九九四年に入って二度北米各地を訪問されました。いずれも運良く会社で休暇が取れ、私自身もそれに参加させていただきました。主が中心におられる家庭集会を各地で開きましたが、例えようがない位に楽しく、休暇を終えて職場に戻ってもつい聖歌が出てきてしばらく笑みが絶えませんでした。

そして、一九九四年十一月にニューヨークで初めての「よろこびの集い」が開かれ、日本と北米の各地から百三十人以上が集まり、コネチカット州グリニッチのハイアットホテルで楽しい集会と語らいの時間を過ごしました。マンハッタンの中心にある日本クラブでも集会を持ちました。そんな集いの準備など過去に経験もなく不安もありましたが、イエス様が中心となって取り進めてくださり、すべて順調に進みました。

一九九五年に入り今度は六月に、やはり同じハイアットホテルで三百人以上が集って二度目のニューヨーク「よろこびの集い」が開かれました。この時は日航がこのバイブルキャンプのために成田から往復の臨時便を出してくれました。また、マンハッタン・ツアーやウッドベリーコモンでのショッピングなどもしました。そして福音集会は、グリニッチのわが家の近所の教会堂を借り、多少汗だくになりましたが、皆一つになってイエス様を讃美しました。事故もなくすべてが順調で、しかも楽しい集会と語らいの連続で、イエス様によって霊的に元気にされ、いきいきとされたことを思い出します。この三百人の「よろこびの集い」を通して、ふたたびわが家のバスタブ

で三人の方が洗礼を受けました。

伊藤さんの救い

一九九五年十二月末、悲しいニュースが入りました。コロンビア駐在中一緒に働いていた、同じ会社の伊藤さんの一人娘であるかずこさんが、マイアミからコロンビアのカリに向かったある航空機の墜落事故で突然亡くなりました。伊藤さんはずっとコロンビアに駐在されていましたが、ニューヨークには何度か仕事で出張に来られていました。かずこさんが米国の大学に留学されカリフォルニアに住んでいることも聞いていました。伊藤さんはコネチカットの家にも来てくださり、そのつど「光よあれ」などの証しの本をお渡しして救いを祈っていました。その伊藤さんが常々自慢もし、かわいがっておられたかずこさんを突然亡くされたのです。どのように伊藤さんに話してよいか分からずただ主に祈るばかりでした。

「イエス様、伊藤さんが個人的にイエス様を知ることができるようにしてください。そして、聖書に書いてある、死が終わりでないこともわかるようにしてください。」と祈りました。

伊藤さんのことを祈っているうちに、一九九六年三月にベックさんがニューヨークに来られることが決まりました。一方、思いもかけず伊藤さんが同じようなタイミングでニューヨークに出張することになったのです。ベックさんは土曜、日曜の二日間ニューヨークに滞在されることになっていましたが、伊藤さんはニューヨークでの仕事が前日の金曜日と週明けの月曜日に入り、同じ土日がニューヨークで空いたのです。これはイエス様が、私の祈りを聞いてくださり、導い

てくださっているのだ、と直感しました。そして土日の家庭集会にお誘いしたところ、伊藤さんは喜んでともに過ごすことになりました。

土曜日の家庭集会の後、コネチカットの自宅近くのレストランで皆で夕食をとっていたときのことです。そこで誰ともなく洗礼は主に救っていただいたことの証しであるという話が出ました。伊藤さんは、今までの洗礼に対する自分の考えが間違っていたかも知れない、と独り言を言っておられました。そしてあっという間に井出さんと同じように翌日曜日の朝洗礼を受けられ、わが家のバスタブがまた用いられました。

月曜日、仕事を終えた伊藤さんは、私にこう話されました。「今回の一人娘の突然の死がなければ、自分はイエス様に救われなかったかも知れない。天国でまた会える希望が出てきた」と。私は主を心から賛美しました。伊藤さんは土曜日の朝会った時とがらりと変わって、本当に喜んでコロンビアに帰っていかれました。

そして二ヵ月後、ベックさん、藤本さんたちと一緒にコロンビアを訪れ、ボゴタの伊藤さんの家で、南米での初めての家庭集会が開かれました。そこには以前市川集会に集っておられた石田テミルダさんと小百合さんが参加されたのをはじめ、コロンビア駐在時代親しくしていた谷元さん夫妻と小野さん夫妻も集われました。主のなさることは人間の思いをはるかに超えています。

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。（詩篇　118・23）

海外でもなされる主の救い

一九九五年に、電話回線を使って北米各地を結んでの毎日曜日の礼拝が始められました。これは私たちが一九九六年八月に帰国した後もずっと続けられており、主にある信者たちが離れていても電話線を通じてひとつになって主を礼拝、讃美して集会を開いています。ニューヨークの信者の数が多くなるものとばかり願っていた私たちの考えとはまったく違う形で主は祝福を与えてくださっています。

思い返した時、会社に就職する時から、コロンビアでの海外駐在も、教会生活を経て吉祥寺キリスト集会で救いにあずかったことも、今回の約六年のニューヨーク駐在での住む場所も、仕事で連続して大きな成約が得られたことも、すべて主の御手とご計画の中にあったということがわかります。私たちは何一つよいものがなく何もできない土の器ですが、主はその土の器をお用いになり、海を越えて世界のすみずみに出ている日本の人たちがすべて救われることを望んでおられることが体験的にわかりました。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

（Ⅰテモテ　2・4）

長い間、自分がこの世に生きている目的がはっきりしませんでした。一時期は、良い大学を出て、良い会社に入り、一所懸命仕事をして出世もし、家庭も大切にして、悔いのない一生を終え

ること、などと漠然と生きる目的を考えたりもしました。それはどれも自分のための目的でした。でも、今回のニューヨークでの駐在生活で主がなさった救いのみわざをまのあたりにして、救われた者のこの世に生きる目的は、まだ救われていない方々が救われるように祈ること、救いのために主に用いていただくことに尽きるという確信をいただくことができました。

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

なお、私はその後転勤辞令を受け、家族ともども日本に帰り、同系の会社の仕事をしながら、キリスト集会に集っています。



写真中、直美さん。

神がこのことをされた（伝道者 3・14）

岩崎 直美

一九四七年神奈川県鎌倉市に生まれる。豊島区立駒込小、駒込中、都立文京高校、東京女子大学短大部英語科卒業。三井物産株式会社勤務の後、一九七四年結婚。家族は夫洋二さん、長女愛さん。

ニューヨークの生活の始まり

一九九〇年クリスマス。主人の転勤で、私と娘は市川キリスト集会の方々に見送られて出発し、ニューヨークの地に降り立ちました。途中、飛行機の中から窓の外を見ますと、まっくら闇の中に少しづつ光が入ってきて、紫色、そしてピンク、オレンジと微妙に色が変化していって、私たちが夜から朝に向かっているのがわかりました。それがあまりに美しく、神秘的で、引き込まれるように見入っていました。その後、何度か日本とニューヨークの間を往復しましたが、このときほどの美しい色の変化を見たことはありません。ちょうどノアが大洪水の後に見た虹のように、これからの私たちのニューヨークでの生活を、主が祝福すると約束してくださっているようでした。

私は、長い間の教会生活の後、主人とともに吉祥寺キリスト集会に導かれて四年半が過ぎていました。長いこと求めていて得られなかった主のご臨在を初めて実感することができ、喜んでいました。また、キリスト集会の方々とのお話を通して教えられることもたくさんありました。もっともっと主のすばらしさを知りたいと思っていました。

こういう時に主人がニューヨークへ転勤となったのです。キリスト集会のない所に出ていく不安でいっぱいの私に、集会のある方は「集会のない所でも主がいらっしゃらなくなるわけではない。少なくともあなたがた家族三人がいる。主は必ず支えてくださる」と言ってくださり、私たちは確信をもって出発することができました。

主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

（詩篇　121・5～8）

一足先にニューヨークで生活を始めていた主人がケネディ空港に出迎えてくれ、仮の宿であるマンハッタンのアパートへ向かいました。想像していたよりも遥かに寒く、耳が痛くなるほどの寒さの中、私たちはクリスマスで賑わう五番街を歩き、とうとうアメリカに来たのだと実感しました。

不自由なアパート生活を終え、そこから約一時間のコネチカット州グリニッチに住むことになりました。そこは木が多く野鳥やリスがいたる所にいて、鹿さえも現われる美しい所でした。白鳥や鴨がゆっくり川を泳ぎ、海が近いためにカモメが飛び、初夏には家のまわりで蛍を見ることができました。ニューヨークの中心地からこんなに近い所でこれほど自然が豊かとは思ってもみませんでした。また、通勤するのに便利で教育水準も高いとあって、日本からの駐在員家族も増

えつつありました。この恵まれた環境の中でアメリカ生活がスタートしました。

一ヵ月くらいした頃、車で六、七分の所に同じ会社の渡辺さんというご一家がいらっしゃるのを知りました。まず奥様にお会いしましたが、その方が吉祥寺キリスト集会の淵野さんの妹さんであることがわかり、びっくりするとともにやはり主は私たちを導いてくださっていると確信いたしました。後にこのお二人のお父様の葬儀が吉祥寺キリスト集会で行なわれることとなりました。そしてお母様は我が家の浴槽で洗礼を受けられ、現在息子さんご一家と住んでいらっしゃるロスアンゼルスの集会に集われています。

その頃ニューヨークの国連近くに河辺さんが住んでいらして、郊外には石田さんと須々木さんがいらっしゃいました。毎週、河辺さんのお宅か我が家で礼拝をもつことができ、小さな群れでしたがともに祈ることができ、主を賛美することができ感謝でした。このような小さな群れの中に、主は次々と日本からキリスト集会の方々を出張とか旅行という形で送ってくださり、交流の時を与えてくださいました。前から存じ上げている方も、初めてお目にかかる方もいらっしゃいましたが、その語らいのひと時は本当に楽しく励まされました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。…それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

（詩篇　133）

小さくなったキリスト集会

主人と私はニューヨーク到着前から、ニューヨークの地でキリスト集会が起こされ、多くの人々が救われて大きな集会となることを望んでいました。しかし主のみこころは違っていたことを、後になって知りました。私たちのニューヨーク駐在半年後に河辺さんが帰国され、二年後には須々木さんと石田さんが次々に日本に帰国されました。

小さな集会が大きくなることを祈っていた私たちは、私たち家族のみになってしまった時、「どういうことなのでしょう」と戸惑いました。その少し前にデトロイトに鈴木さんがいらして電話でお話することができるようになっていました。また、ベックさんご夫妻がいらして初めてロスアンゼルスでキリスト集会を開かれたのもこの頃です。しかしロスとニューヨークは飛行機で六時間の距離がありますので、ニューヨークに来ていただけるとは私は考えていませんでした。

現実を見て、無理と決めつけていた私と反対に、主人は出張で日本へ行くたびにベックさんにお会いして、「ニューヨークには日本人が六万人います」とか「七万人います」とか、熱心にニューヨークへにお誘いしていました。そんな主人に、私は「無理、無理」とさめた気持ちで言い続けていました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。　（箴言　3・5）

初めての家庭集会

私は、現実を見て自分の判断に頼ったトマスのように、見なければ信じない愚かな者でした。

私のこのような不信仰にもかかわらず、ベックさんがニューヨークに来られる時が意外に早くやってきました。一九九三年六月ロスで初めての「よろこびの集い」が行なわれ、大勢のキリスト集会の方々が日本からアメリカの地に来てくださり、主を賛美する機会が与えられましたが、その年の十月末、ベックさんと数人の日本からの方々をお迎えしてニューヨークで初めての家庭集会が開かれることになりました。夢のようなできごとでした。私たち家族だけという最低限の状態になった後、主は思いがけない恵みをくださいました。

この時突然カナダから電話が入り、オタワに住んでいらっしゃる井出さんのご一家が車で十時間かけて参加なさることになりました。私たちはカナダに井出さんという方がいらっしゃることすら知りませんでした。

この集会で当の井出さんも期待していらっしゃらなかったことが起きました。ご主人が救われて洗礼を受けられたのです。その晩宿舎のホテルで「今まで祈ってきてほんとうに辛かった。うれしい。うれしい。」と泣かれたそうです。参加した私たちも本当にうれしく、共に喜びました。

井出さん一家は途中吹雪に見舞われながらも帰って行かれましたが、喜んで主に従っていらっしゃるご主人に接するたびに、この時の感動を思い出します。

この時にもう一つ主がなさったとしか思えないことがありました。ベックさんが小さなメモを出されて「この人に連絡を取りたいのですけど、近くでしょうか。」とおっしゃいました。ドイツのご婦人の息子さんの名前と住所、電話番号が書いてありました。我が家から車で五分位の所で、それも一ヵ月前に地元の聖書研究会で知り合ったばかりのドイツのご婦人のご主人だとわかり、

驚きました。

フリードリンドというこのドイツ人の奥さんを通して、その友人で一年前に日本に帰国されていた宮原さんが集会に導かれ、あれよあれよという間に、ご一家四人全員とお母様が救われるということが起きました。私は宮原さんとは挨拶をする程度のお付き合いでしたので、この展開は本当に思いがけないことでした。

井出さんのことといい、宮原さんのことといい、私たちの考えてもいなかったことを主はしてくださいました。ただもう一方的な主のみわざを見せていただき、圧倒されました。

「わたし（主）の思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。…天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ　55・8、9）

その後数人の日本のキリスト集会の方々と共に、ベックさんは何度かニューヨーク、ロス、サンフランシスコ、デトロイト、オタワなどを回ってくださるようになりました。その結果今まで北米各地にバラバラに存在していた方々が一つにまとまる方向へと導かれていきました。

一九九四年夏に、横浜キリスト集会から酒井さんご一家が転勤してこられました。主にあって一致できる信者が与えられ、ニューヨークでの「よろこびの集い」開催へと導かれていきました。日本から大勢の方々をお迎えして、何回もの集会といろいろな方々との交流にどっぷり漬かることができました。その後一九九六年に日本へ帰国するまでの間、毎年「よろこびの集い」が開か

れました。また、多くの方々がメッセージとお話のために来てくださいました。

そしてカナダの井出さんの提案による画期的な電話線をつないだ合同礼拝が、一九九五年八月に始まりました。初めの頃はニューヨーク、オタワ、デトロイト、ダラスの四ヵ所でした。今では北米約二十ヵ所を電話線で結んで礼拝ができるまでになりました。お互いの姿は見えませんが、ともに祈り、賛美し、主に礼拝を捧げられるようになったことは大きな喜びでした。特に、ご婦人お一人の所は、どれほどの励ましになっているか知れません。

私たちがそろそろ帰国を意識し出した一九九五年クリスマス。大変ショックなことが起こりました。アメリカから南米コロンビアに向かった飛行機が墜落しました。アメリカから休暇で帰る学生が大勢乗っていました。その中に、同じ会社で私たちが十年以上前にコロンビアに駐在して以来の知人である伊藤さんの一人娘かずこちゃんが乗りあわせていたのです。

その後北米各地と日本国内のキリスト集会の皆さんの祈りによって、伊藤さんは奇跡的にベックさんと会われ、救われました。（この詳しいいきさつは主人の証しをお読みください）彼が洗礼を受けられた日の礼拝で、このことが電話線を通して北米各地に伝えられ、一人一人が非常な喜びで満たされました。真に主は生きておられます。

主の大きなお考え

当初私たちがニューヨークで大きな群れになることを考えていたのとは違う形で、主は大きく

してくださいました。もしニューヨークのみで大きな群れとなっていたなら、私たちはごう慢になったことでしょう。そのことも主はご存知で、私たちを守ってくださったのだと思います。

北南米という広大な範囲で、そして各地バラバラだった信者の皆さんを一つにして、さらにその各地に住む人々を救うという、私たちが考えていたよりももっと大きな可能性を持つ群れへと主は導いてくださいました。私たちの小さな頭では到底考えられなかった主のご計画を見せていただきました。考えてみますと、私たちはただそこに存在していただけで何も特別なことはしませんでした。多くのキリスト集会の皆さんの祈りによって支えられ、主がベックさんはじめ何人もの方々を送ってくださったことを感謝しています。

私たちがニューヨークの地に到着してから去る時まで、主がすべて導いてくださいました。その上想像もできなかった主のみわざの一つ一つを見させていただき、主の素晴らしさに触れることができました。

主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。（詩篇 145・3）

一九九八年に、日本に帰ってまいりましたが、その後も主のお導きと恵みをいただき、ただただ感謝するのみです。一人でも多くの方々がイエス様のすばらしさを知ってくださいますよう、お祈りしています。



左から直美さん、愛さん。

主の用意された道

岩崎　愛

一九七五年東京都に生まれる。コロンビア国ボゴタ日本人学校を経て船橋市立習志野台第一小卒、船橋市立習志野台中卒、米国コネチカット州グリニッチ高校卒。マサチューセッツ州立大学を経て、国際キリスト教大学教養学部理学科化学専攻を卒業、㈱ＮＤＴ勤務。家族は父洋一さん、母直美さん。

私の主との出会い、そしてこれまでの信仰の歩みを振り返ってみると、どう説明していいかわからないほど曖昧であると思いました。私の両親が私の生まれる前からイエス様を信じていたためか、何年にどのようなきっかけで主と出会い、救いに導かれたとはっきり述べることは難しいです。ただ子供の頃から母に主イエスの存在を聞かされ、それをそのまま疑うこともなく信じていました。しかし高校生の頃までは、ただ主の存在を信じていただけで、その存在は私の日常生活の中であまり意味を持たないものでした。

米国での生活

一九九〇年に父の転勤で私たちの米国行きが決まりました。私自身は友達との別れの辛さや苦手な英語に対する不安のため、日本に残りたいと両親に頼んで相談しましたが、主の側についた両親は「家族ばらばらではよくない」と、私の希望を聞いてくれませんでした。この時はかなり

このことで落ち込みましたが、今考えるとこの米国行きが主の私に用意してくださった最良の道だったと思えます。

一九九〇年十二月二十五日、ちょうどクリスマスの日に、私は母と共にニューヨークに到着しました。マンハッタンはクリスマスで賑わっていましたが、友達と別れてきてこれからの生活に不安を抱いていた私にとっては、すべてが灰色に見えました。翌年の一月にニューヨーク州の隣のコネチカット州に移り、私の高校生活が始まったのです。

米国でのわが家は米国に来て最初に見たマンハッタンとは大きく違い、木の多い自然に恵まれた場所で野生動物もたくさん目にすることができました。その恵まれた環境と、これまでまったく考えたこともない米国という国での生活を新しく知っていくという希望もありました。しかし、その反面、まったく英語もできない状態でこの新しい生活に入っていくのはやはり大変なことでした。毎朝、学校に行くことが不安で、いつもでかける前に母に「私が今日一日無事に過ごすことができるように」と祈ってもらってから家を出ていくようにしていました。

米国人は（どこの国の人でも同じかもしれませんが）、こちらの英語が未熟だと全く相手にしてくれません。ひどい場合にはそれをからかう人もいて、私はなんとかこの国の人に認められるようになりたいという思いが強くなっていきました。そのためにあまり日本人の友達と固まってばかりいないようにしたり、なるべく英語でコミュニケーションがうまくこなせるように努力もしました。しかし人に認められたいという思いが強まれば強まるほど、精神的に苦しくなっていったような気がします。

喜べない私

この時期、私たち家族はわが家で日曜日に小さな礼拝の集まりをしていました。集まるのは日本から駐在で来ておられた方がほとんどでした。他の方々が集えず、私たち家族三人のみという時には、時間がルーズになったり簡単に終わらせてしまいがちでした。

それに加え、私自身は集会に喜びを持っていませんでした。集会に来た女性に、「集会は好き?」と聞いたところ、「集会に来るとイエス様を礼拝できて大きな喜びを得ることができるから好きよ。」と言われ、ショックでした。「私はやはり集会の方々のように主を喜ぶことができない。きっとまだ私自身は救われていない。」と思いました。

一九九三年に、ベックさんと大勢のキリスト集会の皆さんが日本からニューヨークへ来て、初めて「よろこびの集い」が開かれました。このことで私の両親がとても興奮していたのをよく覚えています。この時の私にはそれはあまり理解ができなかったのですが、今となっては両親の喜びがいかに大きなものだったかがわかります。ニューヨークキリスト集会が始まり、主の恵みによって次々と人が救われ、わが家の浴槽で洗礼が行なわれました。しかし、それでも私は、その方々の救いを心から喜ぶ両親が理解できず、なぜ他人の救いにこんなにもみんな喜べるのかが不思議でたまりませんでした。

罪悪感から喜びへ

一九九四年九月から、私はマサチューセッツ州立大学に進学しました。家から通える距離ではなかったので、私は大学寮に入り、また新しい生活に入っていったのです。

親がいないため、私はそこで自由でした。私は大学の勉強に夢中になり、ますます主を第一とはしなくなりました。それも信仰を持つ両親との会話が減ってしまったためかもしれません。しかしそれでもやはり普段主を忘れている生活というのは疲れるもので、ほぼ毎週末、私はキリスト集会に参加するためにコネチカット州に帰っていました。

そのために友達の何人かに、私は弱すぎると責められてしまいました。米国では精神的に強い者が尊敬され弱い者は疎まれる傾向があるのです。それを気にしたこともあって、また親への反抗心もあって、私はこの世の人々と調子を合わせてしまいました。

その時期のことは今思い出してもいやなものでした。家に帰らなくなり、キリスト集会から離れ、両親から離れ、聖書から離れることによって主から全く離れてしまった私は、拠り頼む存在をなくしました。祈ろうと思っても罪悪感から祈れなくなりました。

その罪悪感がピークになり、耐え難くなって、私は両親に謝り、主の前にへりくだることができたのです。そしてこのことから主なくしてはやっていけないこと、自分の考えのままに生きていくことは楽そうに見えて実はこの上なく厳しいものだと痛感させられました。

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

（マタイ　7・13、14）

それから徐々にですが、私は米国の、また日本からのキリスト集会の皆さん方が本当に好きになっていきました。みんな弱い者だと自覚していて、主を頼っていることで共感を覚えたのかもしれません。そしてニューヨーク・キリスト集会で主からの恵みを心から喜ぶことを知りました。感謝です。あれほど人の救いに無頓着だった私がロスの福元さん、ボストンのリャオさんの亡妻のメアリーさん、コロンビアの伊藤さんたちの救いへの導きに心からの喜びを感じました。この方々の救いのための主の働きは完璧で、驚きと喜びを感じずにはいられなく、あらためて主の偉大さを知りました。

一九九六年に私は両親とともに帰国しました。私は日本の大学へ編入学し、卒業し、就職し、今日まで至っています。今も私は両親と離れて住んでいて、主を忘れてしまうことがありますが、日本では近くに、またいたる所にキリスト集会があり、主を忘れそうになってもまた戻ってきやすい状況なので感謝です。米国での私はいろいろと問題だらけでしたが、日本の大学へ編入できたことも含めて、いつも主に守られてきて、また主によって成長させられたと実感しています。事態が最悪に見える時でも主は最善をなしてくださっていると確信しています。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。

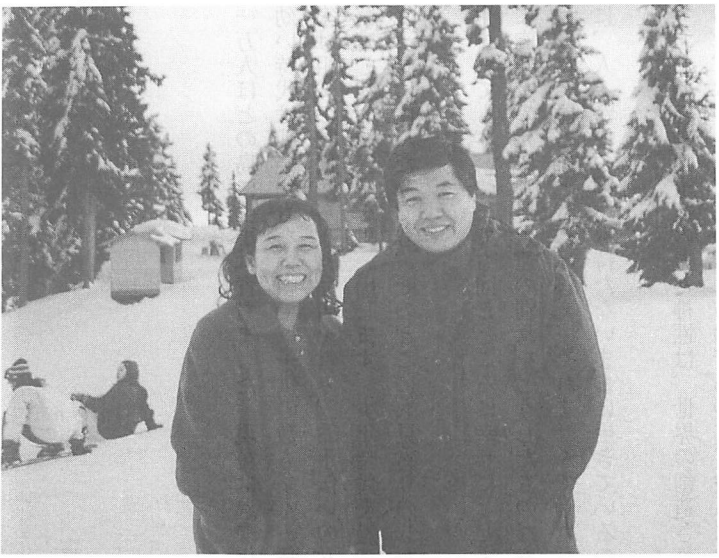
（箴言　16・9）

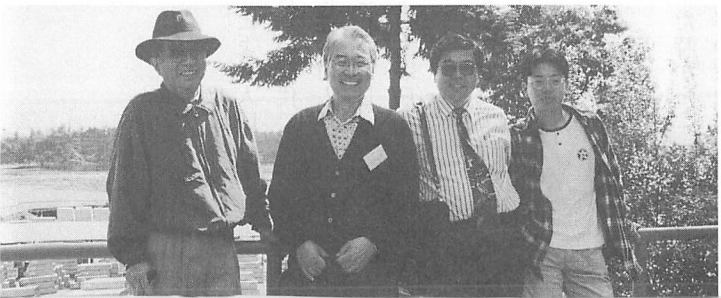
旅の途中で

野田房男

一九五〇年愛媛県に生まれる。愛媛県立宮窪小、宮窪中、愛媛県立今治西高校、法政大学経営学部卒業。宮屋敷会計事務所、三信建設工業㈱、㈱初穂を経て現在㈱スペース・ノア代表取締役。バンクーバー在住。家族は妻洋子さん、長女牧子さん、長男尚広さん、次男恵太さん。

（写真上）シーモア山頂上で妻の洋子さんと。
（写真下）左から竹本さん、中津さん、房男さん、角田さん。





私の生い立ち

私は瀬戸内海の大島という人口一万人ほどの島に生まれ育ちました。現在は過疎化により人口はもっと減少していますが、私の幼い時代は戦後間もない頃で、子供の数も多く、貧しい時代でしたが活気がありました。私の実家は祖父の時代から衣料品店を営み、お手伝いの女性も何人かいました。今でも、お店が忙しく繁盛していた様子を思い出します。少年時代を過ごした美しい瀬戸内海ののどかな島の情景は、カナダに住んだ今でも、そのどこにも見劣りのしないすばらしい景色でした。

しかしいくらすばらしい環境に生まれても、いつまでも同じところに幸せにとどまることはできません。そのころ、子供ごころに肉親との死による永遠の別れをどうしたものだろうと考えたものでした。そんな単純な子供の疑問に、誰もまともには答えてくれませんでした。いつかは必ず来る永遠の別れがあるというのに、人々が何の解決も持たないままに生きているのが不思議でした。

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。

（ローマ　1・20、21）

信仰を持ちはじめた頃

中学卒業後、四国本土の高校入学に入学するため、両親の元を離れ島をでることになりました。十五歳の春でした。生まれ育った家を離れ、殺風景な部屋での心細い下宿生活が始まりました。本土の高校は島の学校とちがってレベルが高く進学校に属していました。私は島では優等生でしたがここでは劣等生のレッテルを貼られたような気分になりました。自尊心をなくしてしまい孤独感や劣等感にさいなまれるようになりました。野原や小高い山を気まぐれに一人だけで歩き回り、スケッチをしたりしていました。試験前日にも教科とは関係のない小説や人生論集などを明け方まで読みふけり現実逃避することもありました。心の空虚さを埋められず、子供心に死にたいと思うようになっていました。しかしとにかく今は、生きる目的の総ては成績を上げること、そして希望の大学に合格することだと定めて毎日を生きていこうとしました。

このような自信喪失からくる疎外感や孤独感は私をホーリネス教会へと導くきっかけを作ってくれました。一学年上の木村さんという友人がしきりに教会に誘ってくれました。彼も同じように島出身者で孤独感や思春期特有の人生の空しさを感じて教会の門を叩いたのでした。そこには阿部ユカエという女性牧師がいて、とても熱心に聖書から語ってくださいました。一月の寒い日なのに阿部牧師の手からは汗が湯気となって立ち昇っている姿が印象的でした。私はこの空しさは自分の罪が原因であること、私は両親の子供としてこの世に生をうけたけれど実は魂の父親は別にいてそれは万物の創造主である神様であったこと、この方は私が生まれたときからいや生まれる前からずっと私を愛していてくださり、迷える魂の帰るのを待っていてくださったこと、今

やっと私はその方のもとに帰ることができたのだということを悟ることができました。それを知った日の夜、感激の涙にむせびました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

イエス・キリストは私が生まれる前から愛してくださり私個人のためにも十字架にかかって死んでくださいました。その事実は今も昔もずっと変わらず孤独の中にいるあらゆる人々への神様の愛のプレゼントです。このすばらしいプレゼントを受け取らない人々、ましてやこの事実さえ知らない人々が大勢いることは人類の大きな損失であると思いました。こんなにすばらしい救いがあるのに、その救いを拒む人が多いのはどうしてなのでしょうか。私は救われた喜びがあまりにも大きくて、会う人毎にイエス様のことを紹介したいという思いに強く動かされました。また一方で下宿のおばさんが『キリスト教に凝ったりして困ったものですよ』と私のことを井戸端会議で話しているのを耳にしてがっかりさせられたこともありました。

しかし救われたという喜びの感情の波は徐々に消えていき、今度は自分の罪の意識にさいなまれるようになってきました。救われたときの喜びはどこかへいってしまい、自分は本当に救われているのかと悩むようにさえなりました。なぜなら現実の自分をふり返ってみると、相変わらず怠け者で救われているとはいっても以前の私がずっとそのままそこにいるわけです。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

イエス様を信じる人とは、罪を赦された罪人にすぎず、救われていても罪も犯せば失敗もする普通の人間です。何十年イエス様に従って生きてきたとしてもいまだにそのような肉的な人間なのです。神様の赦しとイエス様に頼ることなしには喜びをもって生活していけないのです。深く自分の罪を認識するようになり、そのことをとおして、イエス様の十字架の死による贖いの深さと愛に導かれ、より近く神様に頼るようになった者にすぎないのです。

しかし、私たちは私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・37～39）

大学時代の出会い

私の大学時代のもっとも大きな出会いの一つは中村克美さんとの出会いです。彼はそのとき法政大学ＹＭＣＡの案内ビラを学内で配っていました。神様の導きというべき本当に私の人生の大きな出会いのきっかけを作ってくれた人です。吉祥寺キリスト集会のドイツ人宣教師ゴットホル

ド・ベック氏に彼の紹介で初めてお会いしました。それは私が大学一年の秋でした。その頃、ベックさんは那珂湊の教会を出て吉祥寺で伝道をはじめられたばかりでした。私は東京クリスチャン学寮という東京の大学に通うクリスチャン大学生の男子寮に入っていました。その頃は上野ホーリネス教会に通っていましたが学寮からは遠くにありましたし、ベックさんの人柄にも引かれ吉祥寺キリスト集会に通うようになったのです。

大学時代の一、二年間はベックさんが大学の聖書研究会にも来てくださって週に一度は聖書の学び会をしました。それに学寮でも週一度、レイマンスクールというちょっとシステマチックな聖書の学び会があり、週三度、朝の祈り会がありました。木藤さんという寮母さんがいて暖かい心のこもった食事を準備してくださってとても家庭的な雰囲気の中で四年間楽しい大学生活を送ることができました。さらにそこでアメリカ人宣教師のチャールズ・コーウィン氏やオーストリア人宣教師のブルック氏と知り合いました。ブルック氏は自分の子供のほかに韓国人と日本人の女の子を養子に迎えており、奥さんはカナダ人でした。このような国際色豊かな中で大学生活を送り、自分も社会に出る前に一度外国の生活を体験したいと思うようになっていました。その時の私の日記には二十五歳までには必ずアメリカに渡るという決意が書かれています。しかしそれがかなうのはずっと後のことでした。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言　19・21）

私は寮を出てから若者フリーターのような気軽な生活に入りました。就職はせずに会計士になっ

て独立する生活を夢見たからでした。しかし自分が会計士の仕事には向いてないということを長い時間かかって知らされました。私は十年ほどこの仕事のことで苦しんだのです。神様はやはりその人にしかできない天職をそれぞれに備えていらっしゃると思います。パウロは天幕造りの生活をしながら伝道の仕事をしましたが、食べるための仕事は副業で伝道が本職でした。神様が導かれればどんな仕事をしても食べていけるように備えがあります。私の家内の父はよく言っていたものでした。人それぞれに必要な食物は天の神様（彼の場合、おてんとうさんでした）が備えておられると。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。

（箴言　16・9）

結婚の導き

会計事務所に勤めて二年がすぎようとしていた頃、顧客先の一級建築士の方の紹介で三信建設工業という会社に移ることになりました。私は吉祥寺キリスト集会所から近くの所に住んでいましたがこれを機会に埼玉県戸田市の独身寮に住む事になりました。住居費が安くなるというのがその理由でした。夜も集会に行っていましたので帰宅時間が遅くなるデメリットもありましたが、おかげで後に私の妻となる人と彼女の職場が川口市ということもあり駅の改札口でしばしば出会うようになりました。毎朝、申し合わせた訳でもないのに駅の改札口でばったり出くわすのでした。彼女とは彼女の高校時代に一度集会で会っていますが、それから五年くらいは経っていまし

た。偶然にしてはできすぎています。やはり主のご計画だったとしか思われません。ある夕方、大雪の日でしたが集会に行くというので川口から吉祥寺キリスト集会まで車で一緒に行った事もありました。その後はいろいろな出来事がありましたが結婚を前提にお付き合いをはじめて二年ほど経ってから婚約、結婚に導かれました。私たちの結婚指輪には「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠をあたえよう。」（黙示録2・10）が刻まれていますが、今もそうありたいという願いは変わりません。

引越し魔のカナダ移住

生まれ故郷の島を出てからはたとえ何処に住もうとその地は私にとっては「外地」以外の何ものでもありませんでした。言ってみれば転々と放浪の旅に出たようなものでした。旅は私の趣味でもあり嫌いではありませんでした。しかし独身時代はよかったのですが家族持ちになってからも会社の転勤を含め十回以上引越をくり返し、家族にはずいぶん負担をかけました。私は長男という事もありいつかは郷里の島に帰るのだと自分では思っていますが今のところは導かれておりません。

もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。

（ヘブル　11・15、16）

実際には仕事の忙しさにかまけて将来の事はわからないからと真剣に考えることもありませんでした。高校進学、大学入学、そして就職と普通一般的なコースにのって若い時代を走り通しました。不動産会社に身を置いていた頃は成績のため土曜も日曜もなく働きに出る事がしばしばで、深夜の帰宅は当たり前の毎日でした。

バブル経済のもっとも華やかな頃、独立して不動産会社を設立しました。そしてやがてそのピークを過ぎた頃、仕事に一段落をつけて海外に出る決心をしたのです。実は海外生活は結婚をする前からの夢でした。これを実現するには私の年齢、子供たちの学齢や家族の諸条件を考えると今の時を逃したらもう機会はないと思われました。もしこの機会を見送れば、自分の若いときからの念願を果たせずに一生日本の社会だけで生活して終わることになると思いました。前にも会社の関係でグアム派遣の話がありましたがその機会は立ち消えになっていました。二十年も前から主に御心を示してくださいと祈っていましたが御心は示されずに時間だけが過ぎていました。

私はついにカナダのバンクーバーへ一年間だけ行くことを決心しました。

カナダのバンクーバーにはつてがある訳でも、知り合いがいる訳でもありませんでした。ただ、一度だけ会社の社員旅行で来たときの良い印象がありました。シアトルと比べなんとなく田園風で観光の町であるのが気にいりました。妻の方も幼い頃からの愛読書である「赤毛のアン」のカナダ（バンクーバーとは反対の東の方ですが）を気に入っており、アメリカよりも少しは安全というイメージがありました。このような単なる印象だけでカナダのバンクーバーという結論になったのです。「ほんの一年間だけです。ちょっとの間だけのお別れですので友人の皆さんお許しくだ

さい。中年の中休みとして神様がこの時期だからこそ与えてくださった小休暇ですから」。そういった気持ちでカナダ行きを選びました。本当に一年間少しの間だけ研修に行ってくるという気持だったのです。

あなた（主）は彼の心の願いをかなえ、彼のくちびるの願いを、退けられません。
（詩篇　21・2）

小集会の始まり

最初の一年はあっという間にすぎてしまいました。私たち家族はカナディアンロッキーやバンクーバー島のあちこちの田舎をキャンピングして回りながら自然を楽しみました。この時期は私たち家族にとって人生のオアシスにたどり着いたようなひとときとなりました。しかし、一方で子供たちには、言葉の障害などのためかなりのストレスが溜まっていきました。

礼拝は、ほんの一年だけのつもりでしたので、いい体験だと思い近くの英語集会に行っていました。その集会の人々は私たちのためにいろいろ気を配ってくださり本当にお世話になりました。

二年以上カナダに滞在するという頃になって、カナダのその集会にいることが神様の御心なのかどうか悩むようになりました。私たちはこの英語集会で日本の方をイエス様に導くことができませんでしたし、子供たちも喜んで集会に行くという信仰を得るにはいたりませんでした。人が導かれ、救われないのであればカナダにいる理由はないと思われました。人間の世界はどこも同じように神様から造られたもの、すべての人々の心の内側には同じような感情が宿り人種によっ

て何の変わりもないこともわかりました。しかし、二年間通った集会を出るのは億劫で気が引けました。その集会では私はお客様のようなものでしたので、気楽な信仰生活をそのまま続けて行きたいという肉的な願望もありました。「日本に帰るか、あるいはここの集会を出て自分たちで集会をするかのどちらかである」。このような決断を祈りの中で迫られました。決断のきっかけは妻の涙ながらの訴えでした。主の御心が働かれているのだと思え、人としての肉的な感情に従うよりも主に従う事の方が大切だと知らされました。この時私は自分の信仰を妻を通して試されたのです。ある程度の勇気を必要としましたが現地の責任者に手紙を書いて思い切ってそこの集会を出ることにしました。

それと前後して、カナダに来て三年目になる頃、ロサンゼルスでの「よろこびの集い」に参加しました。そこで、日本のキリスト集会の群れである北米の方々が電話回線による礼拝（各家庭の電話回線を通して各所の人々と同時に通話ができるといういわゆるConference Callの音声による礼拝）を北米でおこなっていることを聞き、これに参加するように導かれました。その頃家内の方は週に一回テープによるメッセージを聞く婦人集会を持っておりました。子供たちもその時期に日本に帰れば、英語、日本語ともに中途半端になることはあきらかでした。そんな事情が重なり合い、もう少しバンクーバーに留まることが御心でしたらそのようにしてくださいと祈りました。

この苦しみのときに、彼らが主に向って叫ぶと、主はかれらを苦悩から連れ出された。主があらしを静めると、波はないだ。波がないだので彼らは喜んだ。そして主は、彼らを

その望む港に導かれた。（詩篇　107・28～30）

民族のモザイク

大抵のカナディアン一世の人は家では母国語で話しています。生活の面でも経済、文化面でも母国人との繋がりがあって、それぞれの地域のどこかで何かしら母国文化との関わりを持っています。このような様々な文化を維持し続けている外国人の集まりがカナダ国民と言うわけです。公用語は英語とフランス語ですがそれぞれの民族がそれぞれの言葉で活動を行ないまだまだ溶け合っていないモザイク状態の国がカナダです。

日本人の移民の歴史は古く、百年も前に和歌山の漁師さんが鮭が手掴みでとれる所だと聞いて続々とカナダに来たそうです。今は日本の会社員や学生たちがかなり大勢外国人としてこの地に住んでいます。最近では定年退職前の人々がたくさん移民してくるようにもなりました。一方、韓国、台湾、香港、インド、イランなどのアジアからは日本人以上に多くの人々が移民者としてこの国に来ています。教会も、韓国語、広東語、北京語などそれぞれの母国語で礼拝がされている教会があちこちにあります。

ユダヤ人とギリシャ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。（ローマ　10・12、13）

日本語で礼拝する所も何箇所かありますが、電話回線を使ってキリスト集会と同じ雰囲気で自由に何の束縛もなく聖書と祈りをもって主を賛美できることを本当に嬉しく思います。そして同胞の日本人が根無し草のように生活するのではなく、さまざまな民族と同様、この地カナダで創造主なる真の神様に見出され救われた者となれば喜ばしいことです。多民族のこの国であろうと世界中どこに住もうと真の幸せ者になる要件は同じです。それは、イエス様がご自分の死とよみがえりを通して提供された神様との和解を受入れ、真の創造の神を知り、聖書と御霊の導きに従った生活を目指すことです。

幸いなことよ。主をおのれの神とする、その国は。（詩篇　33・12）

永住権

バブル経済が終焉し、それまでの生活に自信が持てなくなってきたころ、円高のメリットを利用してカナダから日本に住宅資材を輸出する仕事が与えられました。それを機会に労働ビザがとんとん拍子に取得できました。難しい過程をすべて主がいとも簡単にお導きくださったのです。中年の働き盛りの年齢で生活のあてもなく私がこの地に来たことは世間的常識から言えば無謀というしかなかったと思います。それが企業の後ろ盾も何もなく二年後にはビザの切り替えをしなくてもよい「永住権者」としてカナダで生活できるようになりました。これはすべて主のなさった事で私たちの切なる願いというより主が事を運ばれたとしか言いようがありません。

どこにあっても永遠の住まいである天国の国籍取得者であることを忘れることはありません。そ

れぞれの立場、持ち場で主の御心を大切にして従っていけばどのような困難な立場におかれても必ず導きの手が差し伸べられると確信させられます。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言　19・21）

私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。（ヘブル　13・14）





（写真上）サイモンフレーザー大で。左が洋子さん。
（写真中）ブッチャートガーデンにて。

バンクーバーの皆さんと。





自宅前で、房男さんと。

別の名を「愛」というお方

野田洋子

一九五一年東京で生まれる。武蔵野市井之頭小、武蔵野一中、都立府中高、淑徳短大社会福祉学科卒。世界経済調査会、同短大副手兼児童相談所兼務を経て、精神薄弱児者通園施設勤務後、一九七七年結婚、バンクーバー在住。家族は夫房男さん、長女牧子さん、長男尚広さん、次男恵太さん。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1～3）

一九九二年七月、私たち一家はバンクーバー国際空港に降りたちました。主人四十二才、私四十一才、長女十四才、長男十三才、次男八才の時でした。主人はバブル崩壊後仕事が暗礁に乗り上げ、方向転換しなければならない大変な時期にありました。以前から海外転勤の希望を持っていたので、新しい仕事に就き、また勉強するためにカナダに来たのでした。主人が荷物を新居に運んでいる間一時間ほど空港で待ちました。いろいろな国の人々が行き交い、さまざまな言語が聞こえてきました。この国で今後私たちがどのように生活していくのかわかりませんでしたが、四十才を過ぎて初めて訪れた新しい地に、とにかく家族いっしょに来られたことを感謝しました。

宗教からイエス様へ

私の父は新興宗教の教会の家に生まれ、母はしつけの厳しい軍人の家庭で育ち、戦後二人は結婚しました。その後父が職捜し中だったこともあり、私が生まれた時は知人の産婦人科医がまったくお金をとらずに私を取り上げてくださったそうです。

後に聖書で、イエス様はご自身の貴い血によって私たちを贖ってくださったこと、しかもその恵みを価なしに私たちにくださる、という箇所を読み、ああ、私はただでこの世に出てきて、また価なしにイエス様に出会い救われ、永遠のいのちまで与えられるとは、何と虫のいい幸せな人生だろうと思いました。かつては「生まれてこなければよかった」と思ったりした私でしたが、イエス様が私たちを生まれる前から選んで導いてくださったことを知りました。偶然はなく、すべてはイエス様の導きの御手の下にあることを思い、感謝するのみです。

「わたし（主）は潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。」（イザヤ　44・3）

私の父はいつも仕事の上で強いストレスをうけていたようで、夜お酒がはいると風向きしだいですぐに怒りだすありさまでした。父の信じている宗教は父の重荷をとってくれることには何の役にも立たないように見えました。母はそんな父と言い争いをすることもありましたが、大体は波風が立つのが嫌いな母が我慢していました。家庭の雰囲気は重苦しく、楽しいものではありま

せんでした。

私は神だなに手をあわせたり、宗教行事に参加したり、正月には神社参拝するといったようなことをしていました。しかしこれらのことは形式にすぎず、私に罪の意識を芽生えさせるだけで神様は遠い存在でした。そして私の心の中は、明るさや楽しさに占められていたかと思うと、ささいなことで瞬時に暗さと寂しさに変わってしまうことの繰り返しで、もろくて不確かなものしかありませんでした。

幼い頃、影響を受けたのは、宗教よりむしろクオレやアンデルセンなどの本でした。とくにクオレの「愛の学校」は、自分の命を喜んで投げ出す人々の姿が書かれてあり、感動に満ちたものばかりでした。一方、自分自身をみつめると、私の心の中にそのような愛はなく、自我が強く我がままで、「こんな自分は嫌だ」といつも思っていました。反面なるべく自分を理想に近付けようと無理をして明るくふるまっていました。高校の時、遊んでばかりのいいかげんな私でしたが、自分を思いきりぶつけられるものがほしくなり、社会福祉の道に進もうと考えました。担任の先生に相談に行ったところ、「福祉と偽善は紙一重」と言われ、クオレの登場人物に少しでも近づきたいと思っていた私は動揺しました。その言葉が私の心に突き刺さり、真に心を探られました。本当の愛とは何かもわからず体裁だけを整えようとしていた自分、己れを犠牲にできるどころか他人を犠牲にしてもたぶん平気な自分の姿がくっきり浮かび上がりました。自分の存在の意味自体が根本的に疑わしくなり、生きていくのが辛く感じられました。

私はつまずき倒れそうであり、私の痛みはいつも私の前にあります。私は自分の咎を言

い表わし、私の罪で私は不安になっています。（詩篇　38・17、18）

その頃、同じクラスに重い病気から回復して復学し、授業をうけるようになったSさんがいました。倫理社会の授業中先生がクラスのみんなに質問されました。「死がこわくない人？」一瞬クラスが静かになったあと、彼女一人だけが手を上げました。クリスチャンだと言うSさんの顔は輝いていて周りのことなど眼中にないようでした。いつも軽い冗談でみんなを笑わせている彼女のどこからそんなに強い確信が湧くのか不思議でした。私の心にSさんのさわやかな笑顔が焼きつきました。

その一ヵ月後、わたしは友人と共に伝道会に導かれ、イエス・キリストのことを聞きました。なつかしい気がしました。その後ベックさんと出会い、イエス様が私の罪を負ってくださり十字架の犠牲の死を遂げられたこと、それによって私の罪は完全に赦されていること、本当の愛はイエス様からしか与えられないものであること、「救い」は罪を悔い改め感謝して受け取ればよいことを知りました。私が求めていた真実の神様にようやくたどりつき、重荷を降ろすことができました。そればかりでなく、永遠のいのちまでも与えられていることを知り、喜びで一杯になりました。かつてのSさんの気持ちも、本の中の人々のことも、謎が解けるように理解できました。

ずっと後になって、カナダに渡った私は、乳がんの疑いで何度も検査を受けることになりましたが、そこでも主が私にプレゼントしてくださった信仰のすばらしさを味わうことができました。永遠のいのちと天の御国について改めて静かに考える時が与えられました。死の恐怖と不安から

解放され、天に望みをおき、残される家族のことを主におまかせして喜んで召されていったキリスト集会の皆様の証しを思い出し嬉しくなりました。（たくさんの証しが他集の「光よあれ」にありますので、ぜひお読みください。）

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

（Ⅰテモテ　1・15）

主のしもべとして

救われて喜びに満たされた私でしたが、一方で信仰に関する父の猛攻撃を受けました。家族の中でたったひとりイエス様を信じた私は、毎日泣きながら祈っていました。しかし心の底の方ではいつも喜びがあり、嬉しくて感謝の毎日を送っていました。進路についてイエス様に導きを祈り求め、改めて福祉の道を選び短大に入りました。短大で副手をしていたころ、先生から精神薄弱児者通園施設のことを伺い、その後結婚までそこで働くことになりました。

「彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

（ヨハネ　9・2、3）

このイエス様のメッセージを知ったとき、私はとても驚きました。でも実際にこの聖書の言

葉どおり、施設に通園してくる子供たちや授産所に来られる人々を通して、たくさんの神の栄光の現われを見せていただきました。

やがて私は結婚に導かれました。主人もイエス様をすでに信じていたので、安心して同じ土台の上に立ち、生活を始めることができました。ところが結婚後すぐ名古屋に移り住み、転々と住居が変わり、その後主人は会社を辞め独立しました。独立してからも引っ越しや不安定な生活が続きました。でも、それによって多くの友人が各地にでき、イエス様を信じる方々も与えられたことは、大きな喜びとなっています。また一日の計画を練るのが大好きな私が、「予定は未定」とばかりことごとく計画が崩される生活のなかで、ただイエス様に頼るときに安心を覚えるようになりました。頑固な自分の意志を少しずつですが、イエス様にゆだねられるように変えていただいているように思います。主人も、予測できないさまざまな問題のなかで、主イエス様の働きを次々と見せられ、イエス様を以前より深く信頼するようになったと思います。悔い改めることも山ほど示され、天の御国に行けば罪を犯さずにすみ、主のおそばにいつもいられてさぞ居心地がいいだろうと思うこともありますけれど、私たちの罪を贖ってくださったイエス様が「もうあなたの罪を思い出さない。」（イザヤ43・25）と慰めてくださるので幸いです。

このようにイエス様は、私たち家族や親族に多くの贈り物をくださり、今も救いを与えようと働き続けてくださっています。主人の妹たちと私の弟が救われ、主人の祖母がイエス様を受け入れる祈りをし、母たちも病気その他を通して、たくさんの福音の証しのテープや本に接してイエス様が身近になりました。また主人の妹の稼ぎ先にもイエス様は働かれ、義姉を救ってくださり、

姑もベックさんはじめキリスト集会の皆さんの祈りの中で天に召されました。

私の父は長い年月イエス様に反抗していましたが、がんで倒れる前頃からだんだん自分の信じてきた宗教組織を嫌うようになっていました。召される日の少し前私が「もしおとうさんがなおらなくても天の御国はすばらしい所らしいわ。我がままを神様の前に認める人は皆行けるんですって」と言いますと、すなおな顔をして、「天国の門の前でうろうろしちゃったりして」と冗談を言い苦笑いしました。自分の家の宗教を手放すことのなかった父の言葉とは信じられませんでした。召された時は、今まで見たこともない安らかな顔で、イエス様が父を天に連れて行ってくださったと信じられました。キリスト集会の皆様の祈りもとても感謝していました。以前よりの父の遺言で、葬式は私たち家族と二、三人の親族で宗教と関係なく行なわれました。

主人の下の妹は、一足はやくイエス様の所へ召されました。義父は彼女に再会したいと心から願っているので、一日も早くイエス様と向き合い、愛する娘と再会できるという確信が与えられ喜びに満たされますよう祈っています。すべてはイエス様の愛の現われであり、イエス様は私たち家族や親族を救って幸せにしたいと、いつも願っていらっしゃるお方なのです。

異国の地で

さまざまな思い出を日本に残しつつ、カナダでの新たな歩みが始まったときのことです。ここは、英語とフランス語が公用語の国です。今でも言葉にはとても不自由していますが、当時聞いたり話したりがまったくできなかった私たちは、主人のわずかな英語力を頼りに、知り合いもい

ない土地で生活しはじめました。英語を少しずつ学びながらいろいろな国の人々と片言で話すうち、神様が造られた人間の心の中は、文化や言語が違っても同じなのだと実感しました。しばらくの間カナダ人の集会にもお世話になり、イエス様を信じている人々の気持ちもまた世界共通だと思いました。

子供たちも、言葉の壁との戦いが始まりました。英語で学ぶ教科書は、予想以上に大変なことだったと思います。自然というものも、カナダに来て美しいばかりでなく、恐ろしいものでもあることを認識し、神を畏れました。神の造られた自然の中に一人でいると、こだまのように自分の数々の罪がよみがえりイエス様の前にひれ伏すのです。でも裁かれているのではなく、大きな天のふところに抱かれている感じになります。一握りでつぶされてしまうような弱い存在、神の意志一つでどうにでもなる吹けば飛ぶようなものなのに「自分、自分」と主張している人間を神様が笑っておられるのではないかしらと、何万年と続く山々を見ると思います。

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。（詩篇　8・4）

なぜ神様は、こんな者をも愛してくださるのか、今でもよくわかりませんが、いつも大きな愛を感じます。

北米の方々との礼拝

主人の仕事がこの地でも与えられ、滞在がのびたことから、私たちは真剣にこれからどうすべ

きか祈り始めました。一九九四年頃からお知り合いになり、共に聖書のテープを聞いていた日本人の方々のことも祈りました。ちょうど時を同じくして、ロスアンゼルスでも電話回線をつないでの礼拝が始まり、私たちも参加させていただくようになりました。この礼拝は、ずっと日本で吉祥寺キリスト集会に集っていた私たちにとって、本当に嬉しいものとなりました。皆心から主イエス様に礼拝し北米の広い地域の人々と一つにされ、力づけられ、支えあいながらずっと続けられています。カナダの集会で親しくなった方から、英語かフランス語でやっている同じような集会があれば集いたい、と尋ねられ、「主の御心なら英語や他の言語でも始められるようになるといいですね」と言いました。この方のご主人はまだイエス様をご存知ないので、私たちもお祈りしているところです。

新しい住まいと子供たちの救い

今まで住んでいた家が、家主の都合で引っ越さなければならなくなりました。その同じ時に、日本から電話があり、父が倒れたので看病に帰って来てほしいと言われました。忙しい中で家捜しがはじまり、一九九六年四月、家賃も相場よりずっと安く、いい条件の家が与えられました。とにかく引っ越ししないと先に進めない私たちは、とりあえず契約しました。この時私は祈りました。「この家が主に用いられますように。あなたがくださったのですから、自由にお使いください」。でも当時、こんなところにほんとうに誰か来てくださるかしら、と祈ったあとふと思ったりしました。

長期の仕事で日本に行かねばならない主人と父の看病で日本に帰る私とが重なってしまい、両親がいないところで子供たち三人だけが新しい住まいにしばらく生活することになりました。長女は州の卒業試験を控えており、次男は小学校を卒業するという大切な時期でしたが、私はどちらの卒業式にも出られずかわいそうなことをしました。またこの時期、子供たちが親から離れ勝手気ままになってしまい、私たち夫婦もあとで苦しむことになりました。

父の葬式、家のあとかたずけを終え、一時滞在の母とカナダに戻ったのは八月も終わりの頃でした。帰ってみると長男は反抗的で、長女も上の空、次男も言うことを聞かなくなっており、しばしば子供たちと衝突するようになりました。やむをえぬ事情にしろ、長いこと放任してしまった親の責任を思いました。主人は相変わらず日本とカナダを往復する生活で、私は神様がおられるのはわかっていましたが、孤独を感じひとりぼっちのような気がしていました。もちろん、主人のさまざまな支え、協力がなければ今の私たちの生活はありませんでした。でも、カナダに来てお互いが余裕のない日々を送り、子供のことを省みることも少なく、悔い改めの材料には事欠きませんでした。しかしイエス様はこの時も私の重荷を担ってくださっていました。このような状態の中でも、この家はイエス様が与えてくださったという思いが強く、その後知り合いになった方々を家に招きました。よくイエス様を伝えられない私ですが、福音の証しのテープにともにはげまされ、とても感謝でした。ふりかえってみれば、宣教師として言葉の違う国から来られ、ほめられても誤解されても、主イエス様にすべてを捧げて私たちにイエス様の救いを伝えてくださったベックさんたちのような方々がおられたからこそ私は救われたのです。宣教にいらした方々

を思うと、感謝で一杯になります。おかげで、今はどんな所におかれてもイエス様に祈ることのできる恵みの特権が与えられているので安心です。

翌年一月になり、長男が罪を示され主イエス様に心から愛されていることがわかり、悔い改めて主人と祈りました。その後、長女も聖書のことばに導かれて悔い改めに導かれました。そして、二人共、洗礼を受けたいと言い、トロント「よろこびの集い」で洗礼を受けることができました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

テープの会と家庭集会

何人かの方々が、福音の証しのテープを聞く会に集ってくださるようになりました。テープの内容は、普通の職業についておられる方々やベックさんが語っておられる聖書からのメッセージ、そして救い主イエス・キリストに出会い喜んでおられる家庭の主婦や若い人々、ご夫婦で救われた方々やお年寄りの方々の証しなどで、日本からキリスト集会の方々が送ってくださいます。毎回私自身もとても楽しみにしています。いろいろなことで苦しんでおられる方々も来られるようになり、みこころならベックさんたちが会いに来てくださるように、ひそかに祈っていました。イエス様はこの祈りに答えてくださり、六月、九月とベックさんが立ち寄ってくださいました。次々と問題を抱えておられる方々が相談され、イエス様をご自分の救い主として受けいれられ、皆が喜びで満たされました。いっしょに日本から来られたキリスト集会の方々も力強く証しして

くださり、心からの愛を与えられました。イエス様に何でもお話しておけば、ちょうど良い時に助けを遣わしてくださるのだとわかりました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・11）

翌年三月にもキリスト集会の方々が立ち寄ってくださり、私たちを励ましてくださいました。こうして、救われたばかりの人々と神様の御前に祈るようになりました。小さな祈り会ですが、心をひとつにして、イエス様に私たちの願いごとやその他のことをお話しています。イエス様は人間に都合のよい勝手な祈りをより分けてくださり、最善をなしてくださるので、私たちは安心して子供のように正直にイエス様に祈れる幸いを心から喜びあっています。

カナダ「よろこびの集い」

一九九八年六月には、日本から、また北米から大勢の皆さまが来てくださり、バンクーバーで「よろこびの集い」が行なわれました。この時も始めから終わりまでイエス様が先だって導いてくださり、祝福してくださいました。まだイエス様をご存じなかった方々がイエス様と出会い、ひとりびとりが喜びに溢れる者と変えられました。バンクーバーの五人の方々と日本からいらした六人の方々が洗礼を受けられ、イエス様に従う決心を公に証しされました。この集いにいらっしゃれなかったけれど祈ってくださっていた北米や日本の皆様、ドイツ、スイスの方々、また、それぞれの重荷をもちながら祈り、参加された皆さまの上に、主の恵みがあふれました。バンクーバー

のひとりびとりもこの日のために真剣に祈り、ご主人様がたが忙しい中を助けてくださったことも感謝でした。

この「よろこびの集い」で、たくさんの恵みと祝福を通して、イエス様という方の偉大さ、今も生きて働き続けてくださっていらっしゃるまことの神様の存在を強く感じることができました。大きいことも小さいことも、あらゆるできごとをひとつひとつ導き、助けてくださった主イエス様に、すべての感謝、賛美、喜びをおささげしたいと思います。

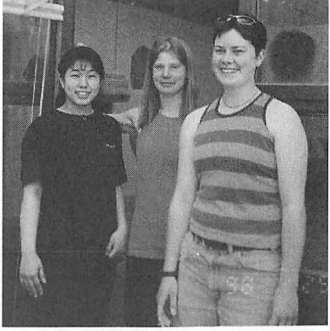
ここまでつづってきた私の証しはちっぽけで平凡な人生の断面にしか過ぎませんが、その中に、その時々に、イエス様の守りと導きが山ほどあるのをとても言い尽くすことはできません。イエス様というお方は決して宗教家などではなく、今も生きておられ、闇の中で疲れ苦しんでいる人々を助けようとしておられる、別の名を「愛」というお方です。このイエス様に一人でも多くの方々が出会い、本物の喜びを得て新しい人生を歩まれることができますよう、心からお祈りしています。

神よ。あなたが、天であがめられ、あなたの栄光が、全世界であがめられますように。

（詩篇　57・5）

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。

（Ⅰテモテ　2・4～6）



左が牧子さん。カレッジで。

ともに歩まれた主

野田牧子

一九七八年東京に生まれる。多摩市立南豊ヶ丘小、神奈川県森の里中、バルモラルセカンダリースクールからウィンザーハイスクール卒業。現在カヒラノカレッジアート科在学中。家族は父房男さん、母洋子さん、弟尚広さん、恵太さん。

私はイエス様を信じる家庭に生まれ、小さいころから日曜学校へ通ってイエス様を何の疑いもなく信じていました。小学校、中学校と毎日楽しい学校生活を送っていましたが、中学二年の七月、カナダへ引っ越すことになりました。その時は一年間の滞在予定だったのでボストンバッグと手持ちかばんだけでカナダへと出発しました。

ところがその後予定とは違って、私たち家族は現在に至るまでの六年間をバンクーバーで過ごすことになりました。最初の一年は、すぐに日本に帰るという気持ちから、英語の勉強もあまりせず、楽しい生活を送っていました。

しかし、時間がたつにつれて勉強、友達関係、言葉の違いなどから学校へ行くのが苦になってきました。いつのまにか私は心の中で「こんなはずではなかった」とぼやくようになり、他人が怖くて人との会話を避けるようになりました。カナダに住むようになってはじめて、日本では一度も感じたことのなかった孤独を感じました。

本当に自分は一人なんだと思った時、心の中に浮かんだのはイエス様でした。一人でいる時は

気がつくといつもお祈りしていました。「イエス様は私と一緒にいてくださるんですね。あなたは私をも愛していてくださるんですね。ありがとうございます」。私にとってイエス様は、絶対的で不動なものでした。そして聖書から好きな個所を書きだして、学校へもっていくようになっていました。

恐れるな。わたし（主）はあなたとともにいる。　（イザヤ　41・10）

私は高校を卒業したら帰国子女として日本の大学へ入るつもりでしたが、カナダでの生活が長引くにつれて、自分は英語圏の生活から逃げ出し安易な道を進もうとしているのではないかという思いが湧いてきました。こういうことはすべてをご存じのイエス様にお祈りするしかないと思い、「どちらがいいのか私にはわかりませんので、どうかイエス様のみこころのままになさってください」と祈っていました。

さしあたり高校を卒業してからの一年間は、キャピラノ・カレッジで美術に関する勉強をすることにしました。いずれ移民権を取れば学費が安くなるはずでしたので二教科しか取りませんでした。その一年間の祈りは「日本に帰ったほうがいいのでしょうか。こちらで美術を専攻したほうがいいのでしょうか。それとも美術ではなく普通の科目を専攻したほうがいいのでしょうか」というものでした。一年後、美術専攻のプログラムに入るための面接試験を受けましたが落ちてしまいました。しかし、そのあとで試験官をした先生からいくつかクラスを取ってみないかとの勧めがありました。これを一年間の祈りの答えとして受けとった時、やはり美術専攻でいいのだ

と、イエス様のみこころが確信でき、イエス様に感謝しました。

このころ、私はもうひとつイエス様から大切な訓練を受けました。私がキャピラノ・カレッジに通い始めたころ、好きな人ができ、いつの間にかお互いに好意を抱くようになっていました。私たちは毎日のように会い、映画、ビリヤード、カラオケなどに出歩くようになりました。私はつき合いはじめる前に、自分はイエス様を信じる者であるということをはっきりと伝えました。しかし、どこまでがイエス様の目によしとされるのかがわからず、ある程度自分でも妥協してつき合っていました。何をするにも神様に対するおそれは心の中にありましたが、それでも自分の欲望には勝てず、聖書も自分のいいように解釈していました。

そんなある日、母との何気ない会話からすべてが明らかにされ、それ以前にも言われていたことでしたがもっと強く「別れなさい」と言われました。その夜、泣きながらお祈りしました。「どうすればいいのですか。私は別れたくありません。でもみこころのとおりにしてください」。聖書を読んでいくうち、ほんとうにたくさんの個所を通して、このままつき合っていくことはみこころではないとはっきり示されました。神様のお声が本当に聞こえてくるようで怖いほどでした。

去れよ。去れよ。そこを出よ。汚れたものに触れてはならない。その中から出て、身をきよめよ。主の器をになう者たち。

（イザヤ　52・11）

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

（イザヤ　55・7）

私はどうしようもなく頑なでした。こう示されたにもかかわらず、別れた後もただ友達としてならいいだろうとその人と会っていました。そんなある日、父が急に日本に行かないかといってきました。私は学校があるので、十日間くらいならということで承知しました。そして日本から帰国すると、その人には新しい女性の友だちができていたのです。とてもショックでしたが、これが私のあいまいな態度に対するイエス様のお答えだと知ることができました。また、私の罪がどんなに重いかも思い知らされました。ここまでこないとイエス様に従えない自分だったのです。一方イエス様の愛は、私が思っている愛よりもずっと深く、こんなに頑なでみことばにも従えないような私なのに、まだイエス様は私を見捨てず、愛していてくださっていたのです。イエス様の愛だけが、いつまでも変わらないということも確信できました。その日はイエス様に悔い改め、感謝しました。本当に聖書に書いてあるとおりでした。イエス様は私の行ないによって罰せず、信仰によって、義と認めてくださいました。

人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

（ローマ　3・28）

私の内側の肉なるものは、イエス様の前に何一つ良いものはありません。それなのにイエス様は、ご自分の血のあがないによって私を救い出してくださいました。私の体はもう自分のもので

はなく、イエス様のものです。私はただ神様のあわれみによって生かされているものであり、所有権は自分にはなく、イエス様にあるのです。

神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。（ローマ　8・3）

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。（ローマ　8・6）

あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。（ローマ　6・13）

私は一九九七年六月一日、洗礼を受けました。その一年後、バンクーバーで「よろこびの集い」がありました。現地にいる者としてお手伝いしながら、自分の無力さをいやというほど感じさせられました。そして集いが始まると、なぜか涙が止まらなくなり、自分の罪を悔い改めさせられました。日曜日には、お祈りしていた方がキャンプに参加され、ほんとうに嬉しくて心から神様に感謝しました。なんだかわからないけれど生まれて始めて感じるような心の底からのわき出る喜びがあり、イエス様を今までになかったほど力いっぱい賛美しました。これは、私が自分からそうしようと思ってしたことではありません。喜んでいる自分も、イエス様のことを証ししてい

る自分も、一方的なイエス様の愛により、またいただいている聖霊の働きによるものであることがはっきりとわかりました。聖書のことばも一語一語が新鮮で、心にしみ込むようでした。私たちの想像をはるかに越えたイエス様のみわざに、ただただ、ありがとうございます、と頭を下げるばかりでした。

助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

（ヨハネ　14・26）

小さい頃から信じていたイエス様は、人間と同じ体をもってこの世に来られ、私の罪のために十字架にかかって死んでくださった方です。私は他の人といっしょになって、イエス様を十字架につけろと叫んでいた者だったかもしれません。それなのにイエス様は、十字架の上で、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ23・34）と言ってくださり、ご自分のいのちを父なる神様に明け渡され、三日目に死者の中からよみがえられました。イエス様が地上に来られて二千年がたとうとしている今、ずっと遠い昔に起こったと思っていたこの事実が、私の救いの根源であるということを聖霊があらためて聖書を通して示してくださいました。心から感謝です。

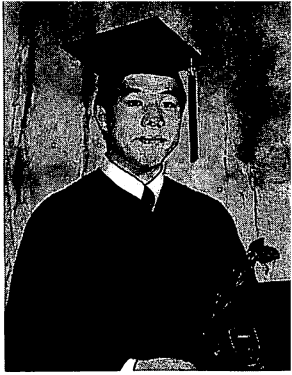
天地万物を創造された神様に愛されていることは、何と光栄で、すばらしいことでしょう。この方が私と共に死をも越えて一緒にいてくださることはとても心強いです。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ 8・38、39）

「見よ。わたし（イエス様）は、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイ 28・20）

トロントでの洗礼式。





ウィンザー校の卒業式で。

イエス様の恵み

野田尚広　一九七九年三重県桑名市に生まれる。多摩市立南豊ヶ丘小、神奈川県厚木市森の里小、森の里中、ウィンザーセカンダリースクール卒業。現在慶応義塾大学経済学部在学中。家族は父房男さん、母洋子さん、姉牧子さん、弟恵太さん。

イエス様には、何度助けていただいたことでしょうか。イエス様は私がどのような状況にあっても支えてくださり、私がどんなに信仰から離れても、見捨てずにいてくださいました。これはイエス様の一方的な愛によりなされたことでほんとうに感謝です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

私の両親は二人ともイエス様に従っていたので、物心ついたときには、すでにイエス様を何の疑いもなく受け入れていました。子供のころから吉祥寺キリスト集会の日曜学校に行くのが当たり前のようだったし、毎週楽しみにしていました。日曜学校のクラスでイエス様の話を聞くたびに、イエス様はとてもやさしくてすばらしい方だなと、子供なりに思っていました。幼かった私にとって、イエス様はかけがえのない存在でした。どんなに小さな悩みもすべてイエス様に祈り

ました。例えば、大事なものをなくしたとき、学校で友人とけんかをしてしまったとき、風邪で苦しいとき、一人で淋しいとき、すべて正直に祈りました。

中学に入り、その生活にも慣れてきた頃、カナダに行くことが決まりました。好奇心を抱く反面、大きな不安にもかられました。外国の生活など、当時の私にとってはまったく想像もつきませんでした。そのような期待と不安が入りまじる中、カナダでの生活が始まりました。

カナダに行って間もなく学校が始まり、まず言葉の壁にぶち当たることとなりました。海外で新しく生活をはじめた誰もが経験する問題だと思います。それまで英語にまったく触れたことのなかった私にとって、当時、毎日出される学校の宿題はとても苦痛でした。毎晩のようにわからないことを親に訴えながら教えてもらい、それでもわからないことは飛ばしながらやりました。学校では孤独な生活を送っていました。学校に通う前までは、すぐに慣れるだろうと簡単に考えていました。その思いの背後には、異国から来た転入生を温かく迎えてくれるだろうという甘えた気持ちがありました。しかし、そのような甘い期待は大きく覆されてしまったのです。多くの人種からなるカナダの学校では、異国の転入生というのは当たり前でした。そこでは、自分から話しかけていかない限り、相手が自分に興味を持ち、話しかけてくれるというようなことはめったにありません。そんな世界でした。片言の英語でも、積極的に話していくのが一番なのですが、私にはそんな勇気がありませんでした。学校では静かな自分と、家ではよくしゃべる自分の二人が存在していました。

学校でうまくやれない私は、自分に苛立ち、そのストレスを無意識に親や兄弟にぶつけていま

した。家にいるときは些細なことで腹を立て、兄弟喧嘩をしたり、親に怒鳴ったりしました。そのたびに自分はなんて悪い子なんだろう、なぜ自分ではしたくないことをしてしまうのだろうと悩み苦しみました。しかしこのような状態にあってもイエス様は、自分の罪に対して心から謝り、祈ってすべてのことをイエス様にゆだねるとき、平安を下さいました。そして、そんな私にイエス様は、自分が好きなスポーツを通じて友だちを与えてくださいました。それは、英語が自由に話せなかった私にとって、いちばんの方法でした。苦しいとき、イエス様に心から助けを求めて祈るなら、イエス様はそれに答えて最善の道を用意していてくださるのだということを、自分の体験を通して知りました。

もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。（ローマ　7・20）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

去年の六月の初め、私はトロントの「よろこびの集い」で洗礼を受けることができました。私は洗礼を受ける前、イエス様から離れていた時期がありました。その時期には、毎日祈ることも忘れ、毎週家で開かれていた礼拝にも面倒くさいという気持ちで出席していました。しかしイエス様は、多くの試練と、私が犯した罪をあからさまにすることで、私のそのような高慢な態度を

砕かれ、私をそのような状態から救ってくださいました。

それにその少しあと、子供のころからイエス様のことを他人に伝える勇気がなかった私に、イエス様は機会を与えてくださいました。私は初めて友だちに自分の体験を証しすることができたのです。そして、それを通してその友人が救われ、そのことで大きな喜びが与えられました。イエス様は私を罪の中から救ってくださっただけでなく、人が救われる喜びも与えてくださいました。

そのようなことを経て、やはりイエス様はこの世のどんなものにも代えられない、一番の存在なのだと改めて感じた私は、トロント「よろこびの集い」で洗礼式の案内があったとき、洗礼を受けようと決心しました。しかし正直に言って、その時の私は、トロントに行くためには学校を何日間か休まなければいけないということがとても心配でした。というのもその年は高校卒業の年で、六月の中旬には、その年の評価の六十パーセントを占める州の統一試験を控えており、一日一日の授業がとても大切な時期だったからです。しかしイエス様はそのようなことにも配慮してくださいました。その忙しい時期に三日も休んだにもかかわらず、私は何事もなかったかのように授業に復帰することができました。みこころがなされるとき、ほんとうに何も心配することはないんだなと感じました。

人の道は主の目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を配っておられる。

（箴言　5・21）

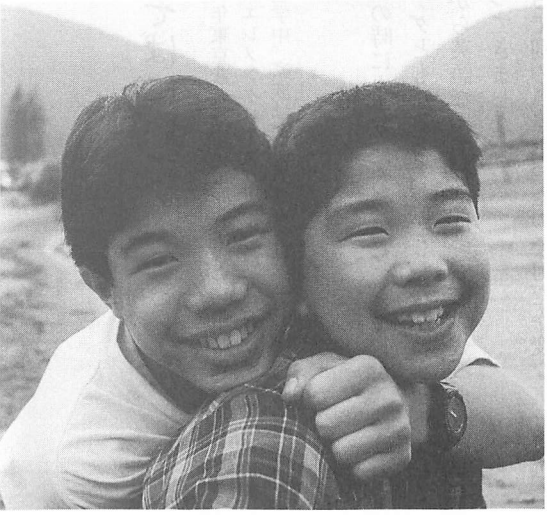
その後開かれたバンクーバー「よろこびの集い」でも、ほんとうにイエス様の大きなあわれみ

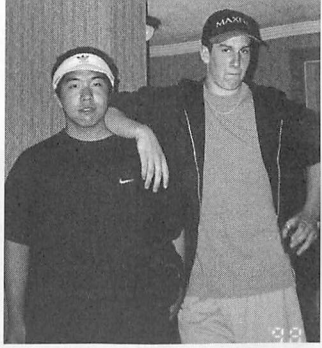
により、沢山の人々がイエス様のみもとに導かれました。その人たちを含め、まだイエス様の愛をご存知ない方々が、一刻も早く主の恵みをいただけることを、これからも祈っていきたいと思います。この世のどんなものにも公平で正しいお方なのですから、この世のすべてのことを必ず配慮していてくださるのだと私は確信しています。そして私は、生まれる前からイエス様の恵みを約束されていたことを心から感謝しています。



サッカー部の仲間たち。

ビクトリアで弟と。





左が恵太さん。親友のクレーテンと。

いつも神様がそばにいてくださった

野田恵太　一九八三年東京武蔵野市に生まれる。神奈川県森の里小、シーモアハイツエレメンタリースクールを経て現在ウィンザーハイスクールに在学中。家族は父房男さん、母洋子さん、姉牧子さん、兄尚広さん。

僕は東京で生まれ、小学校三年生の一学期、八歳の時にカナダに引っ越してきました。僕は引っ越しするのは慣れていると思っていましたが、カナダともなると大変かもしれないなと想像していました。でも周りの人たちが、僕はまだ子供だから英語なんて行けばすぐに話せるようになると言っていたので、僕もそれを信じてカナダへやってきました。

カナダに来てみると、僕が考えていたのとはまるで別の風景だったので何だか変な気分でした。僕が想像していたカナダは、真っ白な雪に包まれた、雪で作ったイグルーなどがある国でした。でもここはバンクーバーという海に近い町で、雪もめったに降らないとわかった時は、ほんとうにがっかりしました。

夏が終わって初めて学校へ行った日は、言葉も何もわからないので不安でいっぱいでした。学校の校長先生と廊下を並んで歩いて教室に着き、ドアをあけてみると白人の子供たちが僕にいっせいに目をむけました。後をふりむくと、一緒に後についてきていたはずの父も母もどこかへ行ってしまってもういませんでした。それから先生に名前を聞かれて、おどおどしながら「マヨネー

ズ・イズ・ケイタ」とあがって答えると、クラスのみんなが動揺した眼で僕を見つめていました。先生が「ケイタ君ね」とやさしく言ってくれました。その日、クラスのみんなは一言もしゃべれない僕をすごく暖かく迎えてくれました。僕はすごく先生とか友人に恵まれたと思います。

わからないことがあると僕は手を使ったり、表情を変えたりして何とか説明しようとしましたが、やっぱり言葉が通じないと、自分の言いたいこともわかってもらえず、ちょっと日本が恋しくなることもありました。でもそれとは別に、カナダのすばらしい自然や景色を楽しむことができました。学校でしていることは簡単で、僕は一日のほとんどの時間、「E・S・L」という英語がしゃべれない人のための授業を受けていました。「ESLクラス」には中国人、韓国人、イラン人、インド人、ポーランド人、フィリピン人などいろいろな国籍の人がいました。でも残念ながら日本人は僕一人でした。はじめの頃僕は友だちがいなかったので、ほとんど家族とだけで時間をすごし兄と遊んだり日本のビデオなどを見ていました。ビデオは何度も同じものを見て、セリフを覚えてしまったくらいでした。

そんな日々が続く中、僕たち家族は小さな白人の集会に行くようになりました。でも僕は英語がわからなかったり、いろいろ覚えなくてはいけないこともあって、時々行きたくないと言ったりしていました。そのうち僕の家で集会が開かれるようになったのですが、僕はよく寝てしまって集会にはあまり出ませんでした。僕は、生まれた時からずっとクリスチャンホームで育ち、イエス様のことを知ってはいたけれど、聖書を開くのは集会の時だけで、あまり神様のことを考えたことはありませんでした。お祈りも、食事の前にいつも同じ一言ですませてしまっていて、そ

れは昔からのルーティンでただ何となくやっているというだけのものでした。ですから正直言って時々、なぜ僕は祈っているのだろうか、こんな不真面目でいいのだろうかと思ってしまうぐらいでした。でも、そのことをあまり深く考えることはありませんでした。クリスチャンホームに育ったことを嫌だと思ったこともあります。なぜか僕の一家がクリスチャンだというのを友だちにもなかなか言えませんでした。

そのうち僕は、いつの間にかカナダに来て四年以上もたっているのに気づきました。カナダでの生活が一年の予定だと聞かされている間は、すごく長いと感じましたが、もうそんなにたつのかと思うと同時に、日本にはもう帰りたくない、という気持ちも出てきました。もし日本に帰ったらいじめられるかもしれない、勉強がみんなより遅れていて困るだろうなと思って、難しい問題から逃げたかったのかもしれません。その頃の僕は、日本からだけでなく、イエス様からも逃げていたのかもしれないと、今思います。

僕にとって「ＥＳＬクラス」は簡単で楽だったので、なまける癖がついてしまいました。でもハイスクールにあがると、そんな僕を打ちたたくように厳しい先生ばかりにつくことになりました。カナダでいろいろなスポーツも始めました。アメリカンフットボールが最初で、けっこうつらいけれど楽しく、片言の英語でも友だちを作れるチャンスになったと思います。このことも僕はとても恵まれていたと今思います。いろいろな面で恵まれて七年後の今の僕に至っています。中学生でカナダに来た兄や姉は、たぶん僕の何倍も苦労したのだと思います。

ある日、バンクーバーでも「よろこびの集い」の話が出ていることを耳にしました。僕はロサ

ンゼルスやトロントのキャンプに行っていたのですが、ほんとうにバンクーバーでもできるのだろうかと思い、ちょっと反対する思いをもっていました。でも話はどんどん進んでいき、僕が知らない間にいろいろ忙しくなってきました。でもキャンプが始まると、反対していた僕にもちゃんとイエス様はご用を考えてくださっていました。小さい子供たちの面倒を見たり、通訳として歯医者にいくことです。地図も一生けんめいに見て、読めるようになりました。バンクーバー「よろこびの集い」ではハプニングもたくさんあったけれど、イエス様がすべてよくしてくださって、みんながとても喜んでいる姿を見て、やっぱりイエス様はすごいと思いました。

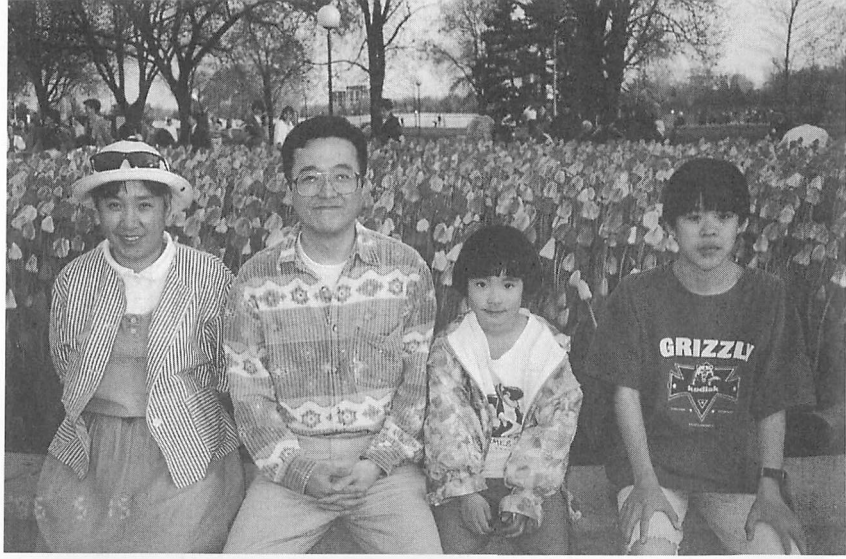
私は、あなた（主）のなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。

（詩篇　77・12）

今僕は、生まれてからきょうまで、いつも神様が見守っていてくださり、どんな時でも僕のそばにいてくださったんだと思うことができるようになりました。

家の前で。





オタワチューリップフェスティバルで。
井出ご一家。



オタワ家庭集会で。左が井出夫妻。

主はあなたの道をまっすぐにされる

井出 和雄

一九五二年山梨県に生まれる。船津小、河口湖南中、沼津高専電気工学科卒業。ソフトウェアデザイナーとして、東芝ベックマン、ソード電算機ほかを経て、七九年にカナダに移住。カナディアン・マルコニーほかを経て、現在ノーザン・テレコムに勤務。家族は妻智子さん、長男雄人さん、長女朝子さん。

移住生活に疲れ果てて

一九九三年の十月半ば頃のこと。突然家内の短大時代からの友人である旭川キリスト集会の樫原さんから国際電話があり、「ニューヨークで家庭集会があるから行ってみたら」という誘いがありました。家内はさっそくニューヨークでの家庭集会の詳細を知るために、当時ニューヨークに駐在しておられた岩崎さんのお宅に電話を入れました。するとすぐに、次の聖書のみことばが書かれた家庭集会のスケジュールがファックスで送られてきました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ　11・28～30）

家内は私にこの家庭集会のスケジュールのファックスを見せて、こう言いました。「このニューヨークでの家庭集会に行きたい。一生のお願いだから」と。私は家内の信仰にはかかわりたくありませんでしたが、「一生のお願い」というのを聞き、「一生のお願いというのはこれっきりだよ」と念を押し、自分はキリスト集会の人たちにはかかわらずに、ホテルのプールかどこかで子供と楽しく遊ぶつもりで家内の願いを聞き入れました。しかしこのファックスを一人でじっくり見たときに、この聖書の一節の「疲れた人」という部分が鋭く心に残りました。この「疲れた人」というのは、四十歳を越え、人生の半ばを過ぎて、生まれた国を離れ、言葉のハンディを負い、心

の平安なしにあくせくと働いている自分のことかな、とふっと思ったからです。

こんな事情で、オタワから十時間もドライブして参加したこのニューヨークの家庭集会で、私の人生にとって一番大きなできごとが起りました。それはこの聖書のみことばのとおりに、私は自分が「疲れた人」であることを認め、主イエス様を知る恵みにあずかるようになったからです。これから、私がどのようにしてカナダに移住し、十四年後四十一歳にしてイエス様に救われたかを、お伝えしたいと思います。

罪のはじまり

私は一九五二年、富士山の麓の山梨県河口湖町で四人兄弟の末っ子として生まれました。家族の問題もなく、素晴らしい自然に囲まれ、明るい心でのびのびと野原を駆けめぐっていた幼い日々をよく覚えています。しかし成長するにつれ、いつの間にか自分の心が暗くなるようなことをするようになりました。小学校の高学年の頃から、嘘をついたり、商売をしているわが家のレジスターからこっそりとお金を盗んだりしていました。だれにもわからなければ、多少悪いことをしてもいいというような心を持った頃と、満たされない心をひきずり始めた頃とは一致します。小学校五年生の時学校の宿題で、「町内のそれぞれの家には何台のテレビがあるか」という調査をすることになりました。町内は観光旅館街でしたので、私は最初からそのようなことは大変なことだと思い、全く調査をしませんでした。そして発表の日には、きちんと調査をしたように適当な数字を先生に言いました。私はクラス委員でしたので子供なりの自尊心もあり、先生に素直に「ご

めんなさい」と言えませんでした。

また私は中学二年生のときに二ヵ月間、急性肝炎で入院したことがあります。その時、私は自分の体に関しては、誰も当てにならない、自分で気を付けなければと思うようになりました。ふたたび病気にかかる不安から非常に神経質になり、自己保存と思い煩いの気質はこのあたりから始まったように思います。

曲がりくねった道

学校を卒業する時、吹奏楽部の送別会で後輩の何人かが部長である私に、次のようなことを言いました。「井出さんは、パート練習の時に俺達のところにやって来てはいつも、『へらへらしているんじゃないぞ！』と言っていたけれど、一番へらへらしてたのは井出さんだと思います」と。その時はふざけた奴らだと軽くあしらっていました。しかし今考えてみると、自分は自分なりにあんなに頑張ったのにという思いがあるのに、それに対する客観的評価がすでにここでなされていたように思います。そしてこれから証しする学校卒業後の私の行動は、後輩の指摘そのものでした。今でもそうですが、その当時は非常に自己中心的で、「自分はこんなに仕事を頑張ってやっているのに、なぜか満たされない」とか、「もっと生きがいのある仕事をしたい」、「もっと人生にチャレンジしたい」などいろいろな思いがありました。そんなわけで、日本にいた頃には、一つの会社で三年以上勤め続けたことがありませんでした。この期間がんばることとは裏腹に、酒、タバコを覚えたり、歓楽街をさまよい歩くような生活をしておりました。その延長線上に、カナ

ダでの移住生活があったのです。

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。

（ガラテヤ　5・19～21）

最初に就職したのは東芝系の会社でしたが、もっとやりがいのある仕事をしたいと思い二年ほどで辞めました。次に移ったのは電算機の会社でした。そこは当時のベンチャービジネスの先駆けで、やりがいのある仕事を次から次へと与えられました。マイクロコンピュータのシステムソフトの制作に追われ、帰るのはいつも終電車という生活を一年ほど送っていました。「自分はこの東京でこんな生活を一生続けていけるのだろうか」という不安な思いを持つようになりました。そして、以前に旅したカナダに移住してみたいという望みを抱くようになりました。今思えばこれも明らかに現実からの逃避でした。一九七五年にカナダへの技術移住ビザを申請しました。その時カナダのある会社で技術者の求人があったのですが、それまでの私の経験とは合わず、移住ビザの申請は却下されました。そのような失意のなかで、仕事が長続きするはずはありません。移住がだめなら海外で働きたいと思い、仕事を探しているうちに、ある会社のロスアンゼルス駐在員の話がありました。しかしそこも半年くらい勤めて辞めました。

日本に帰ってからは人に誘われるまま、福岡でマイコン関係の会社設立に参画しました。この会社は、創立当初から福岡市内に限らず九州一円で名が知られており、確実に業績を伸ばしてい

ました。ですからこのまま福岡に骨を埋めてもいいくらいに思っていたのですが、対人関係の軋轢などで失望した私は、再びカナダへ移住したいという思いがこみあげてきました。一九七九年の初め、四年ほど前に知り合った東京海外移住研究会の友人から、久しぶりに便りをもらいました。彼によると、その年はカナダへの技術移住ビザが入手しやすくなっているということでした。私はさっそく技術移住ビザの再申請をし、半年後にそれを入手しました。

夢と希望のカナダ移住

念願の移住ビザを手にしてから、一九七九年の十月にカナダに移住するまでの数カ月は夢と希望に満ちあふれていました。私は一ヵ月ほど横浜の根岸で国際協力事業団主催の移住のためのトレーニングを受け、カナダやオーストラリアへの移住内定者の方々と寝食を共にしました。ここで知り合った仲間とは、本当に楽しい時を過ごしました。多少事情が違うにせよそれぞれ同じように日本の会社を辞め、みんなカナダ移住の希望と夢を抱いていたのです。

こうして私はカナダへ行きました。主都であるオタワですでに暮していた移住研究会の先輩の紹介で、私はすぐにコンピュータプログラマの派遣会社に勤めることができました。またかねてから希望していたコンピューターサイエンスの夜間の講義を、こちらの大学で受けることができました。この頃には日本の家族や友人に手紙をよく書いておりましたが、一年経った頃、恩師に宛てた年賀状に「カナダにようやく慣れてきて、永住の意志は変わりません。こちらの嫁さんをもらうつもりです」というようなことを書いた記憶があります。しかしそれから一年も経たない

うちに、知り合って間もない旭川出身の家内と結婚することになりました。

夢からさめて

一九八一年の五月、オタワで私たちは結婚しました。初めのうちは孤独からも解放され、外国に住む喜びは確かにありました。しかしそれは一時的な喜びで、長続きしませんでした。移住センターで知り合った仲間が移住生活に挫折して、一人二人と日本に帰りはじめた頃からでしょうか。一つの家族として外国に住む不自由さが重く心にのしかかるようになり、結婚生活も理想とかけ離れたものと感じはじめて、悩みは深刻なものとなっていきました。カナダでの生活は、今から思えば他に頼る人もなく、私が家族のためにすべてをやっているのだという傲慢な思いに支配されていました。ですから十年間で夫婦の亀裂は深まり、すでに私には家内に対する思いやりの心はありませんでした。

家内が腰痛や胆嚢摘出手術などで寝込んでいる時に、今にして思えばごくありふれたトラブルなのですが、「なんで、俺だけがこんなに苦労しなければならないのか」、「俺が病気になったらどうなるのか」という怒りが大きくふくらんで、あげくの果てに家内に別れ話も持ち出す始末でした。そんな中で育った長男は、小学生の頃から情緒不安定と思われる傾向がありました。先生からすすめられて心理関係や、精神科の先生などを訪ねてみましたが良くはならないまま時が過ぎました。

家内がイエス様のみもとへ

私は家内を、私とは違ってスポーツは万能で性格は楽観的、口も達者でときどきはまわりの人の心を傷つけるようなことはあっても、本人は物事をあまり真剣に考えたり悩んだりしないタイプだと思っていました。ですからこの結婚生活に関して、妻は私ほどには苦痛を感じていないだろうと思っていました。ところがある日、ささいなことから口論となり、私は結婚して初めて家内に暴力をふるってしまいました。それは自分でも信じられない行動でした。当時四歳だった娘の目の前で、私の右手が家内を殴打していたのです。その手に残った感触は、私の心を徹底的に痛めつけました。人はこのように簡単に殺人まで犯してしまうのではないか…と。この時私は、自分はどうしようもない人間になりはててしまった、と思いました。

このことがあって数日後、私は結婚して初めて家内の涙を見ました。この時家内は私に、自分の心のうちを初めて吐露したのです。彼女は「あなたに大事にされていないし、愛されていない。もうこんな生活はいやだ」と涙ながらに訴えたのでした。急にそのようなことを言われたので私は面食らってしまい、何一つ答えることができませんでした。そして途方にくれて、勤務先で契約している社員の家族問題を専門に取り扱っているカウンセラーに会うことにしました。カウンセリングは数回に及びましたが何の解決策もなく、心を開いて家内と接したいと思いましたが、できませんでした。

家内が旭川に帰って洗礼を受けたのは、それから間もなくのことです。樫原ご夫妻のお誘いにのっただけのことだろうと軽く考え、なぜ家内がイエス様を信じるようになったのかを思う心の

ゆとりはありませんでした。オタワに帰ってからも家内は聖書を読んだり、ベックさんのテープを聞いているようでしたが、私はといえば、なんの根拠もないのですが、「自分は絶対に負けない。宗教などに頼らず、自分でこの状況から抜けだすんだ」と肩ひじをはっていました。人生のどんな問題も「自分が努力さえすればかならず解決する」と思いこんでいたのです。家内は私に、「光よあれ」という本に私の職種であるマイクロコンピュータを使った電子機器のソフト開発と関係のある人の話が載っているから読んでみたらとすすめましたので、第6集の藤本さんの証しの部分だけを読みました。その中に古田さんという方のことが書いてありました。私自身が「品行方正ではない」という自覚が強かったので、昔の古田さんの姿と自分が重なって親しみを覚えました。けれど警戒心もあってそれ以上は読まずに、「光よあれ」、「実を結ぶ命」など数冊の本がベッドのわきで一年以上もほこりをかぶっていました。そのようなときに、冒頭で述べたニューヨークでの家庭集会があったのです。

主に心をひらかれて

初めて参加したニューヨークの家庭集会で、メッセージのあとに聖歌「聖霊きたれり」をうたっている時、自然に涙があふれてきて、私はそれをどうしても押さえることができませんでした。

「いとも深き　愛と恵み　いざ迷える　罪人らに　語り告げて　神の子とせん　聖霊きたれり……」

この経験を論理的に説明することはできませんが、この歌詞にある「まよえる罪人」とは実は自分のことであり、よくわからないけれど私は神様から「無限の愛」をいただいているのではな

いだろうかという思いが心の奥底からわき起こったのです。意識的にイエス様から遠ざかろうとしていた私にとって、この夜は、まさに人生の一大転機となりました。この夜はさまざまな思いが私の脳裏を駆けめぐり、明け方まで寝つけませんでした。自分は一体どういう人間なのだろうか。自分は今まで何を拠り所に生活してきたのだろうか。自分は今、何をなすべきなのだろうか、と。外国での仕事と生活に追われていた私にとって、このようなことを考え始めたということは、神さまからの愛以外のなにものでもなかったと思います。

ニューヨークへ来る一週間前に出会ったクリスチャンで、サム・ハーレルさんという高名な工学博士が、私の家で聖書の学びをしてくださっていました。サムさんがローマ人への手紙の学びの時に言われた言葉と、私の質問への答えとが鮮明に心に浮かんできました。サムさんは、「主に従うという見えない線を越えるか越えないかは、私たちの問題です」とおっしゃいました。そして「仕事で困難にぶつかった時にはどうしますか」という私の質問に次のように答えられました。「主に祈る」と。

夜が白み始めた頃にホテルのベッドの中で、夢と希望をもって来たカナダでの生活に何の満足も見出せないこと、家庭不和が存在していること、自分はみじめで無力な中年男なのだと素直に認めたとき自然に涙があふれ出てきました。この解放感と安堵感は過去に経験したことのないものでした。これこそが、「疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11・28）というイエス様の絶対的な愛だったのではないでしょうか。私はこの時、サムさんの言われた線を、自然に超えたのかも知れません。しか

し意志の弱い私は、オタワに帰って後、線のこちら側に戻ってしまい、主の恵みから再び遠ざかってしまうような危惧を覚えました。私はイエス様を全然知らない状態で、ベックさんに「洗礼を受けさせてください」とお願いしました。ベックさんは快く引き受けてくださり、私にイエス様と聖書の話をじっくり聞かせてくださいました。そしてベックさんの後について、生まれてはじめてイエス様に祈ることができました。洗礼の時に印象的だったのは、長男の目に涙が光っていたことです。

翌日はベックさんや他の人々のメッセージにあった聖書の言葉が、すんなりと心に入ってきました。そして勇気づけられたのは、「聖書は理解できるものではない」というベックさんの言葉で、「聖書は頑張って勉強するもの」という私のキリスト教のイメージを完全に取り去ってくださいました。祝福に満ちたこのニューヨークの家庭集会でのメッセージや集会の皆さんとお話することを通して、主は私たち家族が「何を拠り所に生活すべきか」を教えてくださいました。

彼らは荒野や荒れ地をさまよい、住むべき町へ行く道を見つけなかった。飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。まことに主は渇いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。（詩篇 107・4～9）

信仰の日々

ニューヨークの家庭集会で、私は、今までの家庭生活の失敗や苦悩の原因は私自身の中にあり、主を見上げない生活が原因となっていることをようやく知らされました。イエス様との出会いによって、この結婚も、二人の子供に恵まれたことも、すべて主からの恵みであることを知らせていただきました。もし私がイエス様を知ることがなかったなら、私は苦悩と思い煩いとの中で息もたえだえになっていたことでしょう。私のために十字架にかかってくださったイエス様は、私の心のくもりをとりのぞいてくださり、のびのびと野原を駆けめぐっていた幼い頃の、あの明るい心をとりもどしてくださいました。昔私は、カナダへ移住することによって心が満たされ、日本にいるよりもっと楽しく充実した人生が送れるものと信じていました。けれども今、どんなに美しいカナダの自然環境にあっても、自分の心が罪から解放されないかぎり心の満たしは得られないということも思い知らされました。最後に私たち家族四人のささえとなっている聖書の中から次の言葉を引用して、この証しを終わらせていただきます。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・5、6）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）



中央が智子さん。左右は樫原夫妻。

イエス様助けて！そして、ごめんなさい

井出智子

一九五四年北海道に生まれる。広陵小、北星中、旭川南高校、東海大学工芸短大卒業。一九八一年に井出和雄さんと結婚。家族は夫和雄さん、長男雄人さん、長女朝子さん。

私は心を尽くして主に感謝します。あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。
私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。
（詩篇　9・1、2）

私の生い立ち

私は一九五四年に、旭川から北へ車で一時間半ほどのところにある名寄という町で生まれました。私が三歳くらいの時に、父は養父の製材工場から独立して造林伐採業を始めるため、私たち家族を連れて、北海道のほぼ中央にある小さな金山という山村に移り住みました。そのころのわが家は、「山子さん」と呼ばれる山林で働く人達でいつもあふれていました。日が暮れるとわが家は麻雀や花札などのギャンブルに熱中する大人たちで、まるで賭博場のようでした。私は人のことなど気にかけない、わがままな性格の芽を抱きながら、「家族団欒」とか「親子水入らず」という言葉に全く縁のない幼年期を過ごしました。そのような人の出入りの激しい生活にいや気

がさしたのか、母は三つ違いの兄と私を連れて、私が小学校二年生の時に旭川へ引っ越してしまいました。そのため父とは月に一度顔を合わせる程度で、私たちは父親不在の家庭環境で成長したのです。

父と離れて暮らしているため、母は父の女性関係にいつも神経をとがらせ猜疑心でいっぱいになっていました。それであちこちに電話をかけては父の動静を探り、腑に落ちないところがあれば徹底的に父を責めて、けんかばかりしていました。ですから父はだんだん家に寄り付かなくなり、母はその寂しさのせいで新興宗教にのめり込んで行ったのです。

母はその宗教団体の中で講師の肩書きをもらい、他の信者の悩みごとの相談にのったりしていました。母に寄せられる悩みごとでいちばん多いのは夫婦間のトラブルで、母の答えはいつも決まって、「夫は妻の鏡だから、妻が先に心を入れかえて夫に尽くしなさい」でした。私は「自分でその言葉を実行したらいいのに」と母に対して思いながら、親にも世の中にもすっかりしらけて、いつも斜めに構えている子供だったのです。お金と暇を持てあました母の宗教活動はますます盛んになりました。

私が高校生になった頃、父が贈賄容疑で逮捕されました。父の仕事は国有林の整備がほとんどでしたので営林署を軸に仕事がまわっており、それに伴って起こることを、父はお金で解決していました。たいした事件も起こらない田舎の逮捕劇でしたので、テレビや新聞にかなり大きく取り上げられました。けれど小さい時から大勢の大人ばかりの中で育ち、他人の視線に麻痺していたせいか私はこの事に特別な感慨もありません。ただ「警察に捕まるなんて何てドジな父親だろ

う」とあきれたのを思い出します。判決では執行猶予がつきましたから、父は刑務所へ収監されることはありませんでした。けれどそのうち父の事業は傾きはじめ、さまざまな人が介入して、実質的な仕事の権限を父から取り上げてしまいました。ここにいたって、初めて私たち家族は「使えるお金には限りのあること」を知りました。母は家の増改築や貸し家の建築を趣味のようにしていましたから、その痛手は大きく、お金のかかる宗教活動もぷっつりやめてしまいました。

カナダへ、そして結婚

本来ならば多感で夢見がちな十代後半を、大人達から突きつけられる現実の中で、私は妙に醒めてふてぶてしく、そのくせ依頼心の強い、ちゃらんぽらんでいい加減な性格の娘になっていきました。特に「努力」とか「頑張り」、「忍耐」とか「根性」などの精神性を強く表わすことばに鳥肌を立てていました。人とおもてだってぶつかるよりは、かげにまわって気のすむまで悪口を言っているのが何より大好きというような者でした。「純粋」などという言葉にほど遠いような青春時代から、私はスキップして、いきなりおばさんになってしまったのです。超現実的で明日を夢見ることのない、実に可愛げのない娘でした。今もこの性格になんの変わりもありません。

学生時代の私は、いつも目の前の楽しいことだけを追いかけていました。毎日がお祭りのような学生生活もまたたくまに過ぎて何とか卒業してみると、身についていたのは立派な遊び癖だけでした。それでも就職はしましたが全く使いものにならず、旭川市役所の出先機関である木工芸指導所で研修を受けることになりました。

そこで研修を受けていた人の中に、とても熱心なクリスチャンがいました。その人は私にイエス様のこと、十字架の贖いなどについて熱心に話してくれましたが、私にはまったく理解できませんでした。

研修が終了した後も、私は一つの所に長く勤まらず、家具製作会社、建設会社の設計課、測量事務所などを転々としました。お金がたまると海外旅行をしたりして、ただ遊ぶために仕事をするという、今のフリーターのはしりのようなことをしながら過ごしていました。気がついてみると私は二十六歳で、結婚適齢期という言葉に西陽が射し始める年令になっていました。漠然と二十七歳くらいで結婚したいと思っていましたが、まわりにめぼしい相手はいません。その頃兄は結婚してカナダへ移住していました。二人っきりの兄妹だったので、私は喪失感を覚えてちょっとうろたえていました。その時思い出したのが、前にニューヨークへ行った時に会った、レストランの寿司職人のおじさんが言った「日本で男にあぶれたら、北米に来れば絶対だよ」という言葉でした。この「絶対」という力強い言葉の響きに惹かれて、「たまには人の言うことを素直に聞いてみよう」と思い、親には「ちょっと兄の様子を見てくるから」と言って一九八〇年の秋、カナダへ渡りました。

そこで「電車と女は待てばくる」と言っていた主人と出会い、翌年の春に結婚しました。結婚に際して特別な感情は、ありませんでした。強いて言えば主人は良さそうな人だし、私は親から離れられるのだから、まずはめでたい、という程度でした。結婚して三年目に長男が生まれ、七年目に長女が生まれました。表面上は何の問題もない夫婦でしたが、「何かのはずみで子供がで

きてしまった下宿のおばさん」と「その下宿人」といった感じでした。カナダに何年住んでいても、私は英語が少しもできませんでした。隣人は、私を「無口ではにかみや」と思っているらしいのですが、単にしゃべれないから笑ってごまかしているだけなのです。

父の死、帰国

そのような言葉の問題もあって、カナダでの生活にも不安を感じるようになっていた結婚十年目の一九九一年の春のことです。父が車にひき逃げされて急死してしまい、葬儀のため六年ぶりに日本へ帰りました。父の死はあまりにも突然でしたから、本当にショックでした。いつも物事をあまり深くつきつめない性格の私も、この時ばかりは、悲しくてやり切れない思いでいっぱいになってしまいました。今思えば、人の生死や生きる目的、死が意味するもの、死の後に来るものなど、できれば避けて通りたい重い課題と向かい会わざるを得ない状況を、イエス様に与えられたのだと思います。このように落ち込んでいる私をイエス様は、すでに家庭集会を開いていた樫原さんのところにつれていってくださいました。再会した樫原さんご夫妻はひと目見ただけではっきりわかるほど、イエス様によって変えられていました。前に私が知っていた樫原さんご夫妻ではなかったからです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

それは「再会」ではなく「新たな出会い」でした。私がクリスチャン全体に持っていた印象は、生身の心を隠しアルカイックスマイルの鉄仮面をかぶり、どこかしぶといかんじの気取った人たちというものでした。けれども樫原さんご夫妻にはそういう感じはありません。それどころか派手な夫婦げんかは相も変わらず健在のようなのに、昔お二人から受けた、いら立つような暗い雰囲気は微塵もなく、はればれとした表情で、「信仰の道を歩く人」に変えられていました。

私は父の葬儀が終わったらすぐカナダへ戻る予定をやめて、ほとんど毎日樫原さんのお宅に入りびたっていました。そんな中で「聖書」や「光よあれ」の本、その他のキリスト集会の本を読むようになり、頭ではイエス様を理解できるようになりました。「光よあれ」と命じて天地を創造された唯一絶対であられる神様は、イエス様を十字架につけ、私たちの罪をあがない、私たちの罪を赦し、救ってくださったこと。人間の頭が考える宗教なるものによっては、人間は決して救われないこと。自分の罪を告白し、イエス様を救い主と告白すれば救われること。私の理解はこんなものでした。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ　11・25）

しかし、頭で理解しただけでは救いの確信がありません。それでも「光よあれ」を読み進むうちに、何となくわかってきたのは次のようなことです。イエス様との出会いは、皆違うけれど、それぞれが抱えた不安や苦しみなどをきっかけに自分の罪に気付かされ、心砕かれて、イエス様

の十字架の意味を体験的に知らされるようになる。そして自我の破産を素直に認めて主に赦しと助けを求めると、そこに光が射し、救いの確信とともに信仰が与えられる。そして何より大切なのは、「心砕かれ」「悔い改める」ということでした。ただ単に教会へ通ったからクリスチャンになれるとか、なったというようなことではないらしいことなど、周辺がぼんやり見え始めました。

私はまだイエス様に出会っていませんでした。このように「救いの確信」とか、「聖霊の満たし」など、今にして思えば頭で考えてもわかり得ないものと格闘しているうちに、ベックさんにお会いできる機会が与えられました。ベックさんから三位一体などのお話を聞かせていただいても、正直なところあまりよくわかりませんでした。最後にベックさんとお祈りをした時、私は「イエス様が私を救ってくださいますように」と初めて心の中で祈ったのです。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」

（マタイ　7・7）

救いの確信

とにかくイエス様だけはしっかりインプットして、三ヶ月の日本滞在を終えてカナダへ戻りました。戻ってみると、どうしたことか毎日が悲しくて空しくてやり切れないのです。これ迄実りのない暮らしをして来たことに気付いて腹立たしくなり、最後には主人の顔を見るのもいやでたまらなくなりました。そして離婚して日本へ帰ることばかりを考えるようになりました。でも具体的に離婚後を想像してみますと、結果はお先真っ暗なのです。この時の私の思考回路はこうで

した。下宿人のような主人と絶対別れたい。が、子供たちとは別れたくない。では養育費を沢山せしめよう。でも主人の給料では、たかが知れてる。働くのはいやだから母親の不動産をもらおう。でも今さらあのうるさい母親と一緒には暮らしたくない…と、まあこんな調子でした。自己愛の固りだった私は自分のことしか考えられず、出口の見えない暗闇で次から次へと罪深い思いにとらわれ、どうにも身動きができなくなったのです。その時、私は思わず「イエス様助けて」と叫びをあげました。そして初めて「人を心から愛せない」、自分の強烈なエゴと、醜い罪に気づかされたのです。そんな自分が本当に情けなくて涙がとまりませんでした。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

その時初めて「イエス様の十字架」が私に迫ってきました。こんな私のためにいのちを捨ててくださったイエス様の愛と、流された血潮と痛みは私のためだった、と素直に信じることができました。それはとても不思議な心の変化でした。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。（Ⅰヨハネ　3・16）

イエス様が救い主としてこの世に来られたのは、自分しか愛せないわがままな私のためでした。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」（ヨハネ3・16）とある「世」とは、私自身のことだったのです。イエス様は、私の生まれるはるか昔から私をご存知で、愛してくださったからこそ、罪に溺れているこの私をご自身のいのちとひきかえにしてまでも、救ってくださったのでした。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。（エペソ　1・4）

このように、絶対的な愛をもって私を見つめてくださる方がおられる、その方がイエス様だ、と知った私は、もう毎日が嬉しくてたまらなくなりました。こうして自分の罪を示され、それがすでに赦されているという確信を与えられた時、主人も同じようにイエス様に愛されていることがわかりましたので、主人へのいら立ちやそのほかの思い煩いが、嘘のように消えていきました。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53・5、6）

真理子さんのこと

救いの確信を与えられた後、洗礼の決意をさせてくださったのは、真理子さんという方でした。

彼女は、フランス系カナダ人と結婚してオタワに住んでいましたが、とても悲劇的な人生を送っている方でした。彼女のご主人はエイズのキャリアで、ご自分がエイズであることに気づかず、真理子さんと結婚し、子供も生まれましたが、その子の発育異常を通して初めて、自分たち家族三人がエイズに感染していることを知ったということでした。真理子さんはやがて発病し、入院されました。私たち日本人は真理子さんの病気が末期のがんだと聞かされていました。真理子さんとは知人の家で一度お目にかかっただけでしたが、ある日私はリンデさんの「実を結ぶ命」という本を持って彼女の病室を訪ねました。本を差し出しますと、真理子さんはとても驚かれて、「私もこれを読んだのよ。これは、とても大切なことが書いてある本だからあなたが持っていなきゃだめよ。そしてほかの人にも見せてあげてね」と言ってその場で本を返してくださいました。

そして日本から送られてくるベックさんのテープやキリスト集会の本を読んでイエス様を受け入れたこと。胎児が産道をくぐらないと母親に出会えないように、この病気の苦しみは、御国へのトンネルのようなものだと言われました。堅く信仰に立ち、主にあって喜んでおられる真理子さんに、逆にこちらが慰められるほどでした。日本を遠く離れたこんなところで、同じ信仰のルーツを持った人がいることを知って、私は嬉しくなりました。これは単なる偶然ではなくて、主がなさったことでした。これが私が初めてカナダで経験した、同じ信仰を持つ人とのおつき会いでした。

イエス様に支えられた真理子さんの闘病生活は、周囲の人の心を打つものでした。新しい移住者で金銭トラブルに巻込まれて悩んでいた方も、真理子さんの信仰に心を動かされてイエス様を信じ、救われました。そんな真理子さんもいよいよ病状が悪化して、医者から余命いくばくもな

いことを言い渡されました。

真理子さんは召される前に一度日本へ帰りたいと希望しておられましたが、経済的に難しいということで日本人の仲間で費用を集めることになりました。その時期たまたま樫原ご夫妻からお電話があり、真理子さんのあれこれをお話しました。するとご夫妻は翌日、私の話を聞いただけで往復のエアチケットが買えるほどのお金を送ってくださいました。ご夫妻の信仰がほんとうに主のご栄光だけを現わしていることに感動し、「イエス様はすごいなあ」と小切手を手にしながら私は思いました。それにくらべて自分はちょっと情けないかなあと感じました。そうして送られてきたお金を届けようと私は真理子さんを訪ねました。その時初めて真理子さんの口から、本当の病名は「エイズ」であることを告げられました。私は内心すごく動揺してしまいました。家に帰ってから、石鹸をたくさんつけて手を洗っている偽善者の自分に気づき、愕然としました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

（ローマ　7・18、19）

真理子さんは発病から二年後の春なかば、この時期にはめずらしい大雪の朝、イエス様のもとへ旅立って行かれました。その雪は、イエス様が真理子さんのために整えてくださった花嫁衣装のようでした。

主人の受洗

それから間もなく、私は旭川で洗礼を受けました。受洗後しばらくは、主に感謝し、祈り、聖書の言葉を糧としながら光と共に歩いているつもりでいました。けれど、つもりと実際の間には大きな隔たりがあるのです。本来なら主に捧げる祈りも主人に聞かせるためだったりして、信仰と自我の間を行ったり来たりしていました。

アメリカではまだ電話回線による日曜礼拝もなく、身近に信仰を分かちあう人はいないし、主人は相変わらずイエス様にそっぽを向いているし、などと心の中で言い訳をしながらこの世のことにかまけて、私の信仰は消えそうになっていました。その頃のこと、私はニューヨークで初めての「よろこびの集い」があることを知らされました。

嫌がる主人に「車の運転を頼むだけだから」、「あなたは子供の面倒をちょっと見ていてくれればいいから」と適当なことを言って承諾させ、家族で参加することになりました。私は自分の信仰の飢え渇きをなんとかしたいという一心で参加したのです。ところがこの「よろこびの集い」で主人が救われ、洗礼まで授けていただくという、信じられないような大きな恵みを与えられました。恵みのあまりの大きさのために私は戸惑ってしまい、空にただよっているような気持ちでした。主人の洗礼の時には、「皆さんの前でご主人のために祈るように」とベックさんに言われましたが、頭が混乱してしまい、何をどう祈ったのかもわかりませんでした。

主人が洗礼を受けたその晩、私は、隣のベッドで寝ている主人の泣き声で目を覚ましました。その訳を聞きますと、「イエス様の愛が自分にも伝わって、すごく心が平安で、嬉しくて仕方がな

い」とのことでした。この時私は初めて、主人の心の渇きと痛みがどれほど深いものだったのかを知りました。いつも自分の嘆きばかりで他者への思いやりもなく、イエス様の恵みを信じ切れずにいた自分の信仰のいい加減さを恥じました。こんな私をイエス様が憐んで主人に光を当ててくださったこともわかりました。

主人の救いは、イエス様が私たち夫婦にも差し伸べてくださった暖かい恵みの御手でした。同じ屋根の下に永年暮らしながら、互いにまるで相手を知らなかった私たち夫婦の間にイエス様が介入してくださったことによって、私たちは、新たな人生を始めることができました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

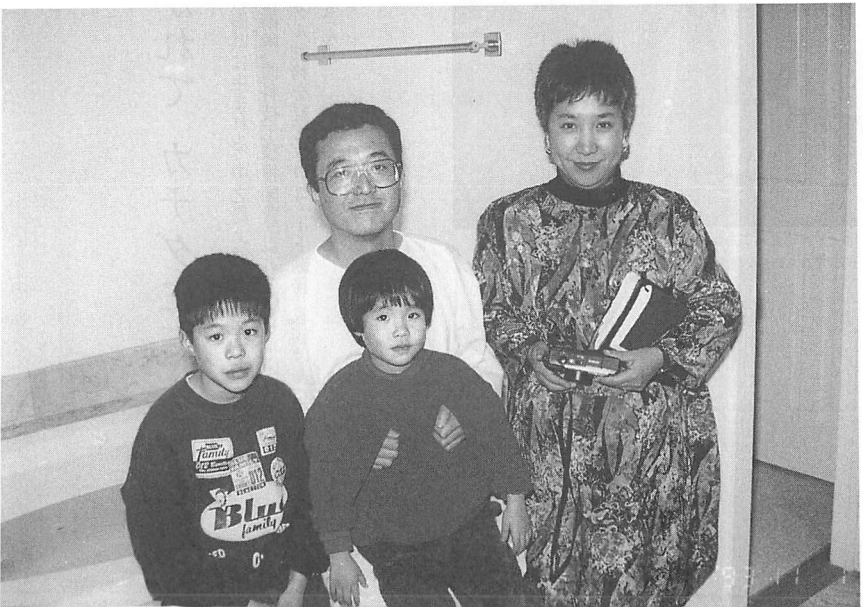
イエス様に出会う前の私は、生きていく価値のないものでした。けれど今は、イエス様が私を「イエス様にあって」価値のあるものとしてくださいました。相変わらず性格は悪いし、いつもつまらないことにつまづくみじめな者であるにもかかわらず、永遠の望みを持って生きることができるようになりました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

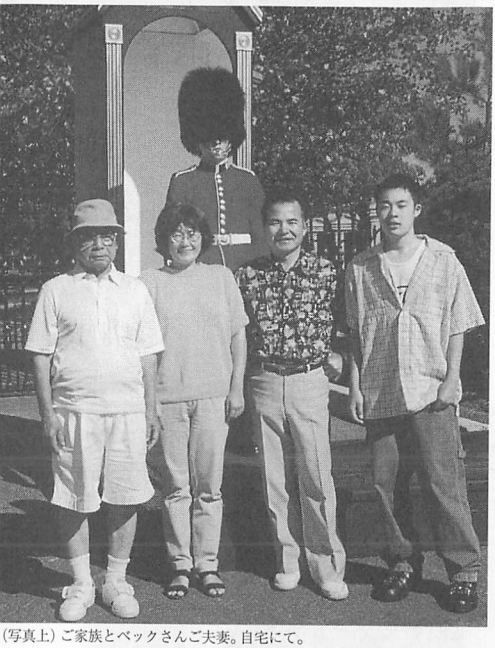
（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

イエス様の愛によって、私はまっすぐイエス様のところに導かれました。今日も生きておられ、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」（マタイ9・2）といつも私に語りかけてくださるイエス様に出会えたことが、何より嬉しくてなりません。

ニューヨーク家庭集会で洗礼の前に。岩崎さん宅で。







イエス様に導かれて カナダにて

南場良光

一九四九年新潟県に生まれる。中之島上通小、中之島中、長岡工業高から航空自衛隊、歯科技工課程国費留学。公庫ビル歯科、プレシジョン・デンタル勤務を経てプロ・アート勤務。家族は妻京子さん、長男新太郎さん。

(写真上) ご家族とベックさんご夫妻。自宅にて。
(写真下) 左から京子さんのお父様高田新さん、京子さん、良光さん、新太郎さん。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。
（ヨハネ　15・16）

眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。
（エペソ　5・14）

他国人が彼の力を食い尽くすが、彼はそれに気づかない。しらがが生えても、彼はそれに気づかない。
（ホセア　7・9）

私はイエス様に出会うまで、そして救われて確信をえるまで、自分が何をしているかにまったく気づかない、高慢で愚かな者でした。周囲の人々にどれだけ迷惑をかけたことか、そして心配をかけたことか、自分にしらがが生えはじめてもまだ気づかない、愚かな者でした。どういうことか私にはわかりませんが、主イエス様は一方的に私を愛し、救ってくださったのです。

かつて日本で生活していた私は、年齢も四十歳近くになっていましたが、当時のバブル景気に踊らされ高慢で放蕩な生活を送る一方で、仕事の壁を感じていました。この行き詰りから早く抜け出さなければとあせり、生活を一からやり直したいといつも思っていました。自分の心の問題を明るみに出し、家族の立て直しをしなければ、と思い続けていたのです。それでもいざとなる

と正直になれず、本音をかくして建前論をもちだし、自分の保身ばかりをはかる、それはほんとうに醜い私でした。

そんなとき妻が、「海外でやり直そうか」と言ってくれました。小学生になった息子を海外で育てたいという気持ちもあったようです。しかし、私は不安でした。語学力もなく、海外で通用するような学歴もなく、就職のつてもなく、はたしてうまくやっていけるのかと思いました。それでも妻が「海外で出直そう」と言ってくれたことをほんとうに嬉しく思いました。またそれについて、義母が賛成してくれたこともありがたいと思いました。

しかし、その時はまだイエス様を知りませんし、罪の悔い改めもありませんから、私の行動は無責任そのものでした。光ではなく闇でした。

スポンサーなしのカナダ移住ビザも、不思議なほど早く取れ、「仕事を決めてから渡航したら」と言う妻の忠告を無視し、すべて自分の自我を通すことだけを考えて一人ですべてを決めていきました。どうしようもない自己中心的なわたしでした。

海外事業団から紹介されたカルガリー在住の増田さんに、長期滞在型のモーテルをとってもらい、空港に出迎えていただいたのが一九八九年。後で家族を呼び寄せることにして、単身アルバータ州カルガリーに移住しました。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

（詩篇　37・23、24）

カルガリーに着いた私は、すぐに求職とアパート探しを始めました。それからは、きびしい試練の連続でした。仕事にはつけず、やっと就職できたと思ったら視力が落ち、まったく仕事のできない状態になりました。それまでは少しは自信などというものがあったのですが、すべてを取りあげられた、という暗い気持ちにおちこみました。

また、狭い日系人社会の中で、ここまで叩かれるかと思うほど、「仕事のできない駄目な南場さん」と評判になってしまいました。そんな中で、妻と子供はほんとうによく耐えてくれ、ありがたいと思っています。

そのころ、よく相談にのってくださった方のすすめもあり、レストランを始めようかと考えたこともありました。しかし時間の不規則なこともあって、子供のことを思うとそれも無理があり、断念しました。

困りはてた私は、「救いの神は必ずおられる」と言っていたことを思いだし、カナダの自然の中で、救いの神を心ひそかに呼んでいました。

どうせ仕事にもつけず、妻が日本から持ってきたお金をあてにしての生活なら、将来にそなえて学校で勉強しようと思い立ち、州の窓口に相談に行ったところ入学できるようになり、約一年、学校に通いました。

私たちの救いの神よ。御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救いだし、私たちの罪をお赦しください。（詩篇　79・9）

一九九〇年の夏のこと、息子が、カルガリーの日系福音教会が主催するサニーサイド・サマーキャンプに参加することになりました。妻もつきそって参加していたのですが、途中で妻から「帰りたいから迎えにきてほしい」と電話がありました。私は軽い気持ちで迎えに行き、夕方キャンプ地に着きました。教会の皆さんと挨拶を交わしているうちに、いっしょに夕食をと誘われ、食事がすむと、「福音集会がありますからどうぞ」と言われ、あっという間に、迎えに行ったはずの私が集会に参加していたのです。結局妻は愚痴をこぼしながらも一泊することになりました。このときのお話は、すべての創造主であられる神、イエス様の十字架について、主の愛と罪の悔い改めについてでした。最後に「イエス様を信じ、救い主として受け入れる方は立ってください」と言われ、そのことばに私は立ち上がっていたのです。どうしてそうなったのか、わかりません。「いっしょにお祈りしましょう」と言われたときには、頭のなかに今まで私がおかしてきた罪や過ちが次々と引き出されてきたのです。気がついたら、遠い昔で自分ではまったく忘れていたことまで、次々と心の内面を皆さんの前で告白していました。こんなことは今までの私には絶対にありえないことです。主が働かれた不思議な体験でした。そして妻や子供にすまなかったと謝り、主に赦してくださいと祈りました。

彼がわたし（主）に向かって叫ぶとき、わたしはそれを聞き入れる。わたしは情け深いから。

（出エジプト　22・27）

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。

わたしがあなたがたを休ませてあげます。」　（マタイ　11・28）

それから日曜日には礼拝に出ることになり、教会生活が始まりました。しかし、あいかわらずごう慢で、ゆずることを知らない私でした。当時、教会の牧師の方は末期がんでしたが、いつも私たちに「人を見てはいけない。真の信仰はイエス様と自分の関係である」と言っておられました。日曜日のお話も、いつもイエス様のことだけだったことがなつかしく思いだされます。

さて、一九九〇年の末には、学校も終了に近づき、就職活動にはいりました。学校でも親切にお世話していただいたのですが、カルガリーではとうとう見つかりません。車で二時間の北にあるエドモントンで採用が決まりかかりましたが、家を買っていたのでいろいろと悩みました。そんなおり、隣の州サツカチュワンから照会があり、人の行きたがらない所でしたが、あまりにも熱心に誘われるので、思いきってこの地に勤務することにしました。カナダ平原三州の真ん中に位置するサツカツーンは、冬はマイナス三十度、ひどい年はマイナス四十五度、夏はプラス三十度を越す暑さで、車で数時間走っても何もない人口十八万の市です。これが当時精一杯の働き場所で、御心と思って決心しました。

一九九一年一月から単身赴任となりました。家族と合流するまでの八ヵ月、一人で聖書を読み、イエス様のことを少しは知るようになり、救われてよかったと思いました。聖書を読む時間もたっぷりあり、一週間おきに週末に家族のもとに帰るのですが、片道六三〇キロのドライブがイエス様とともにいる幸せの時でした。テープを聞き、祈りと涙でぐしょぐしょになりながらの

ドライブでした。サツカツーンのような大自然のまっただ中におかれると、ほんとうに神様がこの宇宙を創造されたことを実感できます。ときにはオーロラも見ることができ、自然の動植物すべてが主の御手の中にあると感じられるのでした。

初めに、神が天と地を創造した。

（創世記　1・1）

神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

（創世記　1・3）

新しい任地のサツカツーンに来て仕事につくことができ、日本のやり方と違う北米のシステムにもなれてきました。

そのころ、家族が住むカルガリーで、夫婦そろって洗礼を受けました。病気が重い牧師さんの祈りに支えられての、主の恵みでした。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）

その後まもなく、牧師さんは天に召されました。ひたすらイエス様だけを宣べ伝え、ペンキ塗りをしながらアルバータ南部の伝道にはげまれ、ひたすら主の栄光が現われますようにと祈りつづけられたその姿に、信仰とは何かを見せていただいたと感謝しています。

一九九一年八月には家族といっしょに住むことができました。しかしサツカツーンでは同じ信

仰に立つ教会が与えられず、私たちは悩みました。

もしあなたが苦難の日に気落ちしたら、あなたの力は弱い。（箴言　24・10）

そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。それは、変えることのできない二つの事がらによって、――神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません。――前に置かれている望みを捕らえるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。（ヘブル　6・17、18）

当時、州の保険制度が変更されてラボの経営が苦しくなり、職場を変わらなければならなくなりました。ちょうど息子の新太郎も中学生になるので、できれば大きな都市がいいと思い、妻の希望もあってバンクーバーを移動先と考えました。しかし主は私たちがバンクーバーへ行くことを許されませんでした。なかなか条件の合うところがなく、またもや失業という試練かと諦めかけた時、知人の方がトロントで日本人のテクニシャンを求めているという情報をくださいました。さっそく連絡をとり、面接、テストを受けて採用が決まりましたが、なにしろ広大な国カナダの西と東です。短期間に転居しなければならず、五つの州にまたがる五千キロを、経費節約のため車で往復しました。いくら車が好きとはいえ、一日平均千三百キロのドライブはさすがに疲れました。今考えても、とても主がいっしょにいてくださらなければこのようなことはできなかった

と思います。そして苦しければ苦しいほどイエス様が近くにおられるのを感じることができました。

このようにして、一九九二年、十一月にトロントで仕事を与えられましたが、一九九三年の七月までは単身赴任をしました。トロントには日系の教会があり、しばらくそこに通っていました。一人で生活する数カ月、聖書に親しみました。やがて家族も呼びよせ、いっしょに住むことができましたが、この教会はいろいろなことがあって、私たちは遠ざかってしまいました。

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。（申命記　8・2）

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（Ⅰペテロ　4・12、13）

かつて日本にいたころ、「光よあれ」の第一集と第二集を友人からもらいました。しかしそのころの私はまったく読む気はなく、それどころか本があることすら忘れていました。それから十年後に、妻が日系の新聞にあった「キリスト集会」という新聞活字に目をとめたのです。それは、一九九四年にベックさんはじめキリスト集会の方々がオタワに来られるので、井出さんが日系新

聞に出した小さな案内でした。せっかく目をとめながら、一回目には行くことができず、四月にもう一度来られることを聞き、ぜひお会いしたくて夫婦で伺いました。初めてベックさんにお会いしたとき、なにかしら目頭が熱くなってしまいました。そしてキリスト集会の皆さんの笑顔がとても印象的でした。

その年には、米国駐在の岩崎ご夫妻が準備をしてくださり、シラキュウスで「よろこびの集い」のミニキャンプが行われました。日本から来られた方々を囲んでのキャンプに初めて参加し、イエス様のご栄光を見せていただき、嬉しい一時でした。それからイエス様は次々と我が家に、日本からキリスト集会の方々を送ってくださいました。こんなちりあくたのような者の所へ、だれが、公私ともに多忙な方々が、来てくださるでしょうか。イエス様に心から感謝しました。またおそれを感じました。そしてお会いして驚かされるのが、皆さん一致して妥協のない信仰の持ち主だということでした。イエス様が一番嫌われるとすれば、この世との妥協ではないかと思うと、厳しいものを感じ、恐れを感じます。でも、イエス様を思っているとき、嬉しくてしようがないのです。ときには北米のキリスト集会の方々が訪れてくださいます。日曜日には、電話回線を使っての全米の礼拝に参加させていただき、多くの祝福をいただいています。なにしろ夫婦の会話でただ一つ一致をみるのは、イエス様の話のときだけです。それ以外は水と油、天と地。それもどうも私に原因があるようです。

一九九七年にはトロントで「よろこびの集い」が開催され、心からイエス様に感謝しました。日本から、北米から、三百人以上の方々が集われました。ほんとにたくさんの主のご栄光を見せ

ていただきました。準備をしているときにも、主はひとつひとつ示してくださり、導いてくださいました。恥ずかしいのですが、初めは高慢にも自分の力でこの集いを準備するんだ、と高ぶっていた私をくだき、「私にはなにもできません、わかりません。どうかイエス様、あなた様が働いてください。みこころをなしてください」と祈ったとき、イエス様がすべてを整えてくださるのでした。そしてこの「よろこびの集い」のかげにはおおぜいの方々の祈りの支えがあったことを知り、感謝と悔い改めへと導かれました。

息子の新太郎のことも、イエス様を信じて救われますようにと祈り続けていました。その新太郎も、このトロントの「よろこびの集い」で洗礼を受け、主に従うことを証しできたのは大きな恵みであり、喜びです。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。（伝道者　12・1）

わたし（主）は、人間の網、愛のきずなで彼らを引いた。（ホセア　11・4）

ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。（エペソ　5・1、2）

世界中がそうであるように、トロントも例外ではなく、若者にとっては誘惑が多く、とてもイエス様が内にいてくださらなければ生きていられないような状況です。まして私たち親といえば、いつも的外れなことばかり、肉に生きイエス様を悲しませているような者ですから。

主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。わしが巣のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように。（申命記　32・10、11）

このようにして、いま私は、イエス様だけを仰ぎ見る信仰に立つことができ、ほんとうに感謝しています。不安や悩みはありますが、喜びの毎日を送ることができます。そして弱い心は聖書を通して強められ、みことばによって日々確信を得させていただいています。

愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。（ユダ　20、21）

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

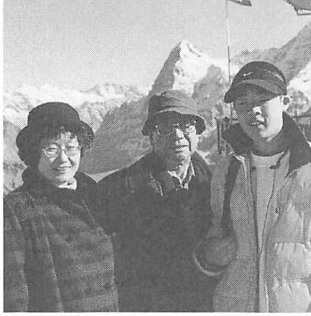
（ローマ　8・38、39）

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

（ヘブル　9・27、28）

祈る良光さんと洗礼を受ける新太郎さん。




左から京子さん、高田さん、新太郎さん。

イエス様が手を取って私たち家族を成長させてくださいます

南場京子　一九五四年福岡県に生まれる。戸塚第二小、東京家政学院中、同高校、日本懐石料理学院卒業。丸紅サービス㈱を経て一九七九年結婚。家族は夫良光さん、長男新太郎さん。

私たち家族は、一九八九年の秋にカナダに移住しました。海外生活の経験はなく、仕事先も決まらず、若くもなく、英語力もなく、親戚もなく、寒さへの備えなど何も知らず、しかもカナダは不況で、それも悪くなる一方で、そんな時に移住したのはまったく無謀でした。日本はバブル崩壊前の好景気で沸きたち、夫の仕事は安定し、親の近くに家があり、古くからの友人も近くに住んで気楽に暮らしていました。移住したカナダは、私たちの無力を思い知るには最適の場所でした。

イエス様との出会い

私は三歳のころから、情操を豊かにと願う親にうながされていろいろな稽古ごとをしましたが、何を習っても、すぐ飽きてしまい、やめるという繰り返しでした。しかし、その一つとして通うようになった教会学校は楽しく、私は続けたかったのですが、私が何かにつけて「神様、神様」

と言うことに母は閉口したらしく、私が教会に通うことを嫌うようになり、自然と通わなくなりました。母は聖書についてのラジオ放送を聞きながら裁縫をするのが好きで、「聖書の教えはいい。右の頬を打たれたら、左の頬を打たせなさいと書いてあるそうだ。このように在りたいものだ。また、旧約には人間の根底の恐ろしい部分が書かれているし、他の宗教にはないものがある」と、よく言っていました。しかし祖母から、「戦時中に出征した息子の無事を願ってありとあらゆる神社、仏閣で祈願したが、戻って来なかった。神仏なんかいない。子を思うのは親だけだ」といつも言われて育った母には、キリスト教は精神的によい教えとしてしか受け取れず、聖書に書かれている唯一の神の存在には気付かず、神様というと八百万の神を連想し、ご利益宗教の一つぐらいに考えていたようです。私も霊的にまことの生ける神を知らなかったので、「キリスト教はよいけれど、家では神様、神様と言うことはいけない」と思い、それからは口にだしませんでした。

祖母が、子を守るのは親だけだと思い、頑張って頑張って生きとおした結果を知っている私は、まことの生ける神を祖母が知っていたらと思えて、たった一つ真理を知るか、知らないかでまったく人生が変ってしまうことを知りました。

「主の御名を呼び求める者は、誰でも救われる。」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。

（ローマ　10・13、14）

この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。（ヨハネ　1・10）

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」（出エジプト　3・14）

「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか。」と聖なる方は仰せられる。（イザヤ　40・25）

イエス様に従うようになってから、あのまま教会学校に通っていたらと思うことがよくありました。でも今では、イエス様のご計画は、カナダで私たち家族を導くことだったのだと確信できます。

私の家は、珈琲焙煎加工卸売問屋で、けっこう手広く商売をしていました。父は人から借金や保証人を頼まれるといやとは言えない人で、収入のほとんどはよそへ流れていってしまい、母はいつまでも実家を頼っていました。そのうっ憤晴らしだったのか、母は母で見知らぬ人でも仲良くなるとすぐに家に連れてきて、ご馳走をしたり、物をあげたり、結局は父と同じでした。わが家にはたくさんの方々が出入りし、居候のような人が常にいて、子供は私だけでした。いろいろな人々が話すことを聞いても、子供心に尊敬できず、信仰が育つ環境からほど遠い生活でした。

でも、教会学校で知ったいつも変わらない優しいイエス様は大好きでした。なかでも一匹の迷っている小羊を探すイエス様のお話は好きでした。どんな迷った羊でも、わが子のように心配してくださるのはイエス様だけだと子供心に思っていました。ご自分のことを考えないで、やさしく人のことばかり考えておられるイエス様は、私にとって、なくてはならない存在でした。しかし私は聖書がよくわからなくて、イエス様は人間の中でただ一人、天地創造の神が許して神様になれた方なんだと、間違ったおかしな解釈をしていました。童話か何かと混同していたのでしょう。こうして私は、まことの生ける神の存在がわからないまま、少女時代を過ごしました。

イエス様のいない行き当たりばったりの生活

中学からは、良妻賢母を教育目標とする学校に入学しました。校歌は聖歌「たみ　みなよろこべ」のメロディで、講堂の奥には教会の祭壇のような物が放置されていて、創立時はどうやらキリスト教の学校だったようでした。大学は栄養士課程と家庭科教員課程しかなく、裁縫はまったく駄目、栄養士課程は推薦してもらえず、仕方なく割烹女学校に通いました。母は、何をさせても駄目な取り柄のない娘だから、せめて早く結婚させて幸せな結婚生活を送らせたいと思ってあちらこちらに縁談を頼み、十九歳からたくさんのお見合いをしました。幾人かの方が結婚を考えてくださいましたが、私は結婚後の生活を思うと自信がなく、お断りしていました。ある方とは式場まで決めたのにお断わりしたので、母が怒って「そんなに慢心していたら今に罰が当たる」と言いました。私は慢心していたわけではなく、むしろ、相手の方が自分より立派すぎて、結婚

したら飽きられてしまうと思っていました。

やがて私は、結婚相手は気が楽で転勤のない人だったらいいと思って、今の夫と結婚しました。夫のほうも私と同じ気持ちで結婚したようです。ふりかえってみると、イエス様を中心にした結婚ではなかったので、イエス様の祝福を受けない結婚生活だったと思います。ですからどちらかというとつまらない結婚生活でした。一見気楽に思えた結婚生活は大事なことが抜けていたので、お互いを思いあうこともなく、気も合わず、喧嘩ばかりしていました。子供がいることで、かろうじて家庭の体裁を保っていました。問題が起こるたびに買い物で憂さを晴らしたり、夫を責め、子供に八つ当たりする感情優先の自分勝手な生活でした。

息子の出産は大変でした。たいへん重い前置胎盤で、まる二ヵ月絶対安静で、少しでも動くと大出血し、そのたびに子供は酸素不足になり胎内で苦しんで暴れました。帝王切開の計画出産で、予定された出産日には全身痲酔で陣痛もなく、感激もなく、息子を産みました。

「わたし（主）は、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」

（創世記　3・16）

子供が授かった時も感謝して神に祈ることもなく、つわりがなかったこともよかったと思うだけ、大出血をくり返したことも母子無事だったことも何となく当たり前のように思っていました。私は、人にそんなにひどいことをしたこともないし、どちらかといえば親切なほうだと思っていたので、自分に限っておかしな子が生まれるわけはないと思っていたのです。でも後にこの聖句

を読んで、主に対しての私の罪を知りました。私が苦しまないで産んだ息子は、他のどの赤ちゃんより弱く、泣き声ひとつあげず、初めて見たとき、育たないかもしれないと思いました。

母親同士がお産の苦しさをおしゃべりし、私に痛みがなかったことをうらやましがられても、私には何かが欠けたお産に思えて嬉しくなく、それよりも母子ともに苦しんで生まれてきた赤ちゃんはむしろ健康でうらやましいと思いました。産まれた時の息子は、チアノーゼで、へその緒を二重に巻き、貧血で、母乳を飲むこともできず、私はほとんど眠ることなく、子供が起きるか、動くのを待って飲ませました。動くようになってからは「多動児」のような動きだと言われるほど動き回るので、一日三回は公園に連れて行ったり、自宅を解放して近所のお子さんの遊び場にすることで息子を発散させていました。腕白盛りの子供たちで家の中は散らかり放題でした。近所のお子さんが帰った後、息子はよくだだをこねて片ずけたおもちゃを散らかし、私を困らせました。息子がこうなったのは私のせいでした。息子が赤ちゃんだったころ、近所のいたずら盛りの子にたたかれたり、つつかれても、私は他のお母さん方に嫌われたくなかったのでその子たちに注意せず、息子の泣き声を聞いてからかばうありさまでした。遊びにきたお子さんを優先して、玩具を息子の手からはぎ取って渡し、よそのお宅に行ったら何でも我慢しなさいと、いつも相手優先にしていました。ですから息子は自家中毒を毎月のように起こしました。幼児期の息子は自家中毒でぐったりしているか、動き回っているかのどちらかでした。私はそのころは自分の罪がわからなかったので、子供のためにこんなにしてるのに、と怒ってばかりいました。のちにカナダに来て、現地の母親が子供を「ハニー」と甘く優しく呼ぶのを聞くたびに、一人っ子だから甘

やかしてはいけないと厳しく育てた自分の恐ろしい姿が思い出され、涙が出ました。神様を知らない子育てが、どれほど空回りであったかを知らされた思いでした。

やがて私たちは、子育てを海外でしようと思うようになりました。

カナダに来て主が私たちにしてくださったこと

私たちがカナダを移住先として決めたのは、カナダに住んでいる知人から、カナダはのんびりして子育てによいところだと聞いたからでした。その方は移民権が取得できた時にカナダに移られたのですが、「自分は独身で、カナダの景気のよい時期に来て波に乗れたからよかったが、今のカナダは景気もよくなく、あなたたち家族が今まで通りの水準ではとても暮らしていけない。今の生活を捨ててまで来るところではない。自分が言ったことに責任を感じているので、考え直しなさい」と何度も言われました。

かつて母は、私が学生だったころ、叔父が私を英国の高校、大学に費用無しで入れてあげると言ってくれたとき、「女の子は嫁に行くまで親元で育てるものだ」と断わったことがあったのですが、今や国際社会で英語は必須になったのを見て、あのとき出しておけばよかったと後悔していたのでしょう。「生活のほうは協力するから、孫を海外で育ててほしい」と言いました。

母のバックアップもあり、私たちも日本で子育てをしたくなかったので、カナダに移住することになりました。

カナダに移ってみると、実情は全く知人の言う通りでした。「カナダはいいところですね」と

言うと、皆さんが口をそろえたように「仕事さえあればね」と付け加えられます。たしかに日本人相手の商売か、日系人関係の仕事につかないかぎり、これといった産業のないカナダで仕事を得ることは難しく、たとえ仕事についても、オーナーは二週間前の予告でいつでも解雇できるのです。景気の変動の中で仕事を続けていくことの大変さが、来たばかりの私たちにはわからず、自分たちが安易に生活できるのをいいことに、「カナダは物価が安いし福祉が行き届いている。自然は豊富でのんびりしていてほんとうにいい国だ」などと気楽なことを言い、現地で苦しんでいる人々に、すっかり嫌われてしまいました。実情は、物価は安いけれど、日本企業のような雇傭の保証はなく、福祉が行き届いている分だけ税金が高く、現地採用で日本企業に勤めても日本から来た方とは待遇がかなり違うのです。それにカナダの人々の社会には、なかなか溶けこめません。このころ、移民で来たのは私たち家族だけでしたから、実情を知らない私たちの発言が何かと話題にされて、反感を買っていたようです。

昨今の不況下にある日本の就職より、もっとむつかしいのがカナダの仕事さがしですから、もちろん、夫も仕事がありませんでした。しかし、このことはある程度覚悟してきたので平気でした。子供の学校、家、車、銀行、保険とたくさんの手続きがあり、それらに取りかかりましたが、夫は仕事さがしで忙しく、私が辞書片手にできない英語を使って走りまわりました。そうして買った中古車は、すぐ動かなくなり、仕方なくバスで訪ね歩き、手続きをすませていきました。たいへんでしたが、そのころは希望があったので、それなりに楽しくもありました。

やがて、知り合った二人の方が、毎日のようにカナダに住むつらさや、ご主人への不満を話さ

れるようになり、その聞き手にされてしまいました。あれやこれや思いつく限りの慰めらしいことを言っていましたが、私にもつらい思いはいっぱいあり、そのことはいったい誰が聞いてくれるのかしらと思うようになりました。

この時期、現地の事情にうとい私たちは反感を持たれていて、私は子供がそのことに気がつかないようにと、子供をかわいがってくれそうな方にプレゼントしたり、知り合った方を誰彼なく家に泊めたり、何とか自分たちのカナダでの居場所を作ろうと必死でした。

私の母は人好きで、家のことを後まわしにしても他人の面倒を見ていたので、私はよくそのことを不満に思い、母に言いました。すると母は、「人様にいいことをしておけば、あなたが困ったとき、ちゃんと返ってくるのよ。あなたのためよ」と言っていました。ふとそれを思い出したのですが、しかしそんなことは私の幸せとなんの関係もなかったように思えるのでした。

そんなことをしているうちに、私の中に人を疑う醜い気持ちが芽生えて、ひねくれていくのが自分でもわかりました。そのことが悲しくて、日本にいればこんな気持ちにならなかったのに、とよく一人で泣いていました。

この国に住む人々は、国が生活に干渉しないので、何もかも自分の判断で意思を決め、自分の弱さを人に見られないように強さを押し出して身を守って生活している感じがし、知らず知らずのうちに個性が強くなっていくのだと思いました。もし、その強くなっていく個性が、もし悪い個性だったら、ひたすら悪い個性が強くなるというこわいことになります。私は、日本にいたのなら、母に諫められるので安心でしたが、カナダにいると「私はこんなにがんばっているんだか

ら」と自分の考えだけで突っ走り、自分は常に正しいと思うようになることがこわかったのです。そんなになった私を、誰が「いけない」と止めてくれるだろうか、と悩むようになりました。気分転換に日本に里帰りもしましたが、カナダに帰ってきたら同じです。「母親の私がこんな気持ちでどうしていい子育てができるだろう。私は醜い情けない人間だが、子供だけは素直に純真に育ってほしい」と思いました。そんなあるとき、教会学校の青年の方々の明るくすがすがしい顔が思い出され、わが子もあのような青年になってほしい、と願うようになりました。

そのころ、知りあった方が、「新太郎君、教会のキャンプがあって、それはそれは楽しいんだよ」としきりにすすめてくださり、よい機会なので参加させていただくことに決めました。主人もキャンプに行くことに賛成で、熱心に私たちにすすめます。それを見ていた知りあいの方の奥さんが、キャンプもいいけど、それよりも教会に来てみたらどうですかと誘ってくださいました。それから牧師さんが訪問してくださるようになり、教会に行くようになりました。そこでも、私たちをこころよく思っていない方の視線を感じました。牧師さんは、「人を見てはいけない。人ではない、神ですよ。神と自分の関係です」とよく言われました。このようにして主のみもとに導かれた私たち夫婦は幸いでした。この牧師さんは間もなくがんにかかられ、主を賛美しながら天に召されていかれました。教会のあるご婦人は、周りの人々から「移民で来ても何の苦労もない人たち」と思われていた私のことを、「誰にでも悩みはあるはずで、あなたにもあるでしょう。イエス様だけがご存じですよ」と言ってくださいました。また母の話をしたときも、「あなたは、お母様が苦労なさった気持ちがわかっていると思っているでしょうが、あなたにはそのすべてはわか

らない。イエス様にしかわからない」とやさしく言ってくださいました。ものごとの見せかけや表面だけで判断する世間一般の考えとちがって、イエス様に従う人は物ごとを深くやさしく見るようになるんだ、と思わされました。

いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。

（Ⅰコリント　2・11）

そのころ、日本にいるときにいただいた「光よあれ」という本を思い出しました。移住するときに実家においてきたので、カナダに送ってもらいました。この本をその方に見せますと、すでに知っておられ、「この本は伝道にいいのよ」と言われたので、伝道に使っていただけたら、と思って何冊かお譲りしました。

「光よあれ」はいただいてから、ほとんど読むことがなく、カナダに来てゆっくりと読むことができました。イエス様をこんなにも愛し、心から喜んでおられる方々がおられることを知りました。こんなにイエス様を喜んでおられるクリスチャンは私のまわりには見かけなかったし、私自身も喜んでいなかったので、強い印象を受け、それから私の中に「光よあれ」という本のことが、何か希望の鍵のような気がしてずっと残っていました。

次に移り住んだサツカツーンでは、日系の教会がありませんでした。トロントに移動することになったとき、これからは日系の教会に通えると喜んでいたのですが、私は引っ越し後すぐに里

帰りすることになりました。日本に帰った私は、なぜか吉祥寺キリスト集会に行ってみたいと思いました。しかし「光よあれ」がてもとになく、住所がわからず、行くことができませんでした。

その半年後、日系の新聞を読んでいて、オタワにベックさんがキリスト集会の方々と来られることを知ったとき、まさかあの行きたかったキリスト集会にカナダで会えるなどとはふつうでは考えられないことだったので、とても喜びました。

その後、キリスト集会の野口ご夫妻とお話をしていて、自分の姿に気がつきました。私は、子供は自分の所有物だと思い、たった一人の子さえも満足に育てられず、子育てとはほど遠い、ただがむしゃらに子供を引きずっていた母親だったのです。こんな私ですから、私を助けてくださり、子供を守ってくださる方はイエス様しかない、と心底思いました。

イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい。」と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、「青年よ。あなたに言う、起きなさい。」と言われた。すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。

（ルカ　7・12～15）

私がこのように主のご臨在を深く感じることができたのも、野口ご夫妻が私たちのために祈っていてくださっていたからでした。祈りの重要さを、この時はじめて知りました。

イエス様を知ることにより、私は子供のことでまったく悩まなくなり、夫婦の話題はイエス様のことが中心になり、仲もよくなり、イエス様だけに頼り、従っていきたいと思うようになりました。

さて、カナダには来たものの、約一年間は仕事がなく、仕事を求めての引っ越しやそのための家の売買、主人の仕事の都合での二回の別居、二重の生活費の出費などで所持金はすぐに使い果たし、私が働けるようなところもなく、親の援助に頼っていることもそろそろやめたいと思い、貸間をして収入を得られる家に移ろうと思いました。ところが、私たちが選んだ家は小さくて、とても古い家でした。家の補修をするために見積もりを頼んだ修理業者の皆さんに、「どうしてこんな家を買ったのか」とあきれられたり、気の毒がられたりするような家で、かなりの費用と手間を覚悟しなければなりませんでした。「違約金を払っても解約したい」と言う私と、「決めたことだから住む」と言う夫と喧嘩しました。家を売ろうとしてエネルギーを使い果たした後、新しい家の改造をしなければなりませんでした。建築業者が現場の下請けの人々に何も言ってくれないので、あれこれと指示が必要になり、ただでさえ下手な英語で、毎日現場に来るチリ、イタリア、インド、アラブ、ポーランド、イギリス系カナダ人と説明したり交渉したりしているうちに神経が参ってしまい、健康をそこね、日本に帰りたくなってしまいました。

結局、家はかなりの費用と神経と時間をかけどうにかなりましたが、私の自我はおさまりません。また、解約に応じなかった夫のせいで、またまた親に頼る結果になったことが不満でした。イエス様に従っていこうと思った私は、実際は、この世のことだけにふりまわされている者でした。

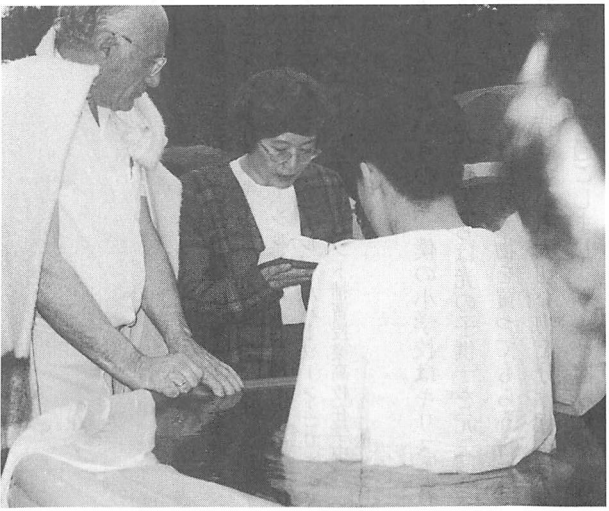
あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。
（ヘブル　12・4）

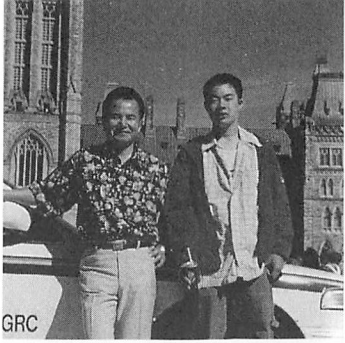
生活も、信仰も、このままいけば落ちて行くだけだという思いがつのり、どうしようもなくなったころ、バンクーバーで開かれた「よろこびの集い」で、イエス様は次のことを教えてくださいました。私たちの家は、手間ひまかけても値打ちはまったくなく、おまけに一つ補修が済むまた一つと悪いところが出てきます。むしろ、全部壊してしまい、新しい家を建てるべきでした。そしてこの無価値な家こそ、私の姿だと思ったのです。イエス様は、私のような存在する値打のない、生きていても何の価値もなく、死んでも当然の私を新しく生まれ変わらせるために、十字架に掛かり、死んでくださるという多大の犠牲を払ってくださいました。その上さらに、未だに問題を起こし、ひねくれる私に、これでもかこれでもかと気長に諭して導き、修正してくださっていることを思うとき、この家はイエス様が備えてくださった家だ、と確信でき、愛着が湧き、喜んで帰宅しました。私はイエス様の愛を疑うような身のほど知らずの横柄な者でした。イエス様ほんとうにごめんなさい。イエス様はほんとうに真実なお方です。あなたのほかにだれが私をいさめてくださるでしょうか。感謝します。

あなたは海の源まで行ったことがあるのか。深い淵の奥底を歩き回ったことがあるのか。
…あなたは地の広さを見きわめたことがあるのか。そのすべてを知っているなら、告げて見よ。
（ヨブ　38・16、18）

あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。
（詩篇　118・28）

聖書を読む京子さんと、洗礼を受ける新太郎さん。





右、新太郎さん。オタワで父と。

大好きなイエス様

南場新太郎

一九八一年東京に生まれる。白金台幼稚園、東京文化小学校、キングズランド・エレメンタリー、キャプテン・ジョン・パルサー、クイーン・エリザベス・エレメンタリー、シルバーウッド・ハイツ・ミドルスクール、ブロアデイル・ミドルスクール、シルバーソーン・コリギエイト・インスティテュート在学中、トロント補習授業高校在学中。

イエス様は明るい。当時七歳の僕でもそう思いました。というのは、僕の小学校はキリスト教の学校で、毎週土曜日に聖書の時間があって、賛美歌で「光、光、私たちは光の子供」を元気いっぱい歌うことが楽しかったからです。校長先生は「クリスマスは自分の物を買ってもらう日ではありません。イエス様は人々の幸せのために生まれ、自分の持っている大切な物を分け与えてくださいました。皆さんもイエス様のことを思ってクリスマスを過ごしましょう」と言われたので、家に帰って話すと、母がとても喜んだのを覚えています。僕の家は教会に行っているわけではなかったし、聖書も読む家ではなかったが、母はイエス様とクリスマスが好きでした。だが僕たち家族みんなが後にイエス様を信じるようになるとは思ってもみませんでした。

カナダに来るようになった一つの理由は、小学校のクラスにいた男の子をいじめたからです。僕は目立つことが好きで、Y君が太っているI君に「デブ、デブ」とからかったとき、僕は「デ

ブ」という言葉がおかしくて、I君のお腹をつついたら、みんなもおもしろがっていっしょにやったので、僕とY君でいじめの原因を作ってしまいました。それからI君は「デブ、デブ」と言われるようになった。何人かで賛美歌を隠したり、キャンプの時、靴を隠したりした。そのたびに僕だけの名前が出て、いつも母親が謝りに行きました。I君はY君がこわかったので、いつもふざけている僕には「ちび、ちび」と逆にからかっていました。ある日、傘を振り回されてころんで家に帰ったら、母がいじめられているのかいじめているのかわからなくなったと言いました。僕は小さかったから知らなかったが、よく謝りに行っていた母はクラスのお母さん方の受けがよく、あまり行かなかったY君のお母さんは教会に通い始めたと聞きました。僕は、いじめられるのもいじめるのも遊びだ、と思っていたから、大人が何を言っても平気で、学校は楽しいところでした。後からいろいろと母に聞いても、へえ、そんなことがあったかなと思うだけでした。そんな僕でも、イエス様を知ってからは、たとえ自分がふざけていたとしても、一言言う前に相手の気持ちを考えてからしゃべるようにしているつもりです。「人間の口からでることは、何一つよいものがない」と聖書に書いてあるから。

たしかに僕は遊び半分で冷やかしていたのですが、I君にとっては「デブ」と言われるのはどれだけショックだっただろうか。彼のバックグラウンドを知らなかった僕は、ついつい調子にのって余計なことを言っていました。I君は、母親がなく、父親と祖母の三人家族でした。面倒を見てくれる母親のいない彼の楽しみといえば、学校から帰ってケーキやお菓子を食べることだった

のです。それが原因となって太ってしまった彼を、何も知らずに笑った僕が、今ではとても恥ずかしい。聖書を読んで、自分のひどい姿がわかりました。

それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦をもたせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」

（マタイ　27・29）

道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけって言った。

（マタイ　27・39～41）

イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。

（マタイ　27・44）

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

（ルカ　23・34）

僕たち家族は、カナダに来て十年間、いろいろな体験をしました。カナダでは三つの州に移り、

十回近く引っ越しをしましたが、すべてのことが僕たち家族にとっていい方向に向かっている気がします。

カルガリーで、僕はとっても良い学校に恵まれました。フレンチ系の学校の、英語で授業をするクラスで、学校中に東洋人は僕一人。しかも僕は英語がわからない初めての生徒だったのです。自分の名前すら書けないこの僕のために、先生がたはわざわざＥＳＬ（English as Second Language）のプログラムを取り入れ、時間と手間をかけて教えてくださいました。同じクラスの子供たちもびっくりするくらい、親切にしてくださったのです。友だちはすぐにでき、そのおかげで英語の上達が早く、あっという間に学校になじむことができました。

最近、僕の両親は、イエス様のなさることは一つとして無駄がない、と喜んでいますが、それまでは両親は、生活の手段が見えないので、いつもカナダに来たことはよかったのか悪かったのか、と考えこんでいたようです。教会にはこのころから行き始めたようです。僕は日本にいるときはキリスト教系の学校に通っていましたが、こうやって実際にカナダの教会に行くのは初めてでした。僕はそこの教会で、毎週サンデースクールに通ったりしながらイエス様を少しずつ知ることができました。やがて両親は、イエス様に導かれ、洗礼を受けるようになりました。あまり本を読むことが好きではない僕でも、聖書を読んだり、話を聞いたりすることがとても楽しくなりました。僕たち家族がイエス様を知ったので、イエス様は僕たちを次の地、サスカチュワン州へ移す準備をしてくださったのだと思います。

サツカツーンはほとんどが白人の町で、日曜日にはほとんどの人が教会に行きます。人口は少

ないのに、教会はやたらとありました。日曜日はデパートや店は閉まるので、教会に行くのが皆の楽しみで、教会の後でレストランに行くのが唯一の楽しみというような所でした。僕たちは時々、郊外にある知り合いのいる教会に行きました。母は知り合った人をよく教会に連れて行っていて、いま思えば、信仰がなくても教会に行けばどうにかなる、みたいな感じでした。学校では、先生ひとりひとりが自分のポリシーを持って教えていて、僕の担任の先生は、毎朝国歌を歌った後、聖書を読み、主の祈りを捧げた後、神様に喜びの祈りをするのが一日の始まりだったし、生徒も当たり前の感じでお祈りしていました。

今現在住んでいるトロントでは、いろいろな人種そして宗教があります。移民の多いこのカナダでは、お互いの文化を尊重しているので、宗教色がとても強いようです。教会に通っている人はサスカツーンよりはるかに少ないが、寺院とか、わけのわからない宗教の建物はたくさんあります。クリスチャンの中にも、人間の力で癒しをする団体があったり、悪魔崇拝などをする、神から離れた生活をする人々も多いようです。そんな中で、僕たちのキリスト集会は、静かに毎週電話礼拝があるのでとてもうれしいです。このキリスト集会に集う前までは、あちこちの教会に行きましたが、キリスト集会では教会と違ったものがありました。ボランティア活動に時間をとられるわけでもなく、神様だけを信じて賛美するこの時間は惜しくありません。僕はイエス様に従うことさえもろくにできないのに、人のために働くことなどできないと思っていたし、礼拝をすることで家族が仲よくなったのが嬉しいです。それに、今まで僕は人が死ぬのはこわくて寂し

いことだと思っていましたが、いまはそんな風に思わなくなりました。天国に召されるのですから。

このキリスト集会に集うようになってから、次から次へと考えられないような祝福を与えられ、イエス様のすばらしさを知ることができました。

イエス様を第一とした信仰は、とても明るいものだとわかってきましたが、僕も信仰について少しばかり考えるようになってきました。僕の信仰は薄く、礼拝後のメッセージも僕には難しくて苦手です。またこの世の誘惑に左右されっぱなしだからあまりかっこのいいことは言えないのですが、イエス様を知ってから、僕たちの世代の音楽、テレビ、映画などの中にイエス様を拒否しているものがあるのがわかるようになりました。僕はそれを感じたときは、聞いたり見たりするのを止めるようになってきました。友だちに誘われても、イエス様と反対のところへは行きたくなくなったのです。礼拝や祈りを通して、僕はイエス様に守られていることを感謝しています。

「わたし（イエス様）は心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

（マタイ　11・29、30）

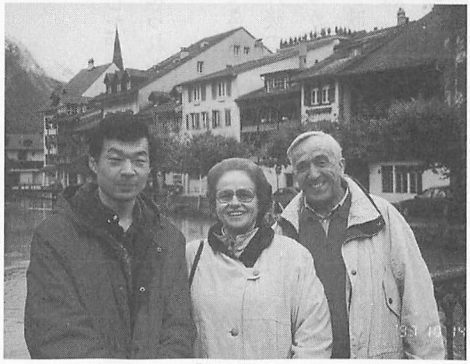


主にあって喜ぼう

岩本秀造

一九五九年東京都北区赤羽に生れる。練馬区立大泉第一小、区立八坂中、東京都立井草高を経て中央大学商学部卒業。現在日立製作所勤務。一九九四年八月よりアメリカ、テキサス州ダラス市在住。一九九八年帰国。現在東京都青梅市在住。家族は妻、範子さん。





(写真上) バンクーバー「よろこびの集い」でのご夫妻。
(写真中) 秀造さんのご両親とともに。
(写真下) スイスにて。

子供心

一九五九年一月一日大雪の日、東京の赤羽で、父吉造、母喜代子の第四子として生を受けました。私自身は覚えていませんが、二歳の時、がんにかかりました。両親は泣き続けていた私を幾つかの病院に診てもらいましたが、原因が分からず最終的にたどりついた大学病院でがんと診断され、すぐ手術、摘出することになり、一命を取り止めたとのことです。

数年後に経過検査のため、再び同じ大学病院を訪れた時の何か厳粛な雰囲気を鮮明に覚えています。その後「もしあの時、手遅れだったら…」という思いが時に心をよぎり、人の命の不思議さに何か自分の想像を超えたものを思わざるを得ませんでした。

また、小学生の頃、キリスト教とは全く無縁の家庭でしたが、家族全員で「ベン・ハー」を見に行きました。映画の中に登場するイエス・キリストが十字架上で処刑され、その後のよみがえりをほうふつとさせる劇的なラストシーンが子供心に印象に残りました。「なぜ、この人は十字架につけられたのだろう」「なぜ、ある人はこの人を憎み、石を投げ、一方で他の人はひどく嘆き悲しんでいるのだろう」「十字架につけられた後、真っ暗闇の中から、一転して晴れやかな音楽となったが、何がこの人に起こったのだろう」。

求めなさい

大学受験前、受験という壁を前にして初めて立ちつくし、真理とは何か、生命とは何か、自分とは、国籍とは何かなどとこだわり、思いにふけるようになりました。誕生日からしておめでた

い陽気な方でしたが、持ち前の明るさも消えうせ、自分はこれからどうしたらいいのだろうと常に漠然とした不安に心が支配されていました。何か確固とした真理が古い書物の中に潜んでいるのではないかと思い、哲学、心理学、歴史もの、特に西洋の古い文献を読みあさっていました。けれども、どれも読み通せたものはなく、途中で別な何かに目が移り、こんどはそちらを探し求めるということを繰り返していました。

大学に入り山本鎌造教授との出会いがありました。授業や合宿で経済学を教えてくださるかたわら、「まず、初めに神が天と地をお造りになった。人間は神の創造物である」などと聖書の話をしてくださいました。そして、初めて耳にする聖書のことばが、日頃何かを求めながらそれがわからないでいた心に、はっきりとした文字となって刻み込まれました。

神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイ　6・33）

暗く思い悩んだ受験の反動で、それまで立ちはだかっていた壁がなくなり、かえって空虚な気持になっていたこともあって、さがしていたのは「これかもしれない…」という思いがよぎりました。

また、男性合唱団に入りました。この合唱団はヨーロッパの中世音楽をテーマとして活動しており、十字架上でのイエス・キリストの死と復活を表現した作品を歌うことがありました。「十字架と復活」の旋律を歌っている時、いつしか我を忘れて、不思議な平安に包まれ、自分の

中にない、自分の存在を越えた何かに触れた思いがしました。

山本教授は卒業時に、のんきだった私たち学生に向けてユーモアをまじえ「諸君、学校を卒業したらまじめに勉強したまえ」と現実の厳しさを体験された先輩として激励してくださいました。それに加えて、真剣に「教会に行ってみては」の言葉をもって送り出してくださいました。

けれどもその頃、聖書とは単なるギリシャ神話のような昔話だと思い込んでいたので、そこに何が書いてあるかには一切興味がなくそのまま聞き流してしまいました。

走る哀しみ

一九八一年三月大学を卒業、四月に現在の会社に入社しました。

それまでの、空虚な学生時代から一変して、日本の誇る厳しいサラリーマン社会に何の心構えも素養もないまま投げ込まれました。入社早々から、要領の悪さも重なり、毎日深夜まで延々と続く仕事。「声の大きな人の意見が通る」大組織の中にあって、大海に投げ出された小船のような心境でした。このような状態の時、山本先生の勧めを思い出し、近くにあった教会に初めて行ってみました。しかし何をどう聞いたかは全く覚えておらず、ただ静けさの中に身をおくことに安らぎを得ていました。

当時、心の空しさを埋めるため、がむしゃらに努力して何かで自分を満たしたい思いにかられていました。

クラシック音楽の中にそれを求めていました。その頃はモーツァルトの作品を手当たりしだい

に聴きました。信じられないほどの美しい旋律に心躍らされる反面、聴いている者の心までがかきむしられるほど暗く悲しい両面をもつ音楽。美しくも短い旋律がめまぐるしく変わることで表現されるように、真実なるもの、平安なるものにたどり着きたい切迫感とたどり着けない諦観とが同居した世界。ある有名な文学者は彼の曲風を「走る哀しみ」と評していました。

まさに私の心境そのものでした。

また、マラソンにも凝ってみました。よく言えば、自分の限界に挑戦し、ゴールでの達成感を味わおうと努力し、悪く言えば静まって考える時を持とうとせずに体を酷使していました。

平安なる拠り所にたどりつきたくて、真っ暗闇の中をがむしゃらに走り続けていました。

教会へはいつしか、自分の好む事の目的の為に行くようになっていましたが、あることを通して行き詰まり、これも自分の思いで行くことを止めました。その結果、自分自身の曖昧さに失望しまるで糸の切れた凧のような状態でした。

一九八八年二月、鐐造先生、弘子夫人の友人であった山本孝子さんを通して、範子さんを紹介していただきました。

会った瞬間、以前のように自分で勝手に描いた理想像を追いかけるような情緒的な思いではなく、「ああ、自分の結婚する相手はこういう人だったんだ」と静かに確信いたしました。

同じ時期に孝子さんが集われていた吉祥寺キリスト集会の礼拝に行く機会が与えられました。

礼拝に集いはじめた頃は、大勢の方々が頭を垂れて祈られるその真摯な信仰の態度に、それまで私が抱いていたクリスチャンのイメージとは違ったものを感じ、戸惑いました。

毎週日曜日の礼拝や家庭集会では、外見からは想像もつかない方々が大変な問題や病気にかかられている中で感謝しながら明るく、喜んで、はっきりとイエス様に救われたことを証しされていました。これらの人々を通して次第にイエス様を信じる人々へのイメージは変わっていきました。つまり、「身なりを良くし、行いをつつしむことが大事であり、時と場合に応じて信仰し、心の中でひっそりと信じてさえいれば外見的には普通の人と何も変わる必要はなく、せめて自分だけは清く正しくありたいと思っている人」というイメージから、「自分では解決できない主なる神様に背き続ける罪の性質を、ただ正直に悔い改めれば聖書にある約束通り赦されることを確信し、心から喜び、また自分だけにとどまらず、家族や隣人が救われる約束を信じ、祈り、そのために証ししたくてしようがなくなる人」こそ真の信仰者であると。ただし、「自分自身はどうか」と問いかけることはなく、全く他人事の問答でした。

この頃、職場の上司が急病にかかり、入院してわずか二週間で亡くなられました。バイタリティーがあり、部下へは厳しいけれども暖かく指導してくださった方でした。いつも仕事で一緒だったこともあって、突然の死はショックで、人生の意味を考えざるを得ませんでした。

「人生とは頑張って走り続けるものであるが、その先にはほんとうは何があるのだろう」、「聖書に書かれている『永遠のいのち』とはほんとうに存在するのだろうか」。

新しい力

結婚の話が進んではいましたが、自分の信仰の曖昧さが原因で彼女との間に食い違いが多く悶々

としていた頃でした、以前患ったがんの箇所がこう丸のうちの一つであったため子供が与えられるかどうかを結婚前にはっきりしておきたいという思いになり、検査を受けることにしました。

一九八九年三月、数日の入院となった検査の結果、病気は完治しているが子供が与えられる可能性はほとんどないとのこと。これを聞いて私は真っ暗闇の中に突き落とされたようでした。それまで、結婚の話を自分の方から積極的に進めようと努力していましたが、ゼロから考え直すべきだと判断し、しばらく連絡をとることを止め、静まることにしました。仕事は普段と変わりなく慌ただしく続けていましたが、心は暗く深いところに沈んだ日々でした。

私は、集会、会衆のただ中で、ほとんど最悪の状態であった。（箴言　5・14）

その頃、何をするにも興味が湧かず、むしょうに聖書に何が書かれてあるかを知りたいという思いにかられました。目に止まる言葉は、ことごとく自分に語られているようでした。深い闇の底に沈んでいた心が、初めて何か確固としたものに触れた思いがしました。

ある夜、寝床に入りバッハのリュートという楽器の静かな音楽を聴いていた時、なぜか涙が込み上げてきて止まりませんでした。

ああ、私は床の上であなたを思い出し、夜ふけて私はあなたを思います。

（詩篇　63・6）

この涙は何だったのかを後になっていろいろ分析しても正直なところ、はっきりとわかりません。

敢えて書き表わすと次のような気持ちだったと思います。

一　何事にも頑張ってきたけれども、心身とも疲れ果て、自分でそれだけは認めなくなかったこと、すなわち自分という存在は実は弱く、結局のところ自分で自分の運命を変えることはできないという点において哀れであり、主なる神様に背くものでしかない者であることを認めざるを得なくなったのです。

二　外見的には正しくあろうと努力してきたけれども、心の中はいつも本当は何が正しいかわからずにいた自分。多少は自分にも正しく、真実なところがあると思うので、キリスト者とはいえ場合によっては主なる神様を無視して自分の判断で行動して良いはずだと思っていたが、それが全くの的外れだったと思い知らされ、全てが空しくなっていました。

三　同時に、私の罪のためにイエス様が十字架にかかって死なれたことが素直に心に受け入れられ、そのことが悲しく、痛ましく思えてなりませんでした。

翌朝、何か大変すがすがしく、平安となり、何か今まで縛られていたものから解放された気持ちがしました。その時にはっきりと自覚したわけではありませんが、心の中の最も大事な部分が、今までに体験できなかった何か不思議な平安に満たされていました。

次の聖書のみことばが当時の心境そのものでした。

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。（ハバクク　3・17、18）

その頃映画で見た「炎のランナー」、英語でのタイトルはChariot of Fire火の戦車（Ⅱ列王記2・11）は、走ることが好きだったこともあり感銘を受けました。この映画全体のテーマとなった次の聖書のみことばには、静かにこみ上げてくる熱い感動を覚え、新たな力を得た思いでした。

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・31）

自分としてはどうしたらいいかわからなくなっていた結婚のことも、こうした聖書のみことばを通してイエス様がどういうお方であるかをはっきりと知ることになり、イエス様にゆだねようという思いに導かれました。多くのキリスト集会の方々の祈りに支えられながら、初めの意思通り私から話を進める確信が与えられ、あらためて申し入れることにした。範子さんもこのことを主イエス様からのものとして受け入れてくれました。当時、範子さんは長野の実家、私は東京と距離が離れていたので、自分の思いで動き回ることなく結婚について静まって祈り、平安のうちに大事な決断ができたことは、本当に感謝でした。

その後、一九八九年五月二十五日に受洗し、同年十二月二日に吉祥寺キリスト集会で結婚式を挙げました。

その時に与えられたみことばは、次のようなものでした。

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

「わたし（主）の恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」（Ⅱコリント　12・9）

結婚後も、仕事などでの日常の困難や思い煩う状態は変わりませんが、イエス様に頭を下げることを知らなかった以前と違い、常に自分の全てをご存じで正直に打ち明けることができる最高の相談相手であるイエス様に祈って、平安と喜びに立ち戻れることは、何にもまして感謝です。

荒地は喜び

一九九四年八月八日、生まれてからずっと住んでいた東京を離れ米国テキサス州ダラスへ駐在することになりました。赴任してしばらくは慣れない英語、習慣の違い、全く未知な仕事内容という三重苦の中で、相次ぐ問題に直面しながら頭がぐちゃぐちゃ、へとへとになり、毎日を過ごしていました。特に仕事面においてはおおらかな米国人に日本独特のサラリーマン社会の流儀を理解してもらおうとしてままならず、双方の論理の真ん中で立ち往生することもありました。

このように、全然余裕のない状態に至った時、自分には信仰が与えられたとはいえ、主に頼ることを忘れてしまい、いかに厳しい現実の中で弱く、また何の良いものもないかを思わされました。

せせこましい東京で生まれ育ったこともあり、赴任して数ヵ月間は、広々とした異国の地で、すべてが異質に思え、あたかも無重力の中に投げ出されて、足が地につかないような不安定な心の状態でした。

米国は一見、現代の先進国の中でも最も物資的に豊かで華やかであり、すべてがうまくいっているように思われがちですが、最近は特に家庭の崩壊が進んでおり、ある都市では、年間の結婚件数と離婚件数がほぼ同じほどの高い離婚率を示し、深刻な社会問題となっています。

信仰という面からみても、建国以来、数多くのすばしいキリスト者が起こされ、大いに祝福されてきた反面、キリスト教の名のもとに、カリスマ、癒し、異言など、聖書のことばを使いながらも、一時的な気分の高揚を強調したり、ヒューマニズム的な感情に訴えるような傾向が強まっていて、本来信仰の基本である静かに神と対話する個人的な祈りの大切さが忘れられてしまっているため、混乱した社会の中で無力になっています。

ここダラスの人々は南部の土地柄特有のホスピタリティ（親切、寛容）があり、人々は大変暖かく、多くの人々が教会にも通っていますが、そのような人々の中でさえ、こと信仰の核心的なことについては暗黙のうちにタブー視される傾向があります。

こうした中にあっても、主イエス様は数々の困難から助け出してくださり、そればかりでなく心から一致できる信仰の方々と出会わせてくださり、その方々と生涯忘れられない心のこもったお付きあいが与えられたことは、本当に感謝です。その方々を通してイエス様が本当に生きて働かれておられることを確信しました。

こちらへ来て、日本各地の多くのキリスト集会の方々と疎遠になってしまって寂しさを感じていましたので、他の北米に住んでいる主イエス様に救われた方々と毎週日曜日に聖書を拝読し、主イエス様に感謝し、賛美するという礼拝が与えられればと祈っておりました。しばらくして会

議用の電話回線を用いてそれが可能となり、日本にいた時と同様に霊とまことに満ち足りて一週間をスタートすることができるようになったことは何にもまさる喜びです。

また、日本人だけでなく、さまざまな方々といろいろな不思議な方法で出会うことができ本当に感謝でした。さらに浅野夫妻ご一家が、しばらく後に、別な会社からの駐在員としてダラスに来られたことはなによりの励ましでした。

その後もイエス様は北米のこの小さな群れに、共に祈りあえるキリスト集会の方々を一人、また一人と増し加えてくださり、改めてイエス様がいかに私たちを個人的に愛していらっしゃるかを知ることができました。こうした信仰者との出会いを通して、イエス様は次のように全てを超えて恵んでくださる方であることを身をもって体験させてくださいました。つまり、時と場所を超えいつでもどこでもイエス様は側近くにいてくださり、導いてくださる。そして同じ言葉が話せずとも民族、国境を超え、イエス様にあるキリスト集会の方々と一致し通じあえるようにしてくださる、ということです。

さらに環境や境遇にとらわれず、どのような場合であっても、イエス様にあって心から解放され、喜べるように変えてくださることも体験しました。

次の聖書のことばは、この米国という荒野での生活の間、試練を通して主がいかに偉大なお方であるかを思い起こさせてくれます。

荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。

（イザヤ　35・1）

焼けた地は沢となり、潤いのない地は水のわく所となり、……主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンにはいり、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、嘆きと悲しみとは逃げ去る。（イザヤ　35・7、10）

アメリカの生活の中で、数々の機会を通して出会った方々との幸いで平安な時は、私のちっぽけな想像を超えたイエス様の深い愛の賜物であったことを思わされます。

同時に、自分という人間はあいかわらず、自己を神とし、創造主である神様に対して逆らい続けるという罪の性質を持ち続けていることも思い知らされました。

一方、イエス様を受け入れて以来、バッハを聴くと、なぜか平安になり、嬉しくなります。バッハの作品はイエス様への賛美そのものであり、私の日々の歩みもこのようでありたいと祈っています。

今後も生まれながらもっている自分のわがままは一生直らず、自分を気にし過ぎては失望するであろうし、またさまざまな問題に直面しそのたびに悩むでしょうが、自分の人間的な力で解決することをせず、「主イエス様が私に何をしてくださったか、そして今も恵みを与えたくてしようがない方である」ことを思い出し、「これから、どういう導きが待っているか」をイエス様に祈り、期待し、お委ねして歩みたいと思います。

なお私はその後、一九九八年に転勤となり、現在は東京の青梅市に住み、吉祥寺キリスト集会に集っています。

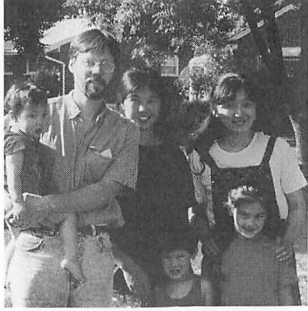
Comfort sweet that Jesus came, Promised long and long expected;
Heart and Spirit, joyous be. That the Lord has chosen thee.
To His Heaven with His Elected.
安きかな、イエス来たりしことは。待ちに待ちにしこの約束こそ、わが心からの喜び。
我を選び、永遠まで導かれんことを。（バッハのカンタータＢＷＶ151から）

…あなたがたの切り出された岩、掘り出された穴を見よ。
（イザヤ　51・1）

まことに主はシオンを慰め、そのすべての廃虚を慰めて、
その荒野をエデンのようにし、その砂漠を主の園のようにする。そこには楽しみと喜び、感謝と歌声とがある。
（イザヤ　51・3）

ダラスの自宅にて姉妹方と。




デトロイトで、右後ろが範子さん。

心のふるさと

岩本範子　一九六〇年長野県に生まれる。川田小、若穂中、長野西高を経て、信州大学教育学部音楽科を卒業後、上水内郡牟礼東小、上高井郡豊洲小に奉職。一九八九年十二月、岩本秀造さんと結婚。

私は、祖母、両親、兄と五人家族の長女として生まれました。家の真ん中には大きな仏壇がありました。幼い頃、夜になると「死んだらどうなるんだろう」と考えることが度々あり、暗くなるのが怖かったのを覚えています。そんな時、近所に住んでいた、家族みんながクリスチャンという友人に初めて教会というところに誘われて行きました。その後通い続けることはありませんでしたが、何の疑いもなく、聞いたままを信じられたその頃のことを、懐かしく思い出します。

小、中、高時代は、何事も努力すれば自分の希望がかなえられると信じ、立ち止まることもなく走り続けていきました。思春期の頃には、時々人間関係について悩むこともありましたが、好きなピアノを弾くことに逃げ込んでいました。そして将来は、好きな音楽の教師になろうと目標を設定し、いわゆる優等生タイプの子として、いつしか大学生となっていました。

自己実現の道

希望通りに大学へ進学し、親元を離れ、ひとりの生活がスタートした大学一年生の時でした。私を立ち止まらせることが起きました。私は混声合唱団に入部し、ドイツレクイエムの六番の伴

奏を命じられ、朝に夕に必死に練習していました。ところが「死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」という激しい箇所にくると、どうしてもうまく弾けないのです。それで、そこを何回も何回も繰り返し懸命になって練習し、とうとう、左手を傷めてしまいました。それまで努力すれば何でもできると信じてきた私でしたが、その努力が、全く思いもよらない結果を招いたのです。それからは、手の治療に明け暮れる日々で、そんな中でピアノの試験があるたびに、何か虚しくわりきれない思いが残りました。「音楽とは、何だろう。私たちは何のために生きるんだろう」。これまで時々考えることもありましたが、結論が出ないままとりあえず目先の目標に向かって走り続けてきた私でした。しかしこの時は、何かそうさせまいとする大きな力を、心のどこかで感じるようになりました。その大きな力によって光の下に引き出された私は、自分がどんなにプライドにこだわって生きてきたかがはっきりと見えてきました。

その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。

（ヨハネ　16・8）

憐れみによって、光の下に引き出してくださったお方を、私はずっと後になって知ることになります。私は、努力することでプライドを保つことができた頃には、自分にプライドがあることに気づきませんでした。いえ、気づこうとしませんでした。そして、人を羨んだり妬んだりするコンプレックスも、プライドの裏返しであることも知らされました。私は、ただのエゴイズムのかたまりにすぎませんでした。そこにはみじめで孤独な自分の姿がありました。ふと、まわりを

見回すと、みんなそれぞれがエゴを持っていて、自分のプライドを満足させようときゅうきゅうとしています。そんな人間たちの姿は、まるで、孤独な競争をひたすら死に向かって走り続けているだけのように虚しく見えてきました。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

（箴言　14・12）

欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

（ヤコブ　1・15）

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

方向転換

大学三年生になって、一年生の時の哲学ゼミの仲間と久しぶりに会う機会がありました。懐かしい面々がそろいました。ふと、だれも座っていない座ぶとんに目を落とした時、私は、何やらいやな予感のようなものがして「S君はどうしたの」と尋ねました。S君の友人の表情がさっと変わり「S君は…」その後に続く言葉に、私たち一同は、大きな衝撃を受けました。

「S君は、自ら人生の結論を出してしまった。どうして、どうして。」私は、闇にむかって涙ながらに叫びました。S君についてよく知らなかったにしても、共にゼミで人生について考えたこ

とのあるひとりの友として、思いあがりかもしれませんが、何もしてあげられなかった無力感に、どっと襲われてしまったのです。しかし、人の死すらも世の中の移り変わりと共に忘却してしまう、薄情なもう一人の私がいたことも事実です。

しばらくして、友人に紹介されて買ったきりそのままになっていた三浦綾子さんの「道ありき」という本を思い出し、読んでみることにしました。その本は、予想以上に私を夢中にさせ、時を忘れ、次々と三浦さんの本を読みあさっていくことになりました。

「氷点」という本を読み終えた頃、ふと倫理学の先生がおっしゃっていた「求めなさい、そうすれば与えられます。」という聖書のことばが心にひびいてきました。「あなたは、わたしのことを、本当に求めているのですか。」声なき声でしたが、私はその問いになぜか行動で答えたいという思いにかられ、ひとり北海道に旅立ちました。どうして北海道なのかわかりませんでしたが、遠くカモメの声だけが静寂をやぶって響きわたるオホーツク海の流氷を見、そして気がついてみると、三浦綾子さんと電話で話していました。電話の向こうから三浦さんのやさしい声がして、家に招いていただくことになりました。冬の寒い北海道の中、身も心も温まる三浦さん御夫妻との出会いでした。一緒に賛美歌を歌い、三浦さんが祈られた姿を目のあたりにした時、「三浦さんは、本当に今も神様を信じていらっしゃるんだろうか」という私の思いあがった疑いが心のすみにあったことを恥じました。

長野に帰って来ると、また、いつもの生活に何事もなかったように戻りました。しかし、この私のとっぴな行動に従姉妹がびっくりしてやってきました。私は、それまで従姉妹がキリスト者

になっていたことを全く知りませんでした。従姉妹は、過去、あらゆる宗教を経た後に、初めてイエス様の愛を知ったことの喜びを輝く顔で語ってくれました。「宗教は、まず最初に私たちに『こうしなさい』と要求するけれど、本当の神様は最初から私たちを愛してくださっているの」。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。（Ⅰヨハネ　4・10）

私はうつろいやすい「人の愛」を求める者でしたが、永遠に決して変わらない百パーセントの「神様の愛」があることと、しかもその愛は、私たちがそのことに気づく以前から、イエス様を通し、私たちに注がれていることを聞いて、「ピンとこないけれど、もし本当ならとてもいいお話だ」と思いました。この時はまだ、闇の中をひとりぼっちで歩んでいると思い込んでいたからです。自分でどうすることもできないエゴイズムに悩みつつ、悶々としていた私に、ドイツレクイエムの一節でもある聖句が語りかけてきました。

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。（マタイ　5・4）

このみことばを下さった方がイエス様ご自身であることも、また光がなければ暗闇がわからないように、光であられるイエス様が、まず私に近づいてくださらなければ、私は自分のみじめさを知って、イエス様を求める気持も起こされなかったということを後になって知った時は、本当にうれしく思いました。

次の日曜日、従姉妹に頼んで連れていってもらったのは長野キリスト集会という所で、牧師さんがいない、聖書だけを中心に、男の人たちが代わる代わる聖書からのメッセージを語っていました。これまで私は、教会に行ってみようと思ったこともあったのですが、人間というものに絶望していたため、「牧師さんといっても人間、もし牧師さんの前で素直になれなかったらどうしよう。本当に神様がいらっしゃるとしたら、神様の前でしか本当に素直になれないのではないかしら」と思い悩んでいました。でもここは「こんな私でも来られる」と思わせてくれました。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

（ガラテヤ　1・12）

やがて、ひとりで聖書を読んでいても難しいので、木曜日の学び会にも出席するようになりました。ちょうど、ローマ人への手紙の学びが始まっていました。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。

（ローマ　3・10、11）

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

（ローマ　3・24）

この聖句に出会った時、それまで「私は偽善者だ」という思いに悩まされていたので、肩の荷

が下りた思いがしました。

また、今までの学校教育の中で、定説であるかのように教えられてきた進化論についても、これは単に仮説にすぎないこと、聖書には人間はひとりひとり神様のご計画によって神様の愛の対象として造られたと説かれてあり、どちらをとるかは私たちの選択にかかっていることも聞きました。

そして人間は、神様を賛美するように、神様の愛によってひとりひとりが造られたにもかかわらず、その神様を無視して自分勝手に自分中心の生き方をしてきたこと、それが最も大きな罪であるということも聞きました。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53・6）

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。（Ⅰペテロ　2・25）

リンデの本との出会い

ある日、キリスト集会の方が私の所に訪ねてきてくださり「来週、キリスト集会からベックさんという方が伝道集会にみえるので、その前にこの本を読まれるといいですよ」と言って、「実を結ぶ命」という本を置いていってくださいました。さっそく読んでみた私は、ベックさんの娘さ

んのリンデさんの信仰とその死に、完全に打ちのめされたような感動を覚えました。ちょうど私と同年齢であることも重なり、その短い二十年の人生が、全く私と対照的であったからです。つまり、イエス様中心の人生と、自分中心の人生は、方向が全く逆であるように思わされました。リンデさんの死は、私が今まで全く見たことも聞いたこともないような平安に満ちたものでした。それまで感じていた死に対する漠然とした恐れに、一筋の光を見たように思いました。

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。（ヘブル　13・7）

また、それまで曖昧だった「宗教」と「信仰」が、完全に一線を画する別のものであるという箇所を読み、何だか私が今まで探し求めていた心のふるさとに出会えたような気がしました。

主と共に歩む道

一九八二年八月八日、残された私の全生涯をイエス様におゆだねすることを決心し、千曲川で洗礼を受けました。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。（ピリピ　3・12）

当時与えられたみことばです。何もわかってはいませんでしたが、人生の真の方向性を与えら

れたように思いました。

信仰者としてのスタートと社会人としてのスタートがほぼ同時期だった私は、いきなりキリスト者として社会の戦いの中に投げ込まれる生活が始まりました。初めての赴任先は、山間にある小学校でしたが、ちょうど同じ地域にキリスト集会のご一家が転勤されて、日曜日の礼拝と木曜日の聖書の学び会に、ともに集わせていただきました。職場では、子供たちの明るい笑顔に励まされる一方、容赦ない現実の厳しさの中、内的、外的な戦いがあり、時々涙することもありました。

あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。

（ヘブル　12・4）

しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。」

（ルカ　23・28）

年頃になるにつれ、やはり、この頃の最も大きな具体的な試みは、結婚についてでした。二十代後半ともなると、回りの方々が心配してくださり、それぞれお話を持ってきてくださいましたが、「キリスト者の方でないと結婚は考えられない」の一点張りだった私のために「娘はこのように申しておりまして」と両親が丁重に断ってくれていました。両親は、結婚の厳しさを本当によく知っていたからだと思います。いつも静かに大きな愛で私のことを心配してくれる両親に、私

は苦労ばかりかけていました。私は、そんな両親に対して何もしてあげられないことを思った時、職場から家に帰る途中涙がでてしかたがありませんでした。そんな時こう祈りました。

「主はすべてのことをご存じですから感謝です。私は何も両親にしてあげられないのです。でも、あなた様は、何が最善かご存じです。それは、あなた様からくる心の平安です。それに代わるものはありません。あなた様はすべてを導くことがおできになります。私の代わりに両親をよろしくお願いします。そして私は主に従えますように」。

当時私にとって一番の問題は、むしろ私の心の状態にありました。それは、自分の結婚について、いま一つ他人ごとのようにしか思えなかったことです。キリスト者の結婚は「主の栄光のため」というところまではいいのですが、「人は、どうして結婚に踏み切っていけるのだろうか」と考えてしまうのでした。しかし、主は心の奥底までご存知で、私が主に明け渡しさえすれば、私をご支配くださり、導くことがおできになる方だと信じ「結婚が主のみ心でしたら、結婚に対し切実に祈れるようにしてください」と祈りました。

それからしばらくして、今まで気づかなかった自分の姿を直視させられる時がきました。それは、学生時代親しかった私の友人同士の結婚を通してでした。その結婚を心から祝福しようとして、自分自身の中で葛藤が起こりました。でも、自分自身は本当は無力であること、しかも、今までこの葛藤を自分で解決しなければならないかのように思い違いをしていた私の高慢な姿を見せられ、愕然としました。そんな自分が音をたてて崩れていきました。

あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま

肉によって完成されるというのですか。（ガラテヤ　3・3）

このことを通し、十字架のもとを離れては何ひとつ良いことのできない者、十字架のもとで、こんな者さえ愛して赦してくださった主を心から賛美せずにはいられない者、また結婚についても主のあわれみを願う小さな者へと変えられていきました。

結婚

その後、主を賛美されているアメリカ人の独身の女性宣教師ベティー・ハドソンさんに、久しぶりにレッスンを兼ねてお会いするため、彼女が東京に移り住まわれたばかりの頃上京しました。その折、以前ハドソンさんに紹介された吉祥寺のキリスト集会に集っていらっしゃる歯科医の山本さんが、偶然にもハドソンさんの引っ越し先の近くに越されたことを知り、懐かしく思いお電話をしてみました。そして山本さん宅を訪問した時、秀造さんと会うことになったのです。山本さんのお友だちである、やはり山本さんという秀造さんの大学時代の先生から、結婚についての相談のお電話を山本さんが受けられた時、ふと私のことを思われたのだそうです。二人の共通の趣味から、「二人で主を賛美できたら素敵だな」と思われた矢先、その数分後に長野にいるはずの私から電話があって、大変びっくりされたそうです。そのお話を山本さんよりお聞きした時、私もとても不思議に思いました。

その後、私は長野に帰り、仕事に忙殺される日々となりましたが、その間、秀造さんと電話な

どのやりとりを通し、ゆっくり一歩一歩導かれていきました。最初は話題がちぐはぐになることもあって、「もし主のみ心でなかったら、どうぞこの結婚のお話を閉ざしてください。主のみ心を教えてください」と祈らなくてはならないこともありました。そんな時、次のようなみことばが与えられました。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
（ピリピ　2・6）

いつのまにか、自分ひとりの力でここまで歩いてきたように思い違いをして高慢になっていました。しかし主はみことばの光をもって、私の高慢ぶりに気づかせてくださり、主を見失っていた私の眼を開いて改めて主のすばらしさが見えるようにしてくださいました。

それから一年後、秀造さんの願いもあり、それまで七年勤務した職場に退職願いを提出しました。しかしその後、結婚についてもう一度主にゆだね、主に責任をとっていただけるという確信なしには一歩も前に進めない状態になりました。しかしそんな中で秀造さんにみことばが与えられ、このことを通し秀造さんが大きく変えられたのを見せていただいたのです。それからはいっしょに話をしていても、以前のように話が食い違い、どこまでいっても平行線のような不安がなくなりました。

とはいっても、聖書には、はっきりと「子供たちは主の賜物」（詩127・3）、また、「神にとって

不可能なことは一つもありません」（ルカ1・37）とあり、また子供を与えていただけるよう祈って与えられたことも書いてあります。主は、この結婚をどのように祝福してくださるのか、どうしても結婚前に個人的にみことばをいただきたいと思い、祈りました。

「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛せよ。」次にはこれです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」この二つより大事な命令は、ほかにありません。（マルコ　12・30、31）

「天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」（マタイ　12・50）

「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。（エペソ　5・31、32）

心からの祈りに主は応えてくださり、この他にもたくさんのみことばを個人的にいただいて、主からの平安が与えられました。私たちが生まれながら持っている「肉親の愛」を超えた真の愛を、イエス様はその尊い血潮を通して私たちに示されたように、結婚を通しても啓示なさりたいのだと思いました。そして、「イエス様による新しい契約としての結婚」へと、一歩踏み出させて

いただきました。

この結婚について祈る中、私が仕事を辞めたことが一つのきっかけとなって、私の学生時代の友人を、主は救いに導いてくださいました。「学生時代、ともに歌った仲間たちと、心を合わせて主をほめたたえられるようになりたい」という願いを聞いてくださったのです。これからも、主の最善の時に、主が成してくださることを、確信しています。

また、この喜びの前に、悲しいできごともありました。それは、私の他の従姉妹が統一教会という宗教に魂を奪われていったことでした。

「私は今までどこを向いていたんだろう。彼女が悩み苦しんでいることも気づかず、最も大切なとりなしの祈りを怠り、自分のことばかり考えて的はずれな方を向いて走り回っていたのではないだろうか」。眠っていた私の頭をハンマーで殴られたような思いがして、深く、悔い改めへと向かわされました。また、このことを通し、この世の「宗教」が漠然と人間の知恵で間違った「神様」のイメージを作りあげ、「イエス様」から何とか引きはなそうとしている事実に、腹立たしい思いさえ覚えました。

そんな頃、主は私を吉祥寺キリスト集会の礼拝に導かれました。あらゆる職業について日々働いておられる多くの男性がたが、本当にへりくだって頭を垂れ、次々と立って「愛するイエス様…」とお祈りされるのを聞き、言葉では言い尽くせない感動を覚えました。そして、「こんな私のようなキリスト者のはしくれでも、イエス様だけを賛美し礼拝させていただきたい」と思うようになりました。従姉妹のことは、イエス様に信頼してこれからも祈り続けていきたいと思ってい

ます。

結婚によって、私たちは東京の吉祥寺キリスト集会へと導かれましたが、それから五年後、長野に暮らす私の両親も救われ、仏壇を閉じ、主をほめたたえる群れの中に加えていただきました。主は本当に祈りに答えてくださる真実なお方であることをあらためて感謝いたしました。

第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

（Ⅰコリント　15・47）

私たち人間すべての祖先は一人の人アダムであり、このアダムによって、いつも自分を正しいとする罪が全人類に入りました。それによって、鳥が空を飛ぶように人間は罪を犯すことが自然の性質として備わってしまったのだそうです。このことに目が開かされた時、本当に心の底から、「ああ、そうだったんですか。」と思いました。

あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」　（詩篇　90・3）

最近、次のような話を聴いて、イエス様のくびきについてのイメージが、より鮮明になりました。昔、牛は二頭ずつしっかりくびきをはめられて農耕をさせられていましたが、若い牛を訓練する時は、必ず年長のよく訓練された牛と組ませたそうです。そして、若い牛は農夫に従うことや、歩く方向などを年長の牛から学ぶのだそうです。このようにしてイエス様は、夫とともに、何もわからない訓練されていないわがままな私を、静かに忍耐強く、やさしく導かれるのです。主に

従いつつ、大変な仕事に毎朝出勤する主人の姿を見るにつけても、イエス様が主人とともについていてくださることは、本当に感謝です。

わたし（イエス様）は心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

（マタイ　11・29）

米国生活

相変わらずどうしようもない私ですが、イエス様はすばらしいお方です。友人のご主人が救われるなどたくさんの主のみわざを目のあたりに見せていただいた後、主は、しばらくの間私たちを米国のテキサス州に移されました。広大で、自由で、豊かさを思わせる米国で、主の憐れみに浴させていただいていますが、この国にいるとヒューマニズムと信仰がすり変わりやすく、ふと、さびしく思う時もあります。

しかし、私たちは何もできないけれど、私たちは「主の御心がなされますように」と祈る愛するキリスト集会の方々の祈りに支えられています。私たちはどこにいても、キリストのからだの一部として生活させていただけるのは、なんと幸いなことでしょう。渡米してから一年もたたないうちに、子宮筋腫の手術のため帰国した時も、私たちは主にあってキリスト集会の方々と祈りを通してひとつのからだなのだと実感させていただきました。

からだは一つ、御霊は一つです。

（エペソ　4・4）

また、米国、欧州各地で行われる「よろこびの集い」や、電話線で主によって結ばれた在米キリスト集会の皆さまとの礼拝や賛美、メッセージからも、距離を超えて励ましを与えられています。「自信を持って強く生きよう」というこの世の流れと逆行して、どこまでいっても自分の罪深さを知らされ、その弱さの中から、主を賛美する御霊の働かれているところ。ここにしか味わえない一体感ある交わりは、何ものにもかえられません。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。（ピリピ　3・20）

私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。（ヘブル　13・14、15）

その後私たちは日本に転勤になり、現在は吉祥寺キリスト集会に集わせていただいております。

奇しい御わざに支えられて

ストーバー　勝子







（写真上）左から勝子さん、タミーさん、晃さん。
（写真下左）ご主人と。

ニューヨークで集会のみなさんと。

一九三七年東京に生れる。新宿区落合第四小、中野区第三中、都立青山高、青山学院大学文学部卒。杉並・世田谷の区立中学校の英語講師の後、一九六五年渡米。ゴールデン・ゲイト南部バプテスト神学校宗教教育コース卒。一九六七年、ビル・ストーヴァー氏と結婚。一九九一年、夫ビルさんが天に召される。現在サンフランシスコのグラハム・アンド・ジェームス総合法律事務所に勤務。家族は、長女タミーさん、長男晃さん。

私がイエス様のお名前を初めて知ったのは、戦後間もなくのことでした。私たち一家は第二次世界大戦の空襲で東京の家を焼かれ、一時愛知県の小さな漁村に疎開していましたが、終戦となって東京に戻り、戦火を逃れた父方の叔母といとこの住む新宿下落合の家に厄介になっていました。私は小学二年生。平和になって、夜中に空襲警報のサイレンで起こされて防空壕に逃げ込むこともなく、朝までゆっくり眠れるのが嬉しかったのを覚えています。世の中は混乱と貧しさの中にありました。妹四人のうちの二人と、母方の祖母は、東京でなく、千葉県の母方の叔母と住みました。今は成田空港になっている三里塚という所で、叔母は生活のため慣れない農地開墾をしていたのです。私たち一家は、このように二つの場所で別れ別れになっていました。

そのころ父母は、週末になると千葉の叔母のところに、大きなリュックサックを背負ってでかけ、妹達と祖母に会い、帰りはそのリュックサック一杯に野菜、芋、お米を詰めて腰を曲げて帰ってきました。人々は貧しく、食料難、住宅難に喘いでいました。

東京の叔母の家近くに、普通の人家の教会がありました。私は、いとこたちといっしょに、いつからか日曜学校に通うようになりました。歌が好きだった私は、オルガン伴奏で歌う讃美歌や美しいカード、特にクリスマスのイエス様ご降誕の劇と美しい音楽に魅せられました。貧しい馬小屋でのイエス様のご誕生…冬の夜空に輝く星を見上げながら、子供心にイエス様というお方がとても懐かしく、貴く清らかなものを深く感じました。

しかし、イエス様を信じ、洗礼を受けるまでには、その後十三年の年月が必要でした。

成長した私は、母と同じ専門の教育学を、ミッション系の青山学院大学で学びました。二年生

の時、必修科目の「キリスト教概論」で、「死」について仏教とキリスト教の観念論比較の講義がありました。仏教では、死後は、自己という個の存在は涅槃の世界の中に溶けこんでしまい、無の存在となると考えます。それに反してキリスト教では、自己の個の存在は、死後も存在すると考えます。この大きな違いに興味を覚えました。

私は小学生の頃から、「死」について考えるとき、「死んだらどうなってしまうのだろう。まったく意識がなくなってしまうんだろうか。どこに行くんだろうか。無の存在になってしまうんだろうか…」と、悩み恐れました。解決の機会もないまま、大学生になっていました。ですから、この講義が刺激となって、私は子供のころ通った教会へ、再び足を向けました。そして、イエス様の十字架の死、復活、罪、悔い改め、救いと永遠のいのちを知り、イエス様を知り、洗礼を受けました。二十二歳の時でした。

母の父は、仏教哲学を修め、沖縄で古い禅寺の住職を務めた人で、祖母も、信心深い人でした。私たちは子供のころ、よくお経を暗唱させられたものでした。しかし、仏教色の濃い家庭に育ちながら、私は仏教の教えや寺の雰囲気、また葬儀などにどうしても親しめませんでした。私がいつの日かイエス様と出会うための備えだったと思います。

あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。

（詩篇 139・16）

大学卒業後、教職を経て五年後、二十六歳の時、私は、サンフランシスコのゴールデン・ゲー

ト・ブリッジに近い南部バプテスト神学校で学ぶ機会が与えられ、アメリカへ渡りました。一九六五年の秋でした。三年間の勉学の間、語学力不足に悩まされ、また、日本の母からは結婚しなさいという圧力がかかったりで、勉学と結婚の問題で岐路に立たされました。三十歳を間近にした私は、心からイエス様に将来を委ね、祈りました。すると、二ヵ月後に、後に夫となるビル・ストーヴァーが神学校に入ってきました。彼は、建築デザイン専門で、アジアの教会建築を通して伝道したい計画を持っていました。彼の信仰、日本好き、物静かで優しい人柄に触れ、また、主が私の祈りに答えてくださったという確信が与えられたので、彼のプロポーズを受け、一年後に結婚しました。

教会側の方針で、私達のアジアでのミッションの道は閉ざされたので、そのかわり、夫の就職先、南部バプテスト・ホーム・ミッションボードの教会建築課のあるテネシー州ナッシュビルで一年間過し、オクラホマ州オクラホマ・シティーと東京にそれぞれ短期滞在した後、日本で生まれた娘タミーを連れて、私たちは、最初に出会った神学校があるマリン郡に戻って来ました。夫は、最初の印象以上に優しく親切で、家族をこよなく愛し、大切にしてくれました。私は世界で一番幸せな結婚に恵まれたのだと、心の底から思っていました。

結婚当初から、幼い娘、生まれたばかりの息子とともに一家そろって教会の礼拝や行事に参加していましたが、私の心の中には、次第に喜び、感謝、平安がなくなっていきました。幸せな家庭や教会生活があっても、いつもこの世で欲しいものに心奪われ、それらが満たされず、すべてが自分の思う通りならないといらだって、優しい夫や子供たちに不満や怒りをぶつけていました。

そんな自分への嫌悪感が、わけのわからない怒りとなって増幅し、ますます大声でどなるような私でした。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。（詩篇　73・21、22）

教会にも、私の生活の中にも真の「祈り」がなく、まして聖書と精霊の声に聞き従うこともなく、イエス様との生きた交わりがありませんでした。教会にただ通うだけで、この世の人々と同じような状態の中にありました。私は霊的に死んでいたのです。

…キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。（ローマ　8・9）

そんな哀れな私を、夫は悲しそうな目つきでただ見つめていました。本当に愛と尊敬のない罪深い妻であり、母親でした。イエス様を救い主として信じ受け入れたころの最初の愛は、すっかり冷えきり、なくなっていました。

「…あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。」（黙示　2・4、5）

それでも、教会で形だけの礼拝をし、名だけの信者の生活を続け、何の疑問も持たずに長い歳

月が過ぎ去りました。やがていつのまにか、私たち家族は、形だけの教会へすら行かなくなっていました。

しかし、主は真実なお方です。主から離れ、どっぷりと罪の中に落ちこんでしまった私を、憐んで御心にとめてくださり、恵みの試練を通してご自身を示してくださいました。一九九一年に夫が発病し、二年足らずで天に召されたのです。悲しみと絶望の日々が始まりました。

生前の夫に対してとった私の数々のわがまま、冷く愛のない行為が、日夜鋭く深い後悔となって私を責めさいなみました。私は夫を心から愛していました。ひねくれて素直になれない哀れな者でした。夫はどんなにか悲しかったことでしょう。優しく繊細な心を持った人でした。

意識不明になる一週間前、ベッドのそばで夫と最後の会話を交わしました。わがままできつい妻だったことを心から詫び、「あなたがいなくなったら、とても淋しくなるわ」と、そっと呟きました。夫は、力をふりしぼって私の手を取り、「先に天国へ行くけど、勝子が来るのを待っているよ」と言い、「アイ・ラブ・ユー」と五回ほどくり返しました。「主よみもとに近づかん」を妹かほると共に歌い、近所のキリスト者のご夫婦が聖書を読んでくださいました。

一週間後の早朝、夫は、看護疲れで寝入っている家族をそっとしておきたいかのように、彼らしくひっそりと静かに、天に召されていきました。

私は自分が許せませんでした。悲しみのどん底で号泣しました。

その後、人から勧められて、家族を失った人々のためのサポート・グループの集いにも参加し

てみましたが、そこには何の慰めも解決もありませんでした。私の仕事はストレスも多く、父親を失った後の子供たちの問題なども加わり、私は悲しみと苦しみでうちひしがれていました。「自殺は弱い人がするものだ。自分には関係ない」と思っていた私が、初めて、この苦しさから解放されたい強い思いから、ふっと自殺が頭をよぎり、愕然としたこともありました。暗く光のない、悲しみと絶望の底に沈んでいる日々でした。

悲しくて、辛くて、イエス様を思い出すこともできませんでした。そのころ、狭心症発作で入院した主人のことがきっかけで、吉祥寺キリスト集会にいた末の妹、仲尾美知子から「光よあれ」が何冊も送られてきました。キリスト集会のことは、妹から以前にも聞かされていました。多くの人々が日々イエス様のみもとに導かれていることを知らされ、もしや新興宗教のたぐいではないかと疑問をもっていましたので、キリスト集会とはどういうところか調べてみようという気持ちになり、また、わらにもすがる必死の思いから、読み始めました。あとは、本を閉じることができません。仕事から帰ると夕食もとらず、通勤のバスの中、仕事場の昼休み、床に入ってから、夢中で読みました。読み終わるまで、夜中の二時三時まで起きていました。「光よあれ」を読み始めてすぐに、神学校でかじった少しの知識からして、新興宗教ではないことがわかりました。読み進むうちに私は、体が震え、慟哭を押えることができませんでした。「イエス様、イエス様」と、心の中で叫んでいました。イエス様の十字架の血潮の贖い…それまでは観念的な知識しかありませんでしたが、数々の証しを通して、それが私の内で生き生きした体験となったのです。聖霊が私の内に宿ってくださったのがわかりました。心から、主から離れていた罪を悔い改め、赦

しを乞いました。イエス様は、みじめで憐れな罪深い私を愛して、罪の滅びから救ってくださるため、十字架上で血を流し、死んでくださったのでした。人知ではかり知れない愛と恵みの事実を、洗礼から三十二年たって、初めて体験させていただきました。

私は、後悔、絶望という苦しい枷から解放され、数々の罪を赦していただいたことを確信し、絶望の暗い世界から、赦しの光の世界へと移されたのです。言葉で言いあらわせない喜びでした。生きた信仰へのスタートでした。感謝、喜び、平安で満されました。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。…事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・18、21）

父親を失った時、息子晃は十五歳でした。笑顔がなくなり、学校も休みがちで、部屋に閉じこもり、眠ってばかりいました。私にも話しかけなくなっていました。ある日突然、警官二人がわが家のドアのベルを鳴らし、ドアを開けるや否やいきなり飛びこんできました。私は、何のことかわからず、あっけにとられて突っ立っていました。

晃が持っている小さな鉢植えの二つがマリファナだったのです。それからは、青少年裁判や更正プログラムへの送り迎えなどで心が休まらず、悲しみの三ヵ月を送りました。考える力も行動する力も失い、こんな時にいっしょに心配し支えあう夫もなく、途方にくれ、私には、イエス様

にすがり、お委ねすることしか残されていませんでした。「イエス様。晃は『流産は免れない』と、医者から言われた子です。私たち夫婦が、あなたに、『無事生まれたら、あなたの御用に仕える子としてお用いください』と祈って生まれた子です。あなたにすべてお委ねしますから、みこころのままにお導きください」と、涙とともに祈り続けました。憐れみ深い主は、祈りに答えてくださり、次々とみわざを示してくださいました。

小さいころからスポーツが大好きだった晃は、マリン郡水泳チームのコーチに拾われたのです。すぐにきびしい訓練に入り、水を得た魚のように生き生きし、失った笑顔が戻り、すっかり明るくなってきました。学校にもきちんと通うようになりました。「お父さんが死んだあと、とても辛かった。心の痛みを和らげたかったんだ。でも、もう大丈夫」と、言ってくれました。私は、「心の痛みは、イエス様に祈ったらいいのよ。ほんとに、それしかないの」と言い、真剣に息子の救いのために祈らなくてはと、強く思いました。主は真実なお方ですから、信じる者を決して孤児とはなさいません。祈り求めれば、必ず答えてくださいます。全てを益とし、不思議な方法で全てを整えてくださいます。ベックさんが「祈らないと損だよ」とおっしゃるのは、事実です。今思うと、主からいただいた試練は、大きな恵みと祝福でした。

苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。主は、私に答えて、私を広い所に置かれた。
（詩篇 118・5）

ああ、私の苦しんだ苦しみは、平安のためでした。あなたは滅びの穴から、私のたまし

いを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。
（イザヤ　38・17）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

一九九二年四月、ロサンゼルス、パサデナにあるグレース・リンさんのお宅で、日本からベックさんはじめ十六人のキリスト集会の方々をお迎えして「よろこびの集い」が開かれるから出席してみては、とのお誘いを東京の藤原さんからいただき、一人夢中でロス行きの飛行機に飛び乗っていました。

「よろこびの集い」では、イエス様のご臨在が満ち、心からの賛美と礼拝が捧げられました。イエス様が中心の、生き生きした集いでした。今までに訪れたどの教会にもない、喜びに溢れたものでした。身にあまる恵みと祝福をいただき、ベックさんやキリスト集会の皆さんと親しい時を過ごさせていただき、イエス様の御手の内にある安心感、暖かさ、懐かしさを強く感じました。イエス様のみわざとご栄光が目に見えるような集いがただただ嬉しく、賛美しては泣き、感謝しては泣き、涙と笑いでぐしゃぐしゃの二日間でした。

この日からグレースさんと電話でいろいろとお話できるようになり、グレースさんはやがて東京に帰られましたが、ずっとごいっしょに祈ったり主を賛美したりしてきました。このことも感

謝でした。

その後アメリカの東西両海岸各地で毎年「よろこびの集い」が開かれるようになり、また、北米各地の集会を結ぶ電話回線礼拝も始まりました。毎週の聖日礼拝には、二十ヵ所近いアメリカ各地の皆さまとごいっしょにイエス様を礼拝したり、賛美を捧げたりできることは、この上ない幸せです。サンフランシスコの集会は、近所に住む房江・ミラーさんと私の二人だけですから、一人でも多くの方が導かれるように祈っています。

このように、イエス様の十字架によって生まれ変わって喜んでいても、私はほんとうに弱い者で、いつも罪の本質を引きずり持っています。ごう慢でわがままな性格が、いつも表に出ようと待ちかまえています。イエス様に喜んでいただけるキリスト者となれるよう、少しでも成長したいと熱望しているのに、現実は反対で、イエス様を悲しませてばかりいる惨めな者です。

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。…こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ　7・19〜21、8・1、2）

また主は、娘タミーの恋愛問題を通して私の心を探り、砕いてくださいました。私は、この世の常識に妥協の態度をとる過ちをおかしました。その結果は、辛い悲しい経験でした。主の掟と精霊の導きに従おうとしなかった私の間違った行ないに対して、主は実に明確に、愚かな私にしっかりわかるように示してくださいました。私は、あまりにも厳粛な主の御前にひれ伏し、深く悔い改めました。それから五ヵ月間、聖書にすがり、すべてを主に頼り、委ねて祈りました。そして、主はお答えとして、今度も想像を越えたみわざを見せてくださいました。もやもやしてよくわからなかった、ヨハネ1・1の聖句が、霧が晴れたようにはっきりと理解できました。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

（ヨハネ　1・1）

そのころ、試練の中で支えられた聖句を、いくつかあげさせていただきます。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

（ローマ　12・2）

主は、いつくしみ深く、正しくあられる。それゆえ、罪人に道を教えられる。

（詩篇　25・8）

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。―主の御告げ―それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

主よ。私の願いはすべてあなたの御前にあり、私の嘆きはあなたから隠されていません。（詩篇　38・9）

主に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。（詩篇　32・10）

主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。（詩篇　37・4）

つまづいては立ち上がり、立ち上がってはつまづく私ですが、イエス様を見上げれば必ず、喜び・平安・感謝・愛・赦しが確実にいただけるので、ほんとうに幸せです。イエス様に信頼しきることと従順、そして御霊に私のすべてを支配していただくことを教えていただき、聖書と祈りによるイエス様との生きた語らいがどんなにすばらしいものかも体験させていただきました。

愛する二人の子供たちは、残念ながら、まだイエス様に従う者ではありません。イエス様の再臨が間近い今、イエス様が彼らの心を開いてくださるよう、祈り続けています。夫亡き後、子供

たちとここまでこられたのは、ただただイエス様が私たちを愛し、憐んで導き、奇しいみわざの数々で支えてくださったからです。

わがたましいよ、主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・1、2）

私は心を尽して主に感謝します。あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。（詩篇　9・1、2）

妹の結婚式で、ご家族そろって。

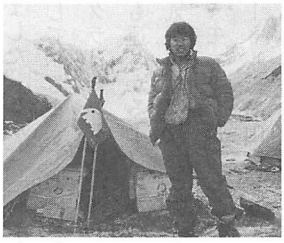


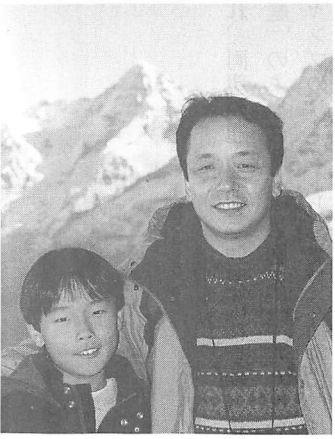


家族そろって。

すべてのことをなしとげてくださる主

酒井正人





（写真下右）C1のキャンプ1で
（写真下左）翔太さんと。

一九五七年岐阜市に生まれる。三重県菰野小、暁中、四日市高、三重大学工学部修士課程修了。一九八二年ダイセル化学工業に入社。新潟県新井、東京と転勤し一九九四年よりニューヨーク勤務。一九九八年帰国し同社本社勤務。現在横浜市戸塚区在住。家族は妻美恵さん、長女結実さん、長男翔太さん、次女歩実さん。趣味は登山、キャンプ、水泳、ゴルフ、物の修理。

生い立ち

クリスチャンホームの長男として生まれ、両親の通う教会で幼児洗礼を受けました。その教会の付属幼稚園に入園し、園内を「おらが庭」のように闊歩する園児だったと聞いています。日曜学校、バイブルキャンプ、また中高生キャンプのリーダーとして教会活動に参加することによって聖書のことばに触れる機会は多くありました。しかし、「救い」の確信を持つこともなく、毎週日曜日を教会で拘束され、また優等生としてふるまうことに息苦しさを徐々に感じだしました。

中学、高校となると登山、特にロッククライミングに没頭しはじめ、ほとんどの週末、春夏冬休みを山で過ごすようになり、教会からも遠ざかるようになってゆきました。大学に何とか滑りこんだ後も、平日はテニス、土日は山、気が向けば教会と勝手気ままに青春を謳歌していました。大学二年の冬には三ヵ月をフランスのシャモニーで過ごし、ヨーロッパアルプスの岩壁登攀に挑戦しました。またその二年後には七千メートル級の山を登りにヒマラヤ遠征をして、パキスタンのカラコルムでやはり三ヵ月を過ごしました。ほとんど勉強もしなかったため、一年を余分に大学で過ごすことになってしまいましたが「俺は他の人とは違う」との高ぶった思いを持っていたように思います。

ヒマラヤ登山で多くの経験をした反面、地球を直径十センチの野球ボールに見立てれば、あれだけ苦労して登った七千メートルの山がたったの百分の五ミリほどで、縫い目ほどもない事実に何か空しさを感じました。また何度か起こした山での事故から、死への恐怖、両親の心配などを

考えるうちに、その後本格的な山登りから遠ざかるようになっていきました。

そのころから今度は化学の研究が面白くなり、成績はよくありませんでしたが大学院に進学し、人並みの就職をすることができました。あれだけ打ち込んでいた登山に代わる何かを探し求めていたように思います。

家内との出会い

社会人としての最初の勤務地は、工場のある新潟県新井市という豪雪地帯の田舎町でした。四月というのに道端には雪が残っており、町の人々のかなりの人が会社の関係者という環境で、太平洋岸から来た私にとってはすべてが目新しく、新鮮に写りました。しかし、勤めだしてまもなく、「俺の一生はこんな形で過ぎてゆくのか」と、諦めともため息ともいえるような複雑な思いが心を占めるようになっていきました。そんな時、両親が属していた教会がとなり町にあることを思い出して、何かを求めて通うようになりました。しかし、その教会でも「四日市で教会委員をしていらしゃる酒井さんのご子息」としてふるまってしまう自分に平安はありませんでした。

そんなある日、教会の付属幼稚園に勤めている先生が登園拒否になって悩んでいるので、相談相手になって欲しいと、園長でもある牧師さんから頼まれました。それが家内でした。会って話をすると、登園拒否する先生のようには見えず、「気にするな」「楽しいことはいっぱいある」などと今から考えれば慰めにもならないような私の言葉に耳を傾けてくれ、彼女を一生引っ張っていけそうに思いました。彼女の気分を明るくしようと、大爆笑百連発を演じて見せている私でした。

結婚、信仰の確信

二年の工場勤務の後、急に東京本社転勤となり、家内と結婚の約束をして東京に向かいました。横浜の社宅で最後の独身生活を半年ほど送ったのですが、その間に家内はまた精神的に不安定になり、その年の秋の結婚を心配しました。しかし一方で、「テレビのスイッチを入れればまた元気になるさ」、などと自分勝手な楽天的考えも持っていました。その問題を家内と深く話すこともなく、また解決策も無いまま、属していた教会で皆から祝福され結婚式を挙げました。家内を数年は飽きさせないネタは持っていると思っていましたし、自分に対して自信も持っていました。しかし、表面的に元気そうに見える家内ですが、その内面の苦しみは、すでに私の力ではどうしようも無いものであることはすぐ認めざるを得ませんでした。

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。（箴言　10・22）

やがて、自分が原因で交通事故を起こしたことや、本社特有の仕事上のストレスなどが重なり、胃が痛む日々が多くなりました。そんなある日、家内がスカッとした顔をして、ベックさんに会ったこと、聖書の話を聞いたことを嬉しそうに話しました。しかし、自分の心の中に素直に喜べないものがあることにすぐ気がつきました。「クリスチャンホームに育った人間に聖書の話を講釈するとは」、「人に心配させておいて」、「すでに知っているイエス様の話をわざわざベックさんから聞かなくても僕は大丈夫」などなど。

家内が解放されていくのと反比例するかのように私の心が頑なになっていくのが分かりました。同じ社宅にいて次々に救われて信仰を持つようになった五家族の皆さん方と話していても、聖書の知識は披露できても、喜びを披露できない自分に気づかされました。

そのころ、自宅でベックさんが来てくださる家庭集会があるたびに、酒席を設けてわざと遅く帰宅したり、それでもまだ社宅の前に皆さんの車が停まっていると、社宅の回りを歩き回って時間稼ぎをしました。主の圧倒的なご愛の前に何と滑稽で哀れな姿だとすぐに思わされ、ほんとうに情けなくなりました。

その後、少しずつ家庭集会、日曜礼拝にも参加するようになり、今まで理解してきたヒューマニズム的、道徳的聖書の世界とまったく違う世界があることがわかってきました。そんなころ、池田さんから軽井沢のバイブルキャンプで証しをするよう頼まれました。何とか断ろうと思い、「洗礼を受けていないし、救われていないし…」などと、いろいろ抵抗してみました。しかし、池田さんは、「酒井さんは救われていますよ」とおっしゃいました。その一言で、「救われている」喜びが一気に心にあふれてきて証しのことなど忘れてしまい、「洗礼を受けたいです」と、とんちんかんな返事をしてしまいました。同時に頑なになっていた原因が自我、プライド、甘えといった罪からきたものであることがはっきり示され、イエス様がその罪をご存知の上で待っていてくださったと確信できました。体が急にふーっと軽くなり、世の中が輝いて見えるようになりました。自分の力に頼ってきた過去が出口の無い迷路のようなものであったことを知らされました。

まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、

救い出されました。　（詩篇　116・8）

渡米

横浜での十年間は本当に楽しいものでした。同じ社宅に私たちを含めて六家族の集会の方々がいるだけでなく、多くの家庭集会や西軽井沢の福音センターでの「よろこびの集い」に参加することもでき、みなさんとのお付き合いの中から多くの恵みをいただくことができました。また、重病の信者の方をお見舞いに行くたび、逆に元気づけられる経験を何度もしました。肉体は弱っていらっしゃいますが、主によって支えられ、よほど私より健康そうに見える方にお会いするたびに、イエス様のご愛、奇跡をまのあたりに感じることができました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。　（詩篇　133・1）

一九九四年の夏、ニューヨークに転勤する話が持ちあがりました。自分の大きな弱点が英語にあることに不安を抱く反面、そこの責任者として赴任することを密かに自慢する思いもありました。この密かな驕りは後で完全に砕かれることになりました。この転勤に際してはほんとうに多くの集会の方々に祈っていただきました。出発前日も家庭集会に参加し、集会の方のお宅に泊めていただいたり、空港にも見送ってくださるなど、目に見えることはもとより、目に見えない皆さんの祈りを強く感じ、どれだけ心の支えになったか言い尽くせません。

また、ニューヨークには岩崎さんご夫妻がいらっしゃり、二家族ではありましたが日曜礼拝もでき、このことも大きな恵みであり、心の支えでした。日本では礼拝、家庭集会などでキリスト集会の人々がいつも顔を合わせることが当たり前のように思っていたのですが、それはほんとうに主の恵みによるものだと知らされました。

そんな飢え渇きを主はご存知であり、一九九四年の十一月には日本から百人を超えるキリスト集会の皆さんが来てくださり、ニューヨーク「よろこびの集い」が開かれました。翌年には北米の各地に在住しているキリスト集会の方々を電話でつないでスピーカーフォーンによる日曜礼拝も持てるようになりました。今では二十ヵ所近くをつないで電話礼拝をするまでになっています。その後も日本の信者の皆さんの祈りに支えられ、また重荷を持ってくださっている方々が次々と北米に来てくださり、ロサンゼルス、トロント、バンクーバーなどで「よろこびの集い」が開かれました。

信仰の歩み

このように、主から多くの恵みをいただいていましたが、時折家内が以前のように精神的に不安定な状態になりました。やはりこの時も家内を何とか力づけようと、自分の知識、言葉、やさしさに頼っていたように思います。また、仕事の方も問題は多くありましたが、まだ自分の能力の範囲でこなすことができ、主に積極的により頼むことをしていませんでした。祈りも自分勝手なものだったように思います。

一九九七年十月、家族でスイス「よろこびの集い」に参加しました。日本にいた時は会社、学校を休んで海外の「よろこびの集い」に参加することなど思ってもみませんでした。それだけに、学生時代と新婚旅行で登山に行ったスイスに、今度はキリスト集会の皆さんと、また三人の子供をつれて家族で訪れることができたのはほんとうに感慨深く、感動しました。また、初めてお会いするドイツ、スイスの主にある方々ともお会いでき、言葉の不自由さはあるものの、主によって一つにされていることを強く感じました。また、ドイツ、スイスの信者の方々が私たち日本のキリスト集会のためにずっと祈っておられることを知り、心が洗われる思いがしました。

自分を振り返ってみると、知らず知らずのうちに家族を、仕事を自分の力で引っ張っており、主に委ねて祈ることを忘れてしまっていました。家内の苦しみはそういった私の問題が原因の一つであることをこのスイスの集いを通して思わされました。イエス様は「もういいかげんに自分の力で走るのをやめたらどう」とおしゃっているようでした。ほんとうに恵みの多いスイスでしたが、私が本当に砕かれるには、やはりもっと試練が必要でした。

試練

スイスで、自分の自我という罪に改めて気づかされ、悔い改めました。しかし、自分の悪いと思われる性質は比較的容易に十字架につけれても、良いと思っている自分の能力、性質などはかたくなにまだ握っていました。イエス様はこのことをはっきりと示してくださいました。今まで仕事では色々なストレスで胃潰瘍にはなりましたが、おおむね順調で大きな仕事もこなすことが

できき、自信家と映るような言動も出るようになっていました。まさに自分の判断、能力を信じていたために、主が私を通して働けないようにしてしまっていたのです。

そんな私を主は憐れんでくださり、大きな仕事上の試練をくださいました。最初の三日間はほとんど食事も喉を通らず、眠ることもできず、またたく間に五キロほど体重が減りました。まったくどうしていいのかわからなくなってしまい、頭に浮かぶことはただ心配ごとばかりで、何の解決策も浮かんできませんでした。こんな経験は初めてでした。そういったときに、一週間ほど前に家内から渡されて聞いた藤本さんのメッセージのテープのことを思い出しました。その中で藤本さんが同じような経験をされ、ベックさんが書かれた「絶えず祈れ」の下巻の前書きを読んで立ち直られたことが語られています。ここに少し、引用してみます。

「主なる神があなたにおあたえになった働きをつづけなさい。嘘つきには、嘘をつかせておきなさい。組織や制度がくずされるなら、そのままにしておきなさい。悪魔には悪事にふけらせておきなさい。しかし、あなたは、なにもさまたげがはいらにように気をつけて、ひたすら主なる神がおあたえになった働きをつづけなさい。

主なる神はあなたに、お金持ちになれと命じてはおられません。主なる神はあなたに、ひとに攻撃されても自分の性格を弁明せよとは求めてはおられません。主なる神はあなたに、悪魔とその配下があなたについていつわりを言いふらしても、反論せよとは言っておられません。

そのようなことに夢中になれば、あなたはそのほかのことをなにもしなくなってしまいます。あなたは主のためにではなく、自分自身のためにことを行なうようになってしまいます。あなた

はただひたすら、主があなたにおあたえになった自分の仕事をつづけなさい。あなたの目標は、空の恒星のように不動のものでなければなりません。

あなたは、攻撃され、非難され、不当なあつかいを受け、こばまれ、傷つくことがあるかもしれません。敵があなたをののしり、友があなたを見すて、ひとから軽蔑され、拒否されるようなことがあるかもしれません。しかし、あなた自身の人生の目標と、あなた自身の存在のすべてをかけて、ゆるがない決意と絶えることのない熱意をもって、神があなたにあたえられた目標を追求しつづけることを、いつも第一に考えるようにしなさい。」

主よ。私は、あなたのさばきの正しいことと、あなたが真実をもって私を悩まされたことを知っています。

（詩篇　119・75）

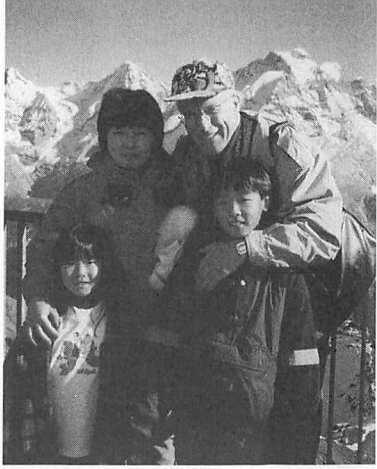
主がわたしに「おあたえになった働き」の一つがすぐに示されました。それは祈りでした。それまでの私は、祈られることはあっても祈ることのまったく少ない者でした。さっそく翌朝から家内と聖書を読み、祈りあいました。この主の恵みに思わず涙がぽろぽろこぼれてどうしようもありませんでした。思えば家内はずっとこのように二人で祈ることを望んでいたのでした。また、助け手としての家内にほんとうに感謝しました。知らず知らずのうちに自分の力に頼ってしまって、主の前にひざまずき、ともに祈ることを忘れてしまっていました。主は私のぐっと握り締めていたかたくなな拳の指を、一本一本のばしてくださっているようでした。この試練は、私を砕くために主がくださったものと確信することができました。

主は倒れる者をみなささえ、かがんでいる者をみな起こされます。（詩篇　145・14）

その後、私たち家族は、一九九八年に日本に帰り、現在は本社勤務となり、横浜に住むようになりました。

今はほんとうに難しい世の中になってきています。すべてにおいてスピードが要求され、何が人生の目標か、何を求めて生きているのかなどをゆっくり考えることはまれになっています。どこに向かって走っているのかさえわからなくなっています。このように現実はとてもきびしいものですが、イエス様によって示された自分の罪、またその罪が赦されていること、そして天国に導かれていることを思う時、確かな平安と希望が与えられます。この主の愛の中で日々生活できることはなにものにも代えがたい喜びです。まだイエス様をご存知でない方が、一日も早くイエス様に出会われることを、心からお祈りいたします。

私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。あなたに向かって、私は手を差し伸べ、私のたましいは、かわききった地のように、あなたを慕います。（詩篇　143・5、6）



ベックさんと。

弱さの内に現われてくださったイエス様

酒井美恵　一九五九年新潟県新井市に生まれる。新井市立新井小、中、新潟県立新井高、青陵短大幼児教育科卒業。聖公会紅葉幼稚園勤務を経て結婚。家族は夫正人さん、長女結実さん、長男翔太さん、次女歩実さん。

一九八四年十月、主人と私は教会で結婚式を挙げ、スイスへ新婚旅行に出かけました。大好きな人と結ばれ、初めての海外旅行。幸せを絵に描いたような場面のはずでした。ロッククライミングの経験があり、ヒマラヤやヨーロッパの山にも登ったことのある主人が、ほとんど未経験の私を連れて、ユングフラウとアイガーに挟まれた山、メンヒに登るのが、一つの目的でもありました。しかし、その時私は、職場での挫折から自己嫌悪と劣等感のかたまりで、うつ状態でもあり、素直に喜ぶことができず、いつも心に空しさを感じていました。

美しい山々に囲まれた谷あいの町グリンデルワルト。そして登山電車の窓から見上げた壮大なアイガー北壁。ユングフラウヨッホ駅からメンヒへ。結局、頂上まで後百メートルという所で私が疲れきってしまい登頂を断念しましたが、メンヒから見たアルプスの白く輝く山々と紺碧の空の美しさに心が洗われるような気がしました。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天

地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。
主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。
（詩篇　121・1～8）

聖書との出会いと挫折

私が初めて聖書に出会ったのは、ある教会でのことでした。小さいころから幼稚園の先生になりたかった私の夢がかなって就職した所が、その教会の付属幼稚園だったからです。聖書もまったく知らなかった私ですが、そこでは週に二回、子供たちに聖書のお話をする時間があり、毎日子供たちと祈る時間もありました。また日曜日の礼拝も勤務のうちだったため、毎週参加していました。そんな中でこの世界の創り主である唯一の神様の存在は、そのまま受け入れることができたのですが、イエス様のことはよくわからないままでした。

勤めて三年目のころ、お話も苦手でピアノも下手、そのうえ要領の悪い私はだんだん悩むようになりました。何より自分の教育方針というものがあいまいで、さりとて園の教育方針であるキリスト教教育ということに対してもずっと疑問を感じていたので、子供たちの前に出るとうまく話すことができず、どんなふうに叱ったらいいのか、何が正しく何が間違っていると教えたらい

いのか、まったくわからなくなっていました。

そのころ三浦綾子さんの本に出あい、次々と読むようになって、自分の中にはっきりと罪というものがあることを意識するようになりました。自分が惨めで、聖書の話をするのも祈るのも偽善でしかないように感じられました。

洗礼を受ければイエス様を心から信じることができ、それまでの思いを吹っ切ることができるのではと本末を転倒したまちがった考えから、滴礼で受洗しました。

幼稚園も四年目になって、年長児を受け持つことになり、心は軽くなるどころかますます重荷になっていきました。幼稚園へ行くのが嫌になり、ぼんやりとしていることが多くなり、いっそのこと死んでしまいたいと思うようになりました。結局、無責任にも放り出すようにして、学期の途中で幼稚園を辞めてしまいました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。…ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。

（ローマ　7・15、17）

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。

（ローマ　3・10～12）

主人との結婚に導かれるまで

新潟の田舎で小さな呉服屋を営む両親と祖父母と弟の六人家族でのんびりと育った私は、素朴な暮らしの中で、真面目に正直に働くことが大切だと、両親の姿を見て教えられたように思います。小さいころから、おとなしいけれど温和な良い子と言われてきた私は、幼稚園を無責任に辞めてしまったことがとり返しのつかない重大なことに思え、ふさぎ込む毎日でした。両親は心配だったと思いますが、そっと見守り支えてくれました。

また教会の牧師があまり思いつめないようにと、教会の中で唯一の若い男性であった主人に、私を励ましてやってほしいと頼んでくださいました。それがきっかけで、私たちは時々会うようになり、主人が私の知らない山の話や学生時代の話を面白おかしく聞かせてくれるうちに私はだんだん元気になり、主人にひかれるようになりました。私はイエス様に主人と結婚させてくださいと祈るようになり、イエス様が導いてくださって、半年後に結婚の約束をしました。

そのころから、私はまた市の臨時の保母として保育園に勤めるようになっていました。以前のことからすっかり立ち直れたわけではありませんでしたが、これから生きていくためには再挑戦する必要があると思い、もう一度がんばってみるつもりでした。しかし、そのころ突然主人に転勤の話がもちあがり、一カ月後には東京に行ってしまうことになりました。

主人と離れ一人で静かに考えてみた時、今までの楽しい日々はただ目線を他に移していたに過ぎず、私の根本的な問題の解決にはまったくなっていないことに気づきました。私はあいかわらず劣等感のかたまりで、どう生きていったらいいかわかってないし、こんな状態で結婚しても幸

せになれるとは思えませんでした。臨時の保母の仕事も手につかなくなり、また以前のようにうつ症状がでるようになりました。また途中で辞めることになり、精神科の病院にかかりました。

そんな私の状態を見て、父は彼に結婚は無理だと手紙を出しました。しかし彼は、結婚していっしょに暮らせば以前のように元気になる、と楽観的に考えてくれ、十月十三日の私の誕生日に教会で式を挙げることになりました。そして冒頭のようにスイスへ新婚旅行に出かけることになったのです。

イエス様との出会い

旅行から帰るとすぐに、横浜の戸塚にある社宅での新婚生活が始まりました。主人は仕事で毎晩帰りが遅く、昼間は何とか普通に過ごしていましたが、夜になると淋しくて虚しくて泣いてばかりいました。主人はそんな私にどうしていいかわからずに困惑していたようです。

そんなある日、同じ社宅の笠井さんと池本さんが家庭集会を開くから来ないかと誘ってくださいました。私たちはそのころ横浜の教会に引き続き集っていたので、一瞬迷いましたが、ご近所づきあいも大切だと思い、伺うことにしました。集会は暖かい雰囲気で、ベックさんが「美恵。イエス様は美恵のことを愛しているよ」と言われた一言が心に残りました。二回目に伺った時は個人的にお話をしていただき、イエス様は人間の外観や地位や能力などを見られるのではなく、ただありのままの自分の弱さ惨めさを認めてイエス様のもとに来る人々を待っていらっしゃることを聞き、ベックさんの後について祈りました。

一週間ほどたった日の夕方、私は夕食の支度をしながら「私はがんばって生きる必要はない。イエス様がいっしょにいて私の行く道を教えてくださる」という思いに満たされ、急に嬉しくなり、それまで不安だったすべてのことから嘘のように解放されました。

強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。

（申命記　31・6）

社宅での主に祝福された日々

驚いたことに、その後数ヵ月のうちに、同じ社宅の冨田さん、山下さんご夫妻が次々にキリスト集会や礼拝に参加されるようになりました。自分もキリスト者だと思っていた主人ですが、皆さんが持っておられる喜びや救いの確信が自分にはないことに気づき、この時期は苦しい思いをした、と後から聞きました。そして主人にもイエス様は臨んでくださり、導いてくださって、主を喜ぶ者へと変えてくださいました。私たち二人はそれまで行っていた教会を辞め、吉祥寺キリスト集会の礼拝に出るようになりました。

戸塚の社宅での生活は十年間でしたが、キリスト集会の皆さまとのイエス様を中心とした豊かなお付き合いと、イエス様からの祝福、そして訓練の時でした。社宅は人間関係が難しいとよく言われますが、そのスタートの時から主は六家族のキリスト集会の方々をいっしょにして、地上の天国にも似た楽しい時を備えてくださったのでした。

私たちは、次々と三人の子供をさずかりましたが、イエス様を中心としたお付き合いの中で子育てができたことは、ほんとうに恵みでした。また主人の両親や妹もそれまでの教会を出て、キリスト集会に集うようになり、イエス様のご計画のすばらしさと完全さに驚くことばかりでした。

そのころの恵みの数を数えればきりがないほどですが、一緒にいたキリスト集会の方々も、何年か経つうちに転勤や引越しなどで社宅を出られる方もあり、またそれぞれに問題が与えられ、主にあって訓練を受けるようになりました。私も主人との関係やキリスト集会でのご奉仕の事で平安がなくなり、再び悩むようになりました。

ある時、イエス様は語りかけてくださいました。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・5〜7、11）

アメリカのニュージャージーへ

やがて突然、主人にアメリカ転勤の話が持ち上がり、早速家族での渡米が決まりました。私は

田舎育ちで、海外に住むなど考えたこともなく、想像もつかないことでしたが、ベックさんが言われた「会社のせいじゃないよ。イエス様が決めたことだから心配ないよ」という一言で、イエス様が責任を取ってくださるから、と安心して赴任する事ができました。ちょうど結婚して十年目の夏の終わり、一九九四年八月三十一日に、成田空港から愛するキリスト集会の皆さんに見送られて出発しました。

私たちの任地は、ニューヨークのマンハッタンから車で三十分ほどの距離にあるニュージャージー州クレスキルという街でした。私たちは不安でいっぱいでしたが、イエス様は細かいところまで配慮して守ってくださいました。幸い、少ないながらも日本人の方がいらっしゃり、学校や買物のことなど一つ一つ親切に教えてくださいましたし、言葉は思うように話せませんでしたが、アメリカ人の先生や近所の方も優しく接してくださり、子供たちも少しずつ環境に溶けこんでいくことができました。何よりよかったのは、車で一時間で行けるコネチカット州に、岩崎さんご夫妻が住んでおられ、日曜日にはともに礼拝できるという大きな支えがあったことでした。また、二年間のうちに三回もニューヨーク「よろこびの集い」が開かれ、懐かしい日本からの信者の皆さんにお会いし、お話をする機会を与えてくださいました。

私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。

（詩篇　139・9、10）

自我からの解放と祈り

私は、そんなイエス様の愛に感謝しながらも、一方ではあいかわらず思いわずらって悩む者でした。ちょうど二回目のニューヨーク「よろこびの集い」が開かれようとしていた時、日本でオウム真理教の事件が起き、「宗教」の恐ろしさが話題になりました。私は「イエス様を信じる信仰は、いわゆる宗教とはまったく別のものである」と確信していましたし、たくさんのキリスト集会の方々とお会いできることを喜んでもいましたが、何となくまわりの目が気になってしまい、イエス様のすばらしさをお伝えしたいと思うよりも誤解されたくないという思いでいっぱいでした。また三回目のニューヨーク「よろこびの集い」の後、岩崎さんご夫妻が帰国されて淋しくなったこともあり、またいろいろなことが重なって疲れてしまい、イエス様を見ずにまわりの問題や自分自身を見て落ち込んでしまっていました。以前のうつ症状そのものでした。夏の終わりには引っ越しを控え、夏休みの間子供たちと過ごしながら家の整理もしなければならず、精神的に苦しい日々でした。

そして引っ越しも済み、夏休みが終わり、子供たちが登校していったその日の朝、たまりかねて日本のキリスト集会のある方に電話しました。「私はイエス様に救われて心から喜んだのに、私はあいかわらず自分のことばかり考えてしまう。そんな自分がいやでたまらないのにどうすることもできない」と泣きました。その方は、私が救われた時から祈ってきてくださった方で、その時も「祈っているからね」と言ってくださいました。電話を切った後一人ぼんやりと座っていた

のですが、しばらくすると突然電話が鳴りました。デトロイトのキリスト集会の女性からで「スピーカーフォンの電話で祈り会をしませんか」というお誘いでした。その方はもちろん私の状態を知っていらしたわけではなく、たまたまいつも参加していらっしゃるミネソタの方がいらっしゃらなかったために、私に電話をくださったのでした。「これはイエス様からのプレゼントに違いない」と思い、私は喜んで参加させていただくことにしました。私は祈りの中で、その時のぺちゃんこの状態をそのままに持ち出すことができ、祈り会に参加した皆さんも、それぞれに与えられている問題をありのままに祈られました。祈り終わって、私は大きな解放感に満たされました。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。
私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。
（詩篇　32・3、5）

それからは祈り会に毎週参加させていただくことになり、共に祈る皆さんのお話を通してイエス様は語りかけてくださいました。私が何を感じ主のために何をしたかが問題ではなく、主が何を求めていらっしゃり、何をなそうとしていらっしゃるかを第一にするべきだと示されました。また私の性格的な弱さもイエス様が与えてくださった憐れみのゆえであり、イエス様にいつもつながっているためであることもはっきりと受け取ることができました。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうち

に完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（Ⅱコリント　12・9）

やがて、私のうつ状態というのは、自分の思うようにならない自分やまわりの環境に対する一種の反発であり、その根をたどれば「自我」であり「罪」であるということがわかってき、それと同時に、イエス様の十字架がこのどうしようもない惨めな私自身のためであったことを心から確信することができました。

そしてそれまで、主人と心から話しあったり祈りあったりできないのは、私でなくて主人のせいだ、と責めていましたが、イエス様は結婚の時から二人を一つに見ていてくださり、二人に関してご計画をもって導いてくださっているのだから、信頼してイエス様にしたがっていけば、必ず私たち夫婦を作り変えてくださると確信しました。そしてこれまで主人に対していかに感謝が足りなかったか、素直でなかったかを示され、主人に謝りました。すると主人や子供たちに対する思いが、それまでとは違ってきて、心から家族を喜べるようになりました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。（エペソ　5・22～24）

またキリスト集会の皆さんとの祈りやお話を通して、北米各地にいらっしゃる方々と祈りの課題を共にして互いに祈りあうようになり、イエス様が確実に祈りに答えてくださるお方であり、またそのすばらしさがどれほどであるかをあらためて見せていただくことができました。そしてまたイエス様は、さらに、タン・ジュンボさんと京子さんのご夫妻を近くに置いてくださり、毎週ごいっしょに電話礼拝に参加するようにしてくださいました。イエス様を信じ、イエス様に従う者は国や言葉の違いを越えて一つであり、共に祈り、イエス様を喜べることはほんとうに感謝です。

十三年ぶりに訪れたスイスの地

アメリカでの生活の四年目がスタートした一九九七年十月の終わりに、私たち家族はスイスのベアーテンベルグで開かれた「よろこびの集い」に参加することができました。あの思い出の新婚旅行の地であるスイスをもう一度訪れることができるとは、思ってもみませんでした。しかもその間、主を土台とする夫婦に変えられ、子供たちを連れて、愛するキリスト集会の皆さん方といっしょに一週間も滞在することができたのです。

十三年前のことを思い出すと、今このように喜びに満たされているのが嘘のようです。しかし思えば、私はあの時不安で希望のない状態でしたけれども、その時からイエス様はすでに愛の眼差しで私たちを見守っていてくださり、御手の中に入れてくださっていたのだと、再度訪れたスイスの地ではっきりと確信することができました。

またあのころは自分の子供を育てることなど不可能に思えましたが、イエス様はこうして三人の子供たちを託してくださったのです。以前は些細なことで思い煩っていた母親でした。しかし今は、イエス様がそれぞれの子供にふさわしく試練や困難を送ってくださり、それを通してイエス様が育ててくださり、どんなに愛しておられるかを教えてくださると確信できるようになりました。

私は相変わらず頼りなく弱い者ですが、イエス様の前にその弱さを差し出す時、土の器である私に喜びと平安と希望を注いでくださり、イエス様のご栄光を明らかにしてくださいます。イエス様の御名を賛美し、心から主イエス様に感謝いたします。

彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。
（Ⅰペテロ　2・6）

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。
（Ⅰテモテ　2・4、5）

ご両親、正人さんの妹さんとともに。



主の愛を分かちあう喜び

福元謙六郎

一九四四年長崎県壱岐に生まれる。壱岐高校、上智大文学部新聞学科卒。フロリダ州フロリダ・プレスビテリアン・カレッジを経て州立南フロリダ大中退。アメリカン・マーカンタイル・カンパニーなど勤務の後、現在カリフォルニア州セリトス市に在住。個人雑貨輸出業務を営業。妻登茂子さん、長女亜紗さん、長男修さん。



奥様の登茂子さんと。

ご家族そろって愛犬のクッキーと。



私は一九四四年七月十三日、長崎県の離島、壱岐で生まれました。父は鹿児島県の貧農の次男で、親類を頼ってメキシコに渡り、アメリカに密入国をしてお金を稼ぎ、父の学費として提供してくれた叔父のおかげで九州大学の医学部に進むことになりました。その叔父も父の勉学の途中で結核を病み、日本に帰国してしまいました。学費に困った父は下宿の裏にあった禅寺の小僧として住み込み、朝五時の起床と厳しい戒律の中で苦学を続けて医者になりました。私の母は父の境遇とはうって変わった大地主で、作り酒屋で、東大出の弁護士であった祖父の長女として生まれ、何の苦労も知らない勝手気ままな生立ちだったそうです。母は関東大震災の年に当時日本に二つしか無かったという女子大に学び、祖父が母を嫁に出すことを嫌ったため婚期を逸し、一人の息子を残した妻を結核に取られた父のもとに後妻として嫁ぎました。母は父に嫁いで、五男一女をもうけましたが、その末子として私はこの世に生を受けたわけです。私が物心ついたころは朝鮮戦争の最中で、九州の基地から戦場に飛ぶアメリカの軍用機の編隊を毎日のように頭上に見ながら近くの野山を駆け回っていました。私が小学校に入るころ、父は勤めていた病院を辞めて開業しました。当時私たちが住んでいた壱岐の島は福岡から船に乗って六時間かかる玄界灘の孤島であり、田舎でした。海が荒れると船は欠航し、新聞も来なかったのです。母はこんな田舎の町にあって、あたかも掃き溜めに舞い下りた鶴のような存在であったと思われます。一時は子供が四人小学校に通うことがありました。かけもちで小学校と中学校のＰＴＡの役員を努めていました。家庭裁判所の調停委員もやっていました。選挙のたびに立ち会い人としても勤めていました。小学校、中学校ともにたまたま自宅に近かったため、私は弁当を持つことを嫌い、許される

限り家に帰って暖かい昼食を食べていましたが、家の茶の間はいつも知らない人たちが当たり前のような顔をしてご飯を食べていました。患者さん本人だったり、入院患者の家族であったりしました。農家や漁師のおかみさんが嫁のことをこぼしてみたり、あるいはまたそのお嫁さんたちが姑や小姑のことをこぼしにきていたりしていました。母が取り仕切る茶の間はあたかも、田舎の町のよろず相談所の様相を呈していました。母はまた多読であり、趣味も多く、俳句、料理、裁縫、編み物、家庭菜園と尽きるところを知りませんでした。ものに貪しかった小学校のころ、母が徹夜をして私のズボンを仕上げて元旦の朝に間に合わせてくれたことを覚えています。母は読書や音楽の、そして観劇の楽しさを教えてくれました。ヴァレンチノのことも、ゾラが書いたドレフュス事件のことも母が教えてくれました。

そのような母にひきかえ、父は全く何の趣味もない、ただ働くだけの人でした。夜遅くまで仕事に追われ、お金を稼いで息子たちを医者にすることしか考えられないでいるようでした。テレビの無かったその当時、ラジオで野球の放送を聞いていた私の前に急に現れた父は、「うるさい」、の一言でスイッチを切ってしまうような人で、酒も飲まずタバコも吸わず、スポーツにも音楽にも読書にも興味を示さず、全く退屈を絵にかいたような人でした。趣味と言えるのかどうか、暇があれば、医学雑誌を積み上げて枕にしては昼寝をするような人でした。

これでは母との関係も全くのミス・マッチという他なく、私を含む子供たちの情操教育は母だけに頼るしかなかったものと思えます。母は長い間「婦人の友」という雑誌の読者であり、かなりの数の投稿もしていましたが、この雑誌の所有者であり編集者であった羽仁もと子女史には多

大な敬意を払っていても、女史がお書きになるキリスト教のことに関しては、一定の距離を保って、抹香くさいと嫌っていました。母は田舎の家々に伝わる迷信を極度に嫌い、家にいた看護婦さんやお手伝いさんが口にする迷信を、わざわざその目の前でその通りのことをやってみせて、「あした私が死ぬかどうか、見ていてごらん」と言うような性格でした。

家には両親の寝室の箪笥の上に仏壇と呼ぶにはあまりにも粗末な、それでも一応仏壇のようなものがあり、父と母の先祖の位牌がありましたが、誰も線香を立てる訳でもなく、花をさしたり、水を備えたりしているのを見た記憶がありません。「そう言えば、昨日はおばあちゃんの命日だったわねえ」などと言いながら、一日遅れで線香を立ててみたりするようなことがありましたが、これはむしろ例外でした。私の家には宗教的な雰囲気は一切ありませんでした。神も仏も抜きで生活していました。それで、もちろん私を含めて誰も、何の不自由も全く感じていなかったのです。

そのような環境の中で育った私ですが、上の兄三人が医者になり、歯医者になるにつれて安心し、自らの生活に疲れを感じたのか、あるいはまた、私の学力の限度を十分に知っていたのか、父は私には「おまえも医者にならなければ」、とはもう決して言いませんでした。高校時代を終えた私は耳学問として聞き知った雑学には長けていたものの、こんな人になりたいとか、こんな仕事をしたいとかという意欲も何も無く、外国の映画や自動車の雑誌を読みながら、だらしない毎日の生活を送っていました。私は人の一生のことに関して「晩生」であり、人よりも何年も遅れて物事を知り、考えていたのだろうと思います。最初の年の大学受験に見事に失敗した私は浪人生活に入りました。幸いその次の年には大学への入学を果たし、浪人中に一生懸命になった英

語がだんだんと面白くなってきて、今度は大学の授業をほったらかして、四谷の大学のすぐそばにあった英会話の夜学に通うようになりました。私が入った上智大学はご承知のようにカソリックのイエズス会が経営する大学であり、授業には宗教学、倫理学とカソリックの神父さんの授業があったのですが、当時私が属した文学部、新聞学科というところは、大学の権威、教務課に対して反抗し、既存の設立された規則に反抗するのを生きがいとしたようなところであり、毎日の授業も教師である神父さんとの口論で終わってしまうような状態でした。ベトナム戦争たけなわの時期でもあり、反戦集会だ、デモだと下級生をアジる上級生の口調も激しいものがありました。そのような中で、あいも変わらずだらしない毎日を過ごし、何に興味を持つわけでもなく、毎晩の英会話学校だけが生きがいであり、楽しみでした。こうして英会話の勉強だけは別として、何一つ達成することもなく、自らの人生の目標を持った訳でもなく、私はまるでトコロテンが押し出されるように大学を卒業し、大してその気もない会社の就職試験をそれでも何社か受けて一社も受からず、ずるずるとそのまま同じ大学の外国語学部、英語科に学士入学をしてしまいました。その何ともだらしのない私の学生ぶりをみて心配してくれた新聞学科の教授が、ある時私を呼びつけて、「自分の元に自分の意のままになるアメリカ留学の給費制度があるが、本当に英語がやりたいのなら、いっそアメリカに行ったらどうか」、と親切にも私を推薦してくれたのです。私は学士入学三カ月の英語科をやめ、一九六八年の八月アメリカにたどり着きました。

私がたどり着いたフロリダ州のカレッジは学生が七百人くらいしかいない大変環境に恵まれたすばらしい学校でした。にもかかわらず、ここでも私はあいかわらずのだらしのない生活を繰り

返し、一年後に移籍した州立大学のビジネス・スクールでもただ旅行だけに精をだしてアメリカ中を歩き回り、結局何らの学問をも修めることもなく、タンパという街で就職してしまったのです。いわゆる留学くずれという奴で、全くだらしのない留学で終わってしまいました。

就職が決まってから、五年目にして初めて日本に里帰りした私に、兄の一人が現在私の妻である女性を紹介してくれました。私たちは私が日本にいた二週間のうちに何度か会い、信じられないほどあっさりと結婚することにしました。翌年の一九七三年五月、私は結婚式のためにまた日本へ帰りましたが、結婚式のあと、アメリカ政府によるビザの発給が遅れた妻を残して一人でアメリカへ戻った私は、妻のビザがやっと発行され妻がアメリカへ来る直前に同僚と口喧嘩をし、上司にまで喰ってかかったため、その場で首になり、アメリカに着いた妻をサンフランシスコまで迎えに出た時は失業中でした。そんなそぶりも見せませんでしたが、妻はどんなにか、心細かったことだろうと思います。日系の商社にやっと新しい仕事を見つけるまで、妻が日本から持って来たお金を頼りに二週間ほどフロリダで過ごし、サンフランシスコの小さなアパートで生活を始めました。

仕事はお決まりの猛烈さで出張も多く、翌年誕生した長女もさらにその二年後に誕生した長男も私の顔を覚えることがないほどの生活をしていました。仕事が変わることもあり、何度も引っ越しをしました。サンフランシスコからロサンゼルスへ引っ越し、すぐまたシアトルへ引っ越しました。シアトルにも四年半いて、またロサンゼルスに戻りました。それでも妻は小言らしいことも言いませんでした。中学校に入る年になった長男が日本の寮の設備された学校に入り、翌年

長女も同じ学校の高校生として日本へ行くことになり、私たち夫婦はまた二人だけの生活をするようになりました。子供たちが一緒に生活していたころも夫婦喧嘩はよくやりました。主に子供のことがその原因であったと記憶しています。そして私は自分の両親や兄夫婦たちの夫婦喧嘩と比べてみて大した違いがあるものとも思えず、まず普通の日本人の夫婦と信じて疑うことさえなかったのです。

私はアメリカでの生活を理想と考えていました。生活空間の広さもさることながら、日本で俗に言われる、姑や小姑、親戚付き合いの煩わしさが全くないアメリカの生活の自由さを心から喜び歓迎していました。確立された個人主義と自由主義に基づくアメリカ人の生活態度を手本とし、自分に直接関係のない他人のことに口をはさむようなことは一切してはならないと考え、妻にもこのことを強く戒めていました。もしそのようなことをすれば、直ちに"That's none of your business!"とピシャリとやられるであろうと、強く信じて自らをも戒めていたのです。

このころ妻は、近所の日本人の教会に顔を出すようになっていました。もちろんそのことを奨励する気持ちなど微塵もありませんでしたが、自由主義を理想とする私は、洋の東西を問わず憲法によって保証されている信仰の自由をも強く信じており、妻も一人の人間であり、その自由は十分に保証されてしかるべきだと考えていました。ただ信仰の自由と同時に無信仰の自由も尊重されるべきだと考えて、妻には決して私をその信仰とやらに引っ張り込まないで欲しいと言うことを忘れませんでした。その実私は密かに「なあに、どうせあいつのことだから、そのうちまた飽きてしまうか、誰かにいじめられてべそをかいてやめてしまうに違いない」、と考えてもいたの

です。いずれにしても妻の信仰に対する私自身の態度は冷淡であり、冷やかし半分でしかなかったのです。

記憶がかなりあやふやなのですが、和辻哲郎は風土という本の中で、世界をたしか砂漠とモンスーンと草原という三つの地域に分けていて、人間は自分が生まれ育った環境に影響されるものであるなら、砂漠の民、ユダヤ人の間に起こった神の思想がモンスーンの真っ只中にある日本人の間に定着するとは私にはとても考えられず、舶来もの好み、西洋文化コンプレックスの一部の日本人だけがもの珍しさだけで神を信じるようになったのだと考えていました。あるいはまた、妻を宗教に追いやってしまうほど、自分は残酷で思いやりのない亭主であったのだろうか、と何度かは考えてみたりもしましたが、これもすぐ忘れてしまいました。

そのうち二年ほどして、妻の口からキリスト集会とかベックさんとか古田さんという名前が聞かれるようになりました。私の意に反して妻の信仰は衰えを見せるどころか、ますます熱心に聖書を読む妻の姿を見ることが多くなりました。そして間もなく今度はメッセンジャーという言葉が聞かれるようにもなりました。「誰だ、それは。宅急便の会社の人か」と、妻をからかってみたりしたのですが、もとより妻には通じなかったようです。そしてそのために、これまで嫌がっていたフリーウェイを平気で運転するようにまでなっていました。私も「これはどうやら本気らしい」と、やっとその時になって考えました。

当時はキリスト集会は我が家ではなく別の場所でもたれていました。もちろん私は参加しませんでした。ただキリスト集会が終わって妻と一緒にうちに帰って来て、お泊まりになるメッセンジャー

と一緒に食事をすることになる訳です。食事の会話に「兄弟」とか、「姉妹」とか、あるいはまた「兄姉」という聞きなれない言葉を耳にしました。ご夫婦で来られるメッセンジャーもありました。「あちらのご主人はまだ救われておられない」、などという表現も聞き知りました。私はそんな時、「勝手にしてくれ」、としか考えていなかったのです。

私は本を読むことを楽しむようになっていましたが、西洋の作家のものを読むと、聖書の言葉があちらこちらに引用されていて、聖書を知らずに本を十分に理解することの困難さを感じるようになっていましたが、そんな時にそのようなことを妻にちょっとでも聞こうものなら、妻はさっと聖書を持ち出して、それはマタイの何章の何節とか、それは詩篇の何篇の何節だとか、その個所を見つけ出して見せてくれるようになっていました。私は心の中で馬鹿にしていた妻に逆に馬鹿にされたような気がしたものです。自分自身で聖書を読んでみたことも何度かありました。でも決して長続きしませんでした。あまりにも面白くないのです。退屈でした。私が持ち合わせていない努力を必要としました。そして一度でも読み通すには、あまりにも私は忍耐力に欠けていたのです。私自身の読書を続けるために、妻の信仰に一応の敬意を払うようになり、必要な個所を妻が教えてくれるだけで十分でした。自ら信仰を持とうという気はそのような時でさえなかったのです。

若いメッセンジャーが交代で来られた時期がありました。羽石、富岡、鈴木の三氏で、もとより私はその方々を兄弟とお呼びしたりは決してしていませんでした。むしろこんなにお若いのに、他にもっと面白くて楽しいことが沢山あるだろうに、どうして宗教などに凝って時間を無駄にし

ているのだろうと考えたり、「時差で疲れた人は私のところに来なさい、私が柔らかいベッドで休ませてあげる」、とか「喉の渇いた旅人は私のところに来なさい、私が冷たいビールを飲ませてあげる」などと、妻にくだらないふざけを言ってみたりしていたのです。もとより妻には通じなかったようでした。しかし何時の間にか私はそれらの若いメッセンジャーと一緒に食事をすることを楽しむようになっていることに気がつきました。そして私は何時の間にか一緒に礼拝に参加するようになっており、決して不愉快な気持ちもなく大きな声で聖歌を歌っている自分に気がつきました。

一昨年の七月に卒業以来三十五年目の高校の同窓会が京都で持たれることになり、東京での仕事を早めに終えた私は新幹線で京都に向かいました。京都に近くなり、集合の時刻までにはまだかなり時間があることに気がついた私はそのまま京都を乗り過ごして広島まで行ってしまいました。ちょうど広島の病院に入院しておられた清水総子さんのお見舞いに行こうと考えたのです。清水さんが入院しておられた病院は新幹線の広島駅から在来線で四つほど東に戻ったところで、京都に予定の時間に戻るために、私は清水さんの病室にものの二十分しかいることができませんでした。清水さんは首を固定するために頭につけた金属製のケーブルに大きな重りを付けて頭が動かないようにしておられました。ただ目だけが左右に動いてご自分の周りを見るようにしておられましたが、それでも動かないお顔には微笑みが絶えることなく、キョロキョロと右に左に動くその目は輝きに満ちていました。「福元さん、お祈りしてください」と言われて、清水さんの手を握ったまま慣れないお祈りをしました。そして涙が出て止まりませんでした。翌日京都での

同窓会を午後遅く終えた私は、九州、福岡の日赤病院に入院していた妻の母を見舞うためにまた新幹線に乗りました。母は永い間腎臓を病み、三年近く血液の人工透析を続けており、何度かの入退院を繰り返していましたが、ちょうどこの時にも入院していたのです。兄の家で一泊し、翌朝早めに母の病室を訪ねました。母はベッドの上に正座して静かに聖書を読んでいました。そして私を見上げた母の目元には優しい涼しげな微笑みがありました。自分が神の元に召される時の近いことを十分に承知し、すべてを主の御手に委ねた落ち着きのある美しい微笑みでした。その日の夕刻、成田発の飛行機に乗ることになっていた私は母のそばにも長くいることはできず、また新幹線に飛び乗りました。

その新幹線の車中で私は今まで考えてみたこともなかったことを思い知らされたのです。私はお見舞いに行ったと思っていたのです。しかし「見舞われた」のは清水さんでも母でもなく、「他ならぬこの私であった」、ということを教えてもらった自分にやっと気がついたのです。「いくら晩生のお前でも、もうそろそろ気がついても良いのではないか?」、というイエス様の声が聞こえるような気がしたのです。そして人が見ている新幹線の中で何度もハンカチを使いました。涙が止まらなかったのです。人が見ていることが何にも気にならないほど嬉しかったのです。あるいはこれまで何も知らなかった愚かな自分のことがほんとうに悲しかったのかもしれません。私の救いを永い間祈り続けてきた妻と長女のことを無視してきた自分の態度を思い知らされました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

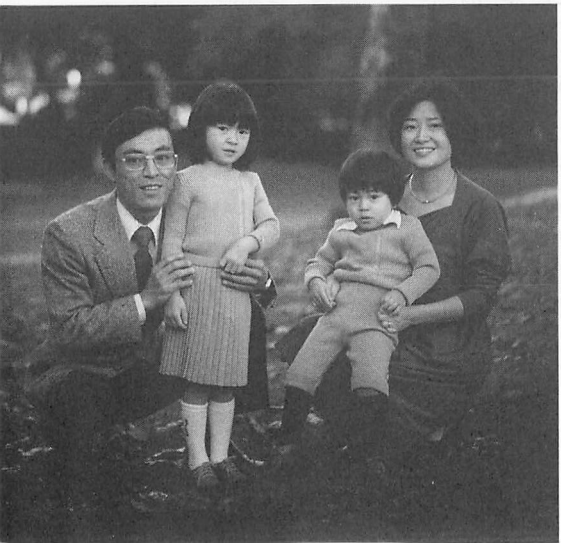
昨年のロサンゼルスでのキャンプのおり、私は妻と長女とともに洗礼を受けました。もう何も躊躇することはありませんでした。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。（ピリピ　4・4）

やっと私も、家族とともに主の愛を分かち合う喜びを知るようになりました。

そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。（ヨハネ　8・32）

1979年頃のご一家。





右、登茂子さん、中野さんと。

主のいつくしみ

福元登茂子

一九四八年福岡市に生まれる。高宮中、筑紫女学園高卒。不二工勤務。一九七二年、福元謙六郎と結婚。以後アメリカのフロリダ州、カリフォルニア州、ワシントン州などに住む。現在、カリフォルニア州セリトス市在住。夫謙六郎さん。長女亜紗さん、長男修さん。

両親と妹一人の家族の中でわがままいっぱいに育った私は、まさかアメリカで半生を暮らすことになろうとは思ったこともありませんでした。結婚してサンフランシスコに住み始めたのは、ちょうど二十五年前のことです。二人の子供たちも与えられました。長女を流産しそうになり、寝たり起きたりの生活の中、近所の方々に助けていただいたり、家具を買うお金もなく、小さなアパートの居間にトランクを置いてテーブル代りに使っていたことなど、今ではとてもなつかしい思い出です。

そのころ、姑とともに、長年の読者だった「婦人の友」を、私は生活の師として、毎月日本から送られてくる本を一気に読んでしまい、なんとか書いてあるように実行したいと思って暮らしていました。ただ一カ所だけどうしても好きになれなかったのは、聖書に関する記事でした。宗教は大嫌いでした。

何でもやる気さえあればできると思っていましたから、子供たちがたいした病気もせず元気にしているのも、私がちゃんとした食事をさせているからだと思っていました。衣類も手作りにし

ていました。主人とは子供のしつけのことでよく喧嘩をしました。少しでも主人に注意されると、こんなにやっているのにどうしてそんなに文句ばかり言うの、と反発ばかりしていました。

サンフランシスコで七年間過ごし、主人の仕事が変ったためロサンゼルスに一年、シアトルに四年住んでまたロサンゼルスに戻りました。シアトルに越してからすぐ、親しくしていた友人が肺がんで亡くなりました。ショックでしたが、死について深く考えることもなく、死んだらなにもかもおしまいなのだと思っただけでした。

そのころ、お隣の、娘が習っているピアノの先生がルーテル教会の奏楽もしていらして、毎週の礼拝に連れて行ってもらうようになっていました。私はノルウェー系のアメリカ人の多いその教会の雰囲気が好きでしたし、日曜学校の先生だったリデア・ピーターソンという方の清らかな雰囲気に、いままでにあったことのない人という印象を持ってはいましたが、子供たちが持って帰る十字架のペンダントやイエス様の塗り絵などはさっさとごみ箱に捨ててしまうような者でした。

四年半たってロサンゼルスに戻りましたが、親しい友人もいないので淋しく、知人の紹介で近くの日本人教会に行くようになりました。そのころの私は、牧師さんに主人の悪口ばかり言っていました。「もしかしたらご主人も同じようなことを思っていらっしゃるかも知れませんね」と言われたのが大ショックでした。もしかしたら私も悪かったのかも知れないと思いました。自分の罪もわからないままに洗礼を受け、私の教会生活は楽しく過ぎていました。それから一年後、膵臓がんの疑いがあるとのことで、急いで日本に帰り、一カ月間の入院生活を送りました。脾臓に腫瘍ができており、他に症例がなかったため膵臓がんと間違えられたのでした。この時私は、子

供たちのことをどんなに大切に思っていても、自分の力ではもう何もしてやれないんだと思い知らされました。この病気がきっかけで、私の、また家族の運命が大きく変ることになったのです。

そのころ小学校六年生だった息子は、自ら希望して日本の自由学園に行きました。まだ小さな、アメリカの生活しか知らない息子を手放してしまった私は、神様に祈ることしかできませんでした。こうして生かされている喜びとともに、これからの人生はおまけだと思って、神様のために生きようと思いました。

息子が入学して一年たってから、娘も同じ自由学園に高等科から入学を許されました。私は行っている教会の早天祈祷会に、聖歌隊にと頑張り続けました。でもだんだんと疲れてきました。すべて自分の力でした。どうしていいのかわからず迷っていた一九九二年の八月、パサデナのリンさんのお宅での家庭集会で、日本からいらしたベックさんご夫妻をはじめたくさんのキリスト集会の方々とお会いすることになったのです。メッセージを聞いて嬉しくて元気になりました。

だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。

（ピリピ　2・21）

どこまでも自分中心の私は、自分の居場所を見つけた嬉しさで舞い上がっていました。ほんとうに、自分の罪のためにイエス様が十字架にかかって死んでくださったんだ、とわからせていただいたのは、ロサンゼルスで初めて開かれた「よろこびの集い」の時でした。嬉しくてたまらなかった私は、主人が同じ信仰を持ってくれたらと、そのことばかりを考えるようになりました。

キリスト集会の方々に、「主人をよろしくお願いします」と頭を下げてまわっていた私に、ベックさんが「不信仰だよ」と一言おっしゃいました。私には、すぐには不信仰の意味もわかりませんでした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

聖書にはこのように約束されていますし、また、何度も何度もメッセージを聞いていながら、イエス様に信頼するということは、みことばを信じて従っていくことだ、ということもわからない者でした。

一人で祈っていたとき、子供たちが小学生だったころの親子四人が食卓をかこむ風景が思い出されました。ちょっとしたことで子供たちが叱られ、どうして食事の時いつもこんなことになるの、と主人のことを責めている私、結婚してから主人に何度も言われていながら自分の意見を通そうとして改めようとしなかった私、いつも子供たちが叱られないようにと先回りして「パパに叱られるからね」と主人と子供たちの間に立ちはだかっていた私、罪を罪とも思わぬ恐ろしい私、六年前に教会で思った「私も悪かったんだわ」なんてものじゃない、すべての罪は私にあったのだと知らされました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が

御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」（イザヤ　1・18）

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・15、16）

こんなに愚かで罪人の私にも、主は一方的に憐れみをかけていつくしんでくださる。取り返しようのない罪も雪のように白くしてくださる。イエス様が十字架で私の代りに死んでくださったおかげで新しく生まれ変われる。死んでいたのがほんとうに救われたんだ、と感謝と喜びの涙が出て止まりませんでした。

主人や子供たちにもほんとうに申しわけなく、よくこんなわがままな者と長い間付きあってきてくれたと感謝でいっぱいです。

半年後、東京に住む妹の麗子が救われました。福岡に二人で住んでいる両親も救われ、去年の十月、ともに七十九歳で熊本の「よろこびの集い」で洗礼を受けさせていただきました。キリスト集会の方々が、はるばる福音を伝えにロサンゼルスにいらっしゃる時、家に泊まってくださり、

主人ともどもお話をさせていただく時間をいっぱいいただきました。家庭集会に、日曜礼拝にとわが家を主が使ってくださっていることも恵みです。救われ、喜んでいた私も、問題にぶつかったとき、自分では思ってもみなかったほど人の言葉に影響を受けるみじめな者でした。でも主はいつもみことばで励ましてくださいました。また、守ってくださいました。

人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。（箴言　29・25）

「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ　8・32）

私は人に束縛されないことが、こんなに自由なことだとは知りませんでした。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口の教えは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。（詩篇　119・71、72）

思い起してみますと、今までに起ったすべてのことは、私にとってほんとうに必要なことでした。今、母はとても体が弱っています。看病に帰るたびに、いつも母とともにいてくださるイエス様にお会いします。

イスラエルの王、主は、あなたのただ中におられる。あなたはもう、わざわいを恐れない。（ゼパニア　3・15）

今年の夏には、今生きている母のただ一人の妹が、くも膜下出血で手足が不自由にもかかわらず、ロサンゼルスまで来てくれました。キリスト集会の方々との語らいのうちに、イエス様を救い主と信じて、帰って行きました。イエス様はすばらしいお方、心から感謝いたします。

わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。

（詩篇　40・5）

福元ご夫妻と内田ご夫妻。





イエス様との出会い

福元亜紗

一九七四年サンフランシスコに生まれる。カルメニータ・ジュニア・ハイスクール、セリトス・ハイスクール、自由学園女子部高等科・自由学園女子学部卒。キュー・ロジック・コーポレーション勤務。父謙六郎さん、母登茂子さん、弟修さん。

私は一九七四年、カリフォルニア州のサンフランシスコで生まれました。幼いころは父の仕事のためにアメリカの西海岸を転々としました。小学校二年生の時にワシントン州のシアトルへ引っ越しました。そこで隣に住むピアノの先生の家族といっしょに教会へ行くようになりました。毎週そのご家族に連れられて弟と二人で日曜学校に通うようになりました。日曜学校の先生はミス・ピーダーソンという方で、ノルウェー系のアメリカ人でした。ミス・ピーダーソンは一年に一度、手作りのクッキーやケーキをたくさん作ってお茶に呼んでくださいました。お菓子をいただく前に、ミス・ピーダーソンがしてくださった食前のお祈りがとても印象に残っています。今思えば私たち家族のために長年お祈りしてきてくださった方です。

両親は教会には興味がありませんでした。私たちが日曜学校でもらってくる十字架の置物やことばの入ったカードなどは母がすぐに捨ててしまいました。そういう母も、年に一度、クリスマス・イブに行なわれるキャンドルライト・サービスの時だけは、自分から教会へ行っていました。また、私たちが入っていた子供のコーラスで、ノアの箱船のミュージカルをした時などは、

母が衣装を縫ったり、父が土曜日の練習に行けるように日本人学校の帰りに練習場まで連れて行ってくれたりしていました。両親の教会への興味はそこで止まっていたため、母が教会へ通いだしたとき、また父がキリスト集会に通いだしたと聞いたときはほんとうにびっくりしました。

小学校六年生の時にロサンゼルスに引っ越しました。ロサンゼルスはシアトルののんびりとした雰囲気とは違って大都会でした。小学校一年生の時に通った小学校へ戻りましたが、ずいぶんいじめられました。そんなある日、母が急に「明日、教会に行くよ」と言いました。びっくりして弟と顔を見あわせたのを覚えています。母と弟の三人で、日本人教会に通うようになりました。教会で仲のいい友達ができ、楽しい日々を過ごしました。やがて母はその教会で洗礼を受けました。私たちも受けたいと言いますと、父に「何もわからないまま洗礼は受けるものではない。大人になってものごとの判断がつくまでは受けてはならない」と反対されました。

それから（イエスは）、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい。」

食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。…」（ルカ　22・19、20）

教会では嫌な事が一つだけありました。それは月に一度行なわれる聖餐式でした。当時私たちが通っていた教会では、洗礼を受けた者しかパンと杯にあずかることのできないものでした。な

ぜ聖餐がそんなに嫌だったかは自分でも理由がよくわかりません。シアトルの時聖餐を受けていたけれど、それは受けてよかったのか、また洗礼を受けた友達だけが聖餐にあずかれるのが羨ましかったのか、私にとって神様の存在がはっきりしなかったのか、よくわかりません。

私は現地校の高校二年が終了する直前に、東京にある自由学園に入学することになり、一年先に行っていた弟と同じ学校に通うことになりました。両親から離れ、寮で団体生活をすることは時に苦しいこともありました。そういうときは次のみことばが励みになりました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

私はこのみことばを大きくまちがって受けとっていました。それは、「主が脱出の道を備えてくださいます」と書いてあるにもかかわらず、一生けんめいに自分で脱出の道を探そうとしたり、今は苦しくても、脱出の道はあると自分の力に頼ったりしていたためでした。私はだんだんと疲れてきて、神様がいらっしゃるのはわかるのですが、どうしたらいいのかわからないでいました。このころ、母はキリスト集会へ通うようになり、頭がおかしくなったのではないかと思うほどニコニコしていました。私が何か相談をしても、返ってくる返事といえば、「祈れば」の一言でした。頭にきましたが、どうしようもないことでした。そのうちに父がキリスト集会に出るようになっ

たということを聞きました。私にはとても信じられないことでした。

小さい時から教会へ行っていたにもかかわらず、ほんとうにイエス様に出会ったのは最近のような気がします。自分の罪を贖うため、本来は私自身が十字架につかなければいけないのを、イエス様が身代わりになってくださったことを、頭だけではなく、心で感じ、イエス様にお詫びをすることができたのも私にはほんとうに嬉しいことでした。すべてにイエス様が備えてくださった道がありました。ロサンゼルスのキリスト集会もその一つです。家庭集会、日曜礼拝を家で行なうようになり、メッセージをしにロサンゼルスに来てくださる日本のキリスト集会の方々との豊かなおつきあいを通してイエス様と近くなれたように思います。何をしなさいと言われ、何をしたというわけでもなく、ただただイエス様を信じ、イエス様を信じる人々とイエス様の話をしただけでした。

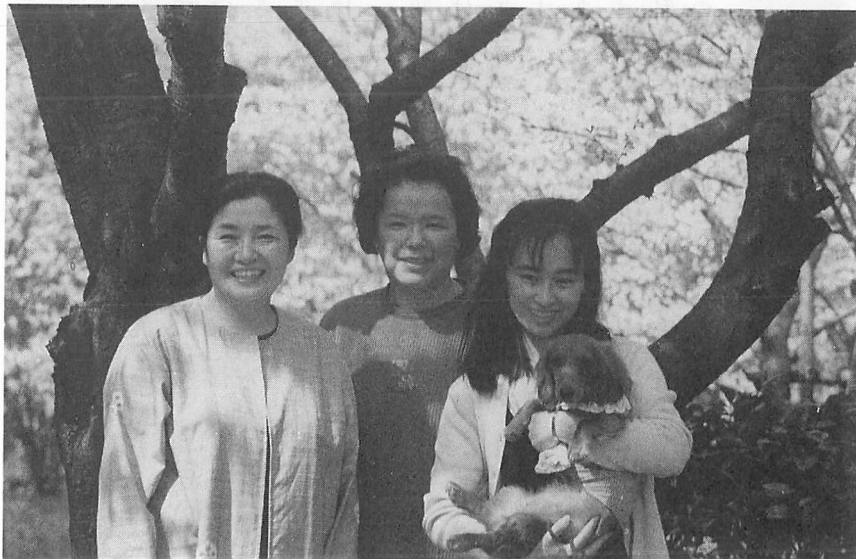
キリスト集会に通い出してから、毎週聖餐式があることを知って、どうしようかと思いました。しかし聖餐は、イエス様を救い主と信じる者であれば誰が受けてもいいものだと知り、昔の聖餐式への恐れもなくなりました。今では聖餐を受けるたび、イエス様が私のすべてを知って赦してくださること、導いてくださることを感謝し、嬉しく思います。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。…私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます。…神よ。

私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

（詩篇　139・1～3、9、10、23、24）

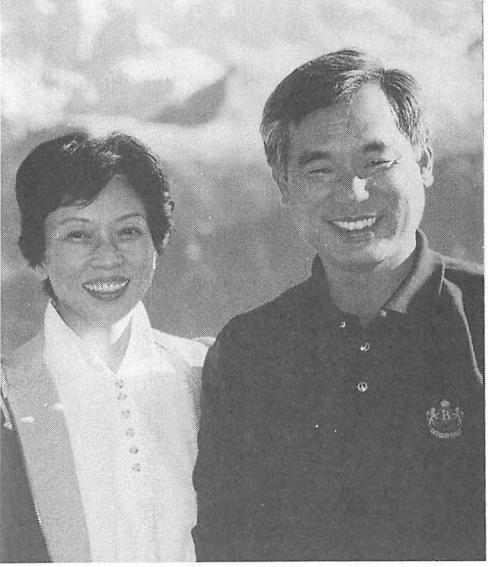
左から登茂子さん、平井さん、亜紗さん。



主は、わが岩、わが砦

緒方　健

一九五〇年、神戸市に生まれる。東須磨小、飛松中、長田高校、神戸大学経済学部卒業、住友金属工業(株)入社、米国へ社費留学、米チューレン大経営学大学院卒ＭＢＡ。国際企画部勤務などを経て、一九九五年よりロサンゼルスのウエスタン・チューブ社へ出向。一九九九年帰国。住友金属工業㈱国際企画部長。多摩市在住。家族は妻啓子さん、長男信祐さん、次男章博さん。





（写真上）奥様の啓子さんと。　お父様の納骨式に西軽井沢で。

ご自宅の家庭集会で。



私が生まれたのは朝鮮戦争が始まった時で、隣国の不幸の上に日本が戦後の復興のきっかけを掴むことになった年でした。子供のころの記憶の中にも、国全体がまだまだ貧しかったころの風景が残っています。両親は戦争の災禍から辛うじて生き延び、貧しくとも戦争の不安や抑圧のない時代になったことを喜び、明日は今日よりもよくなるとの確信を持っていたように思います。平和、自由、民主主義とヒューマニズムが、戦後を支配した思潮でした。これらの思潮は、疑問が差しはさまれる余地のない「輝くもの」でした。このような時代背景の中で、私はまさしく典型的なベビー・ブーマーの一人でした。科学の進歩に対する信頼と期待、社会の陋習を嫌い、大人の持つ既成の価値観には決して従えないとの気分、不幸の大量生産もしかねないが上手く制御すれば豊かな幸せを作り出せる能力を持つ人間と社会に対する、基本的に楽観的な信頼と期待、しかし常に激しい競争。

私は、向上心の強い真面目な性格と言われてきました。高校時代から社会科学に興味を持つようになりました。岩波の社会科学系の新書と文庫を愛読しました。よくわからないことも多かったのですが、人間の歴史が作り出してきた多くの不幸、社会の不公平、不合理を何とかしようとの問題意識が好きでした。社会を科学する力を持った人間の能力と善意を信頼し、自分もそのようになりたいと思っていました。マルクス主義に傾倒していきました。大学時代は活動家でもありました。しかし現実の、社会主義もしくは共産主義国家を標榜する国々の実態を知るにつけ、次第に幻滅していきました。彼らは間違った社会主義だと説く者、実態が歪めて伝えられている

と言う友人達の言に、失望感を強めました。理論や仮説の正しさは実証されねばなりません。大学時代は思想的に悩み、確信を失った時代でした。

しかし人間や社会の倫理の基礎を、人間の善と社会の叡知に求める気持ちは変わりませんでした。ましてやこれらを宗教に求めようとは決して思いませんでした。宗教も人間が作り出した不幸の一つの形と思っていました。宗教はこの世の現実から正常な精神を逃避させる阿片と思っていました。宗教の名によって行なわれたヨーロッパの歴史上の幾多の戦争、カトリック教会の宣教の名の下に行なわれたスペインやポルトガルによる侵略戦争。彼らによる容赦ない富と文化の略奪、夥しい殺戮と破壊、その後も続いた支配の結果、未だに貧困から脱しえない発展途上の多くの諸国。先のベトナム戦争ですらアメリカの聖職者は、聖戦であるかの如く説き、若者の背中を押すようにベトナムに送り出すような宗教界の姿に、私は非常に反感を強めました。もちろんこのような聖職者は全てではなく、良心的兵役拒否と反戦を積極的に説く牧師もいたことは喜びですが。このような聖戦を説く聖職者は、あるいは権力層に近い少数の人々であったのかもしれません。しかし宗教の名の下にこのような行為がまかり通ることは、根本的な不信と反感を強めるものでした。唯物論が正しいと信じている者にとって、宗教に代表される唯心論は非合理極まりなく、この世の不当な支配機構を合理化する思想としか思えませんでした。

人間が不完全であるがゆえに宗教を生み、科学ですら不完全、不合理にしか活かせないと思っていました。しかしその不完全さも、人間自らの行為が生み出した不幸を通じて学習し、次第に

賢明さを身につけ、完全な姿には程遠いにしても、また、その歩みは鈍くとも、前進するし、いずれは自らが不幸を生産することのない状態に到達できると信じていました。

企業社会は、仕事を通して自己実現の追求を大いに奨励しますから、私にとっては住みやすいところでした。仕事に没頭することによって、思想的な悩みや迷いを思い出すことは次第に少なくなっていきました。愛する家族も与えられましたが、仕事が成り立ってこその私生活と思っていましたから、仕事の都合と仕事にかかわる自分の思いを第一に優先しました。このことを当然と思っていました。自分は正しい人間であるし、未完ではあっても正しい努力によっていずれは完成域に近づけると信じて疑うことがありませんでした。家族の生活は、事実上すべて私の都合と思いによって律せられ、支配されていました。家族の日常の願いの全てを満たすことはできなくとも、私は家族を愛し、家族思いの父親と思っていました。そして仕事の上の私は順調でした。

私はごう慢、不遜であったと思います。そのことに気づかない愚か者でした。しかし悩むわが子を通して、大きな試練が来ました。愛し誇りとする子供の不登校を契機に、家庭が崩壊の危機に瀕しました。正しく強いと思っていた私は、子供や家族もそのように導けると思っていました。子供に対しては厳しく強い父親でした。妻や子の心の重荷、心の傷に気づかない無頓着な者でした。そのような私は、家族の危機に際してもそれを救うどころか、一層追い込み、追いつめる者でした。理性の支配を信じて疑わなかった私でしたが、自分が理解できる枠を超える事態の進展

に、しばしば感情の爆発を押さえる事ができなくなりました。短気の怒りに身を任せ、子供に手を振り上げることもしばしばでした。このことは、子供の心を深く傷つけました。家族が危機にあった時、私は単身赴任で離れて住んでいたり、家族と共に住むようになってもしばしば海外出張で家を離れることが重なりました。家族が最も辛い状態にあった時、国際電話の彼方で絞るような声で何十分も泣きながら話す妻に対し、私は何もできませんでした。私のこれまでに何が問題だったのか、なぜこんなことになったのか、私にはわからず、自分の無力を初めて知るようになりました。自分の内部でこれまで力の源泉であったものが崩れていく時でした。妻も悲痛な体験を通して、私が頼りにならないことを知りました。

妻はカトリックの幼児洗礼でした。救いを求めて教会に通っていました。しかしそこでは、救いの確信と平安は得られなかったようでした。キリスト集会へ導いてくださったのは、多摩に住むあるご婦人でした。妻はしばしば家庭集会に出かけるようになりました。私は、たとえ宗教であっても、それによって今の困難な状況の中で妻に平安が得られるなら、それもやむをえないという気持ちになっていました。しかし家庭集会に出かけると、帰りが深夜になることもしばしばでした。狂信的カルトにかかわっているのではないかと心配になりました。帰りがどうしても遅くなるので、運転手をかねて偵察に行きました。池田伝一さんの国立の家庭集会でした。多くの人々が集まっていました。温かく迎えられました。ごく普通の人々であることに安心しました。しかし私自身は、その人々が話す罪とか主に降参するとかといった話に、なるほどとは思わなかっ

たし、その人々の仲間に入るつもりも毛頭ありませんでした。自分は常に正しいという思いはすでに揺らいでいましたが、悔い改めて主に全てを明け渡すというところに最も抵抗がありました。そのような話は私にとっては居心地の悪い話でした。家庭集会の中で、妻は明るく、心の平安を取り戻していく様子に安心しましたが、私自身はあくまで外の人間で十分で、また、そうあるべきだと思っていました。この世にいろいろなタイプの人間がいて、ある種の弱い人々にはそのようなことも必要だろうと思っていました。この世の非合理を再生産するような宗教組織でない限り。妻がたどり着いたキリスト集会は、主イエスにある信仰を神学や教会主義と取り替える所ではありませんでした。私がかって忌み嫌ったこの世の支配機構としての宗教組織とは全く違っていました。しかし自分の力を頼り誇る私には、解決と平安は来ませんでした。子供が抱える問題に悩みつづけました。仕事で身を立てても、大切なことが置き去りになっているとの思いが強くなりました。海外出張に聖書を持ち、折りに触れて開くようになりました。私の持つごう慢な性格、不遜極まりない物の考え方、人を裁き、自分を最も愛する自我の恐ろしさを本心では認めるようになっていきました。ダビデやパウロが聖書の中で繰り返し告白していることは、全くその通りであり、私自身のことでした。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なうものはいない。

（詩篇　14・1）

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしている

のではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。（ローマ　7・17～21）

理屈では説明できないが、聖書で主イエスについて書かれていることは本当ではないかと思うようになりました。この世の人間、社会が持ちうる最高の倫理がすでに完全な形で用意され、聖書の中で説かれているのではないかと。人間が手に入れた科学知識などたかが知れている。明日のことすら全く予見できないし、この世に見るさまざまな不幸は、人間の歴史の中で姿、形を変え繰り返し現われているではないか。人間自らの努力は、どれほど人間自身を変えることができただろうか。ダビデの時代と今と、人間自身の本質に何ら違いはないではないか。この浅はかな人間の理性が理解できるのは、全くちっぽけな範囲でしかない。人間の知恵は往々自分の力を見損ない、自分を大きく考えすぎる。神の導きは最も優れた人間の知恵よりはるかに勝り、その働

きたまう時を失することがない、というのは実は本当ではないのか、と。

あなたがたがわたし（イエス様）にとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

（ヨハネ　15・7）

この言葉が約束している主の救いの前提条件、「あなたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら」を満たすよう試みてみようという思いが急速に強くなりました。私はこれまでの生き方に完全に行き詰まり、助けてもらいたかったのです。藁にすがるような思いでした。作者不詳の有名な詩である「足跡」は、主がいつも生きて働き、試みにあるときに背負って歩いてくださる主であることを証ししたものです。作者は誰であってもよいのです。キリスト集会に集う実に多くの方々も、この詩の作者と同じく、この世のさまざまな悩み、試練に会って砕かれ、主に出会った人々でした。聖書はこう言っています。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・9）

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのでなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。

（エレミヤ　10・23）

神を侮り、自分を誇りとしてきた者に、思い切って最初の「見えないものへの跳躍」をすることは抵抗を伴うものでした。自我の強さによるものでした。この自我という肉の鎧は私の場合特に強固で、導き手となってくださった多くの方々は、私が悔い改め、主に自分を明け渡すまでには、三十年くらいはかかると思っておられたそうです。妻は私の救いを心から望んでいましたが、同じように長い間かかることを覚悟し、主の時を静まって待とうと努めていました。しかし私の中ではすでにことは動きだし、分水嶺を越えていたようでした。ニューヨーク出張時に度々お宅に呼んでくださった岩崎ご夫妻が、一時帰国の機会に西軽井沢「よろこびの集い」に参加されると聞き、お会いしたい気持ちもあって私も出かけました。日曜礼拝の日の早朝に、ベックさんとお話する時間がありました。随分長い時間お話していただいたように思いますが、内容はよく覚えていません。私の中では、今が本当にその時かどうかだけを迷っていました。ベックさんが最後に祈ってくださった時、「主に従うものと変えてください」と主にお願いしました。自然にその言葉が出てきました。見えないものへの跳躍の時でした。

私が洗礼を受けると聞いた時、妻は大粒の涙を流し、涙は止まりませんでした。共に救われ、共に洗礼を受けたいと長く望んでいたからです。何の用意もなく、また、妻は子供たちもいっしょにいる時を願っていましたが、そのような思いとは関係なくその時は慌ただしくやって来ました。一九九三年七月二十五日、妻と二人で洗礼を受けました。一人の救いに、天上の天使は躍り上がって喜ぶそうですが、キリスト集会の方々がそのように喜んでくださいました。初めてお会いした市川キリスト集会の方々も、我がことのように喜んでくださいました。この世の誰が、赤の他人

の救いをこのように喜んでくれるでしょうか。

洗礼式の後、ベックさんご夫妻が贈ってくださったみことばは、次のものでした。

主のほかに誰が神であろうか。私たちの神を除いて、だれが岩であろうか。

（Ⅱサムエル　22・32）

詩篇の作者はまことの神を体験しました。それゆえ彼は主を礼拝せざるを得なかったのです。主なる神は全能者であり、危険と試練のまっただ中で守ってくださいます。主なる神は岩であり、主に信頼する者はしっかりとした土台を持つ者です。この比類のない主をより良く知ることができるように祈っています。（心よりの愛をもって　あなたのゴットホルドとミンヘン・ベック）

私は、主の前に多くの罪を犯しました。神を侮り、自らを神の如く誇る者でした。主は、このような者をも赦してくださいました。私に必要だったのは、自らの罪を認め、心から悔い改めることでした。試練を通して主に出会ったことは幸いでした。まことの喜びと平安を見出すことができるようになったからです。主イエス様と繋がっている者は、喜ぶことができます。主への信頼によって、この世の苦しみ、悩み、悲しみを超えて私たちは支えられ、平安の中を歩むことができます。イエス様は、「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」つまり「悩むことを通して本当の幸せを見出すようになる。」と言われました。このことは、まことに真実でした。

救いへと導かれた後でも、心の重荷として残っていたことがありました。子供が背負った苦しみでした。私の救いのために、我が子が苦しみに会い、これが私の心の負いめとなりました。我が子が払った犠牲を私はどう考えたらいいのか、その後も悩んでいました。ベックさんは私の悩みを聞き、「主のなさることに無駄なことは一つもないよ」と言われました。この言葉に涙が出ました。家族の救いを確信できました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

私の米国勤務のため、東京に離れて住んでいた次男が、友人の運転する車の助手席に乗っていて交通事故に会い、右大腿完全骨折という大怪我をしました。命を落としていても不思議ではない大きな事故でした。日本からの電話連絡を受けた時、私たちは不思議と平静でした。主がこの子を生かしておいてくださった。主はこのことを通して何をなさろうとしておられるのか、主が働かれることを私たち親が肉の思いで邪魔することがないようにと祈りました。わがままと親への反発で背を向けていた子供が、私たちの方を向くようになりました。

私の救いは、一気にハレルヤとはいきませんでした。逡巡と抵抗の末、辛うじて自我が打ち負

けた、といったところでした。自我の抵抗との戦いは容易なものではありませんでした。救いを確信した後においても、これは不断の戦いとして止むことがありません。しかし信仰の歩みの鈍いこのような者をも、主はいつも支えてくださいます。私にとって「救いのすばらしさと喜び」は、爆発的に高まり後は次第に静まるという性格のものではなく、信仰の成長と共に次第に高まるもののようです。この世に肉の性格を持って生きている限り、救われる前の旧い人間の性格は実にしばしば頭をもたげます。この肉の性格は、救われた後の人間の祈りの中にさえ、自分を飾ろうとする色彩を塗り込む力を持っています。信仰生活は、このこととの不断の戦いです。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

（ローマ　12・2）

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かっては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリ

スト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。
（エペソ　2・1～6）

米国勤務も、主の恵みを身近に覚える経験となりました。どのようなことであれ、主から来ているのだと信じることができ、自ずと静まって受け止めるようになったからです。人を見て迷ってはならないことも教えられました。私たちはどこにいても主がそばについていてくださることを覚えますし、パウロが異邦人の宣教に命を賭けたように、ベックさんを始め多くの日本の方々が主のみことばを取り継ぐため、この地をしばしば訪れてくださり、主にある方々との暖かい語らいの中に保っていてくださるからです。私たちは人を見て悩みますし、かって主の前に罪を犯したように、主を離れて自分を頼り誇ろうとする時、再び罪の深淵を覗きかねない恐るべき強い肉の性格を持っていますから、同じ主にある方々と語り合う時間は大切であり、これらを備えてくださる主に恵みを感謝しています。

私たちの国籍は天にあります。
（ピリピ　3・20）

私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。
（Ⅱコリント　10・3）

この世の喜びには限りがあり、一方の側の人々の喜びや利益は、他方の側の人々の悲しみや損

失を対価とするゼロ・サム的なものだと思います。しかし、主にある喜びに限りはなく、一方の幸福は他方の不幸を伴うものでは決してありません。一人の救いは多くの人たちに主の恵みを覚えさせるすばらしい性格を持っています。無限大サムと言えると思います。ですから、私たちが与えられた喜びを多くの人々にも知っていただきたい、また、主との出会いを妨げることのないよう、主にある者として、この世での生きざまが主を証しできるものとなるよう、私の歩みを支え導き強めてくださいとイエス様に祈っています。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。

「彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・10、11）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）



中央が啓子さん。会社の奥様がたと。

あなたこそ私の神

緒方啓子

一九四八年愛媛県に生まれる。聖マリア幼稚園、宮西小、北中、新居浜西高、大阪府立公衆衛生学院看護部卒業。神戸大学教育学部修了。西宮市立高木小学校、堺市立錦西小学校、和歌山市立高松小学校勤務の後結婚。一九九五年ロサンゼルス転勤。一九九九年帰国。多摩市在住。家族は夫健さん、長男信祐さん、次男章博さん。

主人と私が二人そろって御代田の福音センターの礼拝堂で洗礼を受けさせていただいて、六年以上の年月がたちました。私は幼いころ、滴礼の洗礼を受けていましたが、主人とともに浸礼で受けられたときはほんとうに信じられない思いでした。主人は、「お前は弱いから神さまが必要だろうが、僕は神を信じられないし、要らない」と以前から言っていました。やさしくて体力も気力もあり、行動的で真面目な主人に、あまり丈夫でなく引っ込み思案の私は安心して頼り切っていました。結婚して十数年の間に、転勤による引越しを何度かしましたが、夫婦喧嘩もなく、子供たちも幼稚園や学校、お稽古に通う、ごく普通の穏やかな生活でした。

やがて長男が私立中学に入学し、そのまま普通の生活が続くものと思っていましたら、学校にも慣れたころ、急性虫垂炎になり入院しました。医師の方針で手術をせずにすみましたが、授業を一ヵ月ほど休みました。その後も時々腹痛のため休むことがありました。そのうちなんとなく様子が変だと感じるようになりました。ある日学校から、欠席についての問い合わせの電話があ

りました。登校したはずでしたので大変驚きました。これが家族の大きな問題が現われだした初めでした。

長男は、注意をすると謝り、きちんと学校に行くと言うのですが、その実無断欠席を時々するようになりました。理由を聞いてもはっきりしませんし、理由もなく欠席するなどということは、私にも主人にも理解しにくいことでした。やがて長男は登校する振りをやめました。世間でも登校拒否という言葉が知られ始めたころでした。当時主人は近県に単身赴任しており、毎週金曜日の夜帰宅し、日曜日の夕方赴任先に戻るという生活をしていました。私は何年ぶりかで小学校に勤めていました。

長男は、主人が家にいる時には変わった様子は見せず、なるべく近寄らないようにしていましたので、主人がこの事実を重大な問題だと認めるまでには時間がかかりました。これまでは何かあっても、主人に相談すればこともなく解決しました。主人と相談したいのですが、長男の状態の認識さえ一致しません。主人と相談もできないことが私を混乱させました。家庭内の雰囲気は険悪になってきました。長男の気持ちがわかりませんでしたし、対応も対策もわかりません。私は原因をあれこれ考え、大変不安でした。そして母親の私にできることを何かしなければと意を決し、仕事を止め、暗中模索し始めました。

まず、登校拒否児を持つ親の会に参加しました。ボランティアでこの会を主催しておられる方は献身的で立派な方でしたが、私は電車を乗りついでよくわからない所へ行くのも、親の会に参加することも苦痛でした。この会で同じ問題を持つ方々にお会いし、兄弟そろって登校拒否をす

るケースもあると知り、次男だけはそうならないように気をつけなくては、と強く思いました。しかしここでは解決策は見つかりませんでした。

また、心理学教室にカウンセリングを受けにいきました。これは問題を解きほぐすというよりも、私自身を暴かれるように感じてしまい、苦しくなってやめました。その後よい先生がおられるとお聞きし、精神科を受診し、ここでもカウンセリングを受けました。

そのころ、主人は単身赴任を終え、自宅に戻りましたが、とても短気になっていました。以前から子供に対して少しきびしい叱りかたをすると思うことはありましたが、この問題が起こってからは、その話になるとすぐに興奮してしまって、どなったり、時には子供に容赦なく手を出します。まるで人が変わったようでした。子供と主人の間はさらに険悪になり、もはや主人に相談できる状態ではありませんでしたが、一筋の希望をもって相談をもちかけてはいさかいとなり、絶望と焦燥の日々を重ねました。長男がこのまま登校拒否を続ければ続けるほど学校に戻りにくくなります。今どき、学歴もなくてどのようにして生きていけるでしょうか。子供の将来は真っ暗でした。そして私は、子供を登校拒否児にしてしまってなすすべもない母親であることを恥じ、情けなくて身の置きどころのない気持ちでした。主人も同じでしたでしょうに、頼るべき人にたよれない不安で一杯の私は、主人の苦しみと苛立ちを理解するよりも、それを解決する糸口さえ見つけられない主人への失望感で満ちていました。主人も私も、現状を受け入れられず、自分自身の苦しみに振りまわされて、いっしょに問題に立ち向かうための共通の土台に立つことができませんでした。

親でさえこのようなありさまでしたから、子供の心はどんなに苦しかったことでしょう。しかし愚かな私は、一体何をどう考えているのかが分からなければ手の打ちようがないのだからという気持ちで、長男にいろいろと問い詰め、聞き役に徹しようと思いながらつい意見してしまうということを繰り返してしまいました。全く自信はありませんでしたが、子供に対してはひるむことなく母親をしていました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

結果は、通い合わない心と行き違う感情の軋轢に、暗澹とするばかりでした。これではいけないと原因と解決策を探りましたが、長男のためによいと思ってするすべてのことが裏目に出ました。しかしこれは当然のことでした。子供のため家族のためと思っていましたが、ほんとうは私自身に、耐えがたいこの苦しみから逃れたい、という自分中心の思いが無意識の内に深くありました。そのため、長男のことが理解できず、次男を守らなければ、と強く意識しながら、実際には母親として暖かい心で受け入れることができず、かえって傷つけていました。よそ様は平和なのに、なぜわが家にだけこのような問題が起こるのかと、辛くてたまりませんでした。幸せそうに笑っている人がいると不思議で、まるで異星人のように見えました。そのような自分を隠し、外部からは普通の生活に見えるように気を張り、精力を使い果たしていました。

「あなたの傷はいやしにくく、あなたの打ち傷は痛んでいる。あなたの訴えを弁護する者

もなく、はれものに薬をつけて、あなたをいやす者もいない。…なぜ、あなたは自分の傷のために叫ぶのか。あなたの痛みは直らないのか。あなたの咎が大きく、あなたの罪が重いため、わたしはこれらの事を、あなたにしたのだ。」（エレミヤ　30・12、13、15）

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

次男はこのころのことを、「みんな、いらいらぴりぴりしていて、誰も僕に優しくしてくれなかった」と言います。しかし次男がいてくれるおかげで、曲がりなりにも家庭を守っていかなければならないと強く思い、また郷里の優しい父母を悲しませたくはなく、なんとか家庭崩壊は免れているような状態でした。

父母は、私に原因を問い詰めたり、育て方が悪いなどとは言わず、孫と私たち夫婦をひたすら案じてくれました。私は、長男にとって何がよいことか悪いことかさえわからなくなってしまい、私なんか結婚や出産をする資格もなかったし、生きる何の値打ちもない人間だと思い、消えてしまいたいばかりでした。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさい

ません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（Ⅰコリント　10・13）

このような家族にも、神様は救いへの道を用意してくださっていました。家族の安らぎになればと犬を飼いはじめ、近くの公園に夜散歩に行くようになりました。そこで最近ご主人を亡くされたばかりの森山さんにお会いしました。それまで他の人には話せませんでしたのに、なぜか彼女にはすなおに話せました。彼女はそのころ、最愛のご主人を失った寂しさと心細さに、毎晩涙を流されていたと、随分後になって伺いました。そのような状況にもかかわらず、私の話を受けとめてくださったことに感謝し、また自分のことしかない私を恥ずかしく申し訳なく思いました。またここで、キリスト集会の高元さんと村上さんにもお会いしました。通っている教会がありましたので少し抵抗がありましたが、しばらくしてお誘いを受け、キリスト集会に行ってみました。時も場所も覚えてはいないのですが、ベックさんとお話をしました。ベックさんは、家族を目茶苦茶にしてしまって生きている値打ちのない私をそのまま受け入れてくださり、「主イエス様が啓子のことを愛しているよ」と言われました。私は、愛されているなどと考えられもしない時に突然そのようなことを言われたので驚き、堰を切ったように涙があふれ出してとまりませんでした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。私は心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが

来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

（マタイ　11・28〜30）

「恐れるな。わたし（主）があなたを贖ったのだ。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。」

（イザヤ　43・1、4）

イエス様の愛を感じた初めでした。その後吉祥寺キリスト集会の火曜日の婦人学び会のあと、二階での集いに参加させていただきました。集っている皆さまがすなおにありのままを話されるのに大変驚きました。私は話そうとすると胸が苦しく、涙があふれ出て喉が詰まりました。重い問題をいくつも抱えておられる方もあり、それにくらべると私の重荷など小さく感じられ、辛がってばかりいる自分を恥ずかしく思いました。それまで教会に行っていましたのに、祈りが聞かれるという体験も確信もなく、祈っても頼りなく感じていました。キリスト集会に通ううちに、主に祈るなら、願った以上の最善の答えが与えられることを、経過を追って聞き知ることができました。ここには生きて働かれるイエス様が感じられました。こちらの集会に通いたいと思うようになり、祈ったあとで転会の届けを出しに教会へ行きました。意外なほどあっけなく受理されました。実は祈ったのは私一人ではなく、このことも含めて私たち家族のため多くの方々が祈ってくださっていたのを後で知りました。

「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天

におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたし（イエス様）の名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」
（マタイ　18・19、20）

この方々は、もちろん主人と子供の救いのためにも祈ってくださっていました。そして私は、子供の問題について、まず夫婦が同じ土台に立てるようにと祈りました。私たちは感じ方、考え方、やり方、がまったく違う夫婦でした。父親母親という立場でないときには、その違いがさほど問題になりませんが、ひとたび父親母親という立場になれば、すべてが大きく食いちがいました。このように異なった二人が同じ土台に立つには、ともにイエス様を受入れ、イエス様を頭にいただいて歩む以外なかったのです。

その土台とはイエス・キリストです。
（Ⅰコリント　3・11）

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなろう。もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。
（伝道者　4・9～12）

私には、共に戦える同志としての夫が必要でした。このころ主人は、仕事で長期の出張をすることが多くなっていました。その主人が、池田さんのお宅の家庭集会に参加してくれました。私が「よろこびの集い」で体調を崩した時にお世話になったお礼を申しあげるためですが、実は私がどういう所に行っているのか様子を見るためもありました。ともあれ、宗教に忌避感の強い主人が、キリスト集会の家庭集会に初めて参加してくれたのです。このことがきっかけになり、出張先のニューヨークでは岩崎さんのお宅に何度か伺い、美味しいバーベキューをご馳走になったりして、暖かくもてなしていただきました。私は気がつきませんでしたが、ただご馳走になって楽しかっただけではなくて、イエス様は、この時と場所と集われた方々を通して、主人の心にしっかりと働いてくださっていました。一九九三年の夏、岩崎さんご一家が一時帰国され、西軽井沢福音センターの「よろこびの集い」に参加なさるとお聞きし、主人と二人で急に行くことになりました。行った翌日の日曜日早朝に、集会の方々のはからいで、主人はベックさんと一時間あまりお話させていただきました。そしてその日の礼拝の前に、主人と私は、浸礼による洗礼を受けることになりました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。

（伝道者　3・11）

主人がイエス様に従い、その証しとして洗礼を受けるなんて、まさに奇跡でした。同じ信仰を持ちたいと願いながら、主人のことは深い諦めの中に包みこんでおりましたので、私は厚い暗い

霧が急に晴れて、青空に太陽が輝く眩しいほどの明るさの中に出されたように思いました。

神にとって不可能なことは一つもありません。（ルカ　1・37）

思い返せば、私たち夫婦がイエス様を主として受け入れるためには、子供の問題、夫婦の問題、健康の問題、主人の仕事の忙しさや留守がちだったことなど、すべての重荷が私たちに必要なことだったのです。そしてキリスト集会との出会いも、イエス様を信じる方々の中に置かれたのも、すべてイエス様が備えてくださったことでした。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

こうして主人と同じ信仰の土台に立てたことは、主は生きて働いておられるという何よりも確かな証拠でした。子供の問題はあいかわらずでしたが、主人への思い煩いはほとんどなくなっていました。

すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。（Ⅰコリント　11・3）

妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。（コロサイ　3・18）

このみことばには正直言って引っかかりがありました。主人が間違っていたり、わかってないと思うときには、「神様、それでも従えと言われるのですか」と、暗い気持ちになりました。しかし「正しい夫に」とか、「神様を信じる夫に」というような前提条件は聖書のみことばにはありません。正誤善悪が気になり、素直になれない私は、主人が救われて初めて、後に思いを引きずらないで従えるようになりました。神、夫、妻という神様の秩序に従っていれば、その責任は夫が取り、そのまた責任は神様がとってくださいます。感性や意見の違いは相変わらずありますが、主人が正しいかどうかに関係なく神様が主人に直接働いてくださり、責任をとってくださる、そして神様は常に最善をなしてくださるという安心感が大きく広がり、平安な気持になりました。そしてそれが主人に対する信頼感ともなりました。イエス様は主人を同志以上の者にしてくださいました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（Ⅰペテロ　5・7）

このように大きなお恵みをいただきましたが、子供についてはみことばのようにいっさいをイエス様におゆだねすることは、なかなかできませんでした。長男は、理解ある学校と担任の先生に暖かく支えられ、中学校を卒業し都立高校に行くようになりましたが、人の中にいることが苦痛のようでした。私は学歴よりも、人として人の中で生きて行けるようにと祈りました。そして何よりも子供たちがイエス様を受け入れるようにと祈り続けています。子供たちは中学卒業、高

校受験と人生の節目をそれぞれにたどりながらも、何か心がすれ違い、進路も変更し、これではいけないと意識せざるをえないような日々を重ねていました。けれども私は、大好きな次のみことばに支えられ、悲嘆の中に沈みこむことは段々と少なくなってきました。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ　4・4～7）

「恐れるな。わたし（主）はあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。…あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、『恐れるな。わたしがあなたを助ける。』と言っているのだから。」（イザヤ　41・10、13）

一九九五年末にロサンゼルスに転勤になり、家族で相談の結果、子供たちは日本に残ることになりました。長男はいつのまにか、「母さんは特に問題もなくて育ってきたのだから、僕のことであなってても仕方ないよ」と、傷つけ続けてきた私を受入れてくれるようになっていました。私は何もできなかったのに、このように長男を変えてくださったイエス様に感謝しました。

気がかりなのは次男でした。十代前半の多感な時を、問題に翻弄される家族の中で過ごし、親子兄弟の絆は未完成でした。親に反発し、気持ちは家族にはなく、友だちにありました。身のまわりのことも充分にはできないのではないかと、またもや思い煩いそうになるところを主のみことばに支えられ、子供と離されるのも、それが必要だから主がしてくださるのだと、祈りのうちに思いました。主人の弟の浩さんと、私の父母に子供たちのことを頼んで、ともかくも転居しました。

幸いなことに、ロサンゼルスにはキリスト集会がありました。初めての土地であっても寂しいなどということはありませんでした。私たちには、東京にいたときよりも、日曜礼拝と家庭集会が第一のものとなりました。はるばる日本からみことばを語りに来てくださるキリスト集会の方々にも恵まれ、感謝しています。

引越しの疲れと時差で、私の体調は思わしくありませんでしたが、それでも少しずつ新しい生活やアメリカでの車の運転にも慣れていきました。運転や家事をしながらキリスト集会のテープを何度も聞きました。テープから、人は不完全で良いものはなく、むしろ人の価値観や善悪の判断を優先することは神様から遠ざかることであり、自分が小さくなってイエス様だけに信頼すれば、イエス様の大きなみわざを見せてくださること、また、人やこの世のことがらに関係なく、神様の守りと喜びと平安と勝利があり、すべての栄光は神様にあることを教えられました。

母からは電話やファックスでしょっちゅう連絡があり、子供たちも喜んで素直に祖父母のお世

話を受けているようすがよくわかりました。けれども私の心の中にはまだ、不本意に子供を置いてきてしまった、という思いが沈殿していて、平安がありませんでした。主にあっていつも柔和なキリスト集会の皆さまを思い起こしてみますと、私とは信仰の上でどこかが違っているような気がしてしまいます。私は以前は、心配症で、わからないことや未知のことにすぐ不安になりました。その自分中心の不安のために、自分も周囲の人も傷つけていました。イエス様が十字架にかかって死んで私の罪を贖ってくださり、このような私をも愛してくださっていることを知ってから、不安は平安に、絶望は希望へと変えられました。また元に戻らないように、揺れ動かぬしっかりとした信仰を持ちたいという望みが強く湧いてきました。私は人の思いの側ではなく、イエス様の側に立ちたいと祈り、そうすることを決心しました。そのことを今も祈り続けています。

あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。（詩篇　143・10）

あの方（イエス様）は盛んになり私は衰えなければなりません。（ヨハネ　3・30）

しばらくして、父母が私たちのところに遊びに来ることになりました。来てくれるのはとても楽しみなのですが、その間子供に何かが起こらないとも限りません。「イエス様、どうか子供たちをお守りください」と祈りました。

主人も休みを取り、一週間ほど四人でグランドキャニオン、死の谷、ラスベガスを旅行して帰

宅しました。留守番電話に、次男が交通事故に会い、大腿骨骨折したこと、手術をしなければならないので至急連絡してほしいとの浩さんのメッセージが入っていました。一瞬誰も口を開かず身動きもしませんでしたが、その時主人と私は、イエス様がこれを起こされたとはっきりと感じ取りました。不思議にも不安はなく、主は生命までもお取りにはならないという確信がありました。もし後遺症が残されても、「主がなさることですから彼とともにそれを負っていきます」と静かに祈ることができました。以前の私では考えられないことでした。父母は予定を切り上げ、私と共に帰国することになりました。警察の事故係の方のお話では、事故の大きさを考えると、運転者に怪我がないということも、助手席にいた次男が頭部損傷もなく大腿骨骨折だけですんだということも信じられないとのことでした。周りの皆さまをお騒がせし、ご迷惑をおかけしましたが、祈りに支えられ、交通事故に付き物のトラブルで嫌な思いをすることもありませんでした。そしてベックさんが次男とお話してくださる機会も主は用意してくださいました。この事故を通して、子供たちと共に過ごす時間を与えられ、主は家族の関係を修復してくださり、別居への不本意な思いも解消しました。長男も、離れて暮らす間に主がたくましく変えてくださっていました。問題がすべてなくなったわけではありませんし、これからも起こるでしょうが、主はどのようにしてくださるのかという期待と、最善をなしてくださるという確信を持って受け入れることができます。すべての答は聖書の中にあります。揺るぎない拠りどころです。主のくださった平安の内にあって、子供たちと親族、そして友人、知人の救いの日が来ることを祈り、楽しみに待っています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

わたし（イエス様）は、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネ　14・27）

ボストンの家庭集会で。





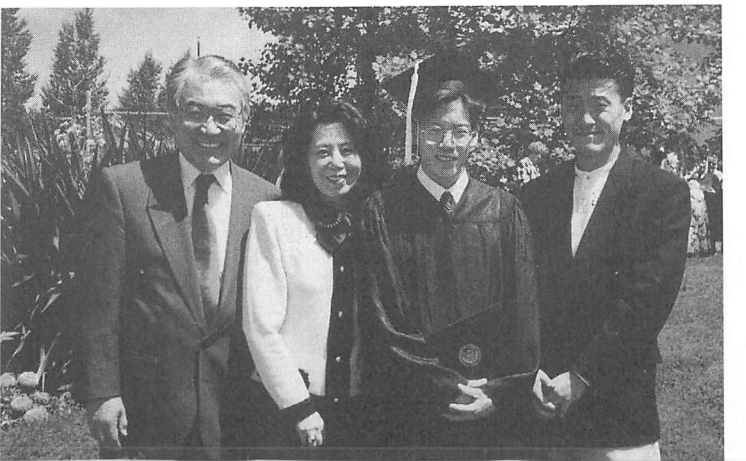
ご自宅の前で。奥様の巳美子さんと。

試みと恵みを通して

中津泰明

一九三七年兵庫県姫路市に生まれる。姫路高校卒。和歌山大経済学部卒。日綿実業(株)(現ニチメン)に勤務。退職後、シアラスカティンバー社(米国法人)に勤務の後タイメイインターナショナル社代表。家族は、妻巳美子さん、長男泰英さん、次男泰治さん。米国ワシントン州マーサーアイランド(シアトル郊外)在住。

泰治さんの卒業式で。



苦労を知らない生い立ち

私は一九三七年十月十二日、兵庫県姫路市で生まれました。当時は日本の軍国主義が日に日に暴走し拡大する一途の時代でした。父は小柄な体格で、それが幸いして、世界列強の軍縮協定の兵力削減に際してまっ先に兵役を免除され、家族のもとで在郷軍人として商売に励み、また、食糧確保のために田畑を買い、農業経営にも手を広げ、時代に合った商才のある人でした。このため、第二次世界大戦に入ってからの食糧難の時代にも、何不自由なく生活することができました。戦後は父が展開する色々な新しい商売、また、政治への参加などを見ながら成長しました。

始めての悲しみの体験、強い自分をめざして

私にとって初めての大きな転機がきたのは、一九五〇年一月十二日、小学校六年生の時でした。母が脳溢血で倒れ、そのまま死んでしまったのです。その時は、何の悲しさも湧かず、涙も出ませんでした。初めて悲しさと寂しさを実感したのは葬儀の時でした。クラスメートが大ぜい来てくれ、その中で自分には母親がなくなってしまったということが切実にわかり、初めて寂しさと悲しさがこみ上げてきました。それから一人隠れて泣き続ける日々を送りました。また、学校の帰途、毎日墓所を訪ねて、「なぜ死んでしまったの?」と墓石に向かって語りかける日が久しく続きました。そのうち、周りの目が同情と慰めに満ちているのを見て、「僕は大丈夫です」と強く明るく答え、まわりの同情をはね返し、せいいっぱい明るい態度を誇張するようになりました。

このころから、自己憐憫と自分を励まそうとする強い自意識が知らない間に培われていったようです。それからの私の少年時代は、「なせばなる」という自信を自分に植え付けながらの生活でした。戦中戦後の混乱の中で家族を守り、いろいろな事業を創り上げた尊敬する父を追い越すことが、私にとって最大の親孝行であり、私の大きな目標でもあったのです。

学生生活から就職、海外生活

多感な思春期も、感傷に浸る間もなく、自分が拠って立つ何かを造り出そうという激しい意欲をもって乗り切りました。勉学に勤め、知識を積み上げるのにさほど苦痛を感じていなかったのですが、「まさか」の大学受験に失敗しました。しかし、あえて浪人生活を選ばず、当時の二期校に進学を決めました。「鶏口となるも、牛後となるなかれ（史記）」の言葉通り、与えられた自分の環境で十分な力を出そうと考えたためでした。これは、父の処世術から学んだ、「時を大切にする」という姿勢であり、この姿勢が年を経るとともに私の哲学の根本となっていったのです。

大学時代は、心身ともに十分な余裕をもっての学業生活で、勉学のかたわら、数多くの社会勉強の機会にも恵まれました。当時、すでに中毒的に蔓延していた麻薬は、まったくやる気がありませんでした。また、友人同士の間で取った、取られたという賭けごとにも手を出しませんでした。自分で自分の時間をコントロールできないゲームというものが好きになれなかったのです。

一九六〇年、憧れの貿易商社員として、日綿実業（株）に入社、木材部に配属されました。二年八ヵ月の受渡業務、中近東、欧州、米国向けの木材商品の輸出業務を担当した後、米国サンフ

ランシスコ支店へ駐在を命じられました。

この時から始まった米国での生活、米国実業界との触れ合いから、多くのことを学びとりました。特に、日本の会社では当然の定年まで勤めあげるという雇用方式と米国の雇用方式の相違、集団が運命共同体という日本の農耕民族的経営と、個人個人が忍耐と知力を尽して獲物を捕る欧米の狩猟民族的経営の大きな違いを学ばされたことも、この最初の駐在時代の貴重な体験であり、将来の私の仕事人生に、大きな教訓として役立てることができました。

その後、商社員の常として転勤が続き、サンフランシスコの後は大阪、東京、シアトル、バンクーバー、大阪、東京、シアトルと、二十一年半の勤務の間に十一年半海外勤務という体験をしました。その間一貫して、木材の輸出入という部門で仕事をしてきました。

会社退職の決断

一九八一年、日綿実業を退職する決断をしました。

その年の初夏、シアトル勤務を終え、東京船舶部副部長の辞令と、帰国命令がでました。この辞令は、東京で一年勤務の後、ニューヨークで日本の大手船社への船舶リースの責任者として赴任するという含みのあるものでした。「また海外勤務?」という嘆きが、私と私の家族の心の中で騒ぎ始めました。

私の海外生活も、初めは「花の駐在員」として、大阪駅頭に五十余人の社員、知人、友人に見送られてのサンフランシスコ赴任から始まって、子供たちの学齢も進み、これからの友人関係、

進学問題が彼らにとって大切な時期にありました。その時までに、長男泰英は十一回の転校経験があり、もうこれ以上子供たちの転校を強いて新しい環境を押しつけることは、たとえ会社の命令であってもできないと思いました。この期に至って初めて、会社よりも家族の生活を守ることの大切さを強く感じさせられたのです。

今一つ、退職を決断した理由は、これまでの二十年間の木材業務から、船舶リースへの転進を命じられたことです。「自分のこれまでの評価が、そう簡単に他にシフトされるようなものなのか」という不満が募り、「会社が評価しないなら、自分が、自ら示して見せてやろう」という、きわめて自信過剰、ごう慢そのものの態度で反応しました。「自分の道を切り開く」という使命を、自らに言い聞かせようとしたのです。

米国シアラスカ社への転職

命じられた日本への帰国も、転任のためではなく、辞表を叩きつけるための旅となり、同行する家族の不安、不都合は、すべて「任せておけ」とばかり、無視同然の旅立ちでした。

辞令が出るころから呼びかけのあった米国、カナダの三社のうち、最も将来の活動の可能性があると判断したシアラスカ社と、雇用契約の話し合いを進めながらの一時帰国でした。その当時、日本の会社で管理職の辞職はごくまれで、私の場合も社長や専務からのたび重なる慰留工作を断って辞職するまで、二ヵ月という時間がかかりました。その間も私の心は、すでに新しい活動の新天地に向かって、ひたすら駆け始めていたのです。

一九八一年十月、初めての米国会社の勤務を始めましたが、これまでの経験を十分に生かすことができるだけに、新しい生活への適応は、案外容易と思えるものでした。入社以来、どんどん私の考えを入れたマーケティング・システムを作り上げていき、数年のうちには、内外の評価も上がり、市況商品の木材の価格形成、特に米国からの住宅構造用木材の対日価格を、私のさじ加減で決定し、それが、翌週の日本経済新聞の市況欄に出るようになって、私は自信を越えた覇者のような気持ちになり、酔いしれてしまったのでした。

当時の市況が、商品の供給者側に有利な「売手市場」だったことから、多くの業界の人々から恐れられ、お追従を言われ、また泣きつかれ、果ては畏怖を表す「別称」で呼ばれたり、囁かれたりされるまでになりました。仕事は順風満帆。家族とも、今までよりは気分的にゆとりをもって話をすることもでき、また、家族連れの旅行も、自分から進んで計画するようになりました。これまで自分の都合本意で家族を引っ張ってきたことに対して、何とか家族が楽しめることを、と反省する気持ちが高まっていたのです。

以前、同じ会社の駐在員家族として、シアトルで仲のよかった、菅野さんから、キリスト集会のメッセージテープをたくさん、定期的に送っていただいていましたが、その中で、多彩なビジネスのバックグラウンドをもって話をされている、池田伝一さんのお話に興味をそそられました。その後、内地出張の合間にお会いして、ビジネス体験を通して見える人間の弱さ、ごう慢さなど、お話を聞かせていただき、かつては仕事の鬼のように恐れられた池田さんが、これほどまでに柔和な方になられているのはただごとではない、と思うようになり、キリスト集会の活動や、集会

の皆さまが求めておられるものに大きな関心を持つようになりました。

一九九一年夏、キリスト集会の方からの紹介で、今川さんご夫妻とお嬢さんが、シアトルに来られることになりました。今川さんは私たちにとって、キリスト集会からの初めての訪問客でした。わずか数日間の短い滞在でしたが、その間の今川夫妻の立ち居振る舞いと話しぶりは、私が今まで接してきた人々と異なり、私心のない、まさしく無邪気な方々であり、正直に言って私は面食らいました。私の日常は、仕事の駆け引き、お追従や皮肉な会話、果ては悪口に明け暮れしているというビジネス中心の生活です。その中にあって、なんと清々しく感じたことでしょう。まったく価値観が異なっており、「どうしたらこの夫婦のように、平安に、リラックスして人と語りあうことができるのだろうか」と、しばしば自問を重ねていました。その当時、妻巳美子のお供をして礼拝に参加していたシアトルの教会では、見たことも聞いたこともない今川夫妻の言動でした。今川夫妻のシアトル訪問は、私にとって大きな価値観の変化をもたらすきっかけとなりました。おそらく今川夫妻も、「これは大変な強情頑固な男がいるものだ。早くなんとかしなくては」と思われたに違いありません。

ベックさんとの出会い

一九九一年十月十三日、内地出張のおり、家内のお供をして、吉祥寺キリスト集会に出かけました。ところが、集会所に入る前にベックさんの自宅へと招待されました。あとで知ったことですが、ごう慢で手のつけられない私を覚醒させるには、ベックさんに会わせるほかない、という

家内と今川夫妻の計らいであったようです。この時も、私は家内が慕うイエス様への信仰の庇護者として、冷静な気持ちでお供していきました。正直言って、家族が平安な気持ちでにこにこしていてくれることは、私も気遣いの必要がなく気楽ですから、「あなたが好きなら…」という気持ちでついていったのでした。

ベックさんのお部屋で、「アーメン」という言葉の意味を聞かされたのを始めとして、ベックさんから、「聖書から次の二ヵ所の聖句を、声を出して読んでください」と、言われました。私は心ひそかに、「ご自分は読み慣れておられるのだから、読んで聞かせてもらう方が手間が省けるし、よくわかるのに…」と呟きながら読ませていただきました。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くするものは高くされるからです。」

（ルカ　18・10～14）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

これまでに私も多くの先人の有名な言葉を聞き、大きな感銘を受け、感激もしましたが、これらの聖句が私に与えたものは、これまで聞いた名言集と異なり、自分の価値尺度では計れない、異質の内容でした。また、振り払おうとしてもいつまでも離れようとしない、じっと心の奥底に留まる言葉でもありました。しかし、「神様が、どのように人々を救われるのだろうか」と思うにつけ、「数え切れない、書くのも恥ずかしい多くの罪を犯し、隠している私が、何の報いもなしに赦され、救われることができるのだろうか」と、信じ難いことが多く、「これまでの自分を作り上げてきた長年の努力、忍耐、自己鍛練を捨てた生活態度など、とうてい考えられない」という気持ちが、心の中に大きく座を占めているというのが、そのころの私の現実の姿でした。

ところが今読んだ聖句は、何も尊大な表現、説明などはなく、ただひたすらに、実際は弱いのに強がっている私を救いへと導かれる神様の言葉なのだということを知り、知らず知らずのうちに、ベックさんとともに祈っている自分を見出しました。

内省

私自身のかたくなさのために、主の愛のすばらしさを知るまでに、ずいぶんと遠回りの道のりを、力いっぱいがんばりながら歩んできました。日本商社、日綿実業の社員としての二十一年半

のサラリーマン生活は、家族にも話したくない、苦楽が激しく交差するものでした。筆舌に尽くし難い仕事面の苦労、人間関係のどろどろした汚い駆け引きの中も耐え抜き、自らの決断によって、間断無いあらゆる攻撃にも挑んできた自分をいたわり、励まして生きてきました。「どんな苦境にあっても、自分に確信をもって進んでいけば、時間はかかっても、必ず道は拓かれる」という自信に満ちた活動によって、多くの熾烈な競争にも打ち勝ってきたという自負心に溢れていました。日綿実業勤務の二十一年半の内、海外勤務が三度、十一年半に及んだことから、異文化の人たちの中にいかに早く溶け込んでいき、相手の信頼を得るかという才に長けていると自信をもっていました。

家族が転勤のたびに直面していた、異国の生活での苦労を、「すべては努力不足のせいだ」と決めつけ、「自分のようになれ」、また、「自分について来い」と、わがまま一途のリーダーとして、家族を引っ張っていこうとしたものです。当然のことながら、家族との間に歪みが出てきましたが、家族の悲鳴にも耳をかそうとしない私に、家族一人一人の心の動きがわかろうはずがありませんでした。

シアラスカ社に転職してからは、社内の雰囲気からも、家族を大切にすることの重要さを日々学ぶことができたのは、転職による大きな収穫の一つでした。しかしながら、私が長年築き上げたごう慢の殻は硬く、自分が作り上げ、それに頼って生きてきた人生哲学は、容易に放棄することができません。捨てることが怖いのです。聖書を通して知った、神様の公正無私の愛はわかるが、今しばらく、人間として与えられた人生を、力一杯自らを試して困難に挑む生活を続けさせ

て欲しいというごう慢な高ぶりは、容易に拭い去ることができないものでした。

シアラスカ社での順風満帆から突然の解任へ

シアラスカ社に入社してからは、仕事が楽しくてたまらない毎日でした。日本の会社は、社内の人間関係に半分以上のエネルギーを費やしてしまうのに対し、米国の会社は、百パーセント業績向上にエネルギーを集中できるという利点があります。これをフル活用して、日本の取引先との緊密な業務関係のもとに、シアラスカ社は、入社当時ほぼゼロであったものを、十年あまりのうちに業界で自他ともに認める傑出した木材のマーケティング会社に成長しました。太平洋を横断する木材専用船の数も全米最大のシェアにまで活動を広げ、輸送船団の新造船にも、家内が無記名で応募した「オーシャン・リディア号」（使徒16・14よりルデヤの名を借名）と命名するなど、思う存分の仕事をさせていただいた時代でした。

しかし、このように会社が拡大すると、いろいろな嫉妬心を持つ人々が増えてきました。社内でも社長をはじめ、その拡大と成功を恐れる人が出始めたため、将来の摩擦を避けて、一九九三年、自衛策として、会社から独立したコンサルタント会社「タイメイ・インターナショナル」を創り、引き続き外部から会社の経営を指導していくことにしました。業績はさらに向上していきましたが、日本の業界の評価が依然として私の方に傾いたため、シアラスカ社の立場とマネージメント能力の評価に危惧を感じはじめ、業績向上の途次ではありましたが、私との二年間の契約を更新せず、終結することになりました。私は、契約の更新を当然の前提としてのマーケティン

グ展開をしていたものが、急に二ヵ月の追加指導期間を要請され、一九九五年五月、私のシアラスカでの活動は終了することになりました。私にとってはまさに、青天の霹靂で、「絶好調の今、なぜ?」という不満が、疑問が、膨れ上がったのは当然のことでした。シアラスカ社での仕事を通して、十四年間、いろいろな日本の会社では体験できないテンポの早い苦楽を体験しながら、強力なマーケティング・システムを作り上げ、マーケット動勢も、自分のさじ加減一つで緩急自在に動かせるという極めてごう慢な態度が高まっていたことについて、何の自覚も、自責の念も、ありませんでした。

ごう慢に対する裁き、聖書の励まし

私の作り上げた仕事は、その頂点で、「ごう慢の極み」において、完全に取りあげられてしまいました。突然のことでしたから、失意の中でいろいろな対策をめぐらせ、また、再び自ら立つこともいろいろと考えてみました。しかしいずれも、望む通りにはうまくはかどりませんでした。

その理由は、主として次の三つでした。まず、自らがすべての英知を費やして作り上げた難攻不落のマーケティング組織に、私とて、攻めかけることは無謀です。次に、親衛隊さながら私に協力を惜しまなかった取引先が、徒手空拳となった私に対して「じっとしていてください」と懇願されるまでになり、多くの取引先が離反していきました。さらに、新しい就職先をさがしても、現行のスタッフがよほどの苦境でない限りリリーフを求めるはずがなく、また、現行スタッフの立場を脅かすということにもなるので求職は進みませんでした。

これらのことはまったく意外なことで、自分がどんどん追い詰められていくのがわかりました。これまで築き上げてきた汗と涙の結晶が取り上げられ、裸同然で放り出された状態となりました。打ちひしがれた私を見るのは家族にとっても初めての経験でしたが、むしろ、「来るべきものが来た」と思ったようです。

このようにすべてをもぎ取られて、これからの仕事、生活について腐心していたある日、それは偶然、聖霊が下ったと聖書にある五句節の日、六月四日でしたが、その当時集っていた教会の牧師が訪ねてこられ、話しているうちに聖書から、次の聖句をもらいました。

この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。

（ダニエル　4・30）

これは、ネブカデネザル王が、自分の栄光のために築いたものがすべて主によって取り去られ、鳥獣の生活にまで落とされる直前の言葉です。この高ぶった言葉は、私の五十余年を集約しているように思われ、読んでいるうちにひしひしと恐ろしさを感じました。

イエス様を受け入れて

この聖句からはじめて、聖書を読み進んでいるうちに、今起こっているすべてのことは偶然のできごとなどではなく、神のご計画の一部であることがわかってきました。長年の私の高ぶりをたたきつぶすには、これほどいい機会はなく、神はすべてを計画して、一挙にすべての「私の罪」

を示されたのです。この時私は、これまでの自分本意の、「自らに栄光を帰する」生き方から出てくる、溜まりに溜まった罪の数々を言い表わし、イエス・キリストの十字架による罪の贖いを自分のこととして受け入れることができました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

この聖句は、かつてベックさんから示されたものですが、この時それが、愛に包まれたいたわりの言葉として私のうちによみがえってきたのです。私はこれまで大切にし、誇りとしてきた生活信条を恥ずかしく思うようになりました。すべてを主に委ねて歩み、示される道を求めたいと決意したのは、この五旬節の日のことでした。

そのころ家内は表年皮質筋質などの激痛に苦しんでいましたが、私は看病人として家内につきそって礼拝に参加していた教会で、一カ月後に洗礼を受け、私の決心をおおやけにしました。

洗礼後の生活

それから、私の日常は、朝夕の主への祈りを通し、また聖書を読むことを通して心の安らぎをいただくことができるようになりました。また、聖霊の呼びかけに耳をかたむけ、示される道に従うという日々を送ることができる喜びは、今まで想像もしなかった主の贈り物であることを確信し感謝することができました。日々の静思の時間と聖書との出会いを通して、仕事の展開が見

えない日々の中でも、勇気づけられる聖句が時にかなって示されるようになりました。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。

（Ⅱコリント　4・8）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

聖書による励ましを通して、ごう慢の角が折られ、少しずつながらも柔和な物の見方ができるようになっていることを感じはじめるのにそんなに時間はかかりませんでした。また主は、すべてのものを私から取り上げることはなさいませんでした。

一部の、信頼してきた取引先が、私のための仕事を作りだし、また、今後の私の活動協力を期待して、タイメイ・インターナショナルを支えたいというお話をちょうだいしました。これらは、いずれも損得勘定によるものではなく、かつて仕事でともに汗を流しあった信義から出るもので、すべてを主からの贈り物として感謝していただいております。パニック状態にならず、絶えず冷静のうちに、皆さまに支えられてこの三年間を送ってこられたのも、ひとえに主が私にくださった恵みと思い、感謝を新たにしております。もちろん、気持ちの騒ぐ朝、焦りを感じる夕もあり

ますが、時を得て聖書の戒めが与えられ、時が満たないのに焦っても徒労となることを教えられて、感謝しております。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。…泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。

（伝道者　3・1、4）

教会を離れる

いつものように朝から机に向かっていた時、妻がベックさんのメッセージ・テープをいくつか持って来て言いました。「時間を作って聞いてみたら？　あなたにとって仕事より大切なことが語られていますよ」。それで仕事が一段落した時から聞きはじめました。わかりやすい言葉でほんとうに大切なことが語られていることを知り、途中で止めることができず、メモを取りだして大切な言葉を聞きのがすまいと集中して聴くようになりました。ごく当たり前の話がこれほど心を打つものとは知らず、恥ずかしくなりました。キリスト集会の多くの方々のテープも聞きはじめました。それまでにも教会で牧師さんのメッセージを聴いていましたが、それとは違った感銘を受けました。ただひたすらに聖書を通して主の栄光を語ろうとする方々のメッセージは、お一人お一人が自分の体験を自分の言葉で語り、聞いた人には誰でもわかるものでした。

私たちが集う教会にも、主を見上げ、主のみわざのすばらしさを話す人もおられましたが、ほとんどの教会員は、主を見上げるのでなく、周りの人々を見、仲よしクラブになっています。主

の輝き、主への感謝が、おたがいの会話の中に出てこないのです。これではビジネス世界の交際となんら変わらないのではないかという気がしてきました。

やがて一九九七年春、教会を去り、キリスト集会の北米の人々を結んで行なわれる電話回線による日曜礼拝に参加するようになりました。礼拝と多くの讃美の後の心の平安のすばらしさ。翌日からの労働の一週間も、北米のキリスト集会の皆さんとともに祈りあいながら、今、一日一日を感謝しながら進んでいるという豊かな確信が与えられ、また、次の日曜日が待ち遠しくなる。このような、心が飢え渇いている状態は、今までに経験したことのない喜びです。

今は別の教会に参加する子供たちも、教会生活の中で悩みながら歩んでいます。近い将来、両親とともに「主にある家族」として、キリスト集会の礼拝に参加してくれることと信じています。週一回、家族の夕食会を主に感謝しながら持たせていただいていますが、「教会活動についてのあれこれは話題にしてほしくない」と子供たちから申し入れがあり、祈りながら主の時を待っています。

仕事への再起とみことばによる制止

シアラスカ社との業務を止めてからの二年間は、思ったより早く過ぎました。幸い、経済的には十分の支援が与えられていました。業界の方々のサポートに応えるためにも、今一度仕事の体制を立て直そうと意気込んでいたとき、思いもよらない聖句が強く示され、何度も読み返しました。まさしく聖霊の導きによる聖句であることが、その後起こったできごとを通して私に示され

ました。

愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渇いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。

（ローマ　12・19、20）

「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」

（マタイ　5・44）

ひそかに私の心の奥底にしまい込まれ、再起のエネルギー源となっていた「敵意と復讐心」は、みごとに聖霊の導きによって白日のもとにさらされたのです。自分をこのような苦しい状況に追いやって、しかも私の作った路線の上を気楽に歩む人々に対する恨み、憎しみがあったことを、改めて認めさせられ、燃え上がっていた怒りと、復讐の牙を、主は黙って取り外してしまわれたのです。これらの聖句を通して教えられたことは、敵意を捨てて、素手で愛をもって取り組むという対人関係は、警戒心をもつ相手の心をほぐさずにはおかないということでした。

このような状況の中で、思いもよらぬことが起こりました。私の仕事を引き継ぎ、わが物のようにそのやり方を踏襲していたシアラスカ社の副社長が、激務から心身消耗して辞職することになりました。また時を経ずして、私の後、営業全般を管理していた上席副社長が役員会の支持を

得られず免職となりました。

このような激動の中にあっても、私の仕事の本格的再起のための機会がなかなかつかめませんでした。それどころか、夢にも想像しなかった未曾有の住宅、木材大不況がやってきました。住宅関連産業の大幅萎縮、商社木材部門の大胆なリストラ、業界では戦後最多最大の倒産の発生、廃業の続出など、私が手がかりと考えていたものが一つ一つ壊されていきました。

この現実の一連の動きを見ているうちに、私の心に次のようなイエス様の呼びかけが聞こえてくるようになりました。

「一九九五年の最も安定した時期におまえを職場から引き離し、不況の嵐や筆舌に尽くし難い大不況の苦難の中から避け所に引き上げ、豊かに守ってきたのに、おまえはいまさら何が欲しいのか?」この問いかけに対して、私には呟きの一言もありません。

聖霊の導き

これからの私の余生は、主のご計画により聖霊が私の活動の道標を示してくださるままに展開されていくものと確信しています。聖霊の導きにより与えられるものなら、再び希望する仕事、活動の場が与えられることでしょう。しかし、自らの利益栄誉のためにこれを求めるなら、決して与えられないでしょう。私の人生に去来する多くのできごとは、しょせん、水泡のように消えていきますが、私を支える聖書の言葉は、いつまでも輝かしく私の道を照らしてくださることがよくわかりました。これからの一日一日、聖霊の導きにすべてを委ねて、感謝しつつ歩みを続け

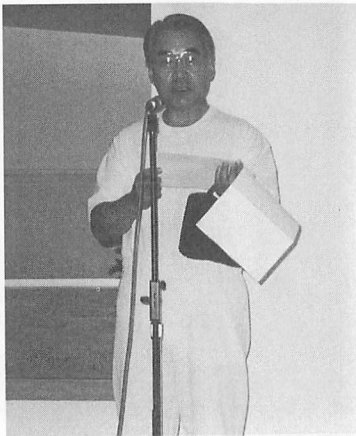
ることができることを、この上ない喜びと思っております。
しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。
（伝道者　2・11）

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。
（箴言　10・22）

主を受け入れた日に。ベックさんのお宅で。



洗礼のときの証し。





私の思いをはるかに越えて

中津巳美子　一九四六年岡山県津山市に生まれる。美作短期大学服飾科卒。家族は、夫泰明さん、長男泰英さん、次男泰治さん。

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

（詩篇　139・13～16）

私は一九四六年、終戦の翌年一月、岡山県津山市という小さな城下町に五人兄妹の末っ子として生まれました。終戦をひかえて、食料も底をつくような最悪の時期に母の胎内に宿り、流れてしまっても不思議でない状態にもかかわらず、無事に生まれました。二千八百グラムの小さな女の子だったそうです。私が娘になるまで、母から、「おまえはいらない子だった」と幾度となく聞かされて育ちました。たくさんの家族と従業員を抱え、戦後の復興と高度成長の中、両親は毎日忙しく立ち働いており、いらない末っ子の私は、いつも母の姿を追い求めながら大きくなってい

きました。いくら慕っても退けられ、母に対して私は、だんだんと反抗的になっていきました。兄や姉のように上手に甘えることもできず、「かわいくない子」と言われるたびに、愛情表現の苦手な自分にいらだち、怒り、愛しているのに憎まずにはいられない、自分の屈折した性格を恨みました。母とのことは、心の傷となって、私の中で、長く痛みとして残りました。

両親はとても厳しく強い人でしたから、兄も姉たちも親の望む通りの結婚をしていました。

反抗心はあったものの、親に逆らうことはできず、私も主人とお見合いをしました。結婚するまでに六ヵ月しかありませんでしたが、その間、中津の母の希望で、家風に慣れるためにと三ヵ月の間、家事見習いとして母と寝起きを共にしながらいろいろのことを教わりました。母は何でもできる優秀な方でしたので、私は長男の嫁としては失格者だったと思います。筆舌に尽くせない多くの複雑な思いがありましたが、主人との結婚生活は、神戸から始まりました。

主人は商社に勤めており、私たちの結婚生活は転勤の連続で、日本と海外を行ったり来たりの生活になりました。神戸で長男を出産した後、東京転勤、そしてシアトル駐在となり、主人は私と長男を社宅に残したままシアトルへと赴任していきました。私たちの時代は、本人が赴任先に慣れるまでは家族を呼び寄せることなどできなかったのです。ですから会社から渡航命令が出るまでは、主人も家族も勝手に動くことはできませんでした。その間私の父は、がんで亡くなりましたが、主人はもちろん帰国することなどできません。私の方も、留守を守り、また主人の実家では嫁が里帰りすることをあまり歓迎しない風があり、父が病の中にあってもなかなか帰ることはできませんでした。私の実家から薄情な娘と言われながらも、父の死に目に立ち会うことがで

きませんでした。社宅から勝手に離れるわけにいかない事情は、会社勤めではない商家である私の実家にも中津の家にも理解されるはずもなく、私と長男と二人、会社からの渡航命令をひたすら待っておりました。

半年後、待ちに待った許可が出て、主人の待つシアトルへと出発しました。そのとき羽田空港で合流し、飛行機でごいっしょに行くことになった方が、同じ会社の菅野さんでした。現在彼女は、横浜のキリスト集会へ集っておられます。彼女とのおつきあいは、もう四半世紀以上になりますが、この時点では数年後に私を主へと導いてくださる方だとは思いもしませんでした。主のご計画のすばらしさ、きびしい両親に育てられたことも、主人と結婚したことも、そしてその後、私に起こった一つ一つのできごともすべて、私に必要であったことが今、はっきりとわかります。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言 19・21）

私にとって生まれて初めての海外生活が始まりました。異文化に慣れることよりもまず、私がショックを受けたのは、社宅生活よりもっと、会社というものが私たちの生活に影響を及ぼすようになってきたことでした。駐在員の妻たちの社会では、会社での年功序列が妻たちの中にも存在し、夫が偉くなれば、その妻もなぜか偉くなってしまう方が多く、上下関係がはっきりと表われてきます。東京の山の手言葉をみごとにあやつり、夫とともに会社の看板を自分も背負って、虚栄とごう慢とプライドを持ち、なにごとにおいてもブランド志向で、自分たちの尺度で人を量ることしかしないこわい集団としか、私には思えません。なにごとも支店長夫人の思い通りにこ

とが進められ、各社入り乱れての複雑なおつきあいの中に、私も放り込まれていきました。主人が勤めている会社の皆さんは、ざっくばらんな方が多く、気を遣うことは他の会社より少なかったことは、ほんとうにありがたいことでした。企業戦士として熾烈な戦いの中で奮闘している男性たちのかげで、敵意、羨望、妬み、争い、分派などなど、女性たちの戦いもまた、現実のことでした。ブリッジ、ゴルフ、お料理、ショッピング、手芸、子どもの教育、夫の出世といろいろな集まりでの話題は尽きることがなく、その中で好むと好まざるとに関わらず暮らしていかなければならないのが、海外どこにいても駐在員の妻の宿命であり、自分がそれにどう染まっていくかが問われます。

そんな中でアメリカの友人もでき、シアトルにも少しずつ慣れてきたころ、主人の父ががんで倒れたとの知らせが入りました。母親のいない主人にとって、父は特別な人でしたから、主人の悲しみは、大変なものだったと思います。会社からは、見舞いに帰るか葬儀に出るかどちらか一つにするようにと申し渡され、主人は、父の意識のある内に会いたいと、見舞いのため帰国という方を選択しました。もちろん、私と長男の帰国など、許可されようはずはありません。父には孫の泰英を目の中に入れても痛くないほどかわいがっていましたので、家族いっしょに帰れなかったことは、今でも心残りです。主人がどんな思いで父と最後の別れをしたかと思うと、胸が押しつぶされそうでした。父が召されても、主人は葬儀に出席することができず、その当日も仕事をしていました。心の中では泣いていたと思います。父のことがある少し前に、主人が会社の中で一番尊敬し、手本としていた方が、オーストラリア総支配人として単身赴任中、車の事故、それ

も正面衝突で突然亡くなられました。二人の大切な人を失ったことは、主人をさらに精神的に強くしましたが、会社組織の非情さを身をもって体験し、会社にたいしてしこりのようなものを心の中に持ったようでした。

その後、私は次男を身ごもり、一九七三年七月十九日にユニバーシティ・ホスピタルで出産しました。私たち一家は、その後社命により転勤し、バンクーバーに住むことになりました。主人は、セクレタリーと二人のワンマン・オフィスでしたので、以前にも増して忙しくなり、家族を顧みる心のゆとりもだんだんとなくなっていきました。同じ会社の方が誰もいないので、私は一人ぼっちだとしみじみ思いました。海外にいますと、会社が一つの家族のようなところもあり、煩わしさもあるのですが自分の意識下でいつしか連帯感のようなものが生まれ、知らず知らずのうちにどこかで頼りにするようなところもあったのでしょうか。私にとって菅野さんご一家との別れは身を切られるほど悲しく、辛いものでした。

私は、主人の仕事のお客様のおもてなしやお付きあい、駐在員の妻としての対社外のお付きあい、すべて一人ぼっちでこなすようになってしまいました。それに加えて、学齢期になった長男の、現地校と日本補習校での勉強が始まりました。特に、日本語を忘れかけている彼が、補習校からいただいてくる宿題は、私にとって頭痛の種でした。言葉のわからない長男を叱りながら、夕方三時間かけて、宿題との取り組みが始まりました。「マミー、マミー」と私を呼び求める次男をかまうゆとりもなく、帰りの遅い主人の夕食の支度をしながら、長男が習い始めたバイオリンの練習を、いらいらしながらさせているという毎日でした。

そのころから、自分が精神的におかしくなっていることが、なんとなく、体の変調でわかってきました。胃の調子が悪く、風邪薬のアルカセルツアーばかり飲むようになり、髪の毛が抜けやすくなり、洗っても洗っても十円玉大の頭皮がはがれ、フケというよりは花びらのように落ちてきました。私の知っている方が、頭髪が二週間で全部抜け落ち、帽子をかぶっておられたことを思い出し、ひとごとではないと思うようになっていました。誰とも話したくない、会いたくない、と人を避けるようになり、失語症に近い状態で、家族といても寂しく、いらだち、自分の心が何かとてつもない勢いで膨らんでいき、自分で自分をコントロールできなくなってしまいました。

あるとき、気がついてみると、プラスティックでできた洗濯かごを、力まかせに流しに打ちつけ続けていて、丈夫なかごが壊れてしまうほどの凄まじさに、ふと冷静にかえったとき、総毛立ちました。いつ何をしでかすかわからない、危なっかしい自分を、どこへ持っていっていいかわからず、苦しみました。私がもっとも心配していたことは、子供につい手がでてしまうのではないかということでした。朝出ていって夜遅く帰ってくる主人は、気がついていないようすでしたし、私も、昼間の自分を主人には絶対見せたくありませんでした。がんばって明るい良い妻を演じることには慣れていました。心の中の凄まじい火の玉を消してくれる何かを、いつも探し求めていました。まったく動くことのできない精神状態の時は、むさぼるように本を読み続け、読むものがなくなると、薬の効能書でもいいから読む。活字を読んでいる、日本語に触れているというだけで、少しは心がおさまるように思えました。過去への自責の念で、「私なんか死んでしまえばいいんだ」と、どんどん落ち込んでいきました。じっとしていられない時は次男をベイビー・

シッターの婦人に預けて、来る日も来る日もバンクーバーのダウンタウンで買い物をし続けました。洋服、バッグ、靴、アクセサリー、キッチン用品、食器類、リネン類、絵画、家具調度品、果ては鹿の剥製まで買うという異常さでした。何を買っても、何を読んでも虚しいだけで、自己嫌悪におちいるだけでした。その時、「物」で人間は満足しないということをはっきりと知りました。バンクーバーはとても美しい街ですが、私にとっては思い出したくない街でもあります。狂気と正気の狭間の中で過ごした数年間は、私の中では霧に包まれ、細かい地名や人の名前など、いくら思い出そうとしても頭の中が混乱して、思い出すことができません。今でも当時の写真を見ると、自分が自分に思えず、カラー写真の向こう側に、目には見えない、白黒の、自分の中の映像が頭の中で交錯して、ぐじゃぐじゃになってしまいます。精神的混乱の中、また転勤命令が出、主人は大阪勤務を命じられました。二人の幼い子どもを抱え、動かない体をむち打ちながらの引っ越しとなりました。帰国することをあれほど望んでいたにもかかわらず、嬉しさも希望もない、灰色の旅立ちでした。

いったん宝塚の社宅に落ちつきましたが、狭い社宅から一日も早く出たくて、私たちは新居を建てることに夢中になりました。長男を宝塚の小学校に入学させましたが、日本語が完全でなかったことと、文化、習慣の違いから、友達からはばかにされ、先生からは自己主張が強いと嫌われてしまいました。アメリカ、カナダでは、自己主張することは当り前のことでしたが、日本では逆で、イエスでもない、ノーでもない、曖昧さがかえって美徳とされるようなところがあり、そ

れを子供に納得させることは大変でした。

日本の夏の暑さをやっと乗り越え、翌年一月、能勢電鉄沿線の日生松尾台に移り住みました。家の周りはゴルフ場があったり、田んぼや川があったりと、自然に恵まれ、子供たちは良い先生にも出会え、たくさんの方に可愛がられて、のびのびと育つことができました。工法も設備もアメリカと同じ、アメリカン・コロニアルの家は、二十数年前には珍しく、私たちの生活は快適でした。ケーキやお料理を作ってお友達を招待したり、ゴルフをしたりと、この世的に見れば何不自由ない生活でしたが、私の心はあいかわらずでした。以前にも増して本の虫となり、それまで読んでいた小説や浄土真宗の仏教書では納得することができず、心理学の専門書を取り寄せて読むようになっていました。読みふける度合いにしたがって自分の中がさらに分裂していくようで不安になり、それを打ち消すために、さらに本を買って読むという具合でした。これがだめなら、もう自分は終わりだと思うようになっていました。そんな生活も三年で終わり、主人のシアトル駐在が決まりました。自分たちの夢であった家も家具調度もすべて置いて、最低限の衣類と食器類だけを送り、渡航することになりました。子供たちは、たくさんの友人に見送られ、後ろ髪を引かれる思いで、彼らが心から故郷と呼べる地を後にしました。

二度目の駐在地のシアトルには、うれしいことに菅野さんがいらっしゃいました。彼女は高校生の時クリスチャンになられ、結婚とともに長く教会から離れておられましたから、それまでのお付きあいの中で信仰の話は聞いたことがありませんでした。二度目の駐在で、新たにイエス様

に立ち返られた彼女を見て、私は驚きました。菅野さんとの長いお付きあいを振り返ってみて、なぜ私が彼女に惹かれたのか、なんとなくわかった気がしました。しかし、聖書を説明してくれる彼女に対して私はすなおになることができず、いろいろな本を持ちだしては、反論を繰り返していました。

その後、彼女がお子さんの教育のために帰国されることになり、私は動転しました。知りあってからずっと、わがままな私をそのまま受け入れ、なかよくしてくださったのは彼女だけでした。そんな彼女に置き去りにされた思いがして、私はまたもや精神的に落ち込み、死ぬことばかりを考えるようになっていきました。土壇場に追い込まれた私は、開けてはいけない自分の中のごみ箱をイエス様なしに開けてしまったのです。収拾がつかなくなり、菅野さんが紹介してくださった多田さんに聖書をお借りして、読み始めました。そんな私に、イエス様はまっすぐに呼びかけてくださったのです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

このイエス様の言葉は、荒涼としていた私の心を、優しく包みこんでくださいました。今まで誰からも聴いたことのない、私の一番欲しかった言葉でした。この言葉は私の慰めとなり、真剣に聖書を読むようになりました。

そのような状態の時、主人にまた、東京転勤の命令が出たのです。子供たちも落ちついてきて

おり、ほんとうにショックで言葉も出ないほどでした。チェスの駒を動かすように簡単に人を動かしていく日本企業のやり方に、怒りが込みあげてきました。主人も今度は真剣に考えているようすでした。私たち一家がそれぞれの思いの中で心を騒がせている時、次男が教会の日曜学校からべニヤ板に貼った小さな一枚の絵をいただいてきました。その絵を一目見た時、私の心の中から不安が消え、言葉では言い表わすことのできない安心感と、喜びに満たされました。その絵は、荒れ狂う海の中に一隻の舟があり、その舟の中に一人の水夫が立っていました。その水夫の後ろにイエス様がおられ、左の手を水夫の肩に置き、右手で嵐の海の前方を指差しておられるのです。その水夫は、嵐をものともせず、しっかりと舟の舵を握り、イエス様の指差しておられる方向をしっかりと見て、その顔は平安と喜び、力強さに満ちているのです。

恐れるな。わたし（主）はあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。
（イザヤ　41・10）

まだ聖書を読み始めたばかりの私に、主は聖書の言葉だけではなく、この目ではっきりと見ることのできる一枚の絵を通して語りかけてくださったのでした。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。
（伝道者　3・11）

主のなさることは、こんなにも細やかで、完全であり、私の思いを遥かに越えていました。こ

の絵を通しての導きは、ただただ恵みであったと感謝でいっぱいです。主人が仕事のことについてどのような結論を出そうとも、イエス様は絶対に私たちを守ってくださる、という思いが、心を満たしていきました。

そして数日後、主人は二十数年勤めた会社を辞める決心をしました。子供たちのことも考え、また、自分自身のことも考えぬいた結果です。海外生活の大嫌いな私でした。でも、イエス様がいっしょなら生きていける、イエス様は絶対に私たちを捨てられないという思いが、その絵を見るたびに私の中で確かなものとなり、根を下ろしていきました。退職とそれに続くアメリカ永住が具体的に進んでいく数ヵ月間、その絵の語りかけに支えられ、私は不思議な平安と喜びに包まれました。

主人の新しい仕事も決まり、私は聖書を貸してくださった多田さんといっしょに教会へ通うようになりました。日曜日ごとのメッセージ、学び会、皆さまとの語らいを通してイエス・キリストを自分の救い主、主として受け入れ、一九八三年五月二十二日、五旬節の日に、滴礼による洗礼を受けました。その日から今日まで、主は私のような者を愛してくださり、それゆえに徹底的に砕かれました。

まず主は、肉体への痛みを与えてくださいました。首から始まり、両肩、両腕、背中と、ものすごい激痛に悩まされ、箸を持つことも苦痛になり、家事もできなくなってしまいました。二十四時間絶え間なく痛み続け、夜も眠られず、泣きながら祈り続けた夜もたびたびありました。西洋医学治療、東洋的な民間治療と、ありとあらゆるものを試みました。激痛からは解放されまし

たが、体の深い部分の疼痛、また関節、筋肉、腱の痛み、皮膚の焼けるような痛みは、十数年も続きました。痛みもさることながら、痛みからくる精神的落ちこみは、痛み以上に私を苦しめました。二度の大きな手術を受け、主は痛みに対して人間がどんなに脆いものであるか、私の弱さを十分に示してくださり、痛みの中にあっても祈りによって生活することを教えてくださいました。

私が尊敬している牧師がワシントンDCへ行ってしまわれた後、新しい牧師が教会に来られましたが、学び会も祈り会もなくなってしまい、礼拝でのメッセージも、牧師のお父様についての話が中心で、イエス様が全然見えなくなってしまいました。歩き始めたばかりの私は、導き手を失い、途方に暮れてしまいました。悩みぬいた末、人に頼っていたことを示され、別の小さな教会へ移りました。私が移った教会へ、前の教会から数人の方々も移ってこられ、三度目のシアトル駐在で渡米された菅野さんもともに集われるようになって、新しい教会生活が始まりました。学び会、祈り会も以前の教会と違って皆さん熱心で、私はこれこそ本当の信仰生活だと大喜びでした。しかし、自分が救われているという確信がどうしても得られず、だんだんと律法的になっていきました。痛みからくる落ちこみが始まると、自分の心を解剖皿の上に置き、あちこちメスで切り開くようなことを繰り返し、自分を責め、また、家族や周りの人々を裁くようになっていきました。

そのころ、婦人の集いのゲストとして、キリスト集会の山本さんがシアトルに来られ、証しをされました。山本さんが持ってこられた「実を結ぶ命」「光よあれ」の本は、日系の各教会へと手渡しされていきました。私と同じ教会の女性が婦人の集いの世話をしていた関係で、キリスト集

会の本やたくさんのテープが、教会の学び会を通して人から人へと手渡されていきました。菅野さんやほかの方々から本やテープを勧められましたが、頑固な私は読もうとも聞こうともしませんでした。

そんな私を主は憐れんでくださり、一度にたくさんのプレゼントを与えてくださいました。子供たちが次々に起こすトラブルで、親としてのプライドを、一枚一枚、むしり取られていきました。私は息子たちに怒りました。主人はいつも出張で家にいず、私はイエス様にしか頼ることができない状況に追いこまれました。そして、自己愛の固まりのような自分を主は見せてくださり、悔い改めへと導いて、子供たちとの関係を、正しいものへと変えてくださいました。

それでも懲りないかたくなな私は、情愛という部分で、主から続けて訓練を受けることになりました。主人と教会の知人を通して私の内側をもっと砕かれたのです。妻として、女として、主にある兄弟姉妹として、人を許すことのできない苦しみを味わいました。その許せない心の中には、ごう慢、自己中心、虚栄、妬み、怒り、さまざまな罪が渦巻いていました。罪の中にどっぷりと漬かって、罪と遊んでいるような状態が続き、祈ることも、教会へ行くこともできなくなり、「キリスト者にならなければよかった」などと思っていました。誰も愛せず、また誰からも愛されている実感がなく、主が遠い所におられるようで、孤独でした。

私は、そんな状態で初めて、キリスト集会のテープを聞くようになりました。聞けば聞くほど涙が出て、止まりませんでした。やっとの思いで出席した伝道集会でも、私は泣きっぱなしでした。こんな私でも、主は愛していてくださる、そのことだけで嬉しく、その他のことは考えたく

ありませんでした。その夜、帰宅してから聖書を読んでいましたら、それまで霧がかかったようでどうしてもはっきりと自分の中に入ってこなかった聖書の言葉が、どんどん入ってきたのです。私は驚き、嬉しくなって、家の中を飛び跳ねながら踊りまわったことでした。

その後も教会の礼拝に出席しない私に、菅野さんは、「恵みから落ちたいのか」と叱責の電話をくださいました。渋々と教会へ戻り、学び会へも出席するようになりましたが、できるだけ人とは言葉をかわさず、半分ふてくされていました。黙示録の学びの中で、次の部分を声を出して読むようにと牧師に言われ、読み始めました。

「わたし（イエス様）は、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、私の口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着か

せよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」（黙示　3・15～22）

私は、何かで頭をガンと打たれたような気がしました。この聖句は私を強く捉え、家に帰ってからも落ち着かず、心が騒ぎました。

数日後、ベックさんの「実を結ぶ命」というテープを聞いていました。二十歳のリンデさんがガンの病床にありながら主に従い通され、多くの実を結ばれたことを知りました。それにひきかえこの私は、主のみこころが何であるか、聖書を通してわかっているのに、従うことができないのです。従うことができないのではなく、従いたくないと思っているかたくなな自分がいました。その日の祈りで聖書の箇所を読んだ私は、心臓を素手で掴まれたようになったのです。それは、イザヤ書の次の言葉でした。

「…かえって、あなたの罪で、わたし（主）に苦労をさせ、あなたの不義で、わたしを煩わせただけだ。わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」（イザヤ　43・24、25）

心の中にどうしても引っかかって動かない、黙示録の言葉とともに、主は私の心を、揺さぶり続けられました。

洗礼を受けた時にいいかげんな悔い改めしかしなかった私に、主は過去のさまざまな罪を一挙

に示され、黙示録にある通りの人間であることを、口に出して告白し、祈るようにうながされました。そして、イエス様の十字架が私に迫ってきました。身の置き所のない、罪いっぱいの汚れた私に、「もうあなたの罪を思い出さない」と言ってくださったのです。それも、主ご自身のために、と言ってくださった……。私は赤ん坊のように、アンアンと泣きました。その時に私は、救いの確信をはっきりといただきました。心の中に渦巻いていた火の玉が消され、いらだたないようになったことも不思議です。それまでは、「私は駄目だ」と口癖のように言っていましたが、それを言わなくなりました。主の前に出るのも恥ずかしい、汚れた、弱い弱い私ですが、主に従いたいと心から願う者に変えられました。それからの私は、聖書の言葉を食べる喜び、祈れることの特権、家族の救いを心から祈り、確信するようになりました。どこにいても、テープを聞いていました。

そのように希望と喜びに満たされている私に、兄の食道がんの手術の知らせが入ったのです。私は福音を手紙にしたため、キリスト集会のたくさんのテープとともに送りました。この兄の病を通し、喉頭がんの手術をした姉がイエス様を救い主として受け入れ、洗礼を受けました。兄も手術後、「光よあれ」第4集に証しが掲載されている笹川さんの証しのテープを何度も聞いてすべてを悔い改め、主を救い主として受け入れることを祈り、天に召されました。兄のことを通して、母も福音を聞いてくれ、「イエス様を救い主として受け入れます」と、私とともに祈りました。兄の葬儀に帰れなかった私に、兄とともに祈ってくださった方から手紙をいただきました。その手紙には、「お兄さんは、イエス様の横で十字架にかかった罪人のようでした。誰が何と言おうと、

死ぬまでの二週間は、お兄さんの人生で一番幸福だったと思います。そしてお兄さんはイエス様のもとに帰られたことを、私は確信しています」と書かれていました。兄はたくさんの人々を悲しませた人でしたから、主の深い深い愛を、心から感謝しました。

その後、帰国した折に、菅野さんに連れられて、キリスト集会の皆さまのお宅で開かれている家庭集会へうかがわせていただくことができました。それまで、テープを通して声だけしか知らなかった、多くの方々とお目にかかることができました。そして、一九九〇年三月の西軽井沢での「よろこびの集い」に集わせていただき、初めてベックさんにお目にかかることができ、私は嬉しさのあまり飛びついてしまいました。そんな私に、「巳美子は喜んでいるねえ」と、ベックさんは笑っておられました。その折、たくさんの主にある方々とお話させていただきました。あの大雪の降った三月の西軽井沢「よろこびの集い」を、私は忘れることはできません。その後、たくさんの方々からテープを送っていただいたり、慰めと励ましをいただきました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

この聖句の約束に支えられながら、価値観がまったく違ってしまった主人とも、何とか暮らすことのできた私でした。

主人は、自分にも人にも厳しい人でしたので、息子たちは、主人の家庭内での絶対権力に萎縮してしまい、父親に何一つ自分の意見を言えない子供になっていきました。長男は試みと悩みを

通して一九九〇年に主を自分の救い主として受け入れ、十二月二日に洗礼を受けました。次男は、父親に認められない悲しさに苦しみ続け、長男よりも先に主を受け入れていましたが、年が若いという理由だけで洗礼を止められていました。長男の受洗で勇気づけられ、父親に、どうしても受洗したいと申し出ました。その日の日めくりカレンダーの聖句をちらっと見た主人は、次男の受洗を許したのです。私も、その日のカレンダーの聖句には驚きました。

「子どもたちを、わたし（イエス様）のところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」（マルコ　10・14）

イエス様のみことばは、頑固な主人をも押し止められたのです。

それまでは胸を張って、「主人を信じなさい。そうすればあなたも、あなたの家族も救われます」と、恐ろしいことを言っていた人ですのに、イエス様はほんとうにすばらしいお方です。一九九一年六月九日、次男は無事、洗礼にあずかりました。

その年の九月に、わが家に、今川ご夫妻とお嬢さんが来てくださり、私どもの家で家庭集会を開くことができました。今川夫妻の謙遜なお人柄に主人は驚き、何と、嬉々としてお話をしているのです。私は嬉しく、主のご配慮のすばらしさに感謝しました。

その後、主人といっしょに帰国しました。翌日、主人もともに吉祥寺キリスト集会の礼拝に参加するために、私についてきてくれました。今川夫妻から、「礼拝の前にベックさんと、お話していただくようにお願いしてありますから」と言われ、期待しての集会でした。その時のことは主

人の証しの中にありますが、私は隣ですべてを見、聞いておりました。そして主は勝利してくださったことをこの目で見、確信しました。その後で、ベックさんが二人そろっての写真を撮ってくださり、私はその時から礼拝と福音集会の間中、ずっと泣いていました。心から主に感謝し、嬉しさでいっぱいでした。たくさんの主にある方々のお祈りと励ましに支えられなかったら、今日の日はなかったと感謝しました。

救われてからの主人は、聖日の礼拝にきちんと出席するようになりました。日々の祈りも、決めた時間に欠かしたことはないと思います。自分で決めたことは絶対に守り通す人ですが、義務感の方が強かったと思います。主人の証しにもありますように、仕事はさらに忙しくなり、悲しいほどごう慢になっていきました。救われた喜びもつかの間、主人と私の関係は、以前に増して悪くなってしまい、顔を合わせれば口論となり、なさけない日々でした。特に信仰の話になりますと聞く耳を持たず、恐ろしい顔で怒鳴られることも多くなりました。「祈ってばかりいるから、健康にならないのだ」とか、「人の世話を焼くのも、ほどほどにしろ」とか、本当によく叱られました。でも、主人とともにこの世に流されていくことは絶対にいやでした。主人に従えば流される、主に従うように、そして従うことのできない自分から逃れるように、私は教会生活にのめり込んでいきました。多くの留学生と関わり、健康な方々と同じように教会のため、教会のためとがんばり続けていました。たくさんのできごとを通し、主は私に、人の目から見てどんなにいいことであっても、自分の思いでするなら絶対にいい結果にならないこと、自分のがんばりが主の手を止めてしまう恐ろしさを教えられました。そのころは、痛みも最高になっていて、体力の消

耗もひどく、血圧が異常に下がって、動くことも難しくなっていました。主人からは、「なまけている」と叱られ、どんなに痛みが激しいか説明しても、誰もほんとうのところはわかってはもらえませんでした。血圧は上が七十台になり、少し歩いても息切れがし、夏でも寒く、皮膚の焼けつくような痛みは、音も空気さえも体に刺さるように激しく、すべてのものが自分に突き刺さるようで、恐怖感に悩むようになってき、人前で笑顔でいることができなくなってしまいました。甲状腺機能低下症と診断され、薬をいただきましたが一向に回復せず、唾液が出なくなり、味覚もだんだんとわからなくなり、目も体も乾燥して、息を吸い込むのも痛みで辛いという欠陥だらけの人間になってしまいました。「主は私を、どれだけ試みられるのだろうか。もうこれ以上、耐えることはできません」と、叫ぶような毎日でした。膠原病の一種ではないかと医者から言われ、検査をするなら日本でしたいと思っていました。最後の治療法としてコーチゾンがあると言われ、一筋の光が射したように思いました。そんな状態なのにまだ、人の悩みごとの相談を受けている、愚かな私でした。

主は憐れんでくださり、ごう慢の絶好調にいる主人から、彼の一番大切な仕事を取り上げてしまわれたのです。私たちが何を言っても聞く耳のない主人でしたから、「お父さんが心から主の前に低くされるのは、仕事を失う時だから覚悟はしておこうね」と、息子たちとは話しておりましたので、家族は主人には申し訳ありませんが、かえって主に感謝しました。

苦しみの中に沈む主人に対して、教会の牧師は、聖書を通しての励ましも、悔い改めに導くこともしてくださいません。知識しか与えられず、話しあう場を整えても世間話に終わり、洗礼、

洗礼と言われるばかりで、霊的な交流は何一ついただけないことが、教会に対する主人の不満でした。私は耐え切れず、年配の方々に電話をし、「いつまで主人を放っておかれるのか、牧師に伝えてほしい」と泣き叫びました。六月四日、やっと牧師が訪問してくださり、主人を悔い改めへと導いてくださいました。しかし、これからの苦しみを、聖書の言葉の約束なしに、よちよち歩きの主人が、どうして乗り切ることができるでしょうか。私は、本当に悲しく思いました。そして、次の聖句を主人に送りました。

私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がり、やみの中に座っていても、主が私の光であるからだ。私は主の激しい怒りを身に受けている。私が主に罪を犯したからだ。しかし、それは、主が私の訴えを取り上げ、私を正しくさばいてくださるまでだ。主は私を光に連れ出し、私はその義を見ることができる。（ミカ　7・8、9）

それから一ヵ月後、七月九日に、私たち夫婦はそろって浸礼による洗礼を受けました。私は、一九九〇年から油絵を習っており、その絵を教えてくださっていた方が、ご夫妻で教会へ来てくださるようになっていました。その方々が救われ洗礼を受けられるまでは、この教会で我慢しよう、と心の中で思っていました。翌年のイースターに、お二人そろって洗礼を受けられましたので、私は安心して日本へ検査入院のため帰国しました。

検査の結果は陰性でした。喜んでいいのか、悲しんでいいのか、コーチゾン治療が最後の頼みと思っていた私の一筋の光も消えてしまった気がしました。「原因不明」。この四文字ほど辛いも

のはありませんでした。シアトルに帰った私は、主人に、キリスト集会のテープを手渡しました。そして、今までの十数年の教会生活で、知識だけは与えられたが霊的成長と覚醒は与えられなかったこと、霊の成長はキリスト集会のテープと本と、キリスト集会の皆さんと親しく過ごすことの中にあったことを、改めて思わされました。

それまでの私の教会でのがんばりは、主のためではなく、教会と牧師のためだったと気づかされました。そして、主から直接、「巳美子。あなたの羊飼いは、わたしです」と、言われたような気がしました。主は、主だけが羊飼いであるキリスト集会へと私を導かれました。北米、カナダの十数カ所を電話回線で結んだキリスト集会の礼拝にも加えていただき、イエス様だけが輝いておられる群れでの信仰生活が始まりました。長い長い私の旅も終わり、すべての重荷を主に委ねることができ、私は喜びでいっぱいです。焼けるような皮膚の痛みはまったく消え、その他の痛みも、ほんとうに軽くなりました。がんばるな、がんばるなと言ってくださる皆さんとのお付きあいは、もうがんばる元気のない私には、ほんとうの安らぎです。すべてをイエス様にゆだね、イエス様だけに栄光が帰される私たちの群れの牧場は、今日も青々と輝いています。

自分の愛する者に寄りかかって、荒野から上って来るひとはだれでしょう。

（雅歌　8・5）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道

に導かれます。たとい、死の蔭の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・1～4）

中央が美巳子さん。



ロス「よろこびの集い」で。





みんなにも知ってほしい

中津泰英　一九六八年神戸に生まれる。兵庫県川辺郡松尾台小、シアトル市ジェームス・マディソン中学、マーサー・アイランド高校、ワシントン州立大学建築学部卒業後、一九九二年に米国三井物産に就職。父泰明さん、母美巳子さん、弟泰治さん。趣味はベースギター、モータースポーツ、渓流釣りなど。

父の仕事の関係で、日本とアメリカを行ったり来たりしながら育った自分にとって「自分の故郷は一体どこだろう」という思いが常にありました。友だちを作っては別れ、作っては別れの日々が続きました。子どもの自分にとっては、これはかなり残酷なことで、「大人になったら、絶対に、日本の商社みたいな非情なところでは、働かない」と宣言していました。

中学生のころ、毎週日曜日に、母に連れられて、日系の教会に嫌々ついていきました。そのころは母親に対してかなり反抗的になっていたと思います。ただし、これは自分に都合のいいように記憶しているだけかもしれません。父は、すごくきびしい人だったので、間違っても反抗するなど思いもよりませんでした。そんなことをしたら本気で殺されると思っていました。父がきびしいので、反抗の対象は母になりました。今でも母に「あの頃のおまえの顔は人間の顔じゃなかったよ」と、よく言われます。

大学に入ってからは、家が遠いのを口実にして家から離れて暮らすようになり、だんだんと家

族との歯車がかみあわなくなりました。弟とは仲がよかったのですが、両親をけむたがるようになり、教会で顔を合わせるだけ、という時期が長く続きました。大学での専攻も、自分の好きな方向を選んだつもりでしたが、やはり、きびしい父の顔がちらちらと見える中で、将来、まともに収入を得られる学科を選びました。個人的には海洋生物学者になりたかったのを、建築家を目指して勉強するようになりました。

初めに通っていた教会を出て、ほかの教会に移り、初めて聖書を読むようになりました。いまだに読み始めたきっかけはわかりませんが、おそらく、自己中心的な気持で読み始めたと思います。でも、そのころから父親のきびしさに反抗してか、ものごとを自分でコントロールする力を鍛えようとしはじめていました。そして、なんでも自分の思った通りにならなければ怒りに燃えるような性格に変わってしまいました。その結果、自分の思う通りに動いてくれ、反応してくれる「機械」を愛する人間になってしまいました。

また車の運転では、スピード違反の「青キップ」をトランプができるくらいためてしまい、保険がかけられなくなり、結局父の厳命で、愛車を売らなければならない羽目になってしまいました。ものごとを自分でコントロールする力を鍛えている上に、自己のイメージ構築が第一といった建築学科はすべて白黒がはっきりした世界で、知らないうちに自分も殺伐とした性格に変わっていました。そんな性格ですから、離れて暮らしている家族とうまくいくはずもありません。でも、両親のすねをかじっている身だったので思いきったこともできず、車と学科以外は両親の言うことをしぶしぶ聞き従っていました。そのころから、自分の思うように物や人は動かないとい

うことを思い知らされ始めました。

ちょうどそのころ、教会の特別伝道集会に行く機会があり、そこで、ある体の不自由な先生の話を聞いていると、どこかが自分と違うことに気がつきました。今となっては当たり前に思えるのですが、そのころ自分には、イエス様を信じている人々が持っている「喜び」と「平安」がまるで理解できず、羨ましく思えました。特別伝道集会には、欠かさず毎日行きました。はじめは母親に文句を言われるのがいやでしぶしぶ行っていたのですが、後半は、自分で進んで行きました。最終日のメッセージが終わると、先生と奥様がたくさんのみことばを紙に書いてくださって、私は自分でも知らないうちに先生の奥様についてお祈りをしていたのです。

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。

（コロサイ　1・13、14）

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネ　5・24）

それから数ヵ月経って、洗礼を受けました。イエス様を知ってからは、コントロールする力を鍛えることもなく、ただイエス様にあって歩もう、自分の思っているようにいかなくても、イエ

ス様が最善の道を備えてくださるじゃないか、と思うようになり、一気に重荷が取り去られ、楽になった気がしました。

「やっちゃん、イエス様を信じると、楽になるよ」と言ってくれた、幼なじみの女の子がいました。洗礼を受けてからの数年は、「だまされたなぁ」と思いました。イエス様を信じるようになっても、十分苦しみがあるじゃないですか。その教会はかなり奉仕というものに力を入れている教会でしたが、教会の中の不一致や愚痴、ゴシップ話などを聞くにつれて「教会なんて入らなければ」と思うようにまでなりました。私もその中で、音楽の奉仕をしていたのですが、時がたつにつれて疲れてきて、愚痴をこぼすようになりました。

そのころ、つらい教会生活の中での励ましが、日本から留学でシアトルに来ていたある若い女性でした。心を許した人で、一時は結婚まで考え、両親も気に入っていた人でした。でも、彼女が最善と考えるみことばや信仰のあり方が、私にとっては逆に障害となり、自己嫌悪に陥ることが多くなり、かなりつらい思いをして別れることになりました。それから、「人」を信じることができなくなり、かなりさめたクリスチャンに変わってしまいました。

そのころ聖書で見つけて、大事にしていたみことばが次のものでした。

あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。

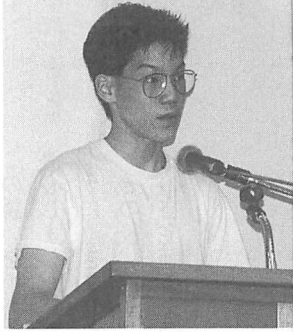
（イザヤ　41・13、14）



右、泰英さん。弟、泰治さんと

一九九七年十一月、キリスト集会のロサンゼルス「よろこびの集い」で、目が覚めたような気持になりました。「信仰のもちかた」や「どういった奉仕をする」という枝葉のことではなく、ただただイエス様が「大好き」でいることがすべての基本だとわかりました。三十歳にもなった男が「大好き」なんて普通は言いにくいのですが、やっと、その昔に「やっちゃん、イエス様を信じると楽になるよ」と幼なじみの女の子に言われた真意がここにあるんだとわかりました。

子供のころから疑問に思っていた「自分の故郷は一体どこにあるのだろう」という思いは、この世のことではなく、天にある希望だということがわかりました。数々の苦しみや体験を通して、イエス様がほんとうに自分を愛してくださっていることがわかり、今は幸せいっぱいの気持です。こんな小さな、いやしい者にまで、イエス様の愛が与えられていると思うと、涙が出そうになり、「イエス様、ありがとうございます」と声を出すのがせいいっぱいです。最後に、私の好きな賛美の歌の歌詞を紹介させていただきます。「私たちはみんな貧しいけれど、私は食べ物のあるところを知っている。みんなにも、知ってほしい」。イエス様に、心から感謝します。



イエス様の愛の中で

中津泰治

一九七三年ワシントン州シアトル市に生まれる。レークリッジ小、アイランダー中、マーサー・アイランド高、ワシントン州立大学社会学部卒業後、ボーイング社に入社。父泰明さん、母巳美子さん、兄泰英さん。趣味はギター。

自分にとってイエス様は、「光」そのものです。日本でYMCAの幼稚園に通っているとき、年に一度、クリスマスで話を聞くまで、イエス様が誰なのか知りませんでした。幼稚園では先生が、御飯を食べる前にお祈りをしなさいと言っていました。なぜ祈らなければならないのかは教えられませんでしたが、どうやって祈り、神様に感謝するのかを教えられました。私の家族は当時は信仰を持ってはいませんでしたし、ただ習慣で日本の宗教を続けていたように思います。だから、その祈りを通して、私が初めてこの家族に「祈り」を持って入ったと聞かされました。

私が一年生の初めに、家族はシアトルに移りました。生まれはシアトルでしたが、この時が自分にとって初めてアメリカ文化と衝突する時となりました。三年間というもの、英語を習い、まわりの人々に溶けこむことに一生懸命でした。

母は近所に教会の友人がいて、この方がよく訪ねてきてくれました。やがて母と兄といっしょに、何にもわからない状態で教会に行くことになりました。初めて行った教会の印象は、年寄りの人たちが神様と話をしに行くところだと思っていました。牧師の話は何もわからなかったので

すが、ただ聞いていなさいと言われて、おとなしくしていました。

何年かたって、教会で友だちができました。彼は遠藤君といって、遠藤かほるさんの息子でした。彼と遊ぶためにしょっちゅう教会に行きました。中学校に通うようになってから、イエス様は確実に私に働きかけてくださいました。遠藤君が夏のキャンプに一週間行かないかと誘ってくれたので、私もひまだから行くことにしました。が、出発の当日まで、このキャンプがバイブル・キャンプだとは知りませんでした。バイブル・キャンプだと知った後でも、二人でクリスチャン的なところは無視していればいいと思っていました。でも、キャンプに参加している人は、みんな明るく楽しそうにしているのです。なぜみんながそんなに楽しそうなのか、どうすれば自分もその喜びを手に入れることができるのかと思いました。そして、みんなといっしょに歌を歌っているうちに、ほんとうに楽しくなりはじめました。ある日、二人でキャンプ場にある湖のほとりに座っていたときに、バイブル・キャンプの年長の人がやってきて、イエス様について話してくれました。私たち二人が一番大きな声で歌っていたことを覚えていてくれたようでした。そしてその人が、「イエス様を信じれば一日中楽しく歌っていられるようになる」と教えてくれました。この誘いを拒否することはできませんでした。そしてその日に、私はイエス様のものになろうと決心しました。なぜかわかりませんが、キャンプから帰るとき、私は今までに泣いたことのないように泣きました。

その後、中学二年のときに、私は、学校に空気銃を持ち込んで、警察官とともに家に帰り、三日の自宅謹慎を受けました。その時に、本当に孤独で淋しい、なんとも言えない悲しい思いをし

ました。夏のバイブル・キャンプの喜びはどこかへ行ってしまい、必死になってイエス様に自分の心の中に入ってきてくださいと祈りました。その時に読んだ聖書の言葉が、今の私の土台となっています。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。（エレミヤ　29・11、12）

高校に入ってから、あまり勉強をしなくなり、成績も落ちる一方でした。学校のカウンセラーに大学に入るのは難しいと言われ、落ち込んでいたときに次の聖句が与えられました。

「わたし（主）は決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル　13・5）

初めに、シアトル・パシフィック大学というキリスト教系の大学に入学しました。そこで、教会を通して、ある女性と知りあいました。その人が私に、勉強面でどうすれば強くなれるか、そして、自分の将来について方向性を持つにはどうすればいいかを、彼女自身のことのように教えてくれました。そして彼女はワシントン州立大学に編入することを勧めてくれました。それで私はまじめに一生懸命勉強をし始めましたが、一回めはうまくいかず、二回めの挑戦であきらめそうになりました。その時に母が次の聖句を贈ってくれました。

「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」（マルコ　10・27）

この聖句を心に秘めて勉強を続け、なんとか念願のワシントン州立大学に編入することができました。そこでたくさんの友達ができました。編入するまで、色々なことでサポートしてくれた彼女とまじめな気持ちでつきあうようになりました。彼女といっしょに、祈りながら、お互いに励ましあいながら、将来の仕事を探したり、セミナーなどに行くようになりました。だんだんと成績も上がってきて、それにつれて私はごう慢になっていきました。すべてのことは自分の力のせいだ、と思っていました。そして、つきあっていた、ほんとうによくしてくれた彼女にまで、挑戦的な態度をとるようになりました。

卒業後、自分に合った職場を探すのに苦労をしました。いろいろなセミナーや講義に行ってみましたが、一つとして職を見つけることができませんでした。父親を通して探していた仕事の返事もなかなか決まらない状態が続き、いらいらしていました。その時に母がいつものように聖書の言葉をくれ、落ちついて待つようにと教えてくれました。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。（エペソ　6・1、2）

父の勧める就職の話は、夢のようなすばらしい条件でしたが、私はこれを取りやめてでも自分の力で仕事を探したい、と思っていた時でした。聖書の言葉の通りに歩もう、また、父の話にも従おう、と思って待っていました。何週間待っても返事が来なかったところへ、突然ボーイング社で人を探しているというニュースが入ってきました。父が、「お前が行きたいなら、ボーイング社に行けばよい」と言ってくれましたので、飛びつきました。その仕事は、社長の直属の方々から学べるといったすばらしい待遇と部署でした。でも、しばらくしてその部署も解散することになり、また、ボーイング社の内部で別の仕事を探さなければならなくなりました。そんな混乱の中で、つきあっていた彼女と交際を続けることが難しくなり、今まで体験したことのない、抜け道のないどん底を経験しました。でも、聖書の言葉通りにイエス様は私を見捨てられませんでした。やがてボーイング社で、機械工学部門の中で新しい仕事に就くことができ、感謝しながら今でもそこで働いています。

毎日の祈りを通して、はかりしれないイエス様の恵みと愛の中で自分が生きているということを知らされました。たくさんのすばらしい人々を、イエス様は私のまわりに置いてくださり、自分では不可能なことを一つ一つなしとげてくださいました。私が行くのも帰るのもイエス様は知っていてくださり、私の中でイエス様が働いておられるのがよくわかります。これからも私とイエス様の関係を強めてくださり、私が決してイエス様の道を見失わないようにと祈っています。

愛の神に救われて



ロスにて。左端が喜代子さん。

グラハム　喜代子

一九二九年横浜市に生まれる。浜町小、鶴見高女、御殿場実業学校。ノースキャムプ富士通信課勤務。エドさんと結婚、メリーランド州に渡る。カリフォルニアから日本を経て現在デンバー在住。



トロントにて。

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。
（ヨハネ　4・24）

私が教会というものに初めて出会ったのは、一九五四年ごろ、ノースキャムプ富士の通信課に勤めていたときでした。仕事のために寄宿舎に住み、その寄宿舎は富士山麓にあり、朝夕富士山を仰いで暮らすという快適な生活でした。ある日、あまりにも美しい夕暮れの富士山に誘われ、友だちと富士山に向かって歩き出しました。その途中にある教会から流れてきた歌声に惹かれ、私たちは教会の中に入り、後ろのベンチに座り、会堂の中を見まわしました。教会に入ったのは初めてのことでした。

私が卒業したのは仏教系の女学校でした。二年生の時に、学校が火事で半焼し、校舎が再建されるまで私たち下級生は総本山である総持寺の一部を仮教室として使うことになりました。全国から集まってくるお坊さんたちのきびしい修行のありさまを、垣間見ることも多く、私は仏教を特に信じてはいませんでしたが、それでも毎朝学校で観音行を唱え、時々経典の講話を受けました。そのころは修身の時間もあり、善行、道徳といって倫理の教えが少しずつ身に染まっていきました。

そんな私が初めて入った教会は、質素なたたずまいで、私が知ってる寺院の華麗さはないけれど、清らかだと思いました。しかし、イエス・キリストについては、キリスト教の中心で、その誕生日をクリスマスと呼び、その日にはケーキを食べ、家の中に飾りつけた木を置き、その下に

プレゼントを置くといった程度の知識しかありません。ましてそのキリストが二千年前に十字架にかかられたことが、現在の自分に関係があるなど、考えることもできませんでした。

やがて、讃美歌の練習が終わると、牧師が、オルガニストで通訳の方を連れて私たちのところにこられて、「水曜日のバイブル研究の会と、讃美歌の練習に来ませんか」と誘われ、続けて神様のこと、イエス様のことを話しはじめられました。私は、「これは信仰勧誘だ」と思い、「私は仏教ですから、遠慮します」と答えました。しかし毎週水曜日の聖書の勉強は英語に慣れるのにいい機会だと思い、讃美歌の練習は苦手でしたが、その後にあるケーキとコーヒー、そして若い海兵隊の方々との語らいも楽しく、友だちと通いました。でも、週末は父母の家に帰りましたので、その教会の日曜礼拝には出席しませんでした。

教会のライト牧師は、「仏は木や石と同じだ」とよく言われます。私も、「仏像は木や石で造られているのだから」と思い、反論しませんでしたが、よく牧師が言われる「私は罪人である」ということが納得できません。それで「水曜日は楽しいけれど、もう行くのをやめよう」と思っている矢先、牧師は、私の父母の住んでいる町にも教会があると教えてくださいました。迷いましたが、「一度くらい行かないと悪いかな」と思い、日曜日に、住所を見ながら探しましたが、訪ねあてたそこには教会らしい建物などなく、理髪店がありました。「住所が違っている。帰ろう」と思い、もう一度ガラス戸の中をのぞくと、中から女の人がドアを開けて、「よくいらっしゃいました」とにこやかに迎えてくださいました。そして私は店の真ん中に置かれたベンチに案内されました。

その日、聖書のお話をしてくださった方がどなただったのか、何をお話されたのか、まったく記憶にありません。横を見ると、理髪店内の大きな鏡に私の顔がこわばっているのが映っているし、反対側を見ると、ガラス越しに外を歩いている人が見え、落ちつきません。「早く終わってほしい」とだけ、願っていました。

次の水曜日、牧師に「紹介していただいたところは、教会でなく理髪店でしたよ」と報告しました。しかし、牧師の反応は、思いもおよばないものでした。彼は「その理髪店に集う人たちのために、教会堂が与えられるよう、祈りましょう」。そして、祈るのです。日本は当時復興の途上で、活気はありましたが、まだ豊かでなく、私たちの生活は自分たちが生きるのにやっとで、数人の信者のグループが教会堂を建てることなど考えられないことでした。ところが、牧師は、「神様のみこころなら、必ず、この小さな群れに教会堂が与えられる」と信じて疑わないのです。神様に感謝の祈りを捧げる牧師に、「クリスチャンとは、夢のようなことを信じる人たちなのだ。ほんとうに、そんなことを信じるのだろうか」と思いました。

しかし、その「夢のようなこと」が実現しました。牧師のお父様はアメリカで理髪店を経営しておられましたが、その話を聞いてアメリカの理容組合のクリスチャンと、お父様の行っている教会に呼びかけ、多額の献金を送ってこられ、また、当時のノースキャンプ富士に駐留していたクリスチャンたちの献金で、現在平塚にある教会の基盤となる土地と、小さな祈りの家が与えられました。それは、宗派を超えた愛で、神様のなされたことでした。

このように奇蹟を目にしながらも、私は心を開かず、神様の力よりも人間の善意、親切、行動

力に感激していました。

そのころから聖書を読むようになりましたが、「ああ、この箇所は、仏教で教えていることと似ている」とか、「これは修身で習った」などなど、すべて、人の行ないに結びつけて読んでいたのです。そして、自分は律法にかなう生き方をすれば清められるんだ、と錯覚し、自分が罪人であり、神にそむいている者であるとは考えもしないごう慢な者でした。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

（箴言　28・13）

ずっと教会に通っていましたので、まわりの方々から、「洗礼を受けませんか」と言われ、焦りました。そして、救われているという確信がないままに洗礼を受けましたが、その結果はみじめでした。救いの確信を得たいと一人で聖書を読み、自分にきびしくなり、その結果はイエス様の嫌われる高慢で人を裁く愛のない者となり、私自身もそんな自分がいやになりました。教会に行かなかった昔の、のびのびとしたころがなつかしく、仕事が東京に移ったのを機に、教会から遠ざかりました。自分から進んで昔の快適な生活に戻りましたが、友だちにかこまれ談笑していても、時々むなしくなり、「私は何をしているのだろう」と、心が凍るような淋しさに襲われるようになりました。

そのころ恋愛をしましたが、結婚の話になると、脳裏に「結婚は、クリスチャンとしなさい」と言っておられた教会の方の言葉がふしぎに浮かんでくるのでした。

「私は信仰から落ちこぼれてしまった」と思いこんでいましたが、聖書に書かれている言葉や、牧師の言われた言葉は、時々思い出されて、私の良心を刺しました。そして、おつきあいをしている相手がクリスチャンではないということで、結婚に踏み切れませんでした。一生一人で生活できたら、それも一つの生き方だと思えました。しかし私は、英文タイプしか能がなく、性格はプライドが高く、気弱で脆いので商売にも向いていない…。今では、キャリアウーマンとして、熟年になっても仕事をしている方が多くなっていますが、当時は、三十歳前後になるとまわりの口がうるさく、将来への不安と淋しさを痛感しました。

そんなとき、たまたま同じ職場に配属されてきた男性がいました。彼は年も取っていて他の人より落ちついて見えました。やがてデートをするようになり、そんな時の彼の節度ある態度に好感を持っていましたので、結婚を申し込まれたとき、国籍の違いに抵抗を感じましたが受けようと思いました。彼は時々基地内の教会に、私といっしょに日曜礼拝に行きました。私のまわりの結婚をしている方々の幸せそうなようすを見て、ただその時の淋しさ、虚しさを埋められたらと結婚してしまいました。親の心配と悲しみにも耳を傾けず、自分の結婚は自分で責任をもつと言いました。このような結婚が、神様に祝福されるはずがありません。その結婚生活は、ふたをあけてみると、苦しみの連続でした。

デートをしていたときは、食事のときのワイン、食後のブランデー、そして映画や音楽を楽しんだ帰りの一杯。それはごくふつうの節度ある態度でした。そして私を家まで送り、帰った彼。でも、私が節度ある態度と思ったのは私の独り合点で、彼は早く私を送り届けて、バーに飲みに

行きたかったのです。

彼は、アルコール依存症でした。私の父は、お酒が飲めない人、おちょこ三杯で苦しくなるような人ですので、アルコールの恐ろしさには、まったく無知でした。彼は暴力は一度も振るいませんでした。しかし、アルコールによる誇大妄想、賭けごと、金銭に対する責任感覚はゼロ。AAミーティングとともにアルナンミーティングがあり、これは、アルコール依存症の家族のためのもので、その集まりに出席したときに、いろいろとアルコール中毒という病気について説明を受け、それに対処する家族の心得などを勉強しましたが、なかなかその通りにはできません。彼はたやすく借金をします。そして、借金の嫌いな私は、それを払ってしまう。このように、彼の尻拭いで結婚二年半たったころには私の貯えは底をつきました。そして、アメリカに行くことが決まったとき、大きな不安を持ちました。

彼は、「アルコホーリックでない」と否定しますが、アルコールなしでは過ごせなくなっています。離婚を考えました。しかし、私たちには娘が生まれてきました。

妊娠がわかったとき、生むべきか否かと迷いましたが、私の高年を考えたら、今生まないと一生子どもは持てないのではないかという恐れがあり、また、アルコホーリックのほんとうの恐ろしさを知っていないので、子どもを持つことに決めました。友だちは、「子どもが生まれたら彼は変わるから心配するな」と、いろいろと例をあげて慰め励ましてくれましたが、アルコホーリックとは、そんなに生まやさしいものではありませんでした。

私は離婚を真剣に考えました。混血の娘が負わねばならぬ重荷は、日本の方が重いかもしれな

い。まだしも人種のるつぼであるアメリカのほうが、娘が生きていきやすいのではないだろうかと迷いました。そのころ読んでいた聖書の言葉が心に浮かびました。

「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。」と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。（マタイ　19・5、6）

神様のみこころを聞かず、自分で選んだ結婚。そして失敗。この上さらに離婚までしたらどうなるか、と恐れの気持もあり、離婚は彼から言い出すまで待ってみようと思いました。次のみことばに頼ってみようと思いました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（Ⅰコリント　10・13）

そして、一九六五年六月、初めてアメリカのメリーランド州に来ました。それから一九六七年一月カリフォルニアに移り、六八年十二月から七一年五月まで日本に住みました。日本にいたときに私の父母がなくなり、二人が死ぬとき、特に母の死の直前に、母にわたしの親不孝を謝るこ

とができました。そして七一年五月、コロラド州のデンバーに来ました。夫の飲酒量は確実に進んでいます。給料だけでは足りない夫は、次々に高利の借金をして払わないので、家に催促の電話がかかってきます。それで私は新しい借金が増えたことを知る、といったことの繰り返しでした。高利貸の取り立て業の人たちは、昼も夜も週末も過酷な言葉を使い、返済の催促はきびしく、私は電話のベルに脅え、幻聴に悩まされ、私の神経はいつ切れてもおかしくない状態でした。そのうち、電話局から電話を止められ、不自由よりもベルが鳴らないことに気持ちが安らぎました。

このような状態にありながら、人に助けを求めることができませんでした。この地にも日本の方が住んでおられましたが、私は避けていました。というのは、深く心を傷つけられた過去の苦い経験があるからです。でもそれは、私のプライドが傷ついただけですが、高慢な私には耐えられない屈辱でした。また、カウンセラーに会うことも無駄だと思いました。理由はまず、私の語学力の低いこと。そして日本で戦争中の教育を受けて育った私と、アメリカで育ったカウンセラーではものごとの受け取りかたの相違があまりにも大きく、彼は私を正しく把握できないし、私も彼の話すことに納得できず、中途半端でかえって苛立ち、失望したことが二度もあったからです。

私の苦しみの叫びは、夜、一人のベッドルームで、神様に助けてくださいと祈り、また、どうしてなのですかと恨み、天の救いを祈り、ついには母の名を呼んで涙を流したりの日々でした。孤独でした。そのころの夫との間には会話はまったくありません。街中に住んでいるのに、砂漠に一人、放り出されているようでした。

そして、ある夜のこと、祈り泣いたあと、月明りの薄いカーテン越しに、窓の黒い桟をぼんや

りと眺めていました。はじめはただ眺めているだけだったのですが、その黒い影の十字が、はっきりと十字架に見え、それがだんだんと大きく私に迫るように見え、胸が騒ぎました。これは何なのだろう。今でもその時の状況はうまく説明できませんが、私は心の中で、「私の祈りは間違っていた」とわかったのです。私は夫の救いを祈りましたが、それは、「夫を愛して、夫だけのために」彼の救いを祈ったのではありません。夫が神様に救われたらこのトラブルの山から解放されるという、結局は「自分の利益のために」祈っていたのでした。私は自己中心の罪を示され、知らされました。その夜、初めて真剣に、神様に私の罪を謝り、「夫をイエス様におゆだねします」と祈ることができました。

その夜から幾日もたたないうちに、夫は軽い脳溢血で倒れ、病院に運ばれました。血を薄める点滴をし、医者からは「内視鏡検査をしてその結果を見ないとわからないが、九十パーセント咽喉がんだ」と言われました。アメリカの医者、ことに軍の病院だからか、家族に話す前に、すでに本人に伝えてありました。脳溢血、そしてがんというショックに加えてアルコール禁断症の妄想が出てきて、昼となく夜となく大騒ぎを引き起こし、個室に入れられていましたが、点滴を勝手に外し、病院のパジャマで抜け出して警備兵につかまり、病院に連れ戻されました。医者に「あと二日、この点滴の治療をしないと、二度目の発作が起きる可能性が高く、運が良ければ死ぬが、運が悪ければ一生、植物人間として生きる」と脅かされていましたが、案の定、一月もたたないうちに二度目の脳溢血になり、幸い植物人間にはなりませんでしたが、全身麻痺、そして言語障害が起こりました。しかし彼は必死のリハビリをして、常人近くまで戻りました。

この脳溢血で彼の脳の一部が死んだため、思考力の一部が回復できず、彼にとって、病気になってから救われるまでの一年は、混乱と苦しみの日々でした。身体は不自由となり、あんなに飲み友だちと議論することが好きだった人なのに、その飲み友だちは一人も来てくれなくなりました。そのかわり、私の行っている教会の方々が、入れかわり立ちかわりお見舞いに来てくださいます。彼はその人たちに、聖書に書かれていることについて反対したり、議論したりしたいのですが、脳溢血の後遺症による言語障害で、自分の言いたいことが表現できません。右と言うつもりが口から出るのは左というように、いらだつことばかりのようすでした。席を立ってガレージにこもって好きな大工仕事をするつもりでも、今までかんたんにできた木片のコーナーのカットすらできず、またいらだちます。そのころ高校生だった娘の言動は、いっそう彼をいらだたせ、怒りを爆発させます。わが家で一番の被害者は娘となり、そのころの娘はほんとうにかわいそうでした。

この気難しい夫が救われました。それは一九八一年の九月のことでした。私の行っていた教会は、人員が増え、朝の礼拝は二度に分けており、私は、朝早い時間の礼拝に行っていました。その日も家に戻ったところ、夫がいませんでしたが、気にも止めていませんでした。すると電話が鳴り、私のサンデークラスの先生ミリーから、「喜代子、エドが救われたよ」。私の足はガクガク震え、「ミリー、本当なのね。神様ありがとうございます」とくりかえすばかりでした。その年の十月四日に彼は洗礼を受け、新しく生れ変わりました。私はそれまで信仰の深い信者の方にも何人かお会いしましたけれど、その方々の信仰前の姿を見ていませんので、新しく生まれ変わるということを概念的にしか知りませんでした。私はアルコール、賭、病気などで問題だらけの夫と

二十年近くいっしょだったのですが、新生後の夫には、ただただ目を見張るばかりでした。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

夫を見て、みことばに忠実に生きるとは、こういうことなのだ、とわからされました。私は自己中心的で、この世と妥協ばかりしていることを恥ずかしく、情けなく思いました。夫の咽喉がんも、放射線の治療が成功していましたし、結婚以来初めての、落ち着いた日々でした。

まず借金を返して、娘が独り立ちしたら二人でアメリカの各地を旅行しようと、夫は優しいことを約束してくれました。しかし一九八三年ごろ、彼は食事を飲み込むことが難しくなり、がんの再発かと心配しましたが、CTテスト、血液のテストなどで、がんではなく、食道の管が硬く、狭くなったということで、それを広げる治療を受けました。その治療は、荒っぽい治療のようでした。歩いて治療室に入り、出てくるときはストレッチャーに寝かされ、Tシャツに血が点々とつき、口のまわりにも拭き残された血がついていました。三ヵ月も続けたでしょうか。いっこうによくならず、またがんの検査をして、やっとがんがあることがわかりました。しかし場所が悪く、手術も放射線療法もできず、残る治療法は抗がん剤の治療しかありません。今から十五年前の抗がん剤は、投与されている間中ほんとうに苦しそうでした。ついに一滴の水も喉を通らず、胃にチューブを通してチューブから栄養をとり、絶えず吸引器で口の中の唾を取り、寝るときも座ったままの姿勢で横にもなれなくなりました。

それでも夫はイエス様に守られ平安で、辛いとも苦しいとも愚痴をこぼしません。いつもおだやかで聖書を読み、教会の友だちが来ると、嬉しそうに話を聞いています。一方の私は、醜いものでした。彼の信仰が妬ましく、私は三十年近いクリスチャンなのに、私の方が聖書にくわしく祈りの数も多いのに、平安がない。なぜだろうと思いました。

人の怒りは、神の義を実現するものではありません。ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。（ヤコブ　1・20、21）

私の心の奥底には、完全に夫を許していない思いがありました。その醜い心が、夫の信仰を妬みました。

一九八五年、夫は神様のもとに召されました。夫が召された後、私はよく、夫の信仰生活と自分の信仰生活を比較してみました。教会にも欠かさず行き、奉仕もし、献金も収入の十分の一しているけれど、私は夫のようでない、夫のように喜びがない。心から湧きあがる喜びをもってイエス様を賛美したいと願いましたが、どうしたらそうなれるのかわかりません。悩みました。

そのころ、仕事でデンバーに来られたある方から「光よあれ」の本をいただき、吉祥寺キリスト集会に集っておられること、そして、カリフォルニアに集っておられる方々の電話番号をいただきました。「光よあれ」の証しを読んで、私は興奮しました。もっと読みたくて、電話をして本を送ってもらい、全部読み、今度日本に行ったら必ず吉祥寺キリスト集会に行こうと心に決めま

した。そのうち、ロサンゼルスで第二回の「よろこびの集い」があると知りましたが、同じ時にちょうど姉二人が来ることになっていて、久しぶりに会う姉たちのもてなしに気をつかい、ロサンゼルスに行きませんでした。その次の年のロサンゼルス「よろこびの集い」には、行けますようにと祈りました。

そして第三回「よろこびの集い」が、ロサンゼルスのサン・ペデロで開かれ、出席しました。アメリカに来て、このように多くの日本の方々に会ったのは初めてでした。第一日の夜の集会は、期待しすぎたせいか、少し物足りなく感じました。ホテルのロビーに来ると、ベックさんが人々に囲まれておられました。お話をしたいと思いましたが、気おくれがして部屋に戻り、夜の集会について考えてみました。「とにかくここまで来たのだから、全日程を終えて帰ろう」と思い、眠りました。長い間、私は自分が信仰を持っている人間と思っていました。しかし、新生した夫を見てから、「私の信仰は砂上の楼閣なのだ。しっかりとした岩の上に立つ信仰を持ちたい。すべてを主に委ね、みことばに生きる者になりたい」と強く願うようになりました。翌日の日曜礼拝に出た私は、礼拝様式の違いに初めは戸惑いました。そのうちに私は、みなさんと心をあわせてイエス様を賛美していました。長い長い時を越えて、聖書にある初代教会の聖徒たちとともに主を賛美しているような気持がしてきました。

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。

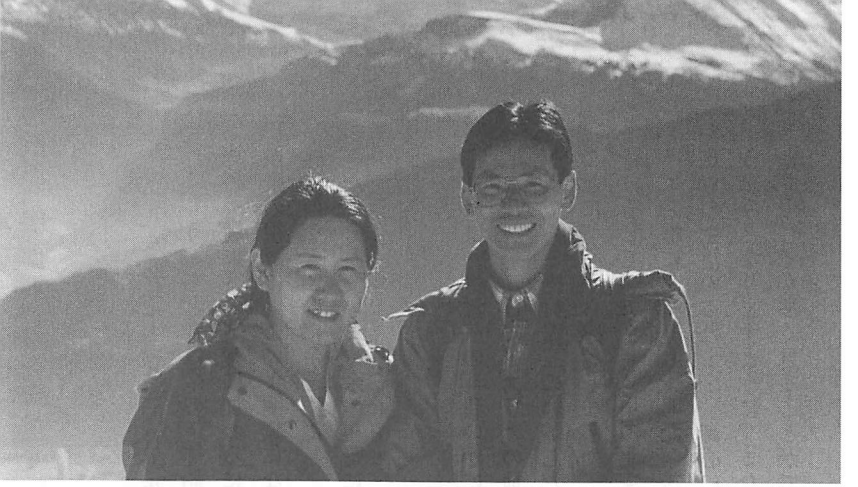
（ヨハネ　4・24）

その「よろこびの集い」で、別に劇的な説教があったわけではありません。しかし、主はあわれんで私の自己中心のごう慢の壁を砕いてくださったのです。心の底から喜びが、泉のように湧いてくるのです。主に赦されたと確信しました。この三十数年、主は忍耐をもって愚かな私を見捨てられませんでした。

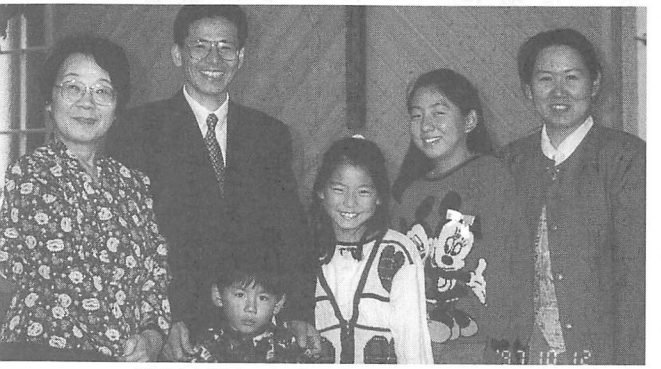
主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。（詩篇　86・5）

もちろん、弱い私です。悲しみや心配ごとがなくなってしまったわけではありません。でも、イエス様にすばらしい平安をいただいております。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。（ピリピ　4・6）



スイス「よろこびの集い」で。奥様の温子さんと。



ご家族と中森さん。

与えられた真理への道

浅野　寛治

一九五六年徳島県に生まれる。垣原小、吉野中、阿波高、徳島大学工学部卒業。日本テキサス・インスツルメンツに勤務。一九九五年十二月より米国テキサス州ダラス本社で、新しいビジネスシステム開発のプロジェクトに従事。IT（インフォメーション・テクノロジー）部門ロジスティックス・システム・マネージャーを経て一九九八年帰国。日出工場に勤務。大分県別府市在住。家族は妻温子さん、長女可奈子さん、次女千恵子さん、長男直人（すぐと）さん。

「一八八四年十一月二四日の夜明け方、余の狂喜した目はまず基督教国のかすかな光景をとらえた。もういちど余は余の下等船室に降りた。そこで余はひざまづいた、――その瞬間は余がその時の一般乗客の興奮に加わるにはあまりに重大であった。低いコースト・レーンジ（海岸山脈）が余の視野にいよいよ明瞭になってきた時、自分の夢はいまや実現せられつつあるという感じが感謝の念とともに余を圧倒し、涙ははげしく頬を流れ落ちた。間もなくゴールデン・ゲートを過ぎた。そしていまや余の視野に現れた煙突としょう頭は、すべて天を指す教会の尖塔のように見えた。」

これは内村鑑三の「我いかにしてキリスト信徒となりしか」の一節です。私たちは一九九五年十二月二十五日にアメリカの地に来たのですから、百十一年後のことになります。信仰の先達の一人である内村鑑三の経験したことの一端を、この、アメリカの地において、自分も体験できたことに、心から感謝しました。私たちはもちろん空路アメリカに渡りましたが、日本を飛び立つ時、そして、テキサス州の北東部に位置するダラス・フォートワース空港に着陸する時、心からイエス様にお祈りしました。後にしてきた別府のこと、また、長年憧れてきたアメリカでのこれからの生活のこと……。御心によって導かれた私たちのアメリカでの生活が、主のみむねにかなう歩みとなりますように、また、私たちの体験するアメリカでの生活を通して、イエス様のご栄光を少しでも多く見ることができますようにと。

生い立ち

私は一九五六年四月二十五日、徳島県板野郡吉野町という田舎町に生れました。町は、人々が「空（そら）の方」と呼んでいた西の山間の池田町から東の紀伊水道に面した徳島市の河口に向かって東西にまっすぐに伸びた吉野川の下流にさしかかるあたりに位置していました。北に阿讃山脈、南に四国山地を仰いだ川の北岸の平野部で、農業以外これといった産業もなく、また名所旧跡もない、平凡で、またのどかな田舎町でした。

早くに両親を亡くした一人っ子の母と、恋愛結婚のようですがいわゆる婿養子として徳島県の農家の三男であった父が母のもとにやってきて、その二人の間に与えられた初めての子供が私でした。後に三人の男の子が与えられたようですが、結局、二歳九ヵ月下の弟の敬朗だけが元気に育ち、二人兄弟で育ちました。

両親とも働きに出ており、生後一ヵ月くらいから、私は昼間両親が働きに出ている間だけ近くの知りあいの人の家に預けられました。正式に両親がお金を払って預けた期間はもっと短かったようですが、私は後々になっても毎日その家に出入りし、週末はよくその家に寝泊まりしていました。ですから、私の幼い日の記憶には、その家でのこと以外は、何も覚えていません。

この家の主は、有特静江さんという明るく優しい、当時四十代後半の、一女二男を持った未亡人でした。当時の私は知る由もありませんでしたが、早くに夫に先立たれ、育ち盛りの子供たちを抱えられて大変苦労されたようでした。小さなよろず屋とお好み焼き屋を営みながら、日雇いの仕事などもしていたようです。そして、子供たちも成長したので、少し楽な仕事をと私を預る

ことになったようです。

私は、この有特のおばちゃんや、その子供たちにもたいへん可愛がられました。私も、おばちゃんやこの家が大好きでした。ですから私は、できるだけ長く、その家で過ごすことさえできれば幸せでした。後に井上靖の「しろばんば」を読むようになった時、その中のおぬい婆さんを有特のおばちゃんに、浩ちゃんを私に重ねあわせ、彼らに何ともいえぬ深い共感と心からの親しみを覚えたのでした。おぬい婆さんと同じように、有特のおばちゃんは、私が近所の年上の子供たちにいじめられそうになる時などは、理不尽なほどに私をかばい、私の味方をするのでした。

そのような幼いころの楽しい日々が、ある日突然破られる時がやってきました。私が小学校に上がって初めての夏を迎えようとしていたころ、たくさんの大人たちが集って、私の慣れ親しんでいたおばちゃんの店と家から家財道具を運び出していました。おばちゃんはその店や家をたたんで、息子さんたちが住むことになった徳島市内へと引越すことになったのでした。ただ私は、このことがよくわからないまま、引っ越しの車にいっしょに乗り、おばちゃんが住むことになったはるか遠くの新しい家まで乗っていきました。そして、長男の正雄さんが、再び私を家まで送り届けてくれました。チョコレートやキャラメルなどのお菓子を持たせてくれ、引っ越しのときに出てきたたくさんの小銭が入ったビンが、私の手に持たされていました。

そのようにして、初めて私は、心から愛した人々が私を遠く離れていった事実を実感したのでした。私の記憶には、そのたくさんの小銭が入ったビンを両手に抱え、家の隣りの林の中に入り込み、誰にも知られず一人泣きじゃくっている、幼い日の自分の姿があります。「こんなに悲しく、

淋しいことがあるものだろうか」という、繰り返しこみ上げて来る悲しみの中でもがき苦しんでいた幼い自分の姿の中に、どのような手段や方法によっても完全に満たされることのない、人が本質的に持っている虚しさと孤独の深淵を見る思いがするのです。

少年時代

おばちゃんの家から独立しなければならなくなった私は、田舎では珍しい鍵っ子となり、弟や近所の同年代の友だちたちと、隠れんぼ、缶蹴り、鬼ごっこ、後には草野球、釣り、川での水泳、また冬はチャンバラ、隠れ家作りなど、ありとあらゆる遊びに夢中になりました。小学校四年生になると、学校に新しくできた少年野球チームに入り、毎日野球に明け暮れる生活となりました。

何の心配もなく、天真らんまんに日々を過ごしていたように見えますが、実は私には毎晩おねしょをするくせがありました。物心ついたころから中学二年の中頃になるまで毎晩、冬の寒い日など時には一晩に二度も。小学校の高学年の頃、見かねた親しい近所の人が、年に一度県内のどこかの神社か寺で行われていた「火渡り」のようなものに私を連れていってくれましたが、期待も空しく効き目はありませんでした。他の近所の人や友だちに、どれだけこの事実が知られていたかは知りませんが、当時の私としては、他人に知られたくない、ほんとうに恥ずかしい悩みでした。ずいぶんと母に迷惑をかけたこの問題が自然と解決されたころ、私は中学から近くの高校に新設された理学科へと進む時期となっていました。

中学の後半は、高校受験の準備期間という色彩が強くなりました。田舎の学校にも受験教育は

浸透していたらしく、高校になるとますますその傾向は強まり、ほとんどすべてが大学受験色に塗りつぶされます。無邪気に育ってきた私には、これら暗黙の了解のような仕組みに納得のいかない思いを持ちながら、かといって何か反発できる確固としたものも持たぬまま、体制の流れに沿って進んでいかざるをえませんでした。やはり、大学に入らねばなるまいと考えていました。また、父が建築関係の仕事で、図面を引いたりしていましたから、私も何かエンジニアになるのがいいのかなと漠然と考えていました。

自分がほんとうにしたいこと、するべきことが何であるかがわからないままに、テストの点数の結果という価値基準が私たちの将来の進路の大勢を決めていく現実を、無抵抗に受け入れる以外になすすべを知らなかったのでした。そのようにして私は、地元の大学に新設されて間もない、情報工学科に入りました。

内なるものへの渇望

さて、ひとたび無事に入った大学では、それまで押さえつけていた生活と疑問への反動のような日々が始まりました。抑圧され、ねずみ色の雲が心に垂れ込めたような高校生活からの解放とともに、大自然は木々が芽吹き、自然の生命が躍動する春の季節を迎えていました。そのような中で、新たに始まろうとする学生生活やその後に続く未来が、春の季節と同じように明るく、希望に溢れたものになるかもしれないと、夢想していたのかもしれません。

当時私が求めたものは、自由と希望と喜びを持ちながら、「人が真に生きるためにはどうすべき

か」という問いに対する答え、そして、表にはあからさまに現われ出てこないけれども、明らかに意識の底にむずむずとしていた幼い「異性への憧憬」でした。

まず最初の答えを見つける手始めとして、私が心の中に持った思いは、「何でもいい、ただ一つで構わない、大学生活を通して熱中し、このことだけは大学時代にやりとげた」と言い得るようなものを持とう、というものでした。そして、それまでどちらかというと、体を動かすことを好む傾向にあった自分自身に、あえて不得手な読書を課題として与え、卒業までに五百冊読破を目指しました。また、自分の意志ではなかったのですが、ふとしたことから強引に、実質は英会話だけの活動といってもいい外国語研究会なるものに引き入れられました。このようなことから後になって私の学生生活を振り返るとき、私にも二つ熱中したものがあったと言えるような気がします。それらは、読んだ数だけが大事とも言える読書のための読書と、決して英語力の向上には直接関係のないことが多かったクラブ活動でした。

ところで、またある意味で私は、道を求めること、人として受けた「生」を真に生きるにはどうすべきか、という極めてまじめで純粋な思いに支配されていました。もともとそのための読書だったし、またクラブ活動でもありました。そのため、当時ラジオで放送されていた著名人の講演会などは好んで聞いていましたし、人の真実な生き方が語られそうなものや、自分自身が真に生きて行こうとする上で指針を与えてくれそうなもの、また、感動を与えてくれそうな映画や、講演会などには、金銭的に許される限り求めて出かけていきました。

同時に、当時私が魅力的だと考えていた女性たちとの恋愛によって喜びを見出しうると信じ、

そのような中で、何人かの女性との出会いがありました。けれども、田舎者でおくての青年は、そのたびごとに痛い失敗を繰り返すはめになり、さらには、いつも真剣で一生懸命であったにもかかわらず、結果的に相手に自分の存在が受け入れられないという事実によって心に受けた傷は大きく、一時的ではあったにせよ、ひどく苦しみもがかなければなりませんでした。そのようにして、自分の中の気づかぬ罪のために、かつて幼い日に垣間見た、自分自身の心を完全に満たすことのできない人の心の中の深い谷のありかを、また確認することとなりました。

一方、このような夢見る生活の代償として、私は最終学年に進級できなくなりました。卒業研究に入った友人たちを横目で見ながら、私はさらにあと二年かけても卒業するには並大抵の努力ではすまないという現実に直面しました。決して余裕があるわけでもない両親のことも頭にあり、夢から目覚めさせられた私は、ひとまず「休むに似た下手な考え」を棚に置いて、現実の生活の中で求められていること、卒業に向けて、おくればせながら努力することとなりました。

そしてこのころ、同じクラブの一年後輩として以前からよく知っていた、今の家内の温子との新しい出会いがありました。彼女の励ましもあって、やっとの思いで進級することができ、また同時に、やっとのことで卒業研究と単位の取得をすることができ、どうにか今の会社にも内定が決まりました。このようにして私たちは、いっしょに卒業し、私は東京、そして彼女は松山にと別れました。

主に出会うまで

東京に出て働き始めたものの、初めて社会人となって働き始めた最初の緊張と目新しさが薄まっていったあとは、結局、これまで棚上げにしてきた大切な問題が未解決であることによる、満ち足りぬ思いが頭をもたげてきました。つまり、人として与えられた生を、自分自身は一体ほんとうはどう生きたいのか。人が真に生きるべき道とは何なのか。これこそ真実だという盤石な人生の、そして心の土台を持ちたい、見つけたいという課題がありました。温子と遠く離れた生活となったことも重なって、満ち足りぬ思いを引きずりつつ過ごす日々が多くなりました。そしてまた少しずつ、夢追い人の生活に入っていったのではないかと思います。立花隆の「青春漂流」の中に出てくる、それぞれに特異ではあるけれども、情熱をもって各々の生を精一杯生きているかのように見える人々の、個性的で魅力的な生き方に影響されながら。かといって、現実軽視の代償というものも少しは身に沁みていましたから、社会人となってからは、日々、なさねばならぬことはなさねばならないこととして、相応のことは行なっていたと、自分では思っているのですが。

このようにして、就職してからの生活を過ごし丸四年が経ったころ、温子と結婚し、同時に茨城に転勤となり、一年後に初めての子供である可奈子が与えられました。二年間の茨城での生活の後、今度は大分県の別府に転勤になりました。このように、内面に、根本的には解決されていない問題の根を抱えつつも、現実の生活の変化や忙しさに忙殺され、そのために、自身の内面のかすかな空虚にさえ目を向けなければ、普通の幸せな家庭であったと思います。事実、結婚できたことや子供を得たことなどは、私にとって、少なからぬ幸せでした。また、私自身の内面に、より安定感を与えてくれました。ですから、このまま忙しさと家族への責任感に支えられて、自

分の内をごまかしながら、その後の人生を主を知ることなく歩んでいっていたかも知れないのです。

このような時、家内をたいへん可愛がってくれた家内のおばが突然召されました。このことを通して、家内は教会に通い始めました。そして二年後、二番目の子供を流産し、その子が生まれてきたであろう予定日と同じ五旬節、聖霊降臨の日に、洗礼を受けました。私にとっても、流産によって失った子供のことはショックでした。そのような中で、家内が信仰という方向に向かうことを、私も心の中で賛成していました。私は家内の信仰を容認していましたし、決して反対ではありませんでした。けれども、自分のこととして信仰を捕えようとしたことは、なぜか一度もありませんでした。

その後家内に、「なおいっそう、真実な信仰へ導かれたい」との思いが与えられるような動きが、教会の中で起こりました。またその動きは、家内のみならず、私の身近な会社の同僚たちの家庭にまで及んできました。そして、あろうことか私が親しくしていた二人の同僚たちが、私の知らぬ間に洗礼を受けて帰ってきました。一九九〇年の夏のできごとでした。それを契機に、私の心の内にさまざまな葛藤、不安、疑い、戦いなどが起こりましたが、結果から見て、私自身も確実に、その動きを通して主の招きの中に入れられていったのだと思います。

年が明けた一九九一年一月、吉祥寺キリスト集会に集う大分出身の女性の実家で、初めてベックさんから聖書とイエス様のことを語っていただく機会がありました。そしてその後、生まれて初めて、意識してイエス・キリストの御名によってお祈りをしました。その二週間後、大牟田市で開かれたキリスト集会の「よろこびの集い」において、集う前の自分の心に決意したものとは

正反対に、聖書の言葉によってはっきりとした態度をとることを主によって示された私は、一晩の最後の煩悩と苦悩の末に、清水の舞台から飛び降りる覚悟で主なる神に従う決意をし、そのことを早速神と人の前に証しする洗礼を受けました。当時私は次のように書いています。

「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」（申命記　30・19）

「見学のつもりで参加したキリスト集会のキャンプで聞いたメッセージの中のこの聖句に、平凡な一人の男の心はとらえられました。その日、眠られぬ夜を過ごし、繰り返し自分自身に問い続けました。イエス様を受け入れることによって、私というものを失ってしまうのではないだろうか。大切なものとは一体なんだろう。人間が与えられた人生を正直に、精一杯幸せに生きていこうとするとき、神様の存在は不可欠なのだろうか。神様を知らない人々の営みの中にも、美しいものや価値あるものがあるのではないだろうか。けれどもそうであるのなら、私が大切だと主張する私の心は、ほんとうに自由なのだろうか。そのような私の人生に、幸福と希望と揺るぎない真実があると言えるのだろうか。問いかけは終わり、私は聖書に従い、『いのち』を選びました。そしてイエス様を私の主と告白し、一夜明けて洗礼へと導かれたのです。」

一九九一年二月三日。九州の冬、日の出の遅い、夜が明けやらぬ早朝のことでした。

わたし（主）に問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたし

はここだ。わたしはここだ。」と言った。（イザヤ　65・1）

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまづきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。（詩篇　56・13）

救い主イエス様によって、私はまことのいのちを得、心満たされ、真理と希望、喜び、平安を知ることができました。かつて神なく、望みなく、さ迷い続けた歩みの中で、孤独の谷を垣間見、その深い谷をただ空虚な思いで眺めることしかできなかった者でした。そのような者を、また、主を求めることのなかった者を主は憐れんでくださり、目を開いてくださり、その孤独の谷に架けられてある「希望の橋」のありかを知らせてくださいました。喜びが私を圧倒しました。

正しい人はひとりもいない

イエス様は、私を何もわからないまま、一方的に救ってくださいました。そのことによって喜びに満たされ、そのような喜びと満たしを与えてくださるイエス様に、すべてをお捧げしたいという気持ちでいっぱいでした。そして、自由になるすべての時間を主に関するものにあてたくてたまりませんでした。会社の往復の車の中と就寝前の布団の中ではメッセージや証しのテープを聞き、昼食時は同じ時期に救われた同じ職場の人々と語らい、また家では家内と主について話し

あい、聖書や信仰書を読む、という日々が続きました。けれども、イエス様に救っていただきましたが、その私を救ってくださったイエス様とは一体どういうお方なのか、またイエス様は私に何を求めておられるのかということについては、まったく無知でした。

そのようにして歩んでいた時、聖書が私たち人間を罪のあるものと断定しており、私も例外ではないことに気づかされ、このような哀れな者の解放のために、イエス様が十字架にかかって死んでくださったことを、涙をもって心から感謝するようになりました。そして、これまで、そんなに自分勝手にふるまってきたはずはないと思っていた自分の生活を省みた時、多くの、そして恥ずかしい罪を犯してきたことを認めざるをえず、自覚する私の罪を主に悔い改めました。

友だちとやった万引きや、神社のさい銭泥棒。身勝手でわがままなふるまいによって身近な人々を傷つけたこと。イエス様を知らない時は軽い気持ちではあったけれど、後にイエス様に示されてそのことを告白することになった時、結果的に家内を苦しめ、また、彼女の私への信頼をいちじるしく損ねることになった不貞の罪などなど。私は私自身を、ほんとうの意味でよく知らない者でした。主を知らなければ、これらの罪について無自覚なままに、ふつうの意味で幸せに暮らしていけたかもしれません。しかし、イエス様はさらに恵み深く、隠された罪をも明るみに引き出してくださいます。決して自分自身の力ではできないのですが、それら隠された罪を主の前に勇気をもって正直に告白するとき、一時的にはまわりの人々も自分をも苦しめますが、主は結果的に人々をいやしてくださり、赦してくださり、罪による隔ての壁を打ち破ってくださり、私たちを罪の咎めから解放してくださいます。

私はイエス様を知らなかった時、どこから見ても、誰に見られても恥ずかしくない履歴書ができあがることを求めていたと思うのです。さらにはもっと積極的に、輝かしい履歴の数々が書かれるようになることを強く望んでいたと思うのです。けれども、そのようにならないことに失望し、落胆し、その原因を探り、あるいは自己嫌悪におちいったりしてきたのではなかったかと思います。けれども、イエス様が、「わざわざ原因を探す必要はない。人とは、本来そういうものに過ぎないのだから」と、はっきり断定してくださっていることを、すなおに信仰の目をもって受け入れたとき、人は初めて開かれた目をもって等身大の自分自身の姿を正しく見ることができ、過度の自己への盲信から解放され、真の自由を得られるのだと思います。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。
（ローマ　3・10、11）

主は捕われ人を解放される。
（詩篇　146・7）

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」
（ヨハネ　8・32）

別府キリスト集会

家内の集っていた教会の人々の間に起こされた動きによって、会社の同僚たちや、教会のご婦

人のご主人たちがイエス様に導かれました。そのような人々が新たに集う場として、キリスト集会が別府に起こされました。そして、この動きの中心的役割りを担われた夫妻が、転勤のため別府を去らなければならなくなりました。残された私たちは皆、年も若く信仰的には生れたばかりという状態でした。そのために私たちは、多くの失敗と、次々に与えられる問題と悩みの中で、信仰の未熟を思い知らされなければなりませんでした。けれども同時に、私たち幼い信仰者の集いは、若い、純粋な、イエス様への熱い思いと、救われた喜びに溢れていました。感謝の涙をもってイエス様に礼拝をお捧げしました。また、集いの中では、喜びと驚きと感謝をもって聖書の言葉が引用されました。

イエス様は、奇蹟をなしてくださり、死の病にあった中野さんを救ってくださいました。腎臓に現われたこうげん病と腎透析との戦いの中で、内なる戦いの末にイエス様を受け入れ、三十一歳の若さで静かに平安のうちに天に凱旋していかれました。中野さんのこの戦いの後、別府キリスト集会のような小さなキリスト集会に、一度に八人ものイエス様に従う人々、その証しとしての洗礼を受けた方々が与えられたことは、今思うと大きな驚きです。渡辺さんは立派な医者でしたが、すなおにイエス様に従われ、天に迎え入れられました。また、がんとの戦いにおいて、主にあるものの恵みと威厳に溢れて天に召された小山田さんもまた、中野さんのイエス様への信仰の証しを間接的に知ることによってイエス様のみもとに導かれた一人でした。さらに、渡辺さんの静かなひっそりとした昇天は、私の心のみならず、多くの主を信じる方々の心の中に、大切なことが何であるかを語ってくれたと思います。そして、新たに主に救われ、重荷から解放されて

いく方々を目の当たりに見せていただくことのすばらしさと喜びに満たされるのでした。

このようにして、小さな別府キリスト集会の皆さんと、主イエス・キリストにある信仰のすばらしさと苦労を共にし、喜びと感謝と大きな希望とに溢れ、またある時は、主にあって共に悩み苦しみ、涙して歩んできました。別府キリスト集会の方々のみならず、イエス様にあって毎週交代で東京や関西など遠くから別府まで来てくださる方々や、別府キリスト集会や別府の皆のことを祈り続けてくださっている全国のキリスト集会の方々にも励まされ、導かれてきました。

このように主に導かれて五年を終えようとしていた時、仕事の都合で、アメリカ本社での新しいプロジェクトに参加するため、テキサス州ダラスに転勤するという、まったく予想もしていなかったことになりました。イエス様にお祈りし、また、主にあって信頼する方々にも相談し、別府を離れることを決意しました。一九九五年のクリスマスの日、別府キリスト集会の方々や遠く福岡から駆けつけてくださった方々に見送られて、雪の舞う大分空港を、万感の思いで後にしました。

北米の皆さんとともに

冒頭にもあるとおり、このようにして私たち家族は日本を離れ、アメリカの地に渡ってきました。四年におよぶこれまでのアメリカでの生活をふりかえるとき、はたして主のみこころが示されるとおりに生きてきたか、また私たちの小さな信仰を通して、主を少しでも証しすることができたかを考えるとき、信仰の至らなさを感じざるをえません。けれども主は憐れんでくださって、

私たちより先にダラスに来ておられた岩本さんご夫妻とのおつきあいや、北米各地の敬愛する皆さま方との語らいを与えてくださいました。イエス様だけを中心とした毎日曜日の電話会議形式による礼拝によって、どれほど私たちの滞米生活が励まされていることでしょう。

会社関係で日本から来られた多くの方々は、いろいろな市民大学講座や英語の学習講座を受講しておられ、週末には日本に比べて手軽にできるゴルフに熱中しておられます。北米の有名なリゾート地や、観光地を旅行した話題にもことかかないようです。そのような中で、私たち家族は毎週日曜日には電話礼拝に出席させていただき、そしてニューヨーク、ボストン、ロサンゼルス、トロント、バンクーバーなどの「よろこびの集い」が北米各地で開かれ、大きな満たしと幸せをいただけることを感謝しています。

一方、人種が入り交じり、日本人が持つ「外国人」という概念がおよそ存在しないこの国で、アメリカ人と言われる人々を見ると、少なくとも彼らの意識の底に聖書があることがうかがわれます。町のいたるところには、大きな教会があります。私の家の近くの教会などでは、日曜日には広大な駐車場に車がおさまりきれず道路に溢れていますし、その上貸し切りバスが、何台も往復しています。ラジオやテレビでは、福音のための専用局も多く、数多くの放送が流されています。しかし残念ながらアメリカの現実は、ジョン・ウィンスロップが理想に燃えて建設しようとした神の意に適った社会とはとても言えない状態で、かつて内村鑑三が百年以上前に落胆したように、彼が心に描いていた理想のキリスト教国とも言い難いのではないかと思います。今日においてなお、人種間の問題に根づいた憎悪から起こる殺人事件が、テレビや新聞のニュースで騒が

れています。アメリカの開拓の歴史は、一方では先住民であるアメリカン・インディアン殺戮の歴史でもあります。日本人である私たちにしても、ひとたび私たちの侵略の歴史や、現実に存在する人種差別に目を向ける時、自分たちをさしおいてアメリカの人々を非難することはできないと思います。

私は、このようにアメリカに来ることを主が許してくださったことを、ほんとうに心から感謝する者です。かつて、与えられた環境の中で満足を得ることができず、まったく異なったアメリカのような異国に住まうことを夢想していた時期がありました。確かに、過去の一切のしがらみから逃れられそうな解放を、この異国の地にあっては味わうことができるようにも思います。しかしこの解放感は、一方で、この地に根を持たない者の異邦人としての孤独感をあおります。そして、もしイエス様なしでアメリカに来ていたなら、恐らく母国にあった時以上に孤独と徒労感の中でさ迷うことになっていただろうと思います。イエス様が共におられない所に「真の希望」がないことを、心から知らされたことを、感謝しています。

北米の電話礼拝に参加する日本語の不自由な方々は、このように言いました。「日本語に不自由な私たちが、はたしてずっとこのキリスト集会に集い続けられるかな、と少し不安になることがあります。かといって自分たちのまわりの、これまで訪れたり通ったりしたことのある教会のことを考えると、もはや近くには、どこにも行く所がないとも思います」。仕事で接するアメリカ人や日本人、そのほかのいろいろな国の人々との交流の中で、心から触れあうことのできない悲しみを覚える中で、言葉の壁を越えた心の触れ合いが、主によって与えられているということは、

どんなにすばらしいことでしょうか。

キリスト集会に集う人々がすばらしいわけでは決してありません。キリスト集会には、ほんとうに「自分はだめな者だ」という事実を、心から受け入れられた多くの方がおられ、それゆえに、主への感謝がすなおで、純粋で、しかも真剣なのではないかと思います。そして私たちが、誇ることのできない本来の自分自身を知って小さくなり、主お一人だけが中心におられ、ほめたたえられるとき、そういうときにこそ、私たちはかえって豊かに祝福され、解放されるのだ、という事実を数多く体験しております。

それぞれは、この広い北米大陸の各地に散らばっている小さなイエス様の群れにすぎませんが、北米のキリスト集会もまた、まだまだ多くの主の満たしと解放を必要としておられる人々のために大いにイエス様に用いられればと願ってやみません。私自身にも、未だイエス様に救われていない年とった両親が徳島におります。父はリンパがんを患っており、一昨年には胃から大量の吐血をしましたが九死に一生を得ました。母も直後に大事故に会い、脳挫傷一歩手前でしたが奇跡的に今も元気です。主が二人を憐れんでくださることを祈りつつ待っております。

私や家族の者たちも、もっともっとこの偉大な憐れみ深いイエス様をよりよく知る者となり、大いにイエス様を喜ぶ者となり、少しでも主に用いられる器となることができますようにと願っております。また、この本を読んでくださる皆さまお一人お一人の上に、イエス・キリストの恵みが豊かにあり、主の御名が大いにほめたたえられますことを祈っております。

イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませて

くれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

（ヨハネ　4・10）

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。（ピリピ　3・12）

テキサスの夏がまっさかりの一日、空と晴れわたった青空のもと、サングラスをかけてもまだ相当に強い紫外線を浴びて、青々と茂った庭の芝生に目をやりながら、同時に、抜いても抜いてもはびこってくる雑草に目が止まります。深い嘆息とともに、「もし主がいてくださらなかったら、私たちは一体どうなっていただろう」と、心から思うのです。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

（ローマ　7・25）

別府集会のみなさん、温子さんのお母様と。





祈る毎日

一瀬賢治

グラフィック会社経営
東京都出身／学芸大付属小／同付属中／石神井高／立教大学経済学部卒／妻 かほる／子供 二男一女

この世に生を受けたすべての人に最も確実に約束されていることは「死」です。私も遅かれ早かれいつかは死ななければなりません。死が怖いのではなく、死を通して来る絶対的な孤独こそが万人の恐れるものではないでしょうか。そこでは、この世の中で価値が在ったとされていたものが何の役にも立たないのですから…。
今までの私はすべてが自分中心であり傲慢そのものでした。いわゆる「人格者」を装う常識人で、最も始末の悪い自己中心人間でした。祖父が禅宗の寺の住職だったことから宗教に対する疑問と、本当に神がいるならどこにいるのかというように、救いに対する謙虚さのひとかけらも無かった私が、聖書とキリスト集会の方々に触れていくうちに、今まで自分が持っていた価値観はすべてうわべだけのものであったことに気付きました。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません」（Ⅰヨハネ1・8）自分の傲慢さは変わりませんが、自分中心ではなく、神様にすべてを委ねることができるように祈る毎日です。…自分の傲慢さこそもっとも罪深い…。

義人はいない一人もいない

一瀬かほる

東京都出身／教育大学付属小／同付属中／都立文京高／恵泉女子学園卒／夫 賢治／子供 二男一女

13年前に姉ががんで召されました。病床の姉の姿はイエス様に完全に守られた平安の実そのものでした。肉親を失うという絶望的な状況の中で、永遠に変わることのないイエス様のご愛とまことのいのちを知り、初めて自分がわがままであることを神様に悔い改めました。聖書のことばが一つ一つ心に突きささり、私の心の暗闇の部分に光があてられ、それまで自分を縛っていた大きな罪から開放され喜びが訪れました。「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです」（ローマ7・18）自分がいかに自己中心であるかという事実を認めていくことで、イエス様がいつも近くにいてくださるのを感じます。主人も7年前に救われ、共に祈る家庭へと変えていただきました。「ドイツ喜びの集い」を通して家庭の中心に主が働かれているのかどうかということを示されました。子供たちとの関わりの中で、いつも死んでいない自我と感情が首をもたげ、救われてもなお自分が正しいと思いたい罪の大きさを知らされ、日々悔い改めています。

マラナタ

清水總子

東京都出身／世田谷小／鴎友学園中／同学園高卒／愛夫 洋一／子供 二女

イエス様。かつて長女が病の中で人生に絶望していたとき、私は彼女の死を祈り求めたほどの恐ろしいわがままな親でした。しかし、イエス様はそのような私を招いてくださり、イエス様の十字架の死は私の罪の結果であったと目を開いてくださり、私の悔い改めを受け入れてくださいました。「あなたがたはわたしの証人、わたしが選んだわたしのしもべである」(イザヤ43・10) その後、自動車事故を通して、以前の私はイエス様を愛し求めていたのではなく、イエス様の神の力、栄光、尊厳、聖霊の実などを欲していた、それも私自身が輝きたいためであったと気付かされました。また聖書のことばの裏に、計り知れないほどの神様とイエス様の忍耐が隠されていることも知らされました。イエス様、ごめんなさい。イエス様、ありがとう。「先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている」(イザヤ43・18、19)
これからも先も、全てイエス様がご支配くださり、最善の道へと導いてくださるのですね。イエス様、早く来てください。マラナタ。

イエス様、大好き

清水まみ

東京都出身／国立六小／成蹊学園中・高／竹早教員養成所卒

肉体的にはB型肝炎、貧血性。内面的には対人恐怖。たくさんの弱さを授かりました。苦しいことはいろいろあったし、また、これからも続いていくでしょう。絶対的な信頼や、本当の従順、十字架の尊さを理解するために、日々贈り物をいただき、学ぶ道の途中です。

イエス様本当にありがとうございます。こんな私をも受け入れてくださって。そしてご自分の命までお捨てになって私を救ってくださって。イエス様は今も私の中にいてくださり、わがままでみじめな私を愛し、励まし。過ちがあれば正し、天国でお会いするその日まで、ずっと導いてくださいます。こんな神様が他にいるでしょうか。イエス様、大好きです。「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である」(Ⅱテモテ2・13)と聖書の中に書いてあるから安心です。イエス様、これからも道を示してください。この小さき器をも、お用いになってください。イエス様が私にくださった、数々の嬉しいこと、悲しいこと。そのすべては、私にとって最善でした。本当に感謝します。今日もイエス様は、いろいろな、理解を超えた方法で、私に語りかけてくださいます。



右 總子さん、左 まみさん。

人生最大の奇跡

清水洋一

九州女子短期大学教授、毎日新聞客員編集委員
東京都出身／開進二小／桜木中／新宿高／東京大学理学部卒／愛妻 總子／子供 二女

見えるもの、理解できるものしか信じようとしない。何事も自分で解決しようとする。追い詰められてもいない。第一線の新聞記者として仕事に邁進し、主から最も遠い所にいる、傲慢な人間であった。

そんな私が、聖歌を歌って涙を流した。集会へ初めて連れて行かれてから約十年後のことである。いつしか、福音に耳を貸そうとしない自分に嫌悪感を抱くようになっていた。

1995年8月13日、まさかの受洗。どうして救いに導かれたのか、本人にもわからない。集会の皆さんのお祈りと、喜んでいる姿。それらが頑固な私の心をじわじわとほぐしていってくれたのではないかと思う。しかしそのことも含めて、主の一方的な憐れみによる賜物であることは間違いない。

十字架の死は、私の罪の贖いであった。「人生最大の驚き」と娘が語った私の救いは、奇跡としか言いようがない。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます」(マタイ19・26)96年6月の交通事故で私は傷一つ負わず、同乗の妻は頸椎脱臼の重傷から奇跡的に回復した。主のみわざは空恐ろしいほどである。



主の憐れみを祈る

平山義輝

(株)日野自動車21世紀センター勤務
茨城県出身／高萩小／高萩中／日立一高／茨城大学卒／妻 紀子／子供 三男

義父松田恒蔵兄弟の召天を目の前にしてもイエス様を心の戸外に立たせたままの私でしたが、七年後の義母義子姉妹の死によって私たち家族全員が日々主の恵みに預かる者へと変えられました。既に十七年になります。私たちはいまだに信仰の歩みの遅い者たちであり、多くの過ちを日々重ねます。私たちは何一つ良いものを持ち合わせていないにもかかわらず、悔い改める時、そして祈る時、イエス様は慰めの御手を伸ばしてくださり、ある時にはきめ細かいご配慮を備えてくださり、その恵みは数えきれないほど与えられています。イエス様に背を向けていたかつての私は順調な人生を送っていると思っていました。聖日に喜び出かける妻の両親に気をとめることもなく、自分の人生も家族への責任もすべては自分の肩にあり、自分でできるものと考えていました。しかし義母の一粒の麦の死により主の存在と憐れみを知らされたのです。「義人はいない。ひとりもいない」(ローマ3・10) その年の夏、ベックさんから人間の罪の性質と主の憐れみについて話をしていただきました。今はただ主にだけにつながっていられるよう主の憐れみを祈るばかりです。

主とともに歩む

平山紀子

鳥取県出身／鳥取大学付属小／同付属中／鳥取西高／明治学院大学卒／夫 義輝／子供 三男

私は生まれた時からイエス様に背負われて歩んでいる両親に育てられ、主の存在をあえて意識することはありませんでした。12歳の時、鳥取大火ですべてを失い、幸せで何不自由のない生活は一瞬にして崩れ落ちてしまいました。しかし、そのような状況の中でもつぶやかず主をすべてとする両親の姿は私には雄々しく映り、主がいつも私たちとともにいてくださるという主のご愛を確信することができました。晩年になって上京した両親は吉祥寺集会の皆さんとのお付き合いを通して「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」(ヘブル13・5)の聖句の通り天国を確信し、喜びのうちに50数年の信仰の道のりを走り終え、天国への凱旋を果たすことができました。両親の死を通して主人が主を信じる者へと変えられ、子供たちもそれぞれに必要な試練を通して救いへと導かれました。三年前から同居するようになった主人の父もともに祈るようになり、「ありがとう」と日々感謝の言葉の絶えない義父に対して、表面的なお世話しかしていない自分の罪深さを見せつけられ、心からの愛を持って仕えることができるようにと祈る毎日です。



主を仰ぎ見る

平山泰之

(株)さくら銀行勤務
東京都出身／府中第七小／府中第七中／桜美林高／明治学院大学卒／妻 裕子

私は物心がついた時にはクリスチャンである母に連れられ、近所の教会に通っていました。そして、家族でただ一人クリスチャンでなかった父のために、母と兄弟3人で「お父さんが教会へ行きますように」と毎日お祈りするようになりました。祈り初めて約5年後に、その祈りが聞き入れられました。きっかけは吉祥寺集会に集っていた祖母の死でした。
祖母が天国を確信して病と闘い、死んでいった姿は父を救いへと導いただけでなく、家族全員を本当の救いへと導きました。祖母は晩年、遺言をカセットテープに入れ、葬儀の段取りを事細かに決めており、その声は希望に満ちあふれていた声でした。

救いは決してゴールではなく、スタートに過ぎないのだと思います。しかし、自分自身を振り返ってみると、主を悲しませることの多さにがく然としてしまいます。日常生活においても、忙しさを理由に祈ることを怠ってしまう毎日です。結婚してからは、自分の罪深さが今まで以上にわかるようになりました。今後は少しでも主を喜ばせることができるように、二人で主に拠り頼んで歩んでいきたいと思います。

主は愛してくださる

平山裕子

富山県出身／三日市小／桜井中／桜井高／信州大学卒／夫 泰之

「もう一度、あの時に戻ってやり直しができたら…」といつも過去のことばかり悔やんでいた私のそれまでの人生は、妥協とあきらめの日々でした。母が通うカトリック教会でイエス様のお名前を知りましたが、ただ都合のよい時にだけ祈る者でした。やがて、その都合のよさに対する後ろめたさと、教会が示す正しい信者にはなれないという絶望感から、私は恐れのあまりに主に背を向け、祈ることすらできなくなってしまいました。誰も私のことを理解してくれる人はいないと、ひとりよがりの孤独の中にいたとき、主はすべてをご存知で私を心配してくださっていました。

吉祥寺集会に導かれ、真の神様と出会い、イエス様は私を愛してくださっているお方と知りました。同時に家族全員が主の救いを確信し、ともに祈る家族へと変えられていきました。また主はみわざをもって私たちを結婚へと導いてくださり、主の大いなるご計画にただ感謝するだけです。結婚を通して自分のわがままを示され、がく然とする思いですが、主がともにいてくださることを本当に嬉しく思います。二人で主を仰ぎ見て、祈りつつ歩んで行きたいと思います。

主よ、私はどうしたらよいのですか

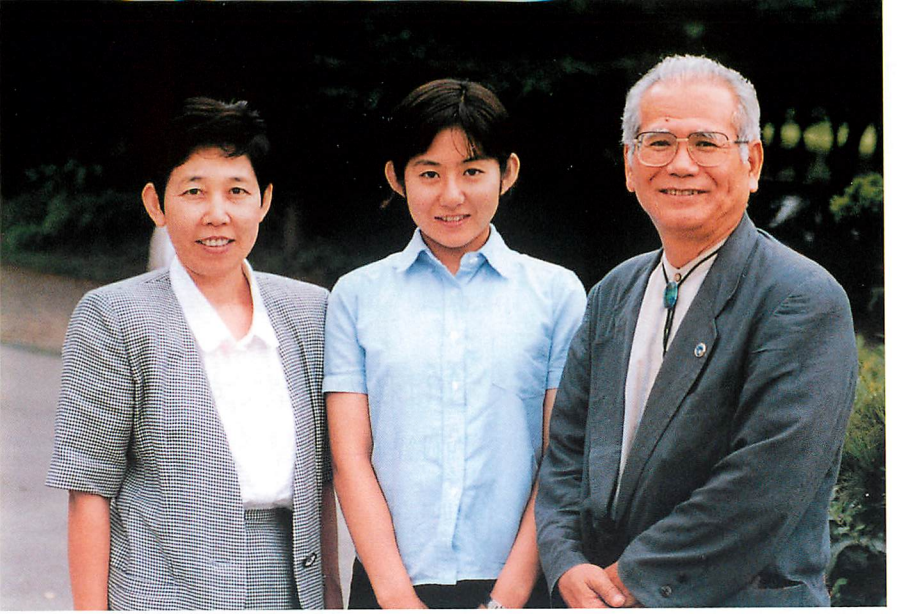
仲井間紀子
沖縄県出身／開南小／上山中／那覇高／東京薬科大学卒／夫 慈成／子供 三女

私は23歳の時にカトリックの洗礼を受けて以来、聖書の真理を求め続けてきました。そして、「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ7・38）の聖書のことばが現実のものとなり、創造主であられる神様の深い愛を知ることができました。しかし、その後さまざまな困難に直面し、どうしたらよいのか途方に暮れてしまいした。そのような時、不思議な方法でキリスト集会へ導かれ、ベックさんとお話をすることができました。「主よ、どうしたらよいのですかと尋ね続けなさい」のベックさんの言葉通り、イエス様は私の祈りの問いに次々と答えてくださり、その結果、家族全員が救われともに祈る家族へと変えられました。家庭にはいつも主への感謝と平安と喜びが満ちており、意見の対立があっても主は一番ふさわしい形で解決してくださいます。私の人生は目標の定まった揺るぎないものになりました。主は今も生きておられ、信じる者にその力を示され、人生の喜びと目標を与え続けてくださるお方です。私は生涯、主の御名を呼び続け、主とともに歩み続けます。

イエス様、大好きです

仲井間尚子
東京薬科大学在学中
富山県出身／三日市小／桜井中／富山県立魚津高卒

高校二年の春、家族とともにキリスト集会の御代田の「喜びの集い」に導かれ、私は本当のイエス様と出会いました。母がカトリック教会に通っていたため、聖書のことばに触れる機会はありましたが、当時私が感じていたイエス様は、清く正しく誇り高く、私よりもずっと高いところから、なんだか偉そうに教えを論しているような遠い存在の方でした。しかし、本物のイエス様は違いました。イエス様は私の一番近くにおられました。優しくて温かく、いつも私の側にいてくださっていました。イエス様は私のすべて（他人からよく思われたいと思う気持ちや、自分を誇る気持ち、それと逆に人と比べて感じる劣等感など）を知ってくださっているうえで「それでいいよ」とあるがままの私を認めて愛してくださっていることを知り、涙が止まりませんでした。イエス様を知ってから、私はこの世的なすべてのものから開放されました。毎日の生活の中で感じる悩みや、不安、さみしさや、虚しさも、すべてを優しくて力強いイエス様に頼って、お任せすることができるからとてもうれしいです。イエス様、大好きです。本当にありがとうございます。



左 紀子さん、右 尚子さん。

あなたは、わたしに従いなさい

仲井間憲成

黒部市民病院副院長・整形外科部長／リハビリセンター所長（兼務）
沖縄県出身／壷屋小／上山中／那覇高／広島大学工学部船舶工学科卒／徳島大学医学部卒／妻 紀子／子供三女

私には少年時代に溺水の経験がある。川べりの花を摘もうと手を伸ばした瞬間、濁流に転落した。「しまった」と同時に「助けられる」との意識が働いた。「今は水の中、息を止めて、水面に出た。素早く息をして」と意識は実に冷静に働いていた。私は濁流の中を浮き沈みしながら流され、暗渠に入る直前で女子高校生たちによって救出された。「あー、助かった」と言って意識を失ったらしい。

私はこの体験をいつでも新鮮に思い出すことができる。この事故以来、私は死について無関心でいられなくなり、悪夢も時々見た。

私は10数年前よりカトリック教会に通い洗礼に備えていた。平成7年5月ベックさんと出会い、平成8年5月沖縄でドイツから来られた集会の皆さん方の祝福の中で家族全員が洗礼を受けた。私は今、長かった悪夢から開放され、主の安らぎを感じ、ラッパの響きとともに主とお会いできる日を楽しみにしている。これからの人生、「聖書は何と言っていますか」（ローマ4・3）、「わたしを呼べ」（エレミヤ33・3）、「あなたは、わたしに従いなさい」（ヨハネ21・22）の聖書のことばを信仰の基盤にして歩みたいと願っている。



私の歩む道

西村孝平

(株)ハックキミサワ勤務
神奈川県出身／小原台小／鴨居中／横須賀大津高／北陸大学卒／妻 智子／子供 一男

私がイエス様への信仰を持つようになろうとは、数年前にはとても考えられなかったことです。私が妻と出会った時、彼女はカトリック教会に通っていました。結婚の話が進み、婚約式や結婚式を挙げる準備のために教会へ通いましたが、式をスムーズに進行させるための儀式のようなもので、イエス様を信じるというものではありませんでした。その後、妻が吉祥寺キリスト集会の礼拝や、喜びの集いに通い始めましたが、私は「我関せず」という感じでした。その私がベックさんとお会いし、イエス様についてのお話を聞きました。初めて耳にすることばかりで理解できませんでしたが、その後少しづつ聖書を読むようになり、イエス様は私のそばにいるのだと思うようになりました。信じてはいるけれど良くわからないと前日まで悩んでいましたが、96年5月26日「沖縄喜びの集い」にて洗礼を受けました。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです」(Ⅰペテロ5・7)聖書のことばが救いになるということを信じ、信仰を深めていきたいと願っています。

主は私の希望です

西村智子

富山県出身／三日市小／桜井中／桜井高／北陸大学卒／夫 孝平／子供 一男

カトリック信者であった母の影響で、神様の存在や天の国については知識として受け入れていました。しかし確信がもてなかったため、祈りに対する信頼性もなく、心から主に感謝することもできませんでした。苦しみの中では祈るのですが、喜びの中では主の存在をすっかり忘れているという生活でした。ベックさんとお会いしたのは、自分自身の存在について考えるようになり、結論の出ない問題に行き詰まっていた頃でした。初めて主の深い愛を感じた時、喜びでいっぱいになりました。私は誰かのために生きているのではなく、イエス様が現在の私を導いてくださっていたのだと確信することができました。「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。…神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(伝道者3・1、11) 今まで、人生を振り返り後悔ばかりしていた私が、この聖句と出会ってからは、どんな状態にあってもイエス様が最善の時に最善のことをしてくださるという希望が持てるようになり、導き手であられるイエス様に感謝することが出来るようになりました。主イエス様が私の希望です。



ただ主に感謝!

野田 繁

(株)ニュー・ディメンジョン・リサーチ勤務
兵庫県出身／桃井四小／明治大学付属中・高／明治大学商学部卒／妻 暢子／子供 二男

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ8・28)

55歳の定年を迎え新しい職場に変わり、「さあ…!」と仕事に燃える思いでスタートラインに立った途端、突然の脳梗塞、それも重度の…。「生涯歩くことは無理でしょう」と言う医師の声と、動かなくなった左手左足、何が何だか解らないまま数日が過ぎましたが、35歳の時に聖書に出会えたことが大きな力となりました。集会の方々のお祈りやお付き合いを通して、「すべて主(神)から受け取って行こう」という思いになった時、不思議な平安と希望に包まれ、自分自身を新しく創り変えてくださるための主のみわざを感じ、十字架の愛が迫って来るのを覚えました。やがて半年に及ぶ厳しいリハビリを経て、杖で少し歩けるようになり、不自由な体ですが今は毎日勤務に出ています。スイスやカナダの「喜びの集い」にも参加できました。とにかく動くことが好きだった私への主からのメッセージは何年経っても「肉体的信仰」であったことへの警鐘でしょうか。主にただ感謝です!

心の支え

野田暢子

奉天出身／別府北小／中部中／鶴見ヶ丘高／明治大学商学部卒／夫 繁／子供 二男

「子供を育てて行く上で、一番大切なことは何か?」。それは彼らがどんな状態になっても喜びと平安と希望を持って生きていける「心の支え」を持つことと思い、22年前に私たちの罪のために死なれ、私たちの最善をいつもなさってくださる生ける真の神イエス・キリストを信じる信仰に導かれました。平成9年4月、健康的であった主人が突然倒れ、「寝たきりか、良くて車椅子で全介護」と診断されました。30分前に元気にバイバイと別れた後のことでした。人間は5分後には何が起こるか解らない砂の上に「安全、安全」と信じ生きている存在だと知らされました。しかし、「神がすべてのことを働かせて益としてくださる…」という聖句が心に浮かび、この病もきっと益としてくださると思わされた時、それまでの不安や恐れがうそのようになくなり、「主がどうなされるのか見てみたい」と心にゆとりと勇気、そして希望が与えられました。主イエス様が生きておられ私たちを支えてくださる真の神様であることを体験しました。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」(ルカ1・38)

主に頼る喜び

久保克之
(株)さくら銀行勤務
ニューヨーク市生まれ／アメリカ・Willard小／暁星国際中／オランダ・International School of Amsterdam／京都大学法学部卒／妻 里子

吉祥寺集会に集いながらも、自分のように罪深い者はここにはふさわしくないと、居心地の悪さを常に感じていました。聖書を理解することもできず、苦痛でしかありませんでした。けれども結婚の前に、真剣に主に祈るようになり、主は祈る者に愛をもって答えてくださる方であることを知りました。同じ土台を共有できる妻も与えられ、恵みにより子供も授かることができ、感謝です。これからも主に頼り、祈り続けたいと思います。

本当の神様を知って

久保里子

埼玉県出身／新狭山小／堀兼中／大妻女子大学嵐山女子高／大妻女子大学短期大学部卒／夫 克之

私は主人と出会うまでは信仰とはまるで無縁の生活を送っていましたが、結婚を機に導かれるようになりました。初めは礼拝に行っても違和感しかありませんでしたが、ベックさんとお話をし、宗教と信仰の違いを知り、心から喜ぶことができました。以来、礼拝にも素直な気持ちで集うことができ、聖書のことばに頼り祈りながら結婚の準備ができ、イエス様のご愛にあふれた結婚式を挙げることができました。心から感謝します。

傲慢を砕かれて

久保治也
(株)三菱ガス化学勤務
東京都出身／カナダ・Denlow小／学芸大学付属大泉中／学芸大学付属大泉高／一橋大学社会学部卒／妻 羊子

私は十四歳の時に父を亡くし、二年後にこの集会に導かれ、クリスマスに吉祥寺集会で洗礼を受ける恵みを主からいただきました。
中途半端な信仰生活を送っていた私にも、主は憐れみによって妻に出会わせてくださいました。その頃から、自分自身の傲慢さとともに主のご愛に気付き、主の赦しを心から感謝することが出来るようになりました。
「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない」(ヘブル10・17)

神は愛です

久保羊子

群馬県出身／矢中小／矢中中／高崎女子高／国立音楽大学卒／夫 治也

私はクリスチャンホームに育ち、小さい頃から聖書のことばを聞いてはいましたが、中学、高校の頃の私は平安や喜びがなく、救いの意味もよくわかりませんでした。主はそんな私を憐れんでくださり、母の病や、主人との結婚を通して、どれほど主が私を愛してくださっているかを示してくださいました。完全に主を信頼して歩むとき、主は必ず最善に導いてくださいます。キリストの愛に満たされて、感謝の日々を歩んでおります。



左から 研介さん、羊子さん、和子さん、治也さん、里子さん、克之さん。

夫の過労死を通して

久保和子　新潟県出身／晴明ヶ丘小／帝塚山学院中等部／同高等部／甲南大学文学部卒／子供 三男

「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」（マタイ9・2）「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）私の自己中心と愛の思いやりのなさが、夫を死に至らしめたと自責の念にさいなまれていた時、これらの聖書のことばをもって、イエス様がご自分の方から私に近づいて来てくださいました。神の御子であられるイエス様の贖いの死がこの私のためであったと悟るには、この厳しい試練と罪の悔い改めは必要なことでした。主の御思いとは正反対の、この世がすべてという思いから救い出され、やっとイエス様のみもとに帰って来ました。主のご再臨も近い今、夫との再会ももうすぐです。あわただしい世の動きにも左右されず、主にある平安と喜び、そして希望が与えられているのは本当に幸いです。自分自身に絶望した惨めなわがままな者が新しくされ、主のいのちを生きることができるとは、何という恵みでしょう。「あなたの恵みを私は楽しみ、喜びます。あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました」（詩篇31・7）

主の導き

久保研介　アジア経済研究所勤務　東京都出身／カナダ・Denlow小／オランダ・International School of Amsterdam／東京学芸大学付属高／慶応義塾大学経済学部卒

大学卒業を目前にして、私は自己実現への道を歩みたいという願望と、社会へ出ることへの不安にとらわれていました。そのような時に、主は私の傲慢を打ち砕かれましたが、そのため主に頼る機会を与えられました。祈りによって不安が拭い去られたことには、驚きと感謝の気持ちを覚えました。
「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」（箴言3・6）

イエス様はこころのふるさと

加藤雅代

鹿児島県出身／和田小／和田中／錦江湾高／鹿児島純心女子短期大学卒／夫 正道／子供 三女

「神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた」(伝道者3・11)この聖句のゆえでしょうか、中学生の頃から私の内に神様を求める思いがありました。英語を学びながら聖書も学べるということで、モルモン教会へ行くようになりました。そこでイエス様の贖罪について知り、このお方に従っていこうと決心しました。目指すべき標準に達しようと、いくつもの戒めを守り努力を惜しみませんでした。モルモンの行いや間違いに疑問を投げかけてくれるクリスチャンの友人の声に耳を傾けることもなく、がむしゃらな私でした。しかし、次第に目指すところとは違った罪との妥協生活を送るようになり、そのことが私自身をとても苦しめました。集まりから離れ、一人で祈る日々が続きました。そんな時、ラジオの伝道番組から「ただイエス様にごめんなさいと頭を下げるだけでいいのですよ。罪は赦されます。イエス様はあなたをお見捨てになりません」という暖かな言葉を聞き、涙があふれました。22歳の時です。遠回りをしましたが、私は心のふるさとであるイエス様のところに帰りました。今はイエス様のみもとで安らぎ家族とともに主を喜んでいます。

わたしを見ててくださるイエス様

加藤恵実　建昌小学校三年在学　善き牧者幼稚園卒

私はイエス様のことが大好きです。イエス様はいつも私の毎日を見ていてくださるからです。どんなに悪いことをしてもイエス様は「ごめんなさい」と言えば、ゆるしてくださいます。「ごめんなさい。ありがとう」の気持ちがあれば、イエス様はみすてることはありません。学校では給食の時や勉強の時、心の中で祈ります。口に出さなくてもきっとわかってくださいます。家ではちゃんと口に出して祈ります。早くイエス様に会いたいなあ。

イエス様のめぐみ　加藤めぐみ　建昌小学校二年在学

わたしの名前は、めぐみです。イエスさまのめぐみをかんしゃして、この名前がつきました。わたしはかみさまが大好きです。まい日かぞくを見ていてくれるからです。たとえ、ひとりのときでもひとりではありません。イエスさま、これからもずっと見ていてください。イエスさまは、わたしたちのつみのためにしんでくださってかわいそうだけど、ありがとうございます。すごい方だね。イエスさまきょうもわたしたちを見ていてください。

主の賜物　加藤百合恵　2才(三女)　代筆 父(正道)

「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません」(マタイ18・3)この子を見ていると、とてもわがままなのですが、ありのままで疑うことを知らず、最後には「はい」と頭を下げます。そしてこの態度をとると主イエス様は必ずあわれんでくださると覚えられ、主の恵みにただ感謝です。「そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された」(マルコ10・16)



救いはイエス様のものです

加藤正道

(株)興南物産勤務

鹿児島県出身／紫原小／紫原中／錦江湾高／関西外国語大学英米文学科卒／妻 雅代／子供 三女

私はキリスト信仰を持つ両親の間に生まれ、幼い頃からキリスト教会に通っていました。次第に天地万物をお造りになられた唯一の神様に従えない自分(嘘を言う、他人を憎むことなど)を知りましたが、私のそのわがままのために十字架で死なれた神の御子なるイエス様を信じるだけで完全に罪が赦され、神の子とされることに、感謝の気持ちをいつしか持つようになっていました。そしてこの思いは私にとって大きな支えになっていました。

しかし23歳頃から、この思いを持ち続けていることができなくなりました。完全に赦され神の子とされていることに疑問を持つようになり、どうしたらよいのかわからなくなりました。吉祥寺集会のベックさんとお会いして、「わたしのところに来る者(一度イエス様に頭を下げた人)を、わたしは決して捨てません」(ヨハネ6・37)の聖句に気付き、嬉しくなりました。大切なのは「聖書に書かれてあるからありがたい」という意識した態度だと知り、絶えず新しく生かしてくださるイエス様がいらしゃるという事実を確信せずにはいられなくなりました。必要な悩みを与えてくださったイエス様に感謝します。

私は主のもの

古田桐子
伊東歯科医院勤務・歯科技工士
熊本県出身／桜井小／鹿南中／玉名高校／都留文科大学／中島学園卒

「彼に信頼する者は、失望させられることがない」（ローマ10・11）「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」（Ⅱコリント12・9）「自分はどうしてこうなんだろう」と、いつも他人と比較して悩んでいた時、これらの聖書のことばが与えられました。最初、不思議なことばだと思いましたが、時が経つにつれ、落ち込んだ時などに、生きたことばとして、慰め、励まし、希望を与えてくれるようになりました。イエス様が私の罪のために十字架で死なれ、よみがえって今も生きて働いておられることを、改めて知らされ、「私の今までのわがままをお赦しください」と祈りました。
「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ2・20）「私は主のもの」という現実がなんともうれしく感じられ、希望を与えられたことを感謝しています。

苦悩から救い出されて

古田静子
植木北中学校 養護教諭
熊本県出身／鹿北第一小／鹿北第二中／山鹿高校／九州女子短期大学卒／夫 俊秋 ／子供 一男一女

「飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された」（詩篇107・5,6）私は23歳の時、親の薦めで結婚しました。恐れるものもなく、わがままに育った私にとって、結婚生活は荒地をさ迷うようなものでした。夫が何を考えているのかわからない、幾日も外泊をする夫、どうして私がこんなに悩まなくてはならないのか、どうして夫には私の気持ちがわからないのか、と不平を言いつつ、いらだつ毎日。次第に失望と孤独の深みに入り込みズタズタになっていきました。そんな時にイエス様は「空の鳥を見なさい」とやさしく御手を伸べられ、暗闇から私を救い出してくださいました。その後、イエス様は聖書を通して私の罪を示され、イエス様の十字架は私の罪のためであったと知らされ、主の前に正直に祈ることができました。そして、夫にも素直に謝ることができました。とても感謝です。



後列左 静子さん、右 桐子さん。

心のやすらぎをいただく

古田満稔　熊本県出身／岳間尋常高等小卒／妻 鶴子／子供 三女／孫 二人

古田鶴子　熊本県出身／鹿本農学校卒／夫 満稔

「あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています」（詩篇4・7）ある日、突然主人が山から落ち脳挫傷で意識不明になり目の前が真っ暗になりました。入院先には、娘や孫が毎日見舞いに来て祈ってくれました。長い病院生活の中、看病していますと神様が一緒におられるように思えました。主人が「行き先を決めておかなければならないね」と言いましたので、家庭集会でベックさんとお会いした時に、主人の言葉を話しました。ベックさんは「ただ、正直に頭を低くして祈りなさい。イエス様を信じていればいいよ」と言ってくださいました。それから、何もわからないまま、イエス様を信じて受洗させていただきました。今思えば、主人の事故のことも主のご計画であったと感謝しております。主人もずいぶん元気になり、二人で聖歌の「人生のあらしに」を賛美しながら平安な日々を過ごさせていただいています。

あわれみ深いイエス様

山口利枝

福岡県出身／三輪小／三輪中／朝倉高／西南学院大学短期大学部児童教育科卒／夫　裕之／子供　一男四女

イエス様を信じ救われたと言いながらも、台風で実家を失い、主人の父の死、広島への転勤など、問題はいつも私の周りにあり、聖書によく書かれている「神は憐れみ深く情け深く…」という箇所にはどうしても「アーメン」と言えませんでした。そんな時兄の死と父の死を通して、私の思い込みの信仰が明らかにされました。イエス様のなされることには間違いがなく、すべてが真実であるということ、私にとって困難と思っていることでも、イエス様からすると大きな憐れみであり、私を真実な方へ導くための最善な方法であるということを教えてくださいました。そしてメサイアの賛美にも参加させていただき、言葉では言い表わすことはできませんが、確かにイエス様が中心におられ、色々な問題や思い煩いが本当にちっぽけなことのように思えました。私の思いや考えは不真実であり、私の中に生きて働いてくださるイエス様だけが真実です。私が手を引けば引くほど、すばらしいイエス様が確実に働いてくださり、私中心の生活からイエス様中心の生活へと導いてくださっていることに感謝いたします。

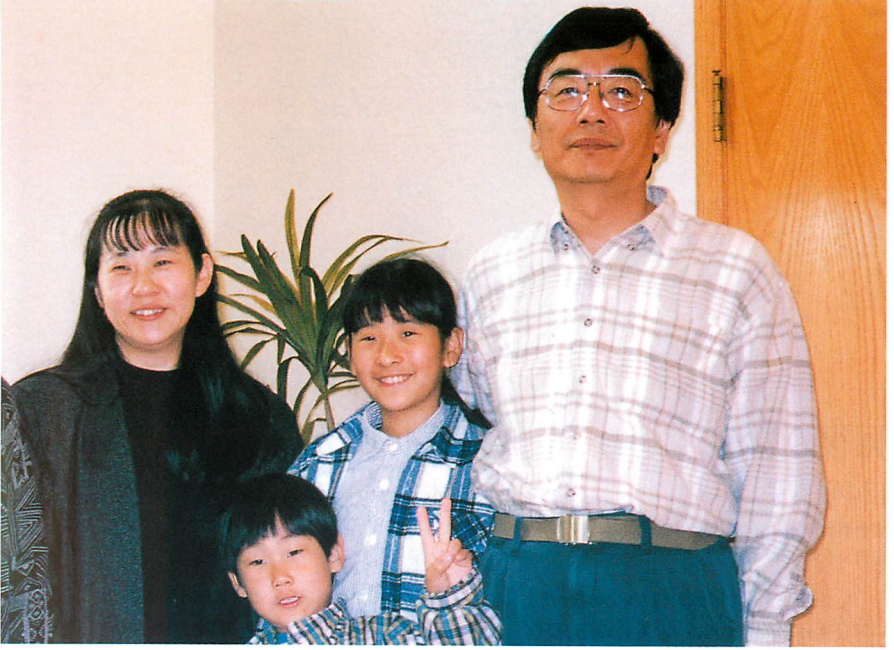
山口あい

牛田小学校5年在学中

私は小学校2年生の時、自分の中におそろしい押えられないもう一人の私がいるのに気がつきました。ときどき夢の中でうなされ、こわくて目が覚めてお母さんの所へ泣きながら行きました。そしたらお母さんが「イエス様があいちゃんのことを一番愛してくれているよ。いつもそばにいてくれるのでこわくないよ。イエス様に祈りなさい」と言いました。それでこわい時いつも、「イエス様助けてください」と祈ります。イエス様が大好きです。

山口直樹　6才

ぼくはイエスさまがだいすきです。どうしてかというと、ぼくのお父さんとお母さんをつくってくれたからです。ぼくは、お父さんとお母さんがだいすきです。お父さんとお母さんはイエスさまがだいすきです。だから、ぼくもイエスさまがだいすきです。りえねえちゃんもまきねえちゃんもゆりちゃんもあいちゃんもすきです。イエスさまみんなをつくってくれてありがとう。（母　代筆）



生ける主に出会って

山口裕之

(株)三和シャッター工業勤務

福岡県出身／東国分小／諏訪中／南筑高／西南学院大学経済学部卒／妻 利江／子供 一男四女

キリスト集会に導かれるまでの教会生活の8年間は、キリスト者とはこのようなものだ、信仰とはこのようなものだと自分で判断し、自分に言い聞かせておりました。ましてや、主イエス様を仰ぎ見ることもなく、自分自身で色々な理由や理屈をつけて自分の行いや考えを正当化していました。日曜日には義務的に教会へ行き礼拝をし、何の喜びもなく暮らす毎日でした。

しかし、このような自己中心的で高慢な歩みをしていた私にも、主イエス様は大きな恵みと愛を与えてくださり、「生ける主、あなたの真実の主はここにいます」と言ってくださいました。

今をもって、私がどうしてこのようなところにいるのかはまったくわかりませんが、目で見ることができない主イエス様を心の目で見ることができ、いつも家族とともに、主イエス様だけを見上げて生活できる喜びを感謝いたします。

「わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう」(詩篇81・10)

回復の恵み

田中美智子

東京都出身／大正小／櫻蔭中／同高等学校卒／夫宏道／子供 三女

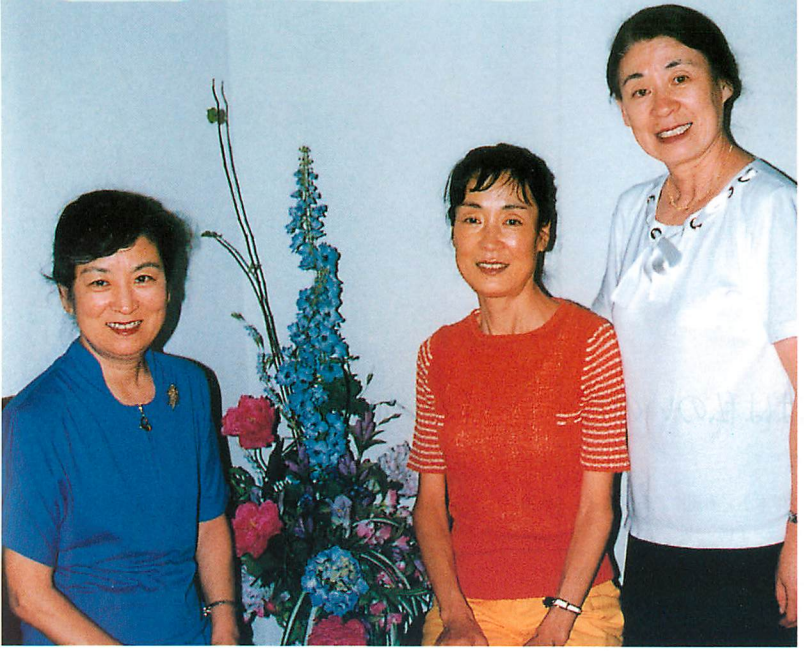
「ちっぽねえちゃん!」妹の口からこのなつかしい呼びかけを私は20年ぶりの再会の日に聞くことができました。この時をどれほど待ち望んだことでしょう。20年前別れ別れになってしまった時、どうしてなのか、なぜなのか、訳がわかりませんでしたが、今こうして祈り求めていたことが現実になってみて、夢でも見ているような不思議な気持ちがします。この20年の間、イエス様は先ず姉と私を呼んでくださり、妹の救いのために期待を持って祈り続けるように働きかけてくださり、ついに時を備えてくださいました。私たちの空白の年月は神様の愛によって完全に癒され、今は皆感謝に変わっています。いつもイエス様を中心にして一緒に居られるのが嬉しくてたまりません。「私はこう確信しています。…私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」(ローマ8・38,39) この写真は昨年の再会に、妹を真ん中にしてベックさんが撮ってくださった忘れられない記念の写真です。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神がこのことをされたのだ。人は神を恐れなければならない」(伝道者3・11,14)

暗闇の中から

鈴木悦子

東京都出身／大正小／忍岡中／青山学院高／青山学院大学英米文学部卒／夫 裕之

私の家のドアを開けてイエス様が中をちょっとご覧になられたのは去年の夏のことです。姉の家での家庭集会に初めて行った時から、イエス様が我が家に来てくださっていました。
約20年前に私が姉たちを一方的に恨んで住所も告げずに引っ越してから、私の光のない生活が始まりました。ところがイエス様は姉たちに再び会わせてくださり、自分がどんな人間であったかをはっきり示してくださいました。がく然としました。本来なら神様の御前に出られるはずもありませんが、十字架によって私の罪は赦されているということを知り、とても驚きました。学生の頃は毎日お祈りをしていましたが、救いについてのお話など聞いたこともありませんでした。主人も私と同じような信仰を持っていましたが、お互いに自我が強く現実の厳しさに上がったり下がったりでした。しかし今年の3月にベックさんのお話をうかがい、180度変わりました。イエス様が第一です。あっという間に夫婦二人で受洗の恵みに預かりました。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ28・20) 私は一人ではありません。主に感謝します。



左から田中さん、鈴木さん、竹本さん。

見よ、すべてが新しくなりました

竹本 裕子

東京都出身／金龍小／都立竹台中・高／ドレスメーカー女学院卒／夫 隆／子供 二女

若い頃から自分に忠実に、自分の納得のいく人生を送りたいと、自分を判断の基準の中心に置いて歩んで来ました。しかしどうにも埋められない虚しさの中で、内村鑑三の本を通して聖書のことばに触れ釘付けになりました。「人はパンのみて生くるにあらず。神の口より出ずることばによりて生くるなり」。その後二十数年教会生活を続けましたが、心の中の問題解決も得られず、現実の家庭生活は完全に破綻していました。互いに愛し合い幸せになりたいと願いながら傷つけ合い、もがけばもがくほど底無し沼に沈んでいくような絶望の日々でした。この頃、軽井沢のバイブルキャンプに参加し、生まれて初めて生ける神様を体験的に知り、喜びに満たされました。そして霧が晴れるように自分の姿を見せられ、私の歩んで来た自己追求こそが罪でありすべての破綻の元凶であることを知り、床にへたり込んで心の底から「ごめんなさい」と叫びました。以後私の人生は一変し、イエス様のきわみまで愛してくださる愛によって、家庭も愛の方向に針が回るようになり、また、最愛の妹とも再会でき、主にある三姉妹として喜びの日々をともに過ごしております。

みことばは私のいのち

上村容子

高知県出身／岸本小／赤岡中／香川高／すみれ洋裁学園卒／夫 誠／子供 一男二女

それまでにないほどに心身共に疲れ果てていた時、当時中学生だった長男が校門の外で配られていた聖書を持ち帰り、それを読み、万物を創造されたお方がイエス様であること、私たちの国籍は天にあることを知りました。イエス様のことをもっと良く知りたいと思い、本を捜したり教会へも通いましたが、かえって空しく苦しくさえなっていきました。そんな時、町内に住むキリスト集会の方からいただいた「光よあれ」で信仰と宗教の違いを知り、教会を去りました。聖書に出会って1年後、イエス様を私の個人的な救い主として受け入れました。「私たちの負いめをお赦しください」（マタイ6・12）救われてから生活の中でどうしたらよいかわからなくなった時、いつも聖書のことばが導いてくださいました。また、子供たちの色々な出来事にもイエス様は聖書を通して語りかけてくださいました。

「心を尽くして主に拠り頼め」（箴言3・5）「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」（マタイ6・33）これからもイエス様にお尋ねして歩んで行きたいと思います。

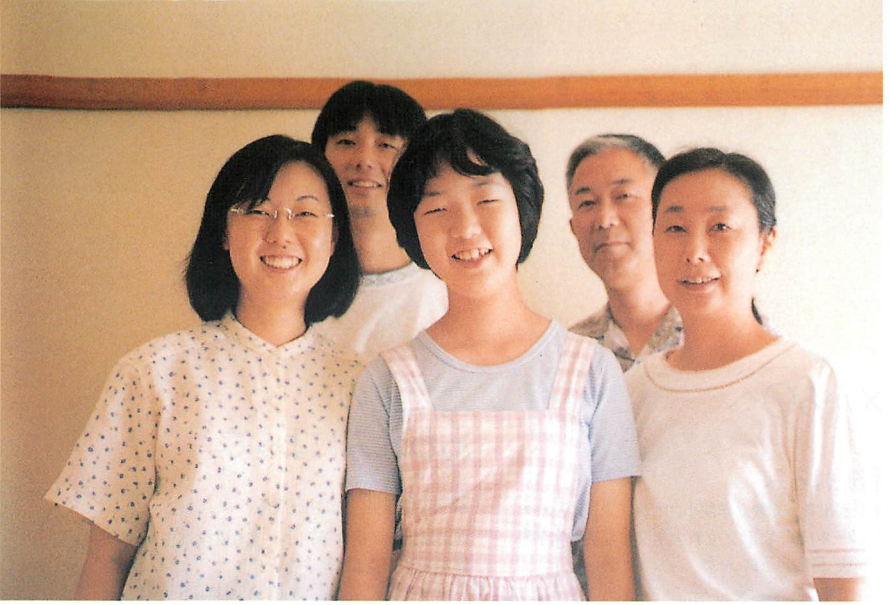
「ハレルヤ」

上村まき

東京都出身／北久米小／野市中／高知学芸高／清和学園英語専攻科卒

私は18歳の時イエス様に出会い、将来への不安、死後の世界への疑問、また何をやっても埋まらない心の空洞から開放されました。
その後、主にある方々が大勢いらっしゃる会社に就職し、吉祥寺集会の近くに住むことになりました。礼拝、祈り会、家庭集会、そして喜びの集いにも毎週のように参加することができ、恵まれた生活を送っていました。しかし、病気になって働くことも集会に行くこともできなくなり、地方の親元へ帰ることになりました。すべて私の意に反していました。けれどもこのことを通し、私はイエス様とではなく集会の皆さんとのお付き合いを第一としていたこと、また自分が信仰だと思ってしていたこととイエス様のみこころとに大きな違いがあることに気付かされました。

ふり返ってみると、シチュエーションは違うものの根本的には同じ問題が私の内にありました。今は、すべての問題は私が「ごめんなさい。ありがとう。すべてお任せします」と主に告白できるようにイエス様が導いておられたのだと確信し、感謝しています。
「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ」（詩篇150・6）



前列 左 まきさん、右 容子さん、後列 右 誠さん。

滅びから救いへ

上村誠

NTT四国建設技術センター勤務
高知県出身／徳王子小／香我美中／高知工業高専卒／妻 容子／子供 一男二女

「死ぬ気になれば何でもできる」。家庭を顧みず、自分の思うままに生きてきました。仕事に行き詰まり何の解決策も見い出せず、疲れて非常階段でたばこを吸っている時、足に少し力を加え空中に飛び出せばこの苦しみから解放されるという死の誘惑がしばしばありました。仕事と趣味を優先に考えて生きてきましたから、自分の内なる自我に束縛され、自分自身の存在価値を見い出せなくなっていました。90年にキリスト集会に集っていた妻を「別府喜びの集い」に連れて行った時、そこで自我から開放される聖書のことばに出会いました。「私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません」（Ⅰテモテ6・7）「あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません」（ヤコブ4・14）　私のわがままのために主イエス様が十字架にかかってくださったことを知りました。愚かな40年間の罪にまみれた滅びの人生から救いあげてくださった主イエス様に心から感謝します。

×から○へ

藤原はるみ
東京都出身／立教女学院小、中、高／米国イーストハイスクール(I.C.Y.E)／立教大学文学部英米文学科卒／夫 信広／子供 一女

キリスト教系の学校で学んだ私は、高校生の時洗礼を受けました。私は良い地に蒔かれたのだから幸せになれると思いました。大学卒業後まもなく結婚しましたが、幸せはどんどん遠のいていきました。親が悪い、夫が悪い、社会が悪いなど、私はそれらを人のせいにし、自分の周りを×印で埋めていきました。そのうちに一番悪いのは自分自身であると思うようになり、ひときわ大きな×印を自分の上に付けました。ついに身動きが取れなくなり、「生まれ変わりたい」と私はうめきながらうずくまりました。そんな時イエス様が「地のはるかな所から」私を呼び出してくださいました。「わたしはあなたを選んで、捨てなかった」(イザヤ41・9) イエス様は私を押しつぶしていた大きな×印を取り除いて、○印に変えてくださいました。そして、イエス様の十字架が自分ではどうすることもできない私の罪のためであったこと、私もともに十字架に付けられたことを聖書を通して知りました。私は生まれ変わったのです!イエス様に頼ればすべて○印に変わります。私に「生ける望み」(Ⅰペテロ1・3)を持つようにしてくださったイエス様を心から賛美します。

ただ主の あわれみによって

藤原絵理 (株)NEC勤務
東京都出身／桃井第四小／立教女学院中・高／上智大学理工学部物理学科卒

教会の日曜学校に通っていた私は、神様を信じていましたが、イエス様が何のために来られたのか、真剣に考えたことはありませんでした。キリスト集会に導かれてから、聖書のことばが生きた言葉として私の心に入って来ました。「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である」(箴言14・12) 「良い子である」と思っていた私は、この聖句に衝撃を受けました。しかし、解決策もすぐに与えられました。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」(詩篇37・5) 祈ると平安が与えられ、主が現実に生きて働かれることを知りました。またイエス様が来られ十字架上で血を流されたのは、傲慢な罪人である私を赦すためであったことも示してくださいました。就職してからは日々無力さを思い知らされ、私の中には良いものが何一つ無いことを認めざるを得ませんでしたが、このことは本当に感謝です。主の力は私の弱さのうちに完全に現われてくださるからです。(Ⅱコリント12・9) ただ主の憐れみによって救われ、天国までの歩みを守られていることを覚える時、心から喜びに満たされます。



左 はるみさん、右 絵理さん。

あなたはいのちを選びなさい

藤原信広

(株)睦屋取締役
宮崎県出身／宮崎大学付属小･中／宮崎大宮高／立教大学文学部英米文学科卒／妻 はるみ／子供 一女

「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ」(哀歌3･22)10年近くも崩壊していた家庭がイエス様の憐れみにより再び一つに継ぎ合わされました。大学卒業後すぐに結婚し子供も与えられ幸せな家庭を望んでいましたが、結果的には絶望だけが残りました。自己中心と家族へ愛の欠乏のゆえ、ついに夫失格、父親失格の烙印を押され、家に戻るのも苦痛になり、自然の成り行きで他の女性と酒に慰めを求め溺れていく自分がそこに在りました。「さよならだけが人生さ」と刹那的になり、家庭生活といえば毎日が綱渡りと修羅場の連続で疲れ、妻にノイローゼ、病と手術等が次々と与えられ、暗い出口無しの絶望の中、イエス様が憐れみを持って妻に望んでくださいました。その後主の光の中で私自身の愛の無さ、わがままをいやと言うほど示され、自分の今までの歩みを悔い改め、長年の重荷を降ろすことができました。神様からもっとも遠く離れていた私さえイエス様は憐れんでくださり、十字架の愛によって傷ついた家族はいやされました。1987年6月に家族3人揃って受洗の恵みをいただくことができました。



主と共にある日々の恵み

吉屋真二

神奈川県出身／南太田小／関東学院中／同学院高／中央大学卒／妻 和子／子供 一男

勤めに出ていた時は仕事に追われ、いかに忙しくても夫婦はお互いにそれぞれの立場を理解し合いながら過ごせば、平安な家庭生活が送れ、ともに歩むことができると思っていました。そして今まで40年近く喧嘩もせず、平穏な生活を送ってきたことに満足していました。時々妻から信仰の道を誘われましたが、関心を持つことはありませんでした。しかし退職後、妻と御代田の集会や家庭集会に何度か通うようになり、ベックさんとのお話を通して考えが変わってきました。ある時妻に「私たちはこんなに仲良しなのに、別々の道を歩んでいるのが悲しい」と言われ、それまでの自己中心的な考えで神なき人生を歩んで来た自分に気づき、信仰の告白に導かれました。

受洗後は神様とともにある人生の素晴らしさを日々実感し、主の恵みの豊かさに感謝でいっぱいです。今は毎日妻と一緒に聖書を拝読し主に感謝し祈りを捧げながら、喜びと平安な日々を過ごしております。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」（Ⅰテサロニケ5・16～18）

主の訓練

吉屋和子

神奈川県出身／西戸部小／鶴見高女／横浜市教員養成所卒／夫 真二／子供 一男

息子隆が結婚する前に、婚約者のひとみは広島キャンプで、「ここに集われている方々はどこか違います。私はこの方達のお仲間になりたい」と言って息子と二人でベックさんにお話を伺い、喜んで主を受け入れました。私の祈りは実現したのです。「今度は主人の救いの番だ」と軽く考えていましたが、主は「夜も昼も御前に祈るこのしもべの祈りに耳を傾けてください」と祈ったネヘミヤのような私の悲痛な叫びにも、「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て」（詩篇37・7）の聖句をもって長い時をかけて主にお委ねする祈りの訓練を私にしてくださっていました。

ある時、御代田のキャンプで集会が終わった時、主人が一人でベックさんとお話をしていました。私たちが何人かで待っていると主人が戻ってきて「洗礼を受けることにしたよ」と言ったのです。主のご愛とご真実さに驚き、感謝の心でいっぱいになりました。今は二人で心を合わせて礼拝をお捧げし、日々聖書を拝読し、お約束を信じてとりなしの祈りの毎日を送らせていただいております。主の長い訓練の後に来たこの喜びと感謝です。ただただ主をほめたたえます。



悲しみのキリスト・イエスに魅せられて　光藤英彦

愛媛県立中央病院東洋医学研究所勤務
愛媛県出身／愛媛大学付属小／愛光中・高／東京大学医学部卒／妻 絢子／子供 一男三女

「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください」（マルコ14・36前半）悲しみの祈り人であるイエス様の姿に魅せられ、17歳の頃からイエス様が私の心の片隅に居てくださるようになりました。それから40年を経て初老期を迎えた今日、このゲッセマネの祈りの後半、「しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください」という神様への信頼に満ちたイエス様の祈りをしみじみと味わうことになりました。キリスト集会に集うようになる3年前には、「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ」（イザヤ43・1）の真意さえまったくわからない者でしたが、今ではもっとも大切な聖句であると知る者へと導かれています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ3・16）「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。…キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです」（Ⅰペテロ2・24）

心砕かれて

光藤絢子

東京都出身／小金井第三小／第二中／成城学園高／成城大学文芸学部卒／夫 英彦／子供 一男三女

約30年前からイエス様は「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）の聖書のことばによって私を助け続けてくださいました。夫の郷里の松山で、夫の仕事も、四人の子供たちの生活も一見まったく順調でした。その間、私はイエス様を生活の隅に置いてしまっていました。ところが四年前、夫が脳出血で倒れ、社会に出ていた長女のめぐみも挫折して松山に帰り、さらに次女のしのぶが拒食症で苦しむという三つの苦難が同時期に起こりました。そんな時、ベックさんを通してイエス様に再びお会いすることができ、生き生きとした信仰に導かれました。それから十ヶ月後、めぐみは26歳の誕生日を迎えてまもなく短い生涯を閉じました。そしてその三ヶ月後に、イエス様は日曜礼拝と家庭集会を私どもの家で開くよう導いてくださいました。イエス様はすべてのことを通して私たち家族の一人一人を救ってくださり、たくさんの恵みと喜びをくださっておられます。「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる」（詩篇34・18）



恵み豊かな主のあわれみ

池島精一

石川県出身／相馬小／七尾実業高校併設中／七尾実業高建築科卒／妻 清子／子供 二男／孫 七人

「人にはできないことが、神にはできるのです」（ルカ18・27） 長男潤一の試練を通してイエス・キリストを知ることができました。十数年前、東京出張の時、二歳の孫の波留加君に誘われて、キリスト集会に始めて集い、そこに集っておられる方々の何の思い煩いのない顔、顔…、に私の胸中と違うものを感じました。数日後、息子夫婦に連れられて大阪に帰り、神戸集会の礼拝に集いました。「神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました」（エペソ1・4）

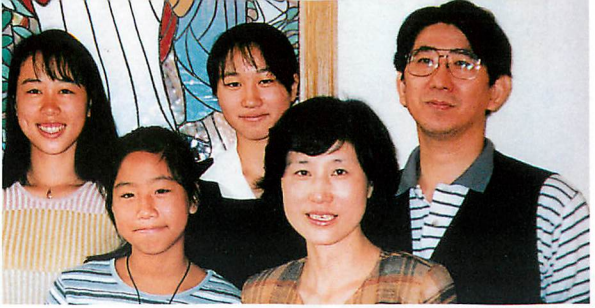
横暴でわきまえのないこんな者の救いを、はるか昔にご計画され、今この地上での生活を日々導いてくださっているイエス様を確信する者とされました。以前は酒でまぎらす生活でしたが、今は酒を必要としなくなった日々の生活を心から感謝しています。何が起こっても、すべてイエス様のご支配のうちにあることを受け止め、「すべての事について、感謝しなさい」（Ⅰテサロニケ5・18）とのイエス様からのご命令ですから、主イエス様に従いたい、そして、すべての事について感謝できるようにと願って祈る日々です。

心の道標（ふるさと）

池島清子

大阪市出身／新庄小／瑞光中／大阪美容専門学校卒／夫 精一／子供 二男／孫 七人

十数年前長男潤一から、インドネシア地方を旅してマリファナや毒きのこを覚え、依存症になったこと、その苦しみをイエス様の愛のお導きによって開放されたことを伝えられ、青天の霹靂でした。後になってこの試練は、順境の日には自分をたたえ、逆境の日には周りを責め、主人には感謝が足らず、子供たちには心の糧を与えず、という自己中心であった私の愚かな罪をあわれまれたイエス様が私をみもとにお導きくださるための道標であったと知り感謝いたしました。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない」（黙示3・17） 聖書を通して自分の罪を知りました。「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない」（イザヤ43・25） イエス様は私のすべての罪を贖ってくださり、主人と心を一つにした祈りへと導いてくださいます。悔い改めと感謝の信仰を賜った今も私は相変わらず、愚かでわきまえのない者ですが、イエス様は常に優しく手を取って導き支えてくださいます。



右から正典さん、妙子さん。

光の中に出される主

松井正典

久留米市聖マリア病院放射線治療部部長
長崎県出身／福石小／福石中／佐世保北高／山口大学医学部卒／妻 妙子／子供 三女

「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える」（エゼキエル36・26）イエス様を知ってすでに30年、主はこの聖書のことばをもって私に新しく臨んでくださいました。それは「奉仕」や「知識」ではなく、自分の罪と本当の姿を光の中に出すことでした。導きに従って重荷となっていた罪を光の中に出しましたが、イエス様が真に望まれたのは、行為としての罪告白ではなく、石のように固い私の心がイエス様によって砕かれることだったのです。「イエス様を信じて生きて来た」と思っていましたが、自分の考えと思いとを膨らませて自分のために生きてきたのだと示されました。「わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ」（イザヤ66・2）イエス様が愛してくださることに甘えて自己中心であることに気付かなかった者でしたが、初めて主を恐れる経験が与えられ、ちりと灰の中からイエス様を見上げた時に、改めてその真実に満ちた愛で愛されていることを知りました。主は本当に真実なお方です。

自己義認からの開放

松井妙子

広島県出身／舟入小／ノートルダム清心中・高／山口大学文理学部卒／夫 正典／子供 三女

若い頃に聖書と出会った私は、ごく自然に神様を信じ教会に通っていましたが、聖書のことばが生きて働かれることも知らず知識に偏り、自分の罪に対してはまったくの無でした。夫も似たような状態にあり、奉仕することで満足しているようでした。しかし主は不完全燃焼のままくすぶっていた私たちをじっと見守ってくださり、暗闇のあるわざが主によって光の中に出されたことを通してキリスト集会へと導いてくださいました。イエス様は「問題は周りではなくあなた自身だよ」と私の心に迫ってきました。心の深みまで探り窮められる主は私の本質がパリサイ人であることをよくご存知でした。愛と潤いのない家庭生活にイエス様の光が差し込んできました。現在我が家の責任者はイエス様です。主の愛と守りと訓練によって心の痛みととげは取り去られました。相変わらず失敗も多く、次々と悩みも与えられますが、主の愛が私たちを取り囲んでいるので本当に感謝です。「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています」（詩篇23・5）



いつも主にあって喜びなさい

石井武夫

長野県出身／泉田小学校高等科卒／妻　光子

私達夫婦は終戦により昭和二十一年九月に満州新京市より引揚者として故郷に帰国致しました。その後クリスチャンの方のお勧めにより上田市内の教会に入信致しました。平成三年七月近所に住んで居られた井上さんより福音センターに導かれ、以来毎週日曜礼拝に出席致しております。ある日井上さんよりベックさんとお会いしてはと言われ、平成六年五月二十九日妻と二人で面会し、信仰についてくわしくお話を承りました。またベックさんの厚い温かい両手を私の手の上に重ねられて唯々感謝と感激で私の眼から熱い涙が込み上げました。私は長い間自分の技術でりっぱに生活して行けると自信を持っておりましたが、イエス様は私の犯した罪の身代わりとなられて十字架を背負われ死に至るまで従われました。私は二十五年前に隠しておった罪を、犯人とされた人の家を訪問して全てお詫び申し上げました。その人は現在時効になっている今頃詫びに来た理由を聞かれましたので、第一ヨハネ1章8、9節を申し上げました。その方は大変喜んでゆるして下さいました。黙示録22章20節の主の御再臨と神の国を望みつつ、ひたすら祈らせて頂いております。

尊い血汐

石井光子

長野県出身／南小学校高等科卒／夫 武夫

御名を賛美致します。私は、昭和二十年八月十五日の終戦を迎えて、旧満州新京市より主人と一緒に故郷に引揚者として帰国致しました。昭和三十四年一月中旬、主人が交通事故で入院致しましたので、主人の代わりに教会の日曜礼拝に出席致しました。以来聖書を通して、イエス様は十字架の上で尊い血汐を流された事、私は罪人であった事に気付き、悔い改めました。キリスト集会に導かれて以来、皆さんの温かい愛の交流を頂き、唯々感謝いっぱいです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント5・17）「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」（詩篇23・1、2）「これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る』アーメン。主イエスよ、来てください」（黙示22・20）



聖書だけに頼って

山田健

山田測量事務所自営
神奈川県出身／蒔田小／蒔田中／鶴見工高／攻玉舎短大卒／妻　絹子／子供　一男一女

「あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです」（マタイ23·27、28）若いときから自分の生き方や意味を見出せず自信もなく、自分の価値観も分からず、いつも不安を抱えていました。ただ表面を取り繕い、問題が起こらぬよう腐心するだけで、みんなの中からはみでないように生きて来たように思います。「私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです」（ローマ7·23）この聖書のことばどおりの状態でしたが、イエス·キリストの「わたしの所に来なさい。わたしが休ませてあげます」と言う聖句に信頼し、聖書にだけ頼って生きる決心をし、やっと心の平和を得られました。自分に頼るには自分はあまりに弱く、正しくもなくいいかげんで自分の罪に振り回されている者でした。今は解放され重荷を降ろすことができました。

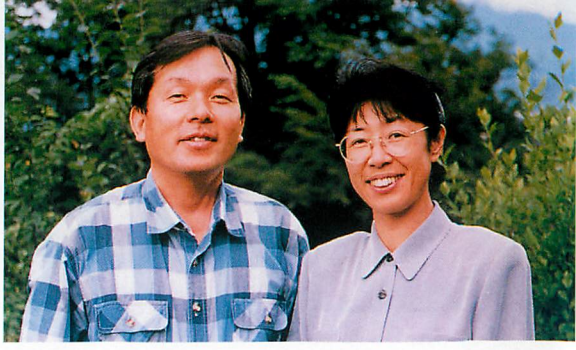
イエス様と出会えてよかった!

山田絹子

神奈川県出身／二つ谷小／栗田谷中／横浜翠嵐高卒／夫　健／子供　一男一女

「義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない」（ローマ3·10～12）子供の頃に母が言っていた「正直の頭に神宿る。」と「良いことをしていても悪いことをしていても神様は見ているのよ。」との言葉で、いつも神様に見張られている気がして、常に正直で善い行ないをしなければと思っていました。又そのように出来ない時は自分を責め、人に気を使うことに疲れ、急に難聴になったり、自律神経失調症からの孤独感に陥ったりと、いつもその恐怖感から逃れられませんでした。

そしてイエス様と出会うことによって本当の正しさと、今までの自己中心の正しさを他人に押し付けていたこととが知らされました。今になってみるとイエス様の救いにあずかったことが、こんなにも私の生き方を楽にしてくださり、孤独からも解放してくださっていることがよく分かります。「私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです」（詩篇118·21）



鉄の壁が打ち砕かれた

山田正博

山口県出身／於福小／於福中／大嶺高卒／妻 由美

「助かった」という言葉が、私の第一声でした。その時私は、生きながら死んでいる状態でした。というのは、長い間、真理とは何かと自問を繰り返し、捜し求め、その中に溺れ、力尽きる寸前でした。そのもっともつらい時期に聖書に出会い、主が呼び掛けてくださっている聖句に触れました。詩篇107編4～16節で慰めを受け、喜びに満たされ、背中いっぱいに負っていた重荷を下ろし、太平洋の真中で小舟の中にゆっくりと休むことができた、そんな思いでした。

青春期に進路を絵の道に決めました。その仕事の中にこそ、必ず真理が存在するものと思っていたのです。が、歩むほどに混乱をきたし、描く意欲さえ失ったのです。自分の前にできたのは、永遠に続くと思えるほどの厚い壁であり、前にも後ろにも進めない状態が16年間も続きました。しかしそれは、私の力や思いが弱まり、砕かれるために必要な年月でした。主の前に出た時、自分がこの世の中心ではないこと、又弱い者、能力のない者であることを認めることが出来ました。（黙示3・17）主イエス様によって新しく生まれ、主と共に歩む生活に変えられました。

心のにぶい者をも

山田由美

長野県出身／筑摩小／開成中／深志高二部／桜美林短大英文科卒／夫　正博

1972年、学生の時に軽井沢のキャンプに誘われ、こんな私でも永遠の命をいただける（ローマ6・23）と聞いてイエス様を信じました。高校時代にも聖書は読んでいましたが、イエス様とつながった時から、聖書のことばがさらさらと音をたてて流れ込むように心に入ってきました。そして一人静かに、「今までイエス様を蔑ろにして、自分の力で生きているかのように歩んでいた傲慢さを赦してくださって、ありがとうございます」。と祈りました。永遠の命が自分のものになってから、小さなことを心配しなくなり、平安です。またイエス様は、このままの私をいつも受け入れてくださり、その上で先入観を一つ一つ取り除き、真理に導き、聖書のことばを持って解放してくださるので、本当に感謝です。

小さい頃からいつも迷っていて心も勘も鈍いのが私の悩みでした。このような者にさえ、一人の人の助け手として歩むようにと、主は1992年に結婚へと導いてくださいました。主にお任せするまで、とても苦しんだ婚約期間でしたが、今、弱くても日々共にイエス様を第一として、祈りの中で歩ませていただいていることは大きな感謝です。



真の喜び

松本昭二

㈱新日本製鐵名古屋支店勤務
山口県出身／通津小／通津中／柳井商業高卒／妻　真知子／子供　一男一女

社内外を問わず自分を認めてもらいたい。このことだけに頭を置いて仕事をしてきた私は、他の人よりもうまく仕事をやり遂げることに生き甲斐を感じ、家庭を顧みることも思いやることもなく大企業の中で必死に抵抗していました。そのような私に真の世界を教えてくださったのがイエス様でした。先に集会へ集うようになった妻の喜ぶ顔、楽しそうに日曜学校に行く子供たち、その変化がはっきりとわかりました。信仰というものは弱い人が求めるもの、私にはまだ必要ないと思っていました。妻や子供たちが集会へ行くことを拒んではいませんでしたが、変わっていく姿に逆に迫害を加えたこともありました。ふと気がつくと自分だけが取り残されているような思いになり、家庭集会へも集うようになりました。いつのまにか自分で疑問に思っていたことも考えなくなり、自分の傲慢さや弱さを一つ一つ体験させてくださり、自分の犯してきた罪をはっきり認識させてくださいました。私を変えてくださり、祈ることの本当の喜び平安を教えてくださった主イエス様に深く感謝します。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません」（詩篇16・2）

聖書のことばを通して

松本真知子

山口県出身／浅江小／浅江中／光高校卒／夫　昭二／子供　一男一女

「祈っているわ」電話の向こうのやさしい声。その当時、長男の原因不明の病で、自分の無力さを知らされ、心配することしかできない状態の私にとって、それはまさに「天の助け」でした。「私のために祈ってくださる方がいる」不思議なほどに素直に受け止めることができ、大きな力に引っ張られるように集会へ導かれました。迷い子がやっと親の元へ帰れたような安堵感と喜びで満たされました。それまでよい妻、よい母でありたいと願い、ある宗教に頼っていました。しかし、願いとは逆に仕事人間の夫に不満を抱き、子供へも自分勝手な愛しか持てず、真理も何も見出せない状態でした。そのような私をイエス様が憐れんで悔い改めへと導いて救ってくださったのです。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」（ローマ10・10）そして今まで犯してきた罪や過ちの心苦しさからも解放してくださり、聖書のことばが生きて働くことを知りました。「あなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない」（イザヤ43・25）弱い私をこのように、聖書のことばを通して導き励ましてくださるイエス様に心から感謝いたします。



主に在る自由

内田忠志

三木市立三木中学校主査
兵庫県出身／和田岬小／須佐野中／育英高卒／妻のぞみ／子供　二男

高校の時、クリスチャンの先生と出会い、初めてキリスト教を知り、教会へと導かれました。8人兄弟の6番目に生まれたせいか、家族の中での存在感は薄く、反対に教会では水を得た魚の如く奉仕・役員等、信仰生活はこうあるべきであり、こうでなければならないと一生懸命でした。「事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです」（ローマ9・16）　努力や頑張りはいつしか疲れます。救いの確信や喜びもないままある日「光よあれ」の本を手にし、証しされている方々が主を信じ喜んでいることに驚きました。それも職場でバリバリと働く中年の男性が多いのにビックリしました。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」（エペソ2・8）　何かの行ないによってではなく、ただ主の前にすべてをさらけ出した時、救いの確信と心からの自由を知り、喜ぶことができました。「真理はあなたがたを自由にします」（ヨハネ8・32）　私たち夫婦は大ぜいの肉親の中で救いを与えられた者です。肉親が主イエス様と出会い救われることを今日も祈っています。

真の導き手なるイエス様

内田のぞみ

鳥取県出身／浦富小／岩美中／鳥取女子高卒／夫忠志／子供　二男

聖書との出会いは幼い時でしたが、イエス様が自分の救い主、いちばん大切なお方となったのは中学生の時です。父と姉を短い間に次々と失い、言い知れぬ淋しさと死の恐怖におびえて過ごすようになり、そのうえ、受験に失敗し失望、落胆してからでした。「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません」（ヨハネ14・18）頼るべき指針であった父を失った私に、イエス様が確かな導き手となり、真の喜びと平安を与えて元気にしてくださいました。そして自己中心でわがまま・高慢・ねたみなど、私のすべての罪が十字架の贖いによって赦されていること、イエス様の深い愛に感謝しました。その後のさまざまな試練の中どう歩めばよいかわからない私をイエス様がやさしく教え導いてくださいました。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」（詩篇119・105）　国籍を天に与えられ、日々平安と喜び、真の自由の中で生かされ感謝でいっぱいです。私の内にいつもイエス様が大きくなってくださるよう祈っています。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ2・20）



天の故郷をめざして

飯塚展夫

茨城県出身／文小／利根中／取手第二高／日本大学法学部卒／東京教育専門学校卒／妻　和世／子供　二女

私の学生時代はオイルショックの時であり、将来への不安と劣等感を抱きながら、目標のない日々を歩んでいました。その時、学内のクリスチャンを通してイエス様と出会い、創造主を知る事が出来ました。学生の時に知りあった妻と教会へ通っていましたが、会社の事業拡大で毎日夜遅くまで、また日曜日も働くようになり教会から離されました。その間に妻はキリスト集会へ導かれて行きました。牧師制度や組織を持たない集会は驚きでした。そして主は遠くに住んでいる親族知人に対して、時間や場所を超えて無限に働いてくださることを知りました。その後バブルの崩壊と共に勤めていた会社はなくなりました。主イエス様は、我が儘でみじめな私のために、十字架にかかり死んでくださいました。それで私は救われ平安を得る者となりました。復活した主イエス様はいつも共にいてくださいます。だから、主を喜び安心して将来に向かって歩んでいけます。「主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまえのない者を賢くする。主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする」（詩篇19・7、8）

主の御手の中に

飯塚和世

茨城県出身／麻生小／麻生中／麻生高／和泉短大児童福祉科卒／夫　展夫／子供　二女

福祉の勉強をしていた私は、何か人の役に立つ事が出来たらと思っていましたが、共に生活する友でさえ愛せない自分の姿を見せられました。その頃教会へ導かれローマ書7章15～17節の聖句を通して自分の罪を知り、私の罪の為に死んでくださったイエス様を信じる決心をしました。でも長い間天国への確信もなくいつも底知れぬ不安がありました。苦しくて主に祈っていた時に集会へ導かれ、リンデさんの『実を結ぶ命』の本の一節に心ひかれました。「主イエス様が私と共におられ私の内に生きておられる。この確信が本当に自分のものとなる時キリスト者はどこにいても喜ぶことができます。」また「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる」（イザヤ1・18）の聖句から、罪赦されイエス様の愛の御手の中にある確信が与えられ、喜びで満たされました。今も私自身は何も変わっていませんが、ありのままの私を愛してくださる主を見上げる時、希望と平安があります。「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります」（詩篇16・11）



神がともにいる

大須賀佳之

㈱オークテクノロジー勤務
神奈川県出身／屏風ケ浦小／浜中／日大高校／日本大学商学部卒／妻　弘子

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）　バブルが全盛の時代に過酷なノルマのある仕事の中で、毎月のノルマ達成の為、新規顧客の開拓、現状取引の拡張などの顧客対応と職場の人間関係に精神と肉体が疲れ果て（人生とは何か、人は何の為に生きているのだろう）生きる望みを失い絶望の淵にいた私は、宗教ではない天地万物を創造された神に出会うことができました。こんな私でも神であるイエス様は愛してくださり「神がともにいる」聖書の中で私に約束されている事を知り、あらゆる問題解決を聖書に求めて生ける希望が与えられました。

イエス様は、祈りの生活の中で聖書を通して私に多くを語り続けてくれています。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」（Ⅰコリント10・13）

この世の苦しみの時にもイエス様から与えられるあわれみと平安のある生活、大きな神の愛と豊かな恵みに感謝します。

あなたの罪は赦された

大須賀弘子

高知県出身／森小／土佐女子中／土佐女子高／国立高知病院付属看護学校卒／夫　佳之

看護婦として働き始めて1年が過ぎ、患者さんの看護や様々な人間関係で悩んでいた私は、絶望の中にいました。イエス様は、同じ職場の森本さんを通して、キリスト集会に導いて下さいました。ベックさんとお会いし、「あなたの罪は赦されています」（ルカ7・48）　聖書のことばを示されて読んで初めて祈った時、涙が溢れ、平安になりました。私のすべてを知っている方がいて、こんな私でもイエス様は愛してくださっていると知った時生きる希望と喜びでいっぱいになりました。「いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」（ガラテヤ2・20）

1992年10月、イエス様によって結婚に導かれ、共に主を賛美し祈る恵みにあずかりました。主人との生活で、自分が傲慢で自己中心でだめな者であると知るにつけ、十字架上で私の罪の為に死んでくださり、復活されたイエス様に感謝でいっぱいになります。4年前に父が急死した時も、家族の救いはイエス様の約束であり、天国で再会できる希望があり、聖書のことばに励まされ、感謝でした。



夕暮れ時にある光

棚村秀樹

石油公団勤務
ジャカルタ出身／日本人学校小学部／同中学部／国際基督教大学高校／ジャカルタインターナショナルスクール／上智大学法学部卒／愛妻 朋加

父の仕事の都合でジャカルタに暮らしていた小学生の時に、クラスの友人に誘われて日曜学校に通い始めたのが私と主との最初の接触でしたが、その頃はただ通っているという状態でした。中学生までは成績もよく、恥ずかしい話、将来自分は人とは違うことをするのではないかと奢り高ぶっていました。高校に入り「いい人」と思われたい、周囲の人に評価されたい気持ちが強くなり、自分の言動がどう思われるかを非常に気にするようになりました。主体性に欠け、八方美人的な生き方をしていた自分が、太宰治の「人間失格」の二つの顔を演じる主人公に共感するに至ったのは、困難なことではありませんでした。楽になれる生き方はないかと探し始めた頃、大学で知り合った妻に聖書のことを紹介されました。「汝の敵を愛せよ」といった部分があり、自分はクリスチャンにはなれないと思いましたが、人間の力では無理で主に頼った時に成し遂げて下さると聞き、嬉しくなりました。今では救われ、すっかり楽に生きられるようになり、主にまみえる日を楽しみにしています。「わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）

神様からのラブレター

棚村朋加

東京都出身／本宿小／武蔵野第三中／恵泉女学園高／上智大学文学部卒／夫　秀樹

母の胎内にいた時から吉祥寺キリスト集会に集うという恵みを頂いていた私にとって、イエス様が共にいてくださると信じることは、空気が私たちの周りを取囲んでいると信じることと同じ位、自然なことでした。そんな私がイエス様と自分自身の個人的な関係、即ち、イエス様の十字架と自分の罪との関係について考えるようになったのは、小学生の時の辛い体験がきっかけだったと思います。いじめたり、逆にいじめられたり、という辛い体験を通して、イエス様は私の中にある、本当に暗く黒い罪の性質に光を当ててくださいました。自分でも目を背けたくなるような醜い部分でした。けれども、イエス様の十字架は、私が自分ではどうすることも出来なかったこの罪の問題を完全に解決してくださいました。

今でも自分なんか大っ嫌いで、自分自身を見るとそこには絶望しかありません。けれども、こんな私をも愛して、愛しつづけてくださるイエス様に希望があります。

「私の目にはあなたは高価で尊い 。私はあなたを愛している」（イザヤ43・4） 神様から、こんなすばらしいラブレターを頂いている私は本当に幸せ者です。



安心は主と共に

遠藤学

東洋歯研勤務
東京都出身／中野島小／中野島中／柿生高／日本歯科大学付属歯科技工専門学校卒／妻　陽子／子供　一女

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)私の人生で初めて出会った聖書のことばでした。現在の妻から渡されたバースデーカードに書かれていたものです。荒唐無稽な聖書のことばを私は到底信じる事はできず、信じるものは自分自身であり、努力こそが人生である、所詮人生最後は死ぬのだと半ば開き直り、虚勢を張って生きていたからです。しかし心の底ではそれが虚しく、本当の安らぎが欲しかった。心のどこかで神を信じたかった。いつしか私は主イエス様に祈っていました。祈りつつ聖書を開くと私自身の事が聖句を通して語られました。(詩篇141・23)(エレミヤ17・9)私は残りの人生をこの神、主イエス様に委ねようと決心しました。こんな私にまで「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ43・4)と言ってくださったのです。私の心は平安でした。主に感謝する毎日です。この先も私たち家族は安心していくことができます。主イエス様が共におられますから。

絶えざる主の愛

遠藤陽子

東京都出身／東久留米第九小／明星学園中／明星学園高／竹早教員養成所卒／夫　学／子供　一女

「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです」(Ⅰコリント8・6)
幼い頃からクリスチャンホームに育った私にとって、イエス様の存在は自然であり疑う余地のないものでした。中学一年の時に受洗しましたが、神様と自分の思いの間を行き来する日々であり、もっと自分の自由な時間を持ちたいと願うことも多くありました。しかし、集会の友人や皆さんとのお付き合いや両親の祈りに支えられて集会に集っていました。22歳の時、単身でアメリカの田舎の小学校へ一年間ホームステイし、周囲に誰も頼れる人が居なくなった時、神と自分の関係をはっきりと実感させられました。

その後、愛する主人と結婚に導かれ、娘も与えられ光の子としての成長を祈る日々ですが、私たちが娘を愛し心配する以上にイエス様は絶えず愛し心配していてくださる事を思う時、本当に平安な気持ちを与えられます。



アルコール依存症からの脱出　森松秀人

造園コンサルタント会社勤務
愛媛県出身／清水小／清水中／松山工業高等学校卒／妻　三代子

「しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。『主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。』」（詩編22・6〜8）私は28歳の若さでアルコール依存症と診断され入院を余儀なくされました。何もできないくせにプライドだけは人一倍高く、傲り高ぶる者でした。そんな自己中心的な生き方から最後にたどりつく先は「孤独」しかありません。仕事もできなくなり借金をしてまで震える手で酒を飲み続け、父・母・妹を苦しめました。

しかし、どうしようもない虫けらである私の心の叫びを主は聞いて下さり、決してお見捨てにはなりませんでした。そして、生きていくことがどうにもならなくなったことを認め、すべてを主に依り頼む者としてくださいました。同じ病気を与えられ共に歩むAAの最高の仲間達や集会の皆さん、そして永遠のパートナーである妻をも主は与えて下さり、一方的にすべてを恵んで下さいました。感謝です。そして天国でカンパイ。

そのままの自分でいい　森松三代子

愛媛県出身／粟井小／北条南中／東温高等学校／公衆衛生専卒／夫　秀人

三人姉妹の末っ子で、出来の良い姉に比べ不器用で親の期待通りにできなっかった私は、劣等感の中で育ちました。成人してからもそれは根強く残り、思い通りにならない事があると育った環境のせいにして生きていました。福音にふれる機会はありましたが「馬鹿にされたくない嫌われたくない」と努力していた頃は素直に受け止めませんでした。何をやっても失敗だらけで自己嫌悪になっていた私をベックさんは「そのままでいいんだよ三代子は愛されているよ」と温かく受け入れて下さいました。「あなたを形造った方、主はこう仰せられる…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ43・1、4）主の愛を知る事によって、否定してきた両親への感謝と謝罪の気持ちも自然とわき出てきました。また夫の病気を通して、主イエス様の素晴らしさと聖書が真理であることを学びました。「イエスは答えられた。この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです」（ヨハネ9・3）こんな頼りない私に、主にある愛する夫を側においてくださり主の恵みと感謝で幸せな日々を過ごしています。



主を待ち望む喜び

石黒郁彦

グラフィックデザイナー
埼玉県出身／月越小／富士見中／狭山工業高／東京工学院情報専門学校／東京工学院芸術専門学校卒／妻 まり／子供 一男

「彼に信頼する者は、失望させられることがない」（ローマ10・11）これは私がいちばん最初に目にした聖書のことばです。それまで、自分に信頼をよせていた私は、自分自身がいちばん頼りにならないことを内心知っていましたが、何かあるごとに不安をいだきながらも自分を頼って生きてきました。今、根底にある平安は、主からの一方的な恵みによるものです。私は、前にもまして頼りない自分を再発見しますが、だからこそ、より真実の神に頼ることは平安です。自由業の私は収入を自分で確保しなければなりません。しかし、主に信頼をよせれば心の不安も一時的なものになりますが、もし自分に頼れば妻も子も捨てて逃げてしまうくらいの不安感にかられるでしょう。「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である」（黙示22・5）「これらのことをあかしする方がこう言われる 。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください」（黙示22・20）唯一の真実と愛を待ち望むことができるようにしてくださった主イエス様に唯々感謝するのみです。

わたしはあなたを愛している

石黒まり

ドイツ・シュトゥッツガルト出身／杉並第二小／東田中／田柄高卒／相模大野女子大中退／夫 郁彦／子供 一男

私は人がどの様に自分を見ているかという事を気にして生きていました。モデルの仕事をしていた私は、人前で明るく性格の良い人間を演じていました。実際には、他人を羨みねたむ、愛のまったくない心の貧しい者でした。両親とも問題を抱え、信頼関係は破綻していました。外見上の自分と心に影のある自分とのギャップに苦しんでいた頃、三浦綾子さんの本やクリスチャンの親友を通して、少しずつ集会に集うようになり、イエス様と出会いました。イエス様は私がどんなに醜くて惨めな者であるかをすべて御存知の上で、私を愛していると言われました。ずっと自分のすべてを受け入れてくれる誰かに出会いたいと思っていた私は、それがイエス様だったことを知り、涙しました。それからは、人がどう思うかではなく、主がどう思われるかということに規準をおいて生きるようになり、世の中の価値観から解放され、自由になりました。また、家族や友人の救いを心から祈り求めるように変わりました。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ43・4）このことばは真実であり生きていて、いつも私の心をさします。



遠まわりして辿り着いた「主の家」

村上正剛　JR東日本情報システム㈱勤務
旧満州公主嶺生まれ／熊本県出身／島子小／島子中／天草高／中央鉄道学園大学課程卒／妻　恵子／子供　二男

私と吉祥寺キリスト集会の出会いは、もう18年も前になります。妻が先に導かれ私もバイブル・キャンプに参加したりしましたが、当時40才で自力で物事を解決せねば会社内で取り残されるという思いもあり、集会に背を向け続けました。一方で劣等感にも囚らわれ明日を思い煩う日々を送っていました。定年を3年後に控えた1996年、行き違いから相手会社との契約上のトラブルに見舞われ深刻に悩みました。この時、主は私を見捨てず集会の方々を通して導いてくださり、疲れ果てていた私に救いの手を差し伸べて下さいました。心の扉が開かれ、主の憐れみにより1998年1月2日私を待っていた長男と共に洗礼へと導かれました。受洗後、改めて気づかされたことは、集会の方々の絶えざる祈りがあったことです。私が苦境に立たされたこと＝試練も主の御計画であり感謝するばかりです。主にあって新しく造られた者となった今は、次の聖句に励まされ日々心の平安を得られるようになりました。「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます」（ローマ8・18）

死の恐れから解放されて

村上恵子
東京都出身／中延小／荏原第二中／目黒学園女子商業高卒／夫　正剛／子供　二男

私は子供の頃から、死ぬことが恐くてたまりませんでした。この大宇宙の森羅万象も人間の存在も、不思議でなりませんでした。父が急性白血病で召天したのは、長男が生後半年の時でした。父の突然の死に慄然とし震えました。父はどこに行ってしまったのだろうかと思うと気が狂いそうでした。頑健な父がこうなのだから、こんな幼子なんかひとたまりもないと思い、子供が病気する度に死ぬのではないかと不安でいっぱいでした。そんな時、吉祥寺集会に導かれ聖書の真理を知りました。「初めに、神が天と地を創造した」（創世記1・1）　聖書の冒頭のこの一行で天地万物を造られた神の存在を知りました。人間の生も死も、この大宇宙も、この方によって支配され死は終わりではなく、神である主イエス様と共にいられる、最高の幸せの始まりであると知った時、死の恐さはウソのように消えました。それと同時に家族・友人の救いを心から願い祈り続けました。主の憐れみによって夫と長男も昨年救われ、主にあって共に喜ぶ者へと変えられました。この平安と喜びを多くの方々と分かち合いたいと、主の再臨を待ち望みつつ、夫と共に祈り続けています。



左 美樹さん、右 理古さん。

イエス様＝愛

須藤美樹

ピアノ・エレクトーン講師、プレイヤー
千葉県出身／高柳小／上野学園中音楽科／上野学園高音楽科／上野学園大学ピアノ科卒

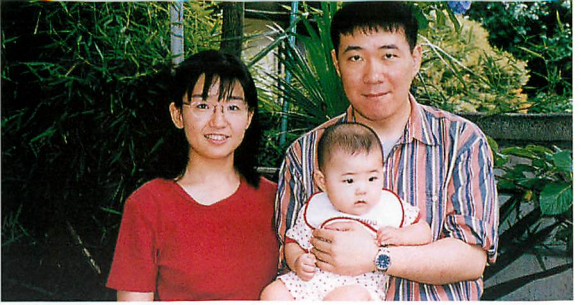
5年程前、当時芝居をやっていた私は、クリスチャンである演出家と作家を通して神様の存在を意識するようになりました。それまで色々な事に興味を持ち挑戦しましたが、熱し易く冷め易い私の心の隙間を埋めてくれるものは何一つありませんでした。しかし真実である神と出会い私が努力した訳でも頼んだ訳でもないのにこんな私をも愛してくださり必要としてくださっていることを知った時、自然と心の隙間は埋められていました。救われてからも人間関係や病気などの苦しみは与えられますが、その度に心から祈ることができ、祈ることによって状況は変わらなくても平安で落ち着くことができます。どうして苦しみや悲しみが与えられるのか、なぜ悪が蔓延するのを神はそのままにしておられるのか私には何もわかりません。しかし唯一つだけわかることがあります。それはイエス・キリストは真実であり愛そのものだという事です。「主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまえのない者を賢くする。主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする」（詩篇19・7、8）

イエス様のこたえ

須藤理古

㈱国際フローリスト・トーキョー音楽講師
千葉県出身／高柳小／高柳中／上野学園高／上野学園大学ピアノ科卒

「愛」とは一体何であろう。救われる前、私はこの答えを捜し続けていました。それまでこの世を謳歌していた私には人生について深く考える事は無意味でした。何故なら自分の力で出来ない事、乗り越えられない事はないと堅く信じ、自分をいつも正しいとしていたからです。しかしある失恋を通してそれまでの自信や計画が見事に崩れていきました。人間の愛がいかに不安定で不確かなものであるかを思い知らされ、心の中に出来た空洞をあらゆるこの世のもので埋めようと努力しましたが何一つ変わりませんでした。もはや自分の力ではどうする事も出来ない所まで来た時、救ってくださいと神に祈るようになりました。するとそれまで気付かなかった自分の罪や醜さが明らかにされました。到底、自分では解決できません。しかしその私の罪のために身代わりとなってくださった方がイエス様なのです。イエス様は私に答えをくださいました。これが「愛」であると。イエス様、感謝します。私を造り、赦し、愛し、生かしてくださっていることを。「わたしは主によって大いに楽しみ、わたしのたましいも、わたしの神によって喜ぶ」（イザヤ61・10）



喜びをもって主に仕えよ

（詩編100・2）

佐山 孝治

㈱JMS勤務

青森県出身／和徳小／弘前一中／弘前高／東海大学医学部中退／妻 淳子／子供 一女

開業医の長男として裕福に育ち、贅沢な生活という我欲を満たす為に医学部に入学した私にとり、在学中に主イエス様の救いにあずかったことは父なる神の一方的な憐れみでした。人間のわがままは神の前に罪であり、この私の全ての罪を贖う為にイエス様が十字架上で死なれたこと、三日後の復活により死にも勝利され、今も生きて私を愛して下さっていること、永遠の命と天の御国が約束されていることを知り、イエス様を信じ、愛し、仕えて行きたいと願う様になりました。その後の私の歩みは己の罪の醜さを見据え、その全てをご存知の上で受入れて下さるイエス様の愛のご真実を新しく覚えることの繰返しです。留年を重ねた末の大学中退、職場での社長、上司への反抗等、己から出るものは全てわがままです。それを自分本来の姿として受入れることは私にとって非常な苦痛を伴います。しかしイエス様は絶えず私の傍で私の悔い改めを黙って待っていて下さいます。心を静めて悔い改め、罪の赦しを頂き、イエス様の愛を新しく体験する喜びは救いにあずかった者の特権です。赦された罪人としてイエス様のために生きたいと妻共々祈る毎日です。

主と共に歩む喜び

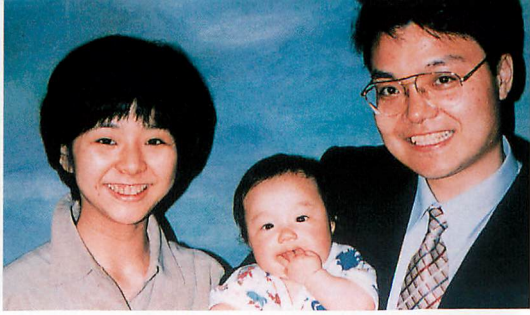
佐山 淳子

神奈川県出身／永野小／上永谷中／横浜日野高／聖徳学園短大附属教員保母養成所卒／夫 孝治／子供 一女

子供の頃は、どこか冷めていて、かつ劣等感の固まりだった私は、「いいことないかな」が口癖でした。反面、この世に確かなものがあるなどとは思いもせず「世の中なんてこんなもの」とあきらめていました。そんな私がイエス様のことをはっきり知ったのは、結婚を考えた時でした。考えていることの違う二人が一緒に生活するようになれば、お互いにわがままを通したくなるということは何となく想像ができました。相手の人を好きと思えば思う程悩み、その悩みを通して急激に主に導いていただきました。その結婚話はなくなりましたが、それからは、互いに主の前に悔い改め合え、祈り合える相手をと願うようになりました。三年の月日を経て、主の導きにより、主人と引き合わされ、今は幸せな結婚生活を送っています。子供も与えられ、三人で主の器として働かせていただきたいと祈り願う毎日です。

「もしおそくなっても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない」（ハバクク2・3）

「主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない」（箴言10・22）



本当の心の平安

小山裕

㈱オークテクノロジー勤務
東京都出身／落合第四小／落合中／戸山高／一橋大学商学部卒／東洋大学大学院経済学研究科修士課程修了／妻　真未／子供　一女

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）　学生時代、友人達が一流企業へ就職を決めるなか、私は一切就職活動を行ないませんでした。（権力闘争や派閥抗争のない世界で静かな人生を送りたい）と心から願いました。将来に不安を抱いていたこの時、イエス様は私を吉祥寺キリスト集会へ導いてくださいました。イエス様が私の罪を赦すため身代わりとなって死んでくださった事、今までの挫折や敗北は決して無駄ではなかった事、すべての営みが主イエス・キリストに出会うためのプロセスだった事を確信することができた時、私はこれからの人生をイエス様に委ねる決心をしました。更にイエス様は、私の信仰の助け手として妻を与えてくださり、子供も授けてくださいました。家族が心を一つにしてイエス様を見上げる時、心が平安になります。私たちには希望があります。天国でイエス様に会える日が一日一日近づいている事です。イエス様、これからもずっと共に歩んでくださることを心から感謝します。

私たちは主のものです

小山真未

千葉県出身／落合第四小／東京女学館中／東京女学館高／多摩美術大学絵画科卒／夫 裕／子供一女

大学に通い始めた頃、私はすべてが空しくなってしまいました。そのようなとき、中学からの親友の大沢ひろみさんによって、イエス様のみもとに導かれました。それ以来、聖書のことばと、集会の皆さんのお祈りやお付き合いを通して、支えられています。イエス様が結婚を導いてくださった時、私たちは指輪に、聖書の次の箇所を刻みました。「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」（ローマ14・8）

罪の中に死んだ者をイエス様が生かしてくださっています。私は弱く、愚かな者ですが、どうにかして変えていただき、私の罪のために十字架におかかりになったイエス様のために役に立ちたいと願っています。そして、イエス様から賜わった娘喜子が主にあって喜ぶ者となり、主のために生きるようになることが私の願いです。「キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます」（Ⅰペテロ3・22）　主イエス様に栄光がありますように。



左 美紀さん、右 貞美さん。

イエス様は私の主

西尾貞美
豊岡村立豊岡南小学校勤務
静岡県出身／磐田西小／磐田第一中／磐田南高／常葉学園大学教育学部卒

中学生の時に教会に導かれて洗礼を受けましたが、イエス様よりも自分を大切にし、好き勝手な行動ばかりしていました。しまいには、イエス様を知りながらも、偶像崇拝や占いの罪を犯すようになりました。

大学に入学する頃、聖書を読んで自分の犯した罪の恐ろしさを知り、絶望しました。ひどく苦しみました。しかし、ペテロが裏切ると知っていながらも 、「わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました」(ルカ22･32)と語られたイエス様のことばに目がとまった時、あまりの愛の深さに涙が止まりませんでした。その時から、イエス様にどこまでもしたがっていきたいと、心から願うようになりました。

社会人になってから、更に深くイエス様の愛に気づかされるようになりました。そして、イエス様の憐れみによってキリスト集会へと導かれました。「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」(詩篇103･2)

私は、相変わらず受けるばかりで与えることのない者です。イエス様だけに栄光が帰せられますように。(詩篇115･1)と、心からお祈りいたします。

イエス様、ありがとう

西尾美紀
磐田市立今之浦保育園勤務
静岡県出身／磐田西小／磐田第一中／磐田北高保育科／浜松短大幼児教育科卒

「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ」(哀歌3･22)

私は幼い頃、罪を犯しました。それをひた隠し、偽り、自分も周りの人も信じられず、中学生の頃、寂しくなってよく泣きました。そして「死」というものに対し不安があり、もし天国･地獄があるなら、私は絶対に「地獄行き」だと思っていました。そんな私を主は愛してくださっていました。「この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみから救われた。主はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない」(詩篇34･6 、22)

すべてをご存知で本当に信頼できるお方に私は出会うことができました。このお方はどんな時にもいっしょにいてくださり、導いてくださるので安心です。「家族 」を心配し、愛してくださっているのもこの方です。本当に私は幸せです。愛するイエス様は、天に場所を備えて迎えにきてくださいます。どうか、イエス様がほめたたえられますように。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます」(ルカ1･46 、47)



主の御名にほめ歌を

斉藤令奈
東京コロニー勤務
栃木県出身／中央小／朝日中／作新学院高校卒

イエス様と出会う前の私は、家族や周囲の人達の誰からも愛されていない、この世で必要のない人間なんだと思い、何のために生まれてきたのだろうという思いで、毎日が孤独と不安でいっぱいでした。また、体にハンディを背負って生まれてきたことに関しても、親のせいにしたり、周りにいる健常者の人たちに対して、嫉妬や羨ましい思いで、毎日満たされない不平不満の日々でした。そして、人の目を気にしたり、被害妄想が激しく、すべてが悲観的で勝手に思いこみ勝手に落ち込んだりしていました。また、一人になる事が怖くて行動することができず一人で外を歩く事もできませんでした。でも、イエス様と出会ってからは、決して一人ではないんだ、イエス様が共にいてくださり誰よりも愛してくださっていることがわかり、心から感謝です。「私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった」（詩篇40・1、2）「あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、会わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます」（詩篇71・20）



あなたの道に、私を生かしてください

田中幸子
㈱ニュー・ディメンジョン・テクノロジー勤務
福岡県出身／二川小／明光学園中／明光学園高校卒

悲しくて涙がこぼれないように、大空を見上げたこともありましたが、今大空に大きく手を振ることができます。
母の病を通してイエスさまにお会いし、気がつかなかったこと、見過ごしていたこと、すべてを喜び感謝へと変えてくださいました。イエスさまの道は、はるかに高いこと、イエスさまから離れては、自分では何も出来ないこと、本当の喜び、希望、平安はイエスさまからしかいただけないことを、いろいろな出来事を通して教えてくださいます。ごめんなさいとありがとうの繰り返しですが、どんな小さな草花も光の方を向いているように、主の光に歩みたいと願っています。
幼い頃から真実な神さまがいらっしゃると信じていましたが、そのことをイエスさまは日々語ってくださっています。
「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません」（詩篇16・2）



主の愛とあわれみの中で

澤田 朋子

㈱ニュー・ディメンジョン・リサーチ勤務
東京都出身／向丘小／向丘中／洗足学園大学付属高等学校音楽科／洗足学園大学声楽科卒

突然、幸せだと信じていた結婚生活が、奈落の底に落ちた時、目の前が暗闇の世界になり、誰も信じられないという思いと共に、何があっても変わらない本物が欲しい。藁にもすがる思いで、心の底から叫びました。その時一方的な憐れみにより、助けてくださり救い出してくださったのが、イエス様でした。「主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』」(ヘブル13.5)　たとえいろいろな大変なことがあっても、目に見える事が悪い方向に行ったとしても、信じていれば、必ずイエス様が責任をとってくださることを知り、とても嬉しかったです。また、イエス様に祈った時、体がスーッと軽くなり、暗闇の世界が、カラーで、鮮明になったのを、今でも覚えております。

日々の歩みはイエス様の憐れみだと思います。何も出来ない私が、仕事や日常生活において、イエス様に祈り、尋ね求める事をゆるされている、それは何よりすばらしく感謝でしかありません。「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」(箴言3・5、6)



十字架の主

野木森純子

愛知県出身／末長小／茅ヶ崎小／ジャカルタ日本人小・中／日本女子大学付属高／日本女子大学家政学部卒／東京学芸大学教育学部在学中

聖書には、イエス・キリストが二千年前に十字架にかかり、血を流され、死に至られた後、三日後に甦られたと書いてあります。それが、私の身代わりであったことを素直に信じ、自分の罪を悔い改めたとき、主イエス様はすべてを赦してくださり、「待っていたよ。」と優しく抱きしめてくださいました。しかしその後、私はイエス様を裏切って自分の道を選びました。「すると、みながイエスを見捨てて、逃げてしまった」(マルコ14・50)　しかし、イエス様は、そんな私を捨てるのでもなく、罰するのでもなく、「あなたは、私のもの」といって私が戻ってくるのをずっと見つめて待っていてくださったのです。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ23・34)　私は自我に縛られ、我儘の中で苦しむようになり、「神様、助けてください。」と叫んでいました。イエス様が十字架上で身代わりとなって犠牲となってくださったがゆえに私は憐れみを受け、救われたのです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ43・4)　神様はすべての人を痛みをもって心から愛しておられます。



助けてくださるイエス様

古川祐子
テスコダイレクト㈱勤務
埼玉県出身／野火止小／新座中／新座北高／上野学園短大音楽科卒

学生時代は毎日楽しく過ごしていたのですが、就職して1年が過ぎた頃、初めて人間関係で悩み、心も体も疲れ果てていました。ある朝、出勤途中で足が進まなくなってしまい、これ以上自分の力で頑張ることはできないと思いました。「イエス様、もう限界です。助けて下さい」と心の中で叫ぶようにお祈りしました。すると気持ちがとても平安になり「私が苦しい時、イエス様はいつもいっしょにいてくださるのだから何も心配しなくていいんだ」ととてもうれしくなりました。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」（Ⅰコリント10・13）先のことをいつも心配していた私ですが、すべてイエス様にお任せしようと思い、導きに従った時、まったく後悔がありません。賛美の奏楽をさせていただくことも、大好きなピアノを小学生の頃から続けることができたのもすべてイエス様がさせてくださっているので感謝です。これからも、イエス様だけを頼り、見上げていきたいと思います。



主は真実です

樋田久美子
小倉記念病院検査部勤務
福岡県出身／富野小／富野中／小倉高校／九州大学医療技術短期大学部卒

中学の頃より無意識に神に問いかけるようになり、そのことにより平安を与えられていました。高校生になってある時から急に勉強ができなくなり、それ以後挫折感に悩まされてきました。27、8才の頃より、物が二重に見え、喋るのも食べるのもただ疲れるだけになり、そんなどん底の時、自分の努力、頑張りによっては何一つ解決せず、自分とは何と無力な存在であるかと思い知り、聖書の中に昔問いかけていた神を見出だし洗礼を受けました。相変わらずの疲れの中で、聖歌「しずかに待てわがたまよ」を心の中で歌いながらただ道が開けるのを祈り続け、ある時筋無力症の薬が与えられ、肉体的に少し楽になりました。37才の時視神経炎で目が見えなくなり入院した時に、先生に多発性硬化症ですよと告げられ、自分の身に起こる数々の不可解なことの答えがやっと与えられた思いで主に感謝しました。その事をきっかけに主は姉、母、義兄、父を次々に救ってくださり、共に天国を夢見る者と変えてくださいました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」（ローマ8・28）



主と共に生きる喜びと勇気を知って

小池正悟

㈱ニュー・ディメンジョン・リサーチ勤務
千葉県出身／長作小／幕張中／市立習志野高／流通経済大学経済学部卒

幼い頃からキリスト集会に集っていた私ですが、心からイエス様に従って行きたいと思わされたのは17歳の頃でした。それまでは、神様を信じる反面、それだけに染まりたくないとも思っていました。「神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです」（ローマ1・21） 主はこのような者をも憐れんでくださり、素直に喜び輝いている集会の皆さんの姿をとおして頑なな心を変えてくださいました。前から知っていたはずのイエス様は、それよりはるかに真実をもって私のことを愛しておられました。今も自己中心的で無力な者ですが、だからこそイエス様が必要です。そのことにさえ目を留めていれば喜びと生きる勇気が与えられます。「私はこう確信しています。死も、いのちも、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」（ローマ8・38、39） 「いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」（ガラテヤ2・20）

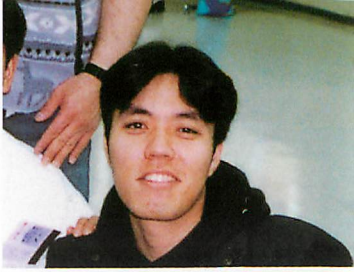


主は私の助け手

角田 菜穂子

㈱オークテクノロジー勤務
東京都出身／七林小／七林中／日出学園高校卒／University of Nevada, Reno卒

私は小学生の頃から日曜学校に通い、神様という存在は信じていましたが、喜びがなく神様に信頼することのない生活を送っていました。アメリカの大学に留学してから、このように妥協の生活を送っていたことに気づかされ、悔い改めへと導かれました。留学中はまだ周りに集会がなく、主イエス様だけが私の相談相手であり助け手であり、また聖書のことばが私の一番の慰めでした。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」（詩編119・105） どんな時でもイエス様は私の助け手であり、イエス様を見上げた時に喜びの生活を送ることができますから感謝です。「私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る」（詩編121・1、2） 何よりも感謝で恵みなのは、イエス様の十字架によって傲慢な私の罪が赦され、永遠のいのちをも約束してくださっていることです。イエス様とお会いできる日を楽しみに、これからも主と共に歩んでいきたいと思います。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です」（黙示5・12）



主は真実な方

狩俣進

㈱ニュー・ディメンジョン・リサーチ勤務
沖縄県出身／仲西小／仲西中／浦添工業高／沖縄国際短大二部経済学科卒

「信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）　母の30年の祈りが聞かれ、この聖書のことばが成就しました。主はまず対人恐怖症を通して母を救いへと導いてくださいました。そして6年前、主は母に不治の病を与えられました。私たち家族は、母の苦しむ姿を見て何とか治してあげたいと思い、いろいろな治療を試みましたが、すべては無駄に終わりました。苦しむ母の姿を見ながら何一つしてあげられない自分の無力さに絶望しました。そのさなか、母が私たちの目が離れた隙に発作的に劇薬の洗剤を飲んでしまい、そのまま病院へ担ぎ込まれました。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」（Ⅰコリント10・13）　母は2日後に召されましたが、母の死を通して私自身を祈る者としてくださり、すべての解決はイエス様にあるのだということを教えてくださった主イエス様に心から感謝しております。



主の深い愛

平良　修一

㈱JMS勤務
沖縄県出身／坂田小／西原中／西原高／琉球大学短期大学部電気工学科卒

幼少から、母を通しイエス様を知ってはいましたが、しだいに主と正反対の道を歩むようになりました。そのような私をも主は一方的に憐れんでくださり、私のすべての罪の為にイエス様は十字架にかかり、死んで復活してくださった深い愛を体験的に教えてくださいました。また主に従いたいという思いが与えられてから色々な事が起こされました。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」（Ⅰコリント10・13）　仕事を通して与えられる主からの試練の中で、その聖句を固く信じ必死に祈り主のご栄光と測り知れない愛の深さを幾度となく体験させていただき唯々感謝しています。「まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です」（詩篇119・24）　主に尋ね求める時必ず答えてくださるということ、主はすべてをご存じだということ、どんな場合でも周りではなく自分に語っておられるということを教えてくださり心から感謝しています。聖書は私の相談相手であり大好きな主イエス様は私の希望、光そのものです。



左から二人目、紘子さん。

アルコールからの解放

村上　紘子

富国生命保険相互会社勤務
広島県出身／足寄小／帯広第三中／五条高校卒／駒沢大学中退／夫静二／子供　二男／母　中森晃子

先日の某新聞に「依存症の中でもっとも恐ろしいのがアルコールである」と発表されていました。家族を巻き込み、家族の病気とも言われます。一生治らない病気です。家族も私もどうにもならない所まで追いつめられ、死ぬことばかり考えるようになりました。私に残されたスタンツは、「神様助けて!」と、呼ぶことだけでした。元同僚のご夫婦が、イエス様を紹介して下さいました。歴史上の人物位の知識しかありませんでしたが、イエス様は確かに病を知っておられる方でした。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです」(ヨハネ11・4)　家族の愛ではどうすることもできませんでした。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます」(マタイ19・26)　聖書のことばを体験的に味わう者となりました。家族全員が救われ「イエス様が一番」が我が家のキーワードになりました。イエス様を中心とするAAミーティングに毎週出席させていただいています。わがままで強情な私を「アル中の紘子」として迎えてくださったイエス様に心から感謝しています。



なぜ疑うのか

伊藤よう子

伊藤法律事務所勤務
島根県出身／神西小／河南中／出雲高／東京大学卒

「食べて、寝て、年とって、そして死んでしまうんだ」これが、救われるまでの私の、基本的な人間観でした。

このような見方は、自分自身を苦しめ、人生に絶望せしめるものでしかなく、自分でもそこから脱却したくて仕方がなかったのですが、自らの思考過程に誤りはないかと何度吟味しても、結論はやはり、「くだらない。むなしい」でした。

苦しみのあまり、哲学書や仏教書を読み、寺院や教会を訪れたりしたこともありましたが、他方では、いわゆる宗教に洗脳されて、客観的に冷静に物事を判断することができなくなる事態を警戒する思いが強く、結局、「何にも信じられない」ことに耐え続ける事こそが、もっとも正しい生き方だと思いつつありました。そんな疑い深い私は、主イエスを呼び求めるどころか、知りもしないくせに、生半可な知識を以って主を悪し様に言う者でしたが、主の方が私を呼んで下さいました。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20・27)　深い憐れみの声を通して、信じられないのは、理性の為でも知性の為でもなく、逆に、盲目に起因する自己中心性の為だと知らされました。



たましいの牧者である主

田中明美
岐阜県出身／上麻生小／上麻生中／加茂高校／名古屋音楽大学器楽科ピアノ専攻卒／東京パン・スクール・オブミュージック卒

「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません」（詩篇23・1）

子供の頃から、目標を持ち、夢に向かって進むことが良いことであると信じ、自己実現の道をひたすら走っていました。けれども、思うようにいかず、進むべき方向を見失いかけたとき、主は足元を照らして下さいました。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」（ヨハネ8・12）　ベックさんと初めてお話をしたときに、「人はみな迷える羊だよ」とおっしゃったことがとても心に残りました。そして、それまでなぜか肩肘を張っていたような生き方から、全く解放されたのです。迷える羊であることには変わりはありませんが、今はたましいの牧者である主イエス様を呼び求めることができることは大きな幸福です。自己中心的で、わがままなこの私のために、イエス様はいのちをお捨てになり、死からよみがえられました。そして新しいいのちと希望を与えていただいたのです。神の測り知れない愛に、感謝するばかりです。今は、まったく思いもしなかった方法で、音楽を演奏する時が与えられていることも感謝しています。



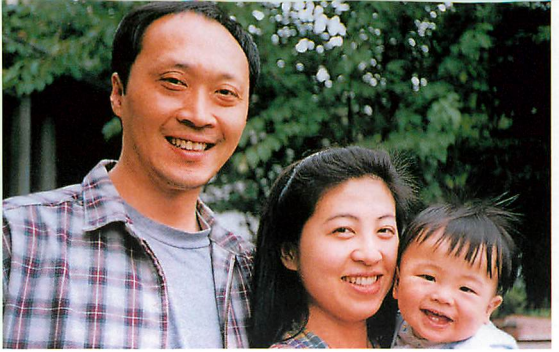
主よ。感謝します。

中村佐知子
岡山県出身／倉敷東小／倉敷東中／武蔵野高校音楽科／武蔵野音大卒

私は、教会付属の幼稚園に行っていましたし、日曜学校にも通っていましたので、イエス様のことは、何となく知っていました。でも、自分自身の罪については、あまりよくわかってはいませんでした。

キリスト集会へは、15年前に、若山さんご一家を通し、導かれました。その後、父が転勤になり、住み慣れた倉敷を離れる事となりました。集会に集い始めて、様々な試練にあいました。私自身、常に、不平不満が多く、何が与えられていても、満足し、感謝するような者ではありませんでした。

ある日、大変に苦しくなってしまい、イエス様に、助けを求めました。すると、今まで、すべて、自分が悪かったことがわかり、自分の罪が、どんどん示されました。そして、イエス様は、このような者のために、十字架におかかりになってくださった事がわかりました。「主よ。感謝します。あなたは、私を怒られたのに、あなたの怒りは去り、私を慰めてくださいました」（イザヤ書12・1）



私の神にほめ歌を歌おう　唐君波（たんじゅんぼ）

メトロポリタンオペラco.合唱団員
南京市出身／珠江路小／南京第九中／南京第九高校／南京芸術学院音楽部卒／Whitworth Collage／Indiana University／妻 京子／子供 一男

私は有名なオペラ歌手として成功を収めるために努力していました。自分には実力がある、と高ぶる傲慢な者でした。しかしその道は困難で、先が見えず将来を考えると不満と苛立ちの毎日となり、音楽家として生活を築けるだろうかと悩むようになりました。人生を支配する力がなく、何一つ正しい選択が出来ない事を知らなかったのです。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない」（箴言16・3）1994年、父の召天を通して主は私を完全に砕かれました。男として満足いく仕事を手に入れる事も、父を少しでも長生きさせる事もできなかった。生涯で初めて無力を感じました。この時の私は、少しの希望も喜びもなく、どうやってこの真っ暗な苦しみの中から抜け出せるかと初めて助けを求めて叫びました。主は最善のときに私を救ってくださいました。南京にいた病床の父を、現在の妻京子が「実を結ぶ命」の本を持って訪ねてくれたのです。そして唯一の主だけが苦難の中の人間を救える方であることを知りました。光の中を歩めるようにしてくださった主に心から感謝します。いつでもどこでも主の御名を賛美します。

最善のご計画

唐京子

東京都出身／北原小／谷原中／大泉高校／武蔵野音大ピアノ科卒／Indiana University performer Diploma（インディアナ大学演奏専攻科修了）／夫 君波／子供 一男

小さい頃から、目標を見つけ達成のため計画を立て努力するのが好きで、少しでも多くの事を経験し向上したいと思っていました。その反面、限りなく努力し続けることを思うと窒息しそうでした。教会へ通っていた時期もあり神に出会ってはいましたが、自分でまず計画を立て、達成を祈るという本来とは逆の主従関係に疑問を持つこともありませんでした。しかしその時々の状況により揺れ動く自分を知り愕然とし、長い間続けてきたピアノも何のためにやっているのかわからなくなりとても苦しみました。永遠に変わらないものが欲しいと切実に祈りました。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた」（Ⅱコリント6・2）　主は誰よりも私をよくご存じで、私の為に最善のご計画をもっておられると知り、今までの焦りと不安から解放されました。そして音楽も主がくださったもので、用いてくださるのも主ご自身であることを教えられたことは大きな喜びです。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」（ローマ8・28）



人知を越えたキリストの愛

中山靖規

旭化成工業㈱勤務
東京都出身／正善小／豊野中／早稲田大学高等学院／早稲田大法学部卒／妻　理彩

私は子供の時から教会に通っていて、救われていると思っていました。そのためか自分は特に問題のない人間であると自負していました。しかし心の中ではいつも他人と自分とを比較して疲れていたり、何かしなければならないという焦りや、何をしても心から満足出来ないという空しさを感じていました。そして遂に今生きていることの意味がわからなくなり、将来に対する不安と恐れも含め目の前が真っ暗になってしまいました。丁度その頃主に徹底的に従うか否か問われる時が来ました。随分考えた末、主に降参して従ってみようと決心しました。それからは試練の連続でした。自分として価値があると思っていたことが次々取られ、代わりに逆のものが与えられました。徹底的に自分を捨ててイエス様の導きに従うことを要求されました。しかし後になると自分に一番大切なものが与えられていることを知らされ、同時に今まで決して味わえなかった喜び・平安・自由・満たされた思いを体験することができました。

これからも愛する妻と共に心を合わせ主に従うことが最善である、という確信が与えられていることが何よりも嬉しいです。

永遠の愛をもってわたしはあなたを愛した

中山理彩

埼玉県出身／文蔵小／南浦和中／大宮光陵高／武蔵野音大ピアノ科卒／夫　靖規

中学生の頃から他人の目を意識し、劣等感と優越感を持ち合わせていた私は、個性的なクラスメートが多い環境の中で自分の意志を素直に表現出来ず、心の中で他人を裁き、恐れ、孤独や空しさを持つ悩む者でした。ある時友人からバイブルキャンプに誘われ、そこでベックさんとの話し合いを通し、主は唯一の神で自分を許せない私をそのまま大いに愛してくださることを知り、また聖句や聖歌にふれ涙が溢れました。私の罪の為に主はあわれな姿で十字架にかかられ、私を救い出し喜びをいっぱい与えてくださって本当に感謝でした。その後次第に喜びも薄れ、集会を離れたこともありましたが、主は憐れみと忍耐をもって悔い改めに導いてくださいました。真実なイエス様にご栄光がありますようにと祈っています。又こんな私にも主から恵みの結婚が与えられ、日々愛する夫と共に平安と喜びの内を歩ませていただいております。「わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。おとめイスラエルよ。わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。再びあなたはタンバリンで身を飾り、喜び笑う者たちの踊りの輪に出て行こう」（エレミヤ31・3、4）



左 ひろみさん、右 博子さん。

私は歌をもって主に感謝しよう

大澤博子

東京都出身／東京女学館小／東京女学館中／東京女学館高／聖心女子学院卒／夫　昭二／子供　二男一女／嫁　二人／孫　三女

神に背を向け「頑張れば何事もなる」と自力に頼り、自己中心的生き方をした49年間。結果は悩み・失望・疲労・苦しみでした。イエス様はそんな私に御手を差し伸べてくださった。長い間家族の悩みの種だったアルコール依存症の兄が、苦しみの中で主に助けを求め、救われました。その様を見て驚き、夏のバイブルキャンプに娘と参加。ベックさんの「イエス様は博子を愛しておられるよ」の言葉に、うれしくて心が震えました。ルカ18章9～13節から、「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している」自分を見せられ、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」。と涙と共に祈りました。イエス様の十字架により、私の罪もすべて贖われているという事実を覚え、重荷を降ろすことができました。主の愛にただ、感謝いたします。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）

その後、両親も救われ、今は天国で再開を待っています。親戚、友人も早くイエス様と出会えますよう心から祈りつつ、生ける神に真心から喜びの歌を歌います。「まことに神は全地の王。巧みな歌でほめ歌を歌え」（詩篇47・7）

イエス様の変わらぬ御愛に支えられて

大澤ひろみ

APCジャパン勤務

東京都出身／青南小／東京女学館中／東京女学館高／東京女学館短大英語英文科卒

「『たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。』とあなたをあわれむ主は仰せられる」（イザヤ54・10）

自分のうちに確かなものが何一つなく、誇るものもなく、頼れるものもないと思っていた私に、主は救いの手を差しのべて下さいました。アルコール依存症の叔父が救われたのをまのあたりにし、祐天寺集会に導かれたのをきっかけに、ベックさんご夫妻や集会の皆さんに会い、イエス様の愛にふれることができました。そしてまもなく救われ、死の直前に救われた祖父の死を通して天国への確信が与えられました。どこにいても、孤独の中におかれても、主はいつも共にいて愛してくださることを、英国留学のときに体験的に知ることができました。そして、国境を越えて主の素晴らしさを賛美できる機会に恵まれたことも感謝しています。これからもいろいろな人に出会い、主のご愛をご紹介できたらと思っています。そしていつか、お約束どおりに父が救われる日と、主にまみゆる日を楽しみに祈り、お待ちしたいと思っています。



渇くことのない水

森田忠志
㈱森田経営管理センター
広島県出身／牛田小／牛田中／基町高／早稲田大学第二文学部卒

「いのちより大切なものはある。それを今後の人生の中で見つけなきゃいけないよ」友人の死を通して生きる意味を問わざるをえなくなっていた頃、一人のキリスト者から頂いたこの言葉をきっかけに私は聖書を開くようになり、二年後にイエス様と出会いました。多くの友人に恵まれてはいたものの、実は自分が孤独な者であったこと、自己実現こそ人生の目的ではないかと考えていましたが、それこそが聖書のいう罪であること、祈りを軽蔑してさえいたのに、そこに何にもまさる喜びと力があること等々、大きな光を与えられて私の人生は一変しました。心の渇きを満たすために様々な事に力を注いできましたが、イエス様によってそれら一切の空しいもがきにピリオドが打たれたのです。小っぽけで罪深い私です。しかし、そんな者をも愛し、見捨てず、受け入れてくださる主を仰ぎ見るとき、心は平和で満たされ、また前進する勇気が与えられます。一人でも多くの方にこの主を知って頂きたいと願うと同時に、次のイエス様のことばは本当であることをここに証言いたします。「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません」（ヨハネ4・14）



イエス様の愛

服部信代
(株)ニュー・ディメンジョン・テクノロジー勤務
茨城県出身／中丸小／東海南中／茨城キリスト教学園高校／国際基督教大学／レズリーカレッジ大学院卒

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」（箴言3・6）夢と好奇心いっぱいの私にとって、米国の生活は異文化に接する楽しさの反面、孤独と劣等感の戦いでした。自分に課した目標に向かって研鑽を続ける生活の中で、イエス様と向き合い、すべての束縛から解放され、御手のあたたかさにふれることができました。悲しみや苦しみの中では「何故」という思いに心が沈みます。しかし「すべてのことは主のご計画の中で何らかの意味を持っている。主はこの試練の道を通る私の過程を見守っていて下さる」。という確信が得られたのは日本に帰国後、昨年秋、父の召天を通してでした。イエス様の深い愛を思う時、心が満ち足りるのを感じます。聖書を読む時、イエス様が「信代さん」と個人的に語りかけて下さっているのを感じます。それはまるで、あたたかなお湯が心に注がれてくるような感覚なのです。このあたたかさを知ってしまった今、ただイエス様に太く繋がっていたいと祈るのみです。イエス様の道から外れないように、私の弱さをご存知の主が憐れみ、正しい道へと導いてくださるよう祈っております。









私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、
神の下さる建物があることを、私たちは知っています。
それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。



私たちはいつも心強いのです。
そして、むしろ肉体を離れて、
主のみもとにいるほうがよいと
思っています。（IIコリント 5·1、8）
















私はあなたの救いを喜ぶからです。
主のように聖なる方はありません。あなたに並ぶ者はないからです。
私たちの神のような岩はありません。(Iサムエル 2·1、2)

主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。
これを、全世界に知らせよ。(イザヤ12·5)









ご主人の寛治さんと。

真理を教えてくださったイエス様

浅野温子

一九五七年八月愛媛県松山市に生まれる。清水小、勝山中、松山北高、徳島大学教育学部卒業。小学校教諭として勤務した後、夫寛治さんと結婚。一九九五年十二月、夫の仕事のため家族で渡米。一九九八年帰国。別府市在住。家族は夫寛治さん、長女可奈子さん、次女千恵子さん、長男直人（すぐと）さん。

初めて身近な人の死に直面して

「おばちゃんが亡くなったって？　そんなことがあるはずがない。だっておとといの夜、電話で話したもの」。羽田から松山に向かう飛行機の中で、私は自問自答していました。まるで自分の子供のように私を可愛がってくれていた叔母でした。「娘の可奈子が生まれてからあまり手紙も書けなかった。おばあちゃん、ごめんなさい」。いろいろな思いが頭の中を交錯し、飛行機の窓から宙を見据えた目から、涙がぽろぽろとこぼれてくるのです。そして、現実に叔母の亡骸を前にして、「おばちゃんの魂は、どこへ行ったのだろうか。人は死ぬと、どこへ行くのだろうか。恐い。死にたくない」と思わされていました。叔母は、四国八十八ヶ所すべての札所を一周りするだけでなく、七周りを終え、八周りの途中でした。私も子供のころ、近くの札所によく連れていってもらいましたが、こんなにまでも熱心に四国めぐりをした、叔母の心を知りたいと思いました。

茨城に帰った私は、さっそく般若真経の本を買いました。叔母は最後に、「私、死にそう」と、

看ていた母に言ったと聞きました。私が読んでも意味が皆目わからない般若真経は、どのようにして叔母の心を慰め、安らぎと希望を与えてくれたのでしょう。最期に言ったという叔母のこの言葉が、なんだか気になり、いつまでも心に残っていました。「弘法大師とは、どういう人なのか。叔母は、死ぬ間際まで、安らかだったのか。信心すると、人生は変わるのか」。そんなことを考えながら、般若真経の本を読み始め、暗唱してみたりしていました。叔母が亡くなって二ヵ月後、私たちは、主人の転勤で茨城県藤代町から大分県別府市に引越しました。

主人と出会った頃

初めて親元を離れて大学生活が始まったとき、自分が今、ここに生きている意味を確かめたくて、日記を書き始めました。自分の内面をすべて書こうとしましたので、たくさんの時間を費やしました。しかし、書くことによって「今を生きている証し」のようなものを残すことができたので、自己満足に過ぎなかったのですが心は満たされました。また、とりえも魅力もない今の自分から脱出して、「後悔のない人生」を生きたいと思い、その糸口を本に求めました。そして、先輩や友達と人生を語りあう中で、自分自身の生きるべき道を模索していました。しかし、大学も後半になると、空理空論に終わってしまいがちな語らいが色褪せて見えるようになり、自己変革のため始めた読書も、思い通りにならない自分に落胆し、出口の見つからない自己嫌悪に陥る結果となってしまいました。

所属していたクラブの先輩である浅野さんと個人的に出会ったのは、最終学年の時でした。私

は何のとりえも魅力もない者なのに、浅野さんはありのままの私を認めてくれましたので、いつのまにか本来の自分を取り戻して、明るくなった自分に驚きました。卒業後、浅野さんは東京に行き、私は松山に帰りました。両親と私の結婚観は一致することがなく、浅野さんとの結婚は反対されていました。結婚という岐路に立たされ、人生で価値あるものは何か、真実なものは何か、考えた時期でした。祈ることも知りませんでしたので、自分の選択を信じて、思い出深い小学校教員生活を後にし、今の主人と結婚しました。最後には、両親も笑顔で送り出してくれ、とても嬉しく、感謝しました。

翌年の一九八五年八月、長女可奈子が生まれました。流産早産気味で、特に前半は仕事をしていたため、心身ともに大変でした。小学校の仕事は私にとってとてもやりがいのある仕事でしたが、主人に家にいてほしいと言われ、私も、「教員の代わりは沢山いるけれど、母親の代わりは私しかいない」と思い、仕事をやめ、育児に専念することにしました。そして、可奈子が八ヵ月になった時、初めに書いたように叔母が亡くなり、その後別府に転勤になったのです。

教会に行き始めて

別府に引越してからまもなく、主人の同僚でクリスチャンの方が、ご家庭での集いに誘ってくださいました。聞くと、なんと私が買い物の行き帰りに目を留めていた教会に行かれているというではありませんか。喜んで、可奈子といっしょにその集いに出席させていただきました。キリスト教は西洋の宗教だと思い、聖書のことはよく知りませんでした。しかし、聖書を読むことは

ためになることだと思って、誘われるままに教会へ行くようになりました。お話も熱心に聞こうとしましたが、最初はまるで文化講演を聞いているようでした。そのうち、特に月初めの聖餐式の時には、私以外の教会員の皆さんが川の向こう岸にいるように感じ、「なぜ神様を信じることができたのか。どうすれば信じられるのか。二千年も前の人が、どうして今の自分と関係があるのか」と思いました。しかし、讃美歌は美しく心に響き、時折なぜかこみ上げてくる熱い思いで、歌えない時がありました。

家庭では、良妻賢母になろうと心がけていました。子供が生まれてからは、子供のことで主人と意見が食い違うことが時々あるようになりましたが、それまで喧嘩などはしたことがなかったので、お互い黙り込んでしまいました。二人とも、傷つきたくなかったのだと思いますが、私は主人の心の中を探り、疲れていました。育児に対しては積極的で、早く自立させようと、熱心に躾けました。思い通りにならないわが子を叱り、また、そのことで自分を責め、苦しくなりました。新聞で育児ノイローゼの記事を読むと、「他人事ではない」と思いました。

一年後に二人目を妊娠しましたが、調子が良くなく、流産を止めるための薬を飲んでいました。しかし、子供は流産してしまいました。それからしばらくの間、教会から足が遠のいてしまいました。ある日、教会に案内してくださった方から、「赤ちゃんは今、神様といっしょに天国で幸せに過ごしているでしょう」というカードをいただきました。それを読んで、神様が、お腹の子を、「おいで！」と呼ばれたのではないかと思ったのです。そして、人間には目に見える事実しかわからないけれど、神様はみんなご存知なのではないかと気がつかされました。人が生まれるのも死

ぬのも、すべては神様のご支配の中にあるのです。そう思うと初めて、心は安堵感で満たされました。

翌年の一月、主人が一ヵ月足らずダラスに出張した時、ちょうど娘可奈子がひどい風邪をひきました。一人で不安で心細く、指折り数えて主人の帰りを待ちました。しかし、ダラスから帰った主人は、久し振りに家族に会えたと言うのに、嬉しそうな顔は一瞬で、後は何か一人で、物思いにふけっているのです。何かあったのだろうかと、こういう時いつも黙ってしまう主人の心のうちを、わかってあげなければと思うのですが、その時はそれ以上に、主人に私の心をわかってもらいたい気持ちが強くて、それを抑えきれませんでした。そして、疲れている主人より自分の気持ちを優先してしまった私は、自責の念にかられ、「私はやっぱり何のとりえも魅力もない者。その上に自分勝手な者。人の目ばかり気になる者。…ああ、こんな自分はもういやだ。変わりたい」と思いました。その時、一つの聖句が雷光のように私の体の中を駆け抜けました。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（Ⅱコリント　12・9）

足りないことばかりを数えていた私に、神様は、「与えている恵みは十分だ」と言われます。人間ではなく、人の生をも死をも支配しておられる神様が「おまえはおまえでいいのだ」と言ってくださいます。そのお言葉で、私は悪い夢から覚めたように顔を上げることができました。

一九八七年五月二十二日、聖霊降臨の日、私は、大分川で洗礼を受けました。その日は、朝から小雨が降っていました。主人も来てくれました。ちょうどこのころ、新しい命の誕生を迎える予定でした。しかし、新しい命とは、私自身が生まれ変わることだったのだと思います。私は、神様の子供になったことを証しできたという喜びと、親しくさせていただいていた教会の方々とは主にあって兄弟姉妹になれたのだという嬉しさをかみしめていました。一九八九年八月十二日、次女が生まれました。やはり流産や早産気味で、入院したりもしましたが、主は憐れんでくださいました。思いがけず、イエス様を知らないはずの主人が、千恵子と命名しました。

主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られる。

（申命記　7・9）

ある時、親しくしていただいている方が、「もうすぐイエス様が来られると思うと、とても嬉しくなるのよ」と言われました。「えっ？　イエス様って、また来られるのですか」と驚いた自分に、「私は、当然知るべきことも、知らないのではないか。私は何を信じているのか」と自問した時、私は、神様と自分との関係がはっきりしていないことにおぼろげながら気がつき始めました。私はイエス様がどういうお方か、ほんとうは知らず、「イエス様の御名によってお祈りします」と祈っているけれど、それがどういうことなのかわかっていないのです。そのころから少しずつ、聖書を開けるようになりました。

「実を結ぶ命」の本を読んだのは、そういう時でした。初め、少し読んで、これは違うと思い、

読むのをやめました。教会で教えてもらっていることとは、異なっていたからです。当時、私は産後の体調が悪かったことなどで、私は長い間、「癒されること」ばかりを祈ってきました。祈りが聞かれないと落胆し、また「祈らないと」と励まされ、祈りが足りないから癒されないのだと自己嫌悪に陥り、これでは救われる以前と変わらないではないか、と焦っていました。そして、なぜか気になり、もう一度「実を結ぶ命」を読み始めました。癒されることが勝利することだと思うのに、癒されなくても死から勝利しているとはどういうことだろうと。そのうちに、頭の中が一つずつ、真理によって整理されてくるのがわかりました。人は、誰でも皆死ぬこと。いつでも死との隣りあわせで、死ぬ可能性の中で生きていること。奇蹟とは、病気が癒されることではなく、死からの恐怖に打ち勝つこと。読み終えて、これこそ真理だと思い、心が解放された気がしました。

「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ　8・32）

「光よあれ」の本も読み始めました。まず、「救いの確信」という言葉に目が止まりました。初めて見た言葉でした。「救いの確信がある」とは、どういうことだろう、よくわからないけれど、今の私の状態が「救いの確信がない」ことだけは、はっきりとわかり、「救いの確信を得る」ためにはどうしたらいいのか、と思いました。また、私などには考えられない環境の中でさえも、喜んで主に感謝しておられる方々ばかりで、信仰とは何だろうと、今までの自分の歩みをふりかえってあまりの違いに驚き、ほんとうのもの、真実のものを知りたいと思いました。ちょうどそのこ

ろ、教会移転の問題で総会が持たれました。発言の順番がきた時、自分には救いの確信がないこと、喜びがほしいことを、初めて正直に言えました。それから、今までぼんやりとしていた知りたいことも、次から次へとはっきりさせてくださいました。

まず、イエス様を主として受け入れたにもかかわらず、私自身がイエス様に無関心であったため、私にとってイエス様は、ずっと遠い存在でした。イエス様のお声に気がつかず、イエス様を外に締め出していたのです。

見よ。わたし（イエス様）は、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示　3・20）

またその昔、主はイスラエルの民が鴨居と門柱につけた子羊の血をご覧になってイスラエルの家々を罪の滅びから見のがしてくださったように、イエス様こそが私の罪のためのいけにえの子羊となって血を流してくださり、父なる神様は、私の性格や行ないをご覧になるのではなく、私に塗られているイエス様の血潮をご覧になって私を救ってくださったのだ、とやっと気がつきました。それはまるで、目の前の霧が晴れて景色がはっきりと見えたようでした。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ　14・6）

心の目が閉ざされ、イエス様のご臨在に目を向けていなかった私はおそれを知らない者でした。イエス様にこのことを心からお詫びしました。

その後すぐ、ベックさんが別府に来られたとき、お会いすることができました。ただ一つだけ、「私は喜びがありません」と申しましたところ、ベックさんは優しく、「温子、感謝しないとね」とだけ言われました。私はうなずきましたが、実は何を感謝したらいいのかわかりませんでした。その晩、聖書を開きました。

彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。（ローマ　1・21）

このみことばは衝撃的に私の心に入ってきました。イエス様は私のことを、ほんとうに個人的にご存知なのだと体験しました。そうです。私はまさにこういう者でした。

そのころから私は、今まで牧師さんに頼っていたことが間違いだと気がつきました。私の頼るべきお方は、イエス様でした。恵みとは、かえって私が思っていたように病気が癒されることではなく、心が死の恐怖から救われることでした。

私は心を平安にして教会の中にいることができなくなってきました。しかし、お世話になったからすぐ出ていくようなことはできないと悩み、この世の情に引きずられていました。イエス様は憐れんでくださって、また私に、聖書の言葉で行くべき道を示してくださいました。心から感謝しました。

あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。（マタイ　7・16）

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。（マタイ　6・24）

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。（ローマ　12・2）

ここ半年の間に起こったいろいろなことに動揺していた私の心の中は疑問でいっぱいでした。落ちついて、聖書にはどう書いてあるのかを調べて、ほんとうのこと、真実のことを知りたいと思っていました。牧師さんにその事実を正直に告げ、今までのことに礼を述べ、教会を後にすることができました。それまで私は、教会の方々や牧師さんにどう思われているだろうかということばかり気にしていました。しかしこれからは、「イエス様はどう思われるか」と尋ねていこうと思い、心が自由になりました。

主人が救われて

それから私は聖書を読みはじめました。この四年間そんなことはしていなかったので、主人が気がついて、「何かあったのか」と聞いてきました。主人に心配をかけまいと初めのうちは黙って

いましたが、そのうちに主人の同僚の方々が集会に導かれ、私もことのいきさつを話すようになりました。また、外に出ると意外なところで教会の方々に出会うことがあり、いろいろと言われ戸惑いましたが、聖書を読むと必ず、その日のうちに主が聖書を通して答えてくださるので、あまりの嬉しさに、わかるはずもない主人にそのことを話していました。しかし、主人の救いを祈ることはありませんでした。そのうち、次の聖句をイエス様からいただきました。

もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。（Ⅰテモテ　5・8）

どきっとしたみことばでした。主人は初めから、私が教会に行くことや信仰をもつことを認めてくれていましたが、「自分には関係ない」という態度でしたので、私も「信仰は個人の自由だ」と思い、それまで何も話したことはありませんでした。もっとも、それまで目が開かれていなかった私には、語ることなど何もなかったのだと思います。

十月末、主人は社員の研修旅行でグアムに行きました。その夜、私は主人が溺死した夢を見て目を覚ましました。寝汗をかき、がちがちと体の震えが止まりませんでした。その時、主人がまだ救われていないことに気がつき、「いっしょに天国に行けない」と思いました。初めて、主人が救われることをお祈りしました。そして今度は、主人といっしょに集える集会を与えてくださるようにお願いしました。

翌年の二月、大牟田で集会があると聞きました。このころ、可奈子の幼稚園で水疱瘡が流行っ

ていたので、「行ってみない?」と誘う私に、主人は、「明日の朝、可奈子が水疱瘡にかかっていなければ、車の運転だけしてあげよう」と言いました。翌朝、イエス様は私たちを大牟田のキリスト集会に連れて行ってくださいました。私も初めて集うキリスト集会でしたので、集まられた方々がイエス様を語る熱意に圧倒されていました。その上に、主人の心の中が終始気にかかり、気が気ではありませんでした。

そのころの主人は、神様なんかいらないと言い、「いかにして生きるべきか」という類の本をたくさん買ってきて熱心に読んでいましたので、心の中では、集会などいやでたまらないのではないかと思いました。そして、「いやだったら無理しないでいいのよ」などと、まるで物わかりのいい良妻を演じていました。

後日、その時の主人は、神様からの言葉を受け入れようかどうしようか、迷っているただなかにいたことを知りました。しかし、その時知らなかったといえ、私はまさに主のさしのべられた手をじゃまする者でした。救われてほしいと願いながらも、やっていることは正反対のことだったのです。明け方、そのことに気がつかされ、取り返しのつかないことを言ってしまったことを、イエス様にお詫びしました。主は私のそむきの罪を赦してくださり、また主人を憐れんでくださって、主人を真理の道に招き入れてくださいました。

いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。

（Ⅰコリント　2・11）

別府キリスト集会に導かれて

イエス様は私の願いを聞いてくださり、主人とともに集えるキリスト集会へ導いてくださいました。小さな群れでしたが、皆、救われた喜びに満たされていました。

中野さんは、若くして膠原病を患っておられました。苦しい腎透析を繰り返す中で、イエス様に個人的に出会われました。何度かごいっしょに開いた聖書には、びっしりと赤い線が引かれていました。イエス様の中にこそ希望と平安があることを、ご自分から見出されたことが伝わってきて、励まされました。天に召された時のお顔は、その瞬間にイエス様に顔と顔を合わせて出会い、嬉しそうに喜んだお顔でした。五年前、叔母が亡くなった時、私にとって死とは、恐怖と絶望だけのものでした。神様は、中野さんを通して、イエス様にこそ平安と希望があることを教えてくださいました。その平安と希望は、私がいまだかつて経験したことのなかった喜びでした。渡辺さんや小山田さん、渡辺さんも、同じように私に天の御国への希望と確信を与えてくださいました。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。

（Ⅰコリント　2・9）

イエス様は、私の罪の根元にまで光を当ててくださいました。イエス様から聖霊をいただいたあと、それまで私は足りないところがたくさんあり弱い者だとばかり思っていたけれど、その実

は、とんでもないごう慢な者ではないかということを知らされて、愕然としました。しかし、それでも私はそこそこの人間だと思っていました。ところが、言動どころか私の存在さえも人を傷つけるものだと知ったとき、私は消えてなくなってしまいたいと思うほど苦しみ悶えました。しかし、イエス様はこんな私さえも尊いと言ってくださって、私を贖ってくださったのです。なんという愛に満ち溢れたお方でしょうか。イエス様に心から感謝いたしました。

ああ、幸いなことよ。幸いなことよ。神に責められるその人は。だから全能者の懲らしめをないがしろにしてはならない。神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださるからだ。（ヨブ　5・17、18）

一九九三年五月二十二日、長男が生まれました。私の受洗記念日でした。流産早産気味でしたがキリスト集会の方々のお祈りに支えられ、イエス様がすべてを導いてくださいました。主人が詩篇から直人（すぐと）と命名しました。イエス様に向かって真っ直ぐな人に成長することを願ってやみません。

私は心を尽して主に感謝しよう。直ぐな人のつどいと集会において。（詩篇　111・1）

人生を模索して歩んでいた学生のころ、「人生の終わりは死なのになぜ生きていくのか？　思い出を残すために生きていくのだろう」と結論を出し、後ろのものを大切にしまって歩いてきました。主人とのこともその中の一つでした。主人がいのちへの道に導かれ、私の隙間のない孤独な

世界もいつのまにか消え失せてしまいした。イエス様がそれを埋めてくださいました。そしてイエス様は、私の大切にしていた過去のものに光を当てられ、お互いを曇りのない目で正しく見えるようにしてくださいました。そして、互いに許された罪人として新たに信仰によって「ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。」（マルコ10・8）と、永遠に向かって歩むようにと言ってくださったのです。人は、神様に罪を示していただいてそれを認め、そして、互いにそれぞれの罪を信仰によって許しあえるとき、以前にも増してより一層相手をいとおしく思うものだと確認させていただいております。

一九九五年十二月十七日、可奈子と千恵子は、徳島キリスト集会の「よろこびの集い」で洗礼を受けました。可奈子のたっての願いにイエス様は憐れみ深く耳を傾けてくださり、大好きなおばあちゃんの前で、イエス様を信じる信仰の証しとして、水の洗礼を受けました。心からイエス様をほめたたえます。

大分からダラスへ

私たちは、会社の転勤で、アメリカのダラスに駐在することになりました。

一九九五年十二月二十五日、小雪の舞うクリスマスの朝の出発でしたが、思いがけず福岡や別府のキリスト集会の方々が見送りにきてくださっており、イエス様が備えてくださったこのすばらしいプレゼントに、喜びと感謝で胸が詰まりました。

その後、アメリカに来て四年が過ぎようとしています。言葉のわからない異文化の中に置かれ

て、子供たちにとっては耐え難く、涙の出ることも多かったと思います。事実そうでした。しかし、「イエス様、助けてください」と祈る子供たちに、イエス様はいつもすぐ答えてくださった、と子供たちは言っています。母親の私ができることは、ただ車で子供たちを送り、その後ろ姿に、「イエス様、今日もこの子を憐れんでください」と祈ることだけでした。子供たちにとって、「頼るべきお方はイエス様ただお一人だ」と知らされていることは、どんなに心強く、また大きな恵みでしょう。感謝の気持ちでいっぱいです。

私にとっては、今まで持っていたもの、生活習慣、嗜好、知識などが何の役にも立たず、かえってそのことがわたしを苦しめました。私を行き詰まらせたものは、何もアメリカの文化でも人でもなかったのです。どこにいても、自分や人や物へのこだわりを持てば持つほど人間は苦しくなり、逆に捨てれば捨てるほど人間は自由に楽になることを、改めて主は教えてくださいました。また、キリスト集会の方々から離されている今、まず頼るべきお方は、家族ではなくイエス様だということ、そしてこのお方こそが、私たち家族の心を一つにしてくださる唯一のお方であることを、子供たちとともに学ばせていただきました。このことを感謝するとき、いつも両親や弟夫婦のことを覚えます。子供たちとともに天の御国に希望を抱き、聖歌六五一番をいっしょに歌える日が一日も早く来ますようにとお祈りしています。

日本からアメリカに来て「確かなものがほしい」と真理を求めておられる方に出会わせていただいたときや、同じ信仰を与えられている方々に出会えたときは、ほんとうに嬉しいものです。そして賛美し、聖書の言葉を拝読し、祈りのときを持たせていただいたとき、イエス様は、平安

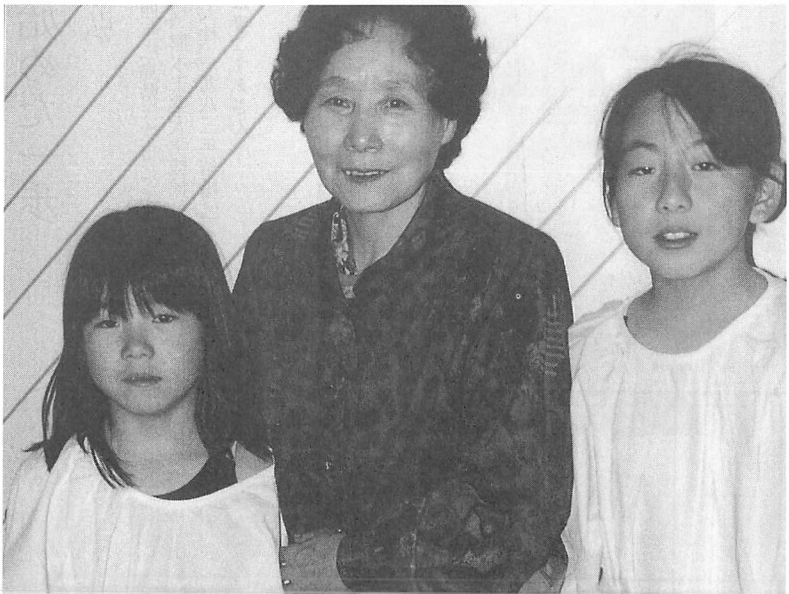
と希望を私たちに与えてくださいました。

また、イエス様が岩本さんご夫妻や北米のキリスト集会の方々を備えていてくださり、電話回線による礼拝を共にして導いてくださっていることは、この上ない喜びです。遠く離れていても、目に見えなくても、イエス様にあって一つの体としてくださっていることを、北米各地の「よろこびの集い」に参加させていただくごとに深く思わされます。日本から来られた方々とともにイエス様のみことばを聞き、ごいっしょに祈るとき、イエス様の恵みが世界に広がり、ますます御名がほめたたえられますようにと心から願わずにはおれません。

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

（ローマ　11・36）

寛治さんのお母様の善子さん。右、可奈子さん、左、千恵子さん。





左から中上こずゑさん。洗礼を受けた和弘さん。深沢さん神林さんとともに。

歩み始めた一歩

中上和弘

一九五四年広島県三次市に生まれる。田幸小、塩町中、庄原格致高校、熊本工業大学機械科卒。一九七六年㈱佐竹製作所に入社、一九八三年結婚。一九八七年よりタイ国駐在。家族は妻こずゑさん。

プーケット島で。



私の生家は広島県の北部にあり、豊かな自然が今でも残っています。幼いころは、田畑の中を自由に飛びまわるとても活発な子供でした。近所に住んでいて、初めて釣りを教えてくれたお爺さんがある時、「この釣り竿は、わしが死んだら中上のぼんにあげよう」と言ってくれたのです。私は、あろうことか「早く死ね、くそじじい」と、とんでもない返事をしたそうです。きっとその釣り竿が欲しくて欲しくてしようがなかったのでしょう。

家庭は平和で、家族の仲は至って良かったように思います。大学時代は親元を離れてとても自由になり、勉強をするよりもやりたい放題をして、四年間を楽しく過ごしました。

一九七六年に（株）佐竹製作所という会社に入社し、一九八三年には結婚しましたが、当初は共働きをしていました。結婚後間もなく、妻の給料とボーナスを取り上げ、「将来的には俺が面倒をみるのだから」との思いからすべてを使ってしまいました。このことは、妻にとって非常なショックだったに違いありませんが、その当時の私は亭主関白を実践しているつもりでいました。

その後は、国内や海外の出張が多く、年間の半分は留守の状態が続きました。一九八七年、佐竹タイ工場が設立されると同時に、私も派遣され、それからの約三年間は、出張ベースでタイに来ていました。日本に帰国するのは年間三ヵ月程度となり、妻との間に大きな溝が生じていましたが、私はまったく気がついておらず、一人で結婚生活を謳歌している気でいました。

結婚生活六年、実質的には三年程度のころ、妻からまったく予期せぬ離婚を迫られ、狼狽してしまいました。妻から離婚を迫られるなんて、その時のショックは今でも忘れられません。自己中心的な性格のため、自分は不満がないのだから相手もないだろう、という思い込みをしていま

した。妻の私への不信感は、私のショック以上のことがあったに違いありませんが、今考えますと、その時の私は、離婚を思い止まらせることのみに終始し、根本的な問題の解決を一切行なうことなく、その場をしのいでいました。本質的にはなにも解決されていないのですから当然のことですが、妻はただ一時的に思い止まっただけのようです。後で妻から聞いた話では、私を一人でタイに赴任させるのはあまりにかわいそうだと思ったので、離婚を少し先に延ばしただけだったそうです。このような状況でしたが、やがてタイに妻を呼び寄せることができ、それが、現在でも夫婦でいることができるためのイエス様のご計画であったように思います。

三度目にタイを訪れた時、妻とジェット機内で隣りの席だった方がクリスチャンで、後で知ったのですが、キリスト集会の松島さんの知人の方でした。すべてのことに偶然はありませんから、このころからすでに妻へのイエス様の働きかけが始っていたように思います。これがきっかけとなって、妻はタイにある日本語の教会に行くようになり、イエス様と出会うことになりました。この時点での私の気持ちは、イエス様に対して大変感謝をしていました。なぜならこれで離婚しなくて済むな、と確信したからです。この時、まだみことばの一つも知らないのに、なぜそう思えたのかは不明なのですが。ともかく、何の抵抗もなく教会に集う妻を見守っていました。

しかしイエス様を信じ一年、二年と過ぎてきますと、妻からイエス様の話、聖書の話を聞かされる回数も増え、反発心が増幅されていきました。こんなありさまで六年近くが過ぎていったのですが、この間、離婚の話が一切出なかったのは、主の守りがあったことと感謝しています。

あるとき、肺の病気で入院していた私を、仕事でタイに来られていた藤本さんが見舞ってくだ

さり、初めてキリスト集会の方とお会いすることができました。その時、藤本さんからいただいたみことばは、次のものでした。

主よ。私の祈りを耳に入れ、私の願いの声を心に留めてください。私の苦難の日にあなたを呼び求めます。あなたが答えてくださるからです。

主よ。神々のうちで、あなたに並ぶ者はなく、あなたのみわざに比ぶべきものはありません。主よ。あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て、伏し拝み、あなたの御名をあがめましょう。

まことに、あなたは大いなる方、奇しいわざを行なわれる方です。あなただけが神です。主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。

（詩篇　86・6～11）

私は、松島さんのもとで働いていたこともあって、松島さんから大きな影響を受けました。その松島さんが洗礼を受けられ、一人取り残された寂しさを痛感しました。松島さんの洗礼の後、妻の態度が一変し、イエス様や聖書の話をいっさいしなくなりました。これは妻の作戦だと簡単に読み取れましたが、こんなことが長く続くと不思議に不安な状態におちいってしまうものです。しかし、まだこの時点ではイエス様のもとに飛び込むというふんぎりをつけることができませんでした。なぜ、ふんぎりがつかなかったのか、その理由は、妻が通っていた教会にあります。私はその教会に何度か行ったことがありますが、教会にいる方々が皆組織の中の一員、という印象

が強く、何か自然さを感じることができませんでした。また、クリスチャンというものになるには、聖書の勉強をしなければならないし、聖書に沿った堅苦しい生活を強いられる窮屈な人生を想像し、宗教という言葉にも抵抗を感じるようになっていました。

そんなおり、一九九六年九月、キリスト集会のバンコック「よろこびの集い」で初めてベックさんとお目にかかりました。その時ベックさんは、「これは宗教じゃないよ。イエス様を信じることだよ」と言われました。しかしその時から、心の中が変わり始めました。また私は、これまでの人生の中で家族の死を経験したことがなかったのですが、時々死について考えるようになっていました。家族の死を体験する時、どのように受け止めればいいのか、不安でなりませんでした。今、何か頼るものを見つけておかないといけない、という思いが強くなっていました。「よろこびの集い」の後、私はなぜか妻に「今日はとてもよかった。僕も洗礼を受けるならベックさんから受けたい」と言っていました。

一九九七年五月、私は二回目のバンコック「よろこびの集い」でイエス様を受け入れ、洗礼を受けることになりましたが、当初は洗礼を受ける予定などなく、当日洗礼を受けることを決めました。ベックさんと話しているうち、今がチャンスじゃないかという気になったのです。イエス様の導きだと思い、感謝しています。実は前夜、妻から明日洗礼を受けないかとの話がありましたが、私は考えておくと言ったまま眠ってしまい、翌日もう一度洗礼を受けないかとの話があるまで忘れていました。

その当日は、ほかにも二人の方が洗礼を受けられました。その時のお二人は今でも忘れること

ができないくらい、大きな喜びに包まれておられましたが、私の場合は、何が何やらわからないまま、すべてが終わっていました。この時、考えていたのは、「妻が洗礼を受ける時には、聖書の勉強をしていたようだったが、聖書も読んだことのない私が洗礼を受けていいのだろうか」ということです。しかし、「イエス様を信じていればいいんじゃないか」と、主に信頼することにしました。今になって、なぜ洗礼を受けたのかと自問自答してみてもよくわかりません。しかし、これがイエス様のご計画であったのだと思っています。

洗礼後には、思いもよらず西軽井沢国際福音センターで開かれた「よろこびの集い」に、妻ともども参加することができました。

これからは、まだイエス様を知らずに苦しんでいる両親や弟たちにも、イエス様のことを伝えていきたいと願っております。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）



左、中上こずゑさん。

主はまことの救い主

中上こずゑ

一九五八年広島県広島市に生まれる。広島市立江波小、中、広島県立広島商業高校卒業の後、広島ガス(株)に勤務。一九八三年和弘さんと結婚、一九八九年バンコクに移る。家族は夫和弘さん。

子供のころの私は、依頼心が強く、勝気で負けず嫌いなお転婆娘でした。家族は、父方の祖父母、両親、姉の六人でしたが、小学二年のころまでは曾祖母と、祖母の妹夫婦もいっしょに住み、また近所にはやたらと親戚が多かったので、大家族の集団の中で伸び伸びと育てられました。家の中では末っ子ということもあり、とてもわがままで、友だちに対しても思いやりのない意地の悪い子でした。そのころ母が私に「家の中だけボスなの？　それとも外でもボスなの？」と尋ねたことがあるそうです。たぶん、私があまりにもわがままなので、外での様子を心配したためだと思います。私は迷うことなく、「両方ともボス！」と答えたそうで、何でも自分が中心にいないと気のすまない子だったと、大きくなって聞かされました。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。

（エレミヤ　17・9）

近所にお年寄りや親戚が多かったので、幼いころから死というものに接する機会が多く、人は必ず死ぬ、ということに早くから気づいていました。小学生三、四年のころには「人は死んでど

うなるのだろう」と考え始めていたことを覚えています。その不安からでしょうか、とにかく「いい人になるよう努力しよう。そうでないと死んだあといい所に行けるはずがない」という間違った考えを持っていました。

いい人になりたいと思っているのに、自分のわがままをコントロールできず、特に子供のころには人から言われたことをしたくない、というあまのじゃくなところもありました。高校生の時には、学校の先生や両親から将来を考えて進学するように勧められましたが、すなおに聞くことができず、「私には必要ありません」と、進学よりも楽に見えた就職の道を選びました。楽だと思っていた就職も、勤めを始めてみるととても大変で、特に何の専門知識も経験もありませんでしたから、他の人に迷惑にならないように毎日の仕事をこなすことに懸命でした。

十九歳の時、祖母が亡くなりました。しかしその時には、社会人としての仕事と生活に慣れることがせいいっぱいで、祖母の死の意味など深く考えることもなく過ぎてしまいました。

やがて、社会人として生活をしていくうちに、自分の頼りなさ、経済力のなさを思い知らされ、一人では決して生きていけない、と考えるようになりました。大好きな両親ともいつまでいっしょにいられるかわからない。姉も結婚すればどのような生活をするようになるかわからない。将来についての漠然とした不安から、確実に頼れる人が欲しいと思うようになり、結婚することを望むようになりました。この時にはイエス様に頼ることなど思いもよりませんでした。

そのころ、今の主人とのお見合いの話があったのですが、タイミングが合わず実現しないでいました。

一九八二年、二十四歳の時、母を突然の脳溢血で亡くしました。あまりのショックで、何も手につかず、まともに眠ることも食べることもできない状態で、ただ悲しくて泣いてばかりの一週間を過ごしました。このままではどこまで落ちこんでしまうのかわからないと思い、私だけが悲しいのではない、必ずやってくる死の恐怖も私だけが持っているのではない、と自分をごまかそうとしていました。まだイエス様を知らずにいたので、後から後から湧いてくる悲しみと恐れに対して目を向けないようにするしかなく、それまで母がしていた慣れない家事に追われる日を過ごしました。

やがて、中断していた主人とのお見合いの話が再びもちあがり、一九八三年一月に会い、四月には結婚しました。これで頼れる人ができたと安心しましたし、優しい主人でしたので二人の間には問題らしい問題もなく過ごしました。しかし、主から見て、この生活がしっかりとした土台の上に建てられたものではないことをまだ知りませんでした。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。（詩篇　127・1）

結婚して三年目のことですが、突然、主人から「来週タイに一週間出張する」と言われました。ただ主人といっしょにいることで、将来への不安から逃れようとしていた私には、一人ぼっちになることがとても恐ろしく思えました。「たった一週間なのだから」と自分に言い聞かせ、また主人にも心配をかけたくなかったので、平気なふりをして送り出しました。

出張した主人からは何の連絡もなく、一週間たったころにやっと電話をくれましたが、それはもう一週間、出張が延びたことを知らせるための電話でした。言葉も通じない、食事も違う、知りあいもいないという環境にいる主人のことを考えると、どんなにか不自由だろう、どんなにか淋しいだろうと思っていました。結局、その時の出張は三カ月にもなり、私は主人の帰るのを心待ちにしていました。主人も同じであったろうと思っていたのですが、帰ってきた主人は別人のように明るく、楽しそうに見え、その時になってやっと、「この人は私がいなくてもじゅうぶん楽しく生活できるのだ」と気がつきました。私には主人が必要だったのですが、主人にとって私などいてもいなくてもよいのだと思いこんでしまい、二人でいるのに、一人でいた三カ月よりももっと淋しく、孤独を感じるようになりました。結婚すれば、将来の不安も、淋しさもなくなると思っていましたが、再び不安になってゆき、死んでどうなるのだろうかという以前から持っていた疑問も湧いてくるようになりました。「なぜ私は生まれて来たのだろう。人はまるで死ぬために生まれてくるようなものではないか」と考えるようになり、すべてのことが色あせ、むなしくなってしまいました。今すでに死を目前にしておられる病気の方や、事故にあわれた方、またお年寄りが羨ましく思えてならず、「明日の朝、目が覚めた時には八十歳のお年寄りになっていればいいのに。そうすれば、むなしい残りの人生は少なくてすむ」などと考えるようになりました。

私は生きていることを憎んだ。日の下で行なわれるわざは、私にとってはわざわいだ。すべてはむなしく、風を追うようなものだから。

（伝道者　2・17）

私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。（詩篇　90・10）

主人の出張はその後もたびたびあり、長い時には半年も日本を離れている、というような生活が三年ほども続きました。時々、主人といっしょにタイに行くこともありましたが、基盤のない外国での生活は、知りあいもないし、何をして過ごせばよいのかわからず、ますますむなしくなるばかりでした。

このように悩むのは、私がつまらない悪い人間だからだと思い、なんとかして抜け出したいと考えました。倫理や道徳を学んでみようと、早起き会というところに行ってみたり、そういう関係の本を読みあさってみたりもしましたが、むなしさから逃れることはできませんでした。

半ノイローゼ状態となり、いつも死にたいという思いに支配され、どうやったら死ねるだろうかとさえ考えるようになっていきました。

自分の人生をやり直したい、そのためには自分のまわりの環境を変えたい。結局、こうなったのは主人の責任だと思いこみ、自分のことしか見えなくなっていた私は、主人とは別れるしかないと考えるようになりました。

結婚し、夫となる人を得、家庭を築くことで、将来への不安や、恐れを持っている自分自身のことを見ないようにできるものと思っていましたが、それは決してやりすごせることではなく、安定していると思っていた生活も、わずかなことでもろくも崩れ去ってゆきそうになりました。

悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・11、12）

「また、わたし（イエス様）のこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」（マタイ　7・26、27）

このような状態が続くなかで、主人は長期の出張から自然にバンコク赴任となりました。一九八九年一月、主人といっしょにタイに来ました。タイでは、主人の会社の上司の奥様がキリスト集会の方で、誘われて行ったタイの日本語教会の婦人会で初めて福音のお話を聞きました。そのとき、初めてイエス様に出会った時の驚き、喜び、平安は、言葉に表わすことはできません。こんなつまらない私のためにイエス様は十字架にかかって死んでくださった。後から後から流れ出てくる涙をどうすることもできませんでした。それまで人生がむなしく、生きていく希望を失っていた私には、それはまさしくまことにいのちをいただいた瞬間でした。

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。（イザヤ　9・2）

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――（エペソ　2・4、5）

最初のころ、あまりの嬉しさに誰かれかまわず、「イエス様、イエス様。イエス様に頼ればいいのです」と言っているうちに、せっかく仲よくなっていたタイ語学校でのお友だちを失うという失敗をしてしまいました。こんな私でしたが、一九八九年十月には主人が見守ってくれている中で洗礼を受けさせていただきました。水に潰かり、上がってきた時には、何がなんだかわからなかったのですが、ただただ嬉しく、すべての景色がキラキラ輝いて、色づいて見えたことを覚えています。

このイエス様を、日本に住んで、いろいろな問題のさなかにある私の姉に知ってほしくて、せっせと手紙を書いたり、電話をしたりし始めました。しかし、この時も自分のひとりよがりの考えが先行したようで、ただ姉の心を固くさせてしまうだけになってしまいました。そうなってはじめて「彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ10・11）というみことばも与えられ、「ただ、主に信頼して祈ろう」と決心しました。後になって姉から聞いたのですが、私のしつこい手紙攻撃や電話によってではなく、何気なく渡した「光よあれ」を読んで、「これが事実なら私もそうなりたい」と思うようになったそうです。その姉も、一九九五年十二月に姉の一人娘といっしょにイエス様に従うようになり、広島で洗礼を受けさせていただきました。

信仰が与えられた時、主人は、「君がいいのならそれでいいが、僕には言わないでほしい」と、多くのご主人方と同じようなことを言っていました。それを聞いて、「はい」とすなおに従えるようならよかったのですが、もともとおしゃべりで口数も多く、イエス様の話がしたくてたまらず、つい身近な主人に話をしてしまうということがたびたびありました。これは主人にとっては苦痛でしかなかったのでしょう、とうとう「僕は、絶対に、クリスチャンにはならない！」とまで言わせてしまいました。ここまできてようやく、「主よ、駄目です。私には何もできません。主人を救ってください」と祈れるようになりました。

当時、私はタイにある日本語の教会に集っていましたが、そこではなぜイエス様ご自身のことをあまり話題にしないのだろう、家族や友人の救いになぜ無関心なのだろう、という疑問を持っていました。洗礼を受け、はっきりとイエス様に従って生きていくことを表明した喜びはとても大きなものでしたが、四年、五年とたつうちに、次第に教会生活が喜びのないものになっていきました。主人を導いてほしい、でも私のように喜びのない教会生活は重荷となるのではないかと思っていました。大好きなイエス様のことは勧めたいけれど、教会にぜひいらっしゃいとは勧められない、という変な状況になっていました。また、教会の中では、「教会生活と家庭生活は別です」、「イエス様、イエス様って祈ってばかりいてもねぇ」、「私たちも何かをしなければいけない」などという声が大きくなり、今まで主だけから導かれていたことと何かが違ってきてしまい、次第に混乱していきました。

そんな時、キリスト集会の福音を伝えるテープや、勧められて読んでいたウォッチマンニーの

本などから、イエス様こそすべてだ、イエス様のお声だけを聞き、イエス様を伝えることこそが最も大切なことだ、と知らされ、自分が間違ったほうを向いていることに気づかされました。人にではなく、主に喜ばれる者になりたいと願うようになり、またこのころから、「主人は私と同じ教会でイエス様に出会うのか、または違うところなのか、主人を導いてくださるところに私もつれていってください」と祈り始めていました。

一九九六年九月、初めてキリスト集会のバンコク「よろこびの集い」に主人といっしょに参加しました。集会が終わった後もいつになく喜んでいる主人を見て、イエス様の憐れみに心から感謝しました。

キリスト集会に集うことを決心した主人に、「私もあなたと同じところに行きたい」と言いましたら「いいんじゃない、そうしようよ」と言われ、イエス様の導きだと思ってキリスト集会に集うようになりました。一九九七年五月、二回目のバンコク「よろこびの集い」で、主人も、お二人の方々といっしょに、イエス様を信じ従うことを証しするため、洗礼を受けました。

イエス様を知って、罪赦され、救われ、永遠のいのちまでも与えられたこと、将来への不安や恐怖から解放されたこと、またイエス様をともに仰ぎ見る家族となることができたことを心から感謝しています。

もちろん、これですべての問題がなくなったわけではありません。まだ救われていない親族もあり、長年抱えている問題もあります。主を信じるようになったとはいえ、いつまでたっても一人よがりでわがままな性格など、数え始めるときりがなく、自分自身に対する希望はまったく持

てません。しかし、これからは昨日も今日も永遠に変わらないイエス様だけを信頼し、一日一日を歩ませていただきたいと願っています。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

（哀歌　3・22～24）

キリスト集会のみなさんと。



バンコクの日曜礼拝のあと。

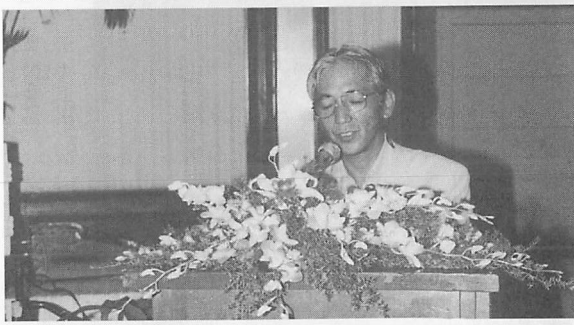


不思議なことばかり

松島悌二

一九四七年山口県に生まれる。埼玉県鴻巣市小、中、熊谷高校、錦城高校を経て玉川大学機械科卒。モリヤ株式会社から、一九八四年サタケ製作所へと転職。一九八七年サタケタイランドに出向、社長を経て一九九八年サタケ蘇州の副総経理となる。家族は妻真知子さん、長女梓さん。





(写真上) 右、悌二さん、左、奥様の真知子さん。

(写真下) 右、真知子さん、義姉の啓子さん、母信子さん。



新しい赴任先、中国へ

時は一九九八年一月元旦、所はタイ航空六六四便の機中。出発地はバンコックで目的地は上海。十年十ヵ月滞在したバンコックを離れ、次の赴任地蘇州市へ向かう機内でのこと。私の他にこのキャビンには乗客はありません。私は涙の中で大好きな聖句を思い出していました。

「わたし（主）はあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」

（ヨシュア　1・9）

蘇州市は、上海から西へ揚子江沿いに百二十キロほど入った古くからの名所で、東洋のピサの斜塔と呼ばれている二千年前の虎丘や、寒山寺、また名園が沢山あります。ここからさらに西に二百キロ入ると無錫を通り南京へと通じます。

私の赴任目的は、ここに精米機を作る工場を建設し運営することですが、これから遭遇するであろう、いろいろな問題に不安になると同時に、タイでの生活も含め、五十歳までの道のりを一瞬に思いおこし、出るのは涙だけ。どうしてでしょうか。お正月だから、機内で食べろと、友人が焼きたてのお餅を届けてくれたけれど、なんとほろ苦いこと。どうして中国に？　どうにも不思議でなりません。ここに至る道のりを記してみます。

幼いころ

今をさかのぼること四十数年前、当時中学生だった私は、長女、長男といっしょに羽田発のタイ航空機で、両親が住むマレーシアに向かっていました。当時はプロペラ機なので、台北経由香港で一泊し、さらにバンコックを経てクアラルンプルへと入りましたが、初めての異国の地の、青空のなんと美しかったことか。

父は、当時の農林省、今の農林水産省に勤務していて、終生、農学者として働いていました。そのころはＦＡＯ＝国連食糧機構の専門家として、マレーシアの稲作の技術指導をしていました。二年半という任期で母と二人で現地にいましたので、子供たちを冬休みに呼んでくれたわけです。私たち兄弟は三つ違いで、姉が大学一年生、兄が高校一年生、私が中学一年生だったと記憶しています。

両親はどちらも結婚する前から無教会派に属していました。特に父方の祖父は島崎藤村の「夜明け前」に書かれている木曽谷で初めて聖書の集会を開いた人で、内村鑑三を師と仰ぎ、木曽谷の家には、内村鑑三を泊めたこともあるという敬虔なるキリスト者でした。このような家に生まれた父は、祖父の影響を受けたようで、病弱で大学受験を二回失敗し、そのころヒルティーの「眠られぬ夜のために」や内村鑑三の「後世への最大遺物」などを読み、自然に聖書を読むようになったと想像できます。

父は大変厳格で勤勉な人でして、私が小学生になったころには、日曜日ごとに研究室の人を集

め、家庭集会を開いていました。家庭でも、お正月、クリスマス、家族の誕生日などの記念日には、ご馳走を前にかなり長い難しいお祈りをし、必ず讃美歌を歌いました。これが私のその後の人生に大きな影響を与えることになったのです。

その当時、私が一番嫌っていたのは学期の修了日で、通信簿をこの厳格な父親に提出するのが最悪の時でした。父の期待値はオール5でして、3や4の数字をみつけますとこぶしが飛んでくるのです。それでも、幼いころには何とかそこそこの点数を取っていましたが、父への反抗から、無意識のうちに勉強嫌い、農学者嫌い、キリスト教嫌いの芽が出てくるようになっていました。

ワルの時代

そんなわけで、中学生になったころ、この厳格な父がいなくなったものですから、もともと私の性格のなかにあった悪の要素が表に出てきました。今までの反動で夜遊びはする、たばこは吸う、酒は飲む。やりたい放題でした。私の高校受験の前に、両親が帰国してきましたが、このように変わってしまった私を見て、大変な驚きだったことでしょう。しかし、勉強しないわりには、かなりの県立有名校に何とか入ることができ、両親もこれで私が立ち直れるかと一安心したと思いますが、さにあらず、悪事はさらにひどくなり、喧嘩はするは、万引きはするは、補導はされるは、睡眠薬は飲むは、停学を食らうわで、結局、一年と数ヵ月で退学となりました。

父は山形県のキリスト教独立学園に転校させたかったので、友人などに頼みこんだと後から聞きましたが、私にはとても無理で、都内の私立校へと転校しました。新しい学校へと転校し、し

ばらくはおとなしくしていましたが、学校にはあいかわらず最低の出席をするだけで、新宿界隈をうろついていました。そうこうしている内に、父が転勤することになり、環境を変えれば私にもいいかということで、埼玉県の新座市に引越しすることになりました。

引越しした最初の日に、学校から帰る途中、練馬の大泉学園からバスに乗るのですが、そこで同じクラスの友人の顔を見つけ、この出会いが長いつきあいの初めとなりました。それから毎日この友人とバスで待ち合わせをし、地下鉄の淡路町のトイレの中で一息入れてから学校へ行くのです。まもなく大学受験ですが、こんな生活をしているのですから何になりたいとか、何をしたいとかがあるわけもなく、漠然とどこかの大学に入らなくてはいけないなと思っていました。有名校に入れる実力はまったくなく、浪人でもしてと思っていましたが、一校ぐらいは経験のためにと思い受験したのが玉川学園で、やっとのことで機械科に入学することができました。

ここの大学は、別名が「楽園」でして、礼拝も毎週ありましたが、出席カードをもらうと二階の窓から飛び降りて一目散、麻雀、車、海、スキーと、その日の気分、友人の人数で決めて遊びまわる毎日でした。そのとき、いつもいっしょに遊んでいたのがバスで出会った友人で、家も近いこともあり、おたがい行ったり来たりで、どちらが自分の家かわからないというありさまでした。彼に妹がいることに気がついたのも、そのころのことでした。

不思議な始り

あいかわらず、私と父とは断絶状態が続いていて、記念日などのお祈りは逃げまわっていまし

たが、父からは代わりに必ず本が来ていました。ヒルティー、内村鑑三、集会の感話、父の研究成果をまとめた専門書もありました。父はすべての本の表紙の裏に、いつ、だれに贈るというメモを直筆で記入するのが常でした。

私はというと、「楽園」での遊びに忙しく、これらの本はすべて部屋の片隅に積上げるのみ。しかし時間だけは十二分にあり、夜中に遊んで昼間は寝ているわけですから、寝過ぎて何もすることがない時に、ふと手に取ったのが部屋の片隅に積んである本でした。ヒルティーの「眠られぬ夜のために」。これが不思議のはじまりでした。読んでみますと、はっきりとはわからないのですが、なんだか別の世界があるのだな、という気分がしました。次には、内村鑑三の「後世への最大遺物」で、次のような内容でした。

「われわれは、お互いに、生まれ出た時より、少しでも地球をよくして死のう。そのためには、何か記念物を後世に残して死ぬことだ。お金を残すのもよい、事業、思想を残すのもよい。しかし、これらを残すには才能が必要だ。才能がなくても誰にでもできることがある。それは勇敢で、高尚な生涯を残すことだ」。これは？　自分の人生は？　何を残せるのか？　こんな自分でも？かなり強烈なショックがありました。今思うと、この考え方は一種の自己実現で、問題なしとしないのですが、当時の私には新鮮だったのです。こんなこともあって、長年培った怠惰な生活を一変するのは難しいのですが、少しずつ何かが変わり始めました。

結局、「楽園」には五年おいてもらい、就職へと進むわけですが、これまた、高校、大学と無試験に慣れていますので、いつものように安易な方法で入れる会社を探し、埼玉県の住宅関連の製

造会社に無事就職しました。ここでも、学生気分が抜けず、無鉄砲と勝気な性格で問題をいろいろ起こしましたが、仕事も面白くなり、製造への興味も湧き、新工場の建設やら、海外工場の技術指導、ジョイントベンチュアの工場設立など、製造マンの基礎と、少しずつ並みの仕事もこなせるようになりました。この会社で十四年ほどお世話になりました。最も嬉しかったのは、会社を去る日、全社朝礼で工場長が、「彼の思想を引継いでいこうではないか」と言ってくれたことでした。

その間、結婚しました。例のバスの親友も就職し、家に遊びに行っても彼がいない時が多くなりました。代わりに親友の妹の真知子さんが相手をしてくれることが多くなり、やがて親友目当てに遊びに行くのでなく、真知子さんに会うのが目的になってしまいました。結局、その真知子さんと結婚し、親友が義兄となってしまいました。二十七歳の時でした。

四年後、娘の梓が授かりました。三十一歳の時でした。そして私たちはマイホーム作りへと人並みに進んでゆきます。

一九八三年の四月に、妻が急に「すべて貴方に従います」と、わけのわからないことを言い、キリスト集会で洗礼を受けたいと言いだしました。「私に従ってくれる」ということですから、何のためらいもなく、それはよいことだと喜んで同意しました。それ以前にも妻から頼まれて、滝山のキリスト集会や、旧軽井沢のバイブルキャンプにも参加したりはしていました。しかし、私の心の中では、これすべて妻へのサービスで、家庭平和のために年に数回つきあってあげればいい行事だという解釈で、キリスト集会で聞かされる話の内容はいっさい無視していました。

私が転職した動機はまず、製造マンとして海外で通用するかどうかを試してみたいという欲望が第一で、その裏には、かつて最初の異国で見た青空へのあこがれ、仕事をするなら東南アジアでやりたい、という思いが強くあったのです。また同時に、国際的に見た将来の製造業は、日本に研究、開発部門とハイテク部門を残し、ローテク部門は発展途上国に移し、世界全体で製造業のレベルを上げることが製造マンの義務だという熱い思いもあったのです。転職したのは三十六歳の時でした。

転職後の初仕事はインドネシアに工場を作ろうということでしたが、可能性調査の段階で没になり、次のプロジェクトがなく、しばらく広島へ単身赴任することになりました。そのころ、広島でキリスト集会があり、妻の願いで出席したことを憶えています。そこでベックさんに初めてお会いしました。西軽井沢にも行きました。

三年ほど、広島に単身赴任しているうちに、タイでのジョイントベンチュアによる工場の設立が決まり、社長として一九八七年三月に赴任することになりました。赴任するまでは、社長といえば、いい車に乗って、ゴルフでもやっていればいいというかっこいいポジションだと安易に考え、内心しめしめと思いながら喜び勇んで赴任しました。ところが実際は大違い。言葉、習慣、環境のすべてが違うという三重苦で、しかも何から何まで自分で処理しなければならない毎日です。工場の品質管理、能力問題、営業問題、パートナーとの摩擦、本社との軋轢、人事問題、給与問題、資金問題と、まさに無限とも思えるほどの苦労の連続でした。その上さらに小学校三年でタイにやってきた娘の梓の高校進学問題もあり、まさに公私ともに問題山積のありさまです。

これを解決しなくては明日がない、との自覚で日々の仕事をこなしていくのですが、それ以上のペースで問題や仕事が増えていきます。毎日が興奮状態で、眠れぬ日々が続くようになりましたが、それでも何とかこなしていかなければなりません。

救われるとき

そのころ、一九九五年一月、キリスト集会の関係で、岩原さんのお嬢さんのまりさんが大学の卒業旅行でタイ、マレーシア、シンガポールへ行くので二、三日のショートステイをさせてほしいとの依頼があり、それが結局は二週間ほどになりました。なんと彼女は私と同じ大学、「楽園」の出身者でした。彼女が泊まっている間中、毎朝私あてのメモがおいてあり、みことばと、イラストと、彼女の説明がありました。おそらく彼女は真夜中までかかって書いてくれていたのです。私は眠れないので、朝の三時か四時ごろには起きていますから、薄暗い中で、ぼうっとしながらこのメモを読むことになりました。このようにして、主によって少しずつ、みことばが私に入ってきたのです。

妻や娘は、早起きする私を気持ち悪いとか、こわーいとか言います。よほど私の状態は異常だったのでしょう。このころは娘もバンコクで洗礼を受けていて、彼女たちは、すべてを神様にゆだねているせいか、みんなあっけらかんとしているわけです。何で自分だけがこんなに悩み苦しむのかなと思いました。

そんなおり、一九九五年三月に本社で世界会議が開催されることになり、私も呼ばれ、発表す

ることになりました。発表者の中で日本人は私だけ、それも発表は英語でやるんだとのことで、ここでもプレッシャーの追い討ちがかかりました。

そのころから、早起きで時間がたっぷりあるので、少しずつ聖書を読み始めたのです。

その世界会議のため日本出張になり、いよいよ明日発表日という晩に、東京のまりさんから、広島のホテルに電話があり、見てくださいと言われたのが、次のみことばでした。私はいつもは旅館に泊まるのですが、たまたまこの時はホテルに宿を取っていましたので、聖書が部屋に備えてあり、さっそく読みました。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」（マタイ　7・7、8）

さて、いよいよ発表当日となり、私の番のとき、社内で一番口のうるさいオーナーが急の来客で、発表者十二人中、何と私の時だけ席を外されたのです。思わず、発表の冒頭にでた言葉が How lucky I am. 無事に発表が終り、最終便で広島を出て羽田へ着きますと、何とそこに岩原ご夫妻、まりさん、妻と迎えにきていて、これから西軽井沢国際福音センターに行きますとのこと。私は疲れはて、もうどうでもいい、という思いでした。夜中の一時すぎにゲストハウスに到着し、翌朝何時に起きたのかまったく記憶にないのですが、覚えているのはセンターの入口で、ベックさんのあの笑顔で迎えられ、「悌二今日はよい日だよ」との言葉に、すなおに「はい」と答えている

私でした。そして私はイエス様を自分の主として初めて受け入れたのです。そのことを証しするため、すぐ洗礼を受けることにしました。まりさんもいっしょでした。時は一九九五年三月十二日、四十八歳の時でした。聖歌を聞きながら、流れでる涙がとまりませんでした。

その後のこと

一九九六年、続いて一九九七年には、バンコクで「よろこびの集い」が開かれ、おおぜいの方々とともに主のすばらしさを語りあうことができたのは大きな喜びでした。タイの会社で私といっしょに十年苦楽をともにした中上さんが、イエス様を知り、救われたのもこの年でした。またわが家では、時おり日本から来られる方々をかこんでの家庭集会もでき、毎週日曜礼拝ももてるようになりました。まだ今のところは十人にも満たない数ですが、主は必ず羊を増やしてくださると期待して待っています。

仕事上でも、タイ赴任以来の夢だった新工場が、一九九七年に完成しました。神様の愛、両親、皆さまの祈りでやっとここまで来られたわけです。

一九九七年三月に父が召されました。その三日前のこと、病室の枕元で、私が父のために読んだ聖句は詩篇の91篇でした。

いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。私は主に申し上げよう。「わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神。」と。主は狩人のわなから、恐ろしい疫病から、あなたを救い出されるからである。

主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりでである。あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れない。また、暗やみに歩き回る疫病も、真昼に荒らす滅びをも。

千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない。あなたはただ、それを目にし、悪者への報いを見るだけである。それはあなたが私の避け所である主を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。

わざわいは、あなたにふりかからず、えやみも、あなたの天幕に近づかない。まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする。あなたは、獅子とコブラとを踏みつけ、若獅子と蛇とを踏みにじろう。

彼がわたし（主）を愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。わたしは、彼を長いいのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。

（詩篇　91・1～16）

父は黙ってうなずいており、その三日後に御国へと旅立ちました。

ふたたび中国へ向かう機中で

このようにして、私は今、中国へ向かう飛行機の中にいるわけです。

父に反抗してから四十余年、「眠られぬ夜のために」から三十余年、いまだに何もよいところのない罪人の私ですが、これから向かう中国で、かつて父が指導し育てた稲を、息子の私が作る機械でお米にするなど誰が想像することができたでしょうか。ただただ、主の奇しいみわざを思わされ、感動でいっぱいです。

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。（ヘブル　11・8）

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。（エペソ　5・8）

長女梓さんと。





右から真知子さん、母加登ヒデさん、父清一さん。

すべてを益として

松島真知子

東京都豊島区に生まれる。目白小、高田中、日大豊山女子高、自由学園生活学校卒。家族は夫悌二さん、長女梓さん。

「永遠の愛をもって、わたし（主）はあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」

（エレミヤ　31・3）

一九九六年六月、バンコクのわが家に、思いもかけないファックスが届きました。日本から送られてくるファックスの字を追いながら、主人と二人で顔を見合わせ言葉もありません。そこには九月二日から四日まで、バンコックで「よろこびの集い」が開催されることが書いてありました。最初はベックさんと五、六人の方々が来られると聞いていましたのに、おおぜいの方々がいらっしゃる「よろこびの集い」になるとは想像もしなかったことでした。主人が救われて一年、待ちに待った主のお答えがこのことだったのです。主の真実と愛の大きさにただただ驚くばかりでした。信仰のうすいこのような者を主がかえりみてくださり、多くの方々が祈り支えてくださってこのような主のご栄光を見せていただけるとは何という喜び、感謝でしょうか。

救い

バンコクに家族で赴任する五年ほど前に、私は初めて吉祥寺キリスト集会に学生時代の友人に誘われて行きました。それまで聖書に触れる機会はありましたが、私はクリスチャンと呼ばれる人々に偽善的なものを感じていましたから、聖書は私にとって興味のない世界でした。しかしその時は友人の誘いを断われなくて、一度だけ、という思いで行ってみました。しかし何も求めていない心には何も残ることはなく、久しぶりの友人との語らいを楽しんだだけの一日でした。

「あなたが繁栄していたときに、わたし（主）はあなたに語りかけたが、あなたは『私は聞かない。』と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。」

（エレミヤ　22・21）

たしかにこの聖句のとおり、私は聞く耳を持たないごう慢な者でした。しかし、その時に貸していただいたキリスト集会に集う方々の証しのテープを聞いているうちに、今まで私が先入観として持っていたクリスチャン像とまったく異なった人生の歩みをしている方々がいるということに初めて気づいたのです。それから半年ほどたって、子供の友人のお母様が、私と同じころに吉祥寺キリスト集会に行くようになり、救われて洗礼を受けられたことを聞きました。信仰を持つのは、人生の大きな困難にあった時や、教会へ通って何年も聖書の知識を得た上で決心するものと思っていましたから、健康にも家族にも恵まれている友人が神様の招きにすぐに応じた素直さ

に驚きました。そして同時に、「救い」という不思議な言葉の響きに心が動かされました。友人とはちがって、自分がすなおでないことがよくわかり、知ろうともしないで心を閉ざしていた自分の愚かさがなにか惨めで、聖書を「学んでみたい」と思いました。それから火曜日の学び会、家庭集会などに参加しはじめましたが、聖書を学ぼう、理解しようと思っていた私には、聖書はあまりにも難解でした。ベックさんとお話したとき、「信仰は理解するのではなく信じることだよ」と言ってくださいました。そしてこれからの私の人生には二つの道があることを知りました。一つめの道は今までのように自分だけを頼りにして神様のいない人生、そして二つめの道は、私には未知の世界である「信仰をもって歩む人生」です。私はその時、何もわからないけれども「信仰による歩み」を選びたいと願いました。そして、そのことを口に出し、今までの罪を言いあらわし、悔い改めました。主の恵みと多くの方々の祈りによって私は救われたのです。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ　10・9、10）

また、家族の救いは聖書に約束されていて必ず成就するので、感謝して祈ることが大切だと教えていただきました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

それまで難解な書物でしかなかった聖書のみことばでしたが、火曜日の学び会や家庭集会で語られるメッセージ、また集会の方々の生活にイエス様が生きて働いておられる証しを聞くうちに、それらが少しずつ「神様から私への語りかけ」に変わりはじめました。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（Ⅰコリント　1・18）

もっともっとイエス様を知り、従いたいと願う気持が強くなり、救われて半年後のイースターの日に、信仰を証しするため洗礼を受けました。その前に、無教会派キリスト者の主人の両親に手紙を出しましたら、義母からのすてきな手紙をもらい、受洗の喜びをさらに大きくしてくれました。その手紙をご紹介いたします。

主にあって愛する真知子さま

お手紙嬉しく拝見しました。物みなよみがえる復活の春となりましたが、今年はいつまでも寒い日が続いています。私たち二人で神様の摂理の不思議さに驚き、また深い感謝を捧げずにはいられませんでした。私たちは子供たちが「年若い日にその創造主をおぼえよ」というみことばを信じるように祈り続けてきましたが、この一番大切なことを知ることはむずかしいことでした。やはり信仰はその人が謙虚な気持ちで苦しみ、悩み、その中から真実を求めたときに神様から授けられるものだと思います。神様がある日、ある時に一人の人をとりこになさるのだと思います。

もちろん本人やその人を愛するまわりの人々の祈りも加えられます。私たちと同じキリストのしもべとして歩き始められたとのこと、私たちにはこの上ない喜びであり感謝です。この弱い罪のからだ、心をそのままに、神様の聖書に従いましょう。このからだ、心のままでいいのです。すべては十字架の上で赦され、もはや昔の私たちではありません。キリストのしもべとして生まれ変わらせていただいたのです。こんな喜び、こんな感謝はほかにはないと思います。いいお友だちをいただいてあなたはほんとうに幸いでしたね。そして家庭の中に、主の贖いを信じる者となったことは悌二のため、梓のためにこの上ない喜びです。「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。」（詩篇127・1）と聖書の中にあります。おたがい神様の祝福を感謝いたしましょう。何よりもよいお便りでした。ありがとう。あなたの受洗のために心から祈っています。

父母

大きな喜びとともに始まった信仰生活でしたが、聖書のみことばが真の土台になっていない日々の歩みは遅々としたものでしたが、主人が広島に単身赴任をしたり、親しい方の転勤などを通して、人にではなく主のみことばに頼る訓練をさせられました。そのころ、小さなお子さんのいらっしゃる笹川さんと二人で祈り会をしていましたが、ご主人ががんになられ、病気を通して救われ、天に召されるまでみことばが真の支えとなり、確かな希望が与えられるという事実を知ることができました。

「わたし（イエス様）は、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも

生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

（ヨハネ　11・25、26）

バンコクへ

一九八七年、タイのバンコクに主人が転勤することになり、小学校三年生の娘といっしょに、すでに赴任していた主人のもとに行きました。三、四年か、長くても五年だと思って始まったバンコクでの生活でしたが、それが十年になろうとは、その時は思ってもいませんでした。それまでも、主人が広島に単身赴任をして離れて暮らしていたことがありましたから、家族いっしょに生活できるのがありがたく、何の不安もありませんでした。また、バンコクには二度目の赴任で三カ月早くいらしていた田中さんが慣れない私たちを支えてくださいました。バンコクには日本語で礼拝する超教派の集会があり、そこへ誘われて行ってみました。しかし、何か違和感があってためらっていましたが、かといってバンコクの生活でどのように信仰の生活を送ったらいいのかわかりませんでした。「何かが違う」という思いのまま、集っていましたが、ここでも人に頼るのではなくみことばに日々を支えていただくことを学ばされました。心からイエス様を愛する方々との出会いもありました。ふつうは日本から派遣され、赴任期間が三、四年で帰っていかれますが、親しい方々も次第に入れ代わり、満たされない思いがふくらんでいきました。また、自分の内にある多くの罪を示され、霊的な限界を思い知らされる日々でした。

あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あな

たがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。（申命記　13・3、4）

父の死

このころ、娘の高校入学の準備のために一時帰国をしました。私は、いつも遠く離れている年老いた両親に突然の死の時がきて、バンコクから私がかけつけても間に合わないのでは、といつも恐れていました。父は数年前に脳こうそくで入院している時に、ベックさんからイエス様のことを聞いていますから、必ず信じてくれると確信していました。そして、できればイエス様のお約束を感謝して祈りながら天の御国に召されてくれれば、と願っていました。私たちが帰国している時に父が心筋こうそくを起こし、入院してから召されるまでの二カ月間を日本にとどまることができ、毎日母と病院に行けたことも感謝でした。この入院中も、再びベックさんがきてくださって、父と母にイエス様のことを伝えてくださいました。同じ病院には成田さんが乳がんで入院しておられました。若くして召される日の近いことを知りながら平安そのものでいられる姿に、イエス様が彼女のうちに生きて働かれていることを父にも見せていただきました。父は、帰りたいと願っていた家に一度帰り、再び入院しましたが、最後の入院となった九日間は父の枕元で聖歌を歌い、聖書を読み、祈り続けました。父の状態が悪くなって病院に向かう時に聞いたみことばに、すべてが主のみこころによってなされていることを確信しました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。―主の御告げ。―それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。

（エレミヤ　29・11～13）

父の病状が悪くなり、母、兄、姉が病院に集まりました。その晩から急変に備えて兄が病室に泊まることになり、それぞれが用意のため家に帰って出直すことになりました。ところが母と私が病室に残ってまもなく、血圧が急に下がり始め、厳粛な死の時がせまりました。父と母と三人で手をつないで祈り、天国への希望を感謝しつつ父を天の御国に送りました。父が召されて淋しくなりましたが、天国で会えると思った時、悲しみはありませんでした。晩年には話すことも歩くことも不自由だった父でしたが、天の御国で元気な父に再び会えることを確信できるのはほんとうに感謝です。

主人の救い

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

イエス様の愛によって、祈り、願っていた通りに父を送ることができ、感謝に満たされてバンコクに戻りました。しかしそこで、私はイエス様とともに十字架にかかって死んだはずなのに、わがままな自我で生きていることに気がついたのです。主が支えてくださらなければ一日も生きることのできない弱い者であり、私のような良いものの一つもない者をイエス様が見放さず愛し続けてくださっていることは何という恵みでしょうか。

娘は中学三年生の時にイエス様を知り、救われていたのですが、私は主人が救われることをずっと祈り続けていました。主人は、ベックさんやキリスト集会の方々を信頼していましたが、その背後におられるイエス様には目が開かれていないので、なかなか救われるまでにはいたりませんでした。

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたし（イエス様）は言ったではありませんか。」

（ヨハネ　11・40）

イエス様はこのように語られましたが、バンコクで主人が救われるなどとはとても考えられないことでしたから、主人が救われるのは日本に帰国してからだろうと思っていました。

するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私を

お助けください。」

（マルコ　9・23、24）

信じきることのできない不信仰な私ですが、それでもイエス様にすべてをゆだねて、祈り続けました。

一九九五年一月、主人の救いを祈りはじめて半年ほどたったころ、岩原さんのお嬢さんのまりさんが大学の卒業旅行の途中、バンコクのわが家に寄られることになりました。まりさんとバンコクのドンムアン空港で初めて会ったとき、この方が主人の救いのためにイエス様によって送られてきた方だとは知る由もありませんでした。その時が初対面ですから、おたがいに自己紹介をしあい、まりさんはイエス様を信じているけれどもまだ洗礼は受けていないとのことでした。ご家族のことを伺った時、まりさんのお父様が救われるお話がすばらしく、ぜひ主人に話してほしいとお願いしました。まりさんは喜んで話をしてくれて、その日から毎日主人にイエス様のことを伝えてくれました。主人は娘のような若いまりさんが汗をかきかき熱心に話すのを聞き、最初は軽い驚きを感じているようでした。しかしいつも最後は、主人が、まもなく就職するまりさんに社会人としての心得を語るという毎日でした。まりさんから出る言葉はイエス様が語らせてくださっているとはっきりとわかるほど、適切でした。主人にとっては青臭くてとても社会では通用しない甘い考えだと思って聞いていたイエス様のことが、いつのまにか「ほんとうに聖書にそんなことが書いてあるの？」という会話に変わっていきました。主人は年末から仕事が大変だと言っていましたが、ある日帰宅しますと「もう駄目だ。今まで大変なことはたくさんあったけれ

ど、今度はもうどうすることもできない。解決の方法がわからない」と言って食事もとれません。そして「神様を信じて重荷を下ろしたい」と言いました。信じられない告白でした。次の日、国際電話でベックさんとお話をして、はっきりとイエス様を受け入れ、主人はその日から聖書を読み始めました。一カ月後、主人は出張で一時帰国しましたが、その時まりさんの洗礼に立ち会い、自分も洗礼を受ける決心をして洗礼を受けました。

ここに至るまで、イエス様の恵みと両親の四十八年の祈りがありました。イエス様は祈りに答えてくださいました。そして私たちはただイエス様だけを愛し、イエス様だけに従う者とさせていただきたいと願い、バンコクで主人と二人で日曜礼拝をすることとなり、超教派の集会を出ました。主は生きておられますから、必ず私たちを養ってくださることを信じました。

私の病気

私には数年前から子宮筋腫があることがわかっていましたが、ある時検診を受けたところ、子宮頸がんが見つかりました。がんだと聞いて、私は初めて、死が終わりではない永遠のいのちをいただいている信仰を持っていることがどんなに大きな恵みであるか、心の底から知りました。

「胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたし（主）は同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」

（イザヤ　46・3、4）

このみことばを与えられた時、主が支えてくださることを信じようと思いました。でも、もしかしたら自分勝手な思いこみではないかと不安でしたが、入院中にお二人の方を通して同じみことばをいただきました。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。

（ルカ　1・45）

主のみことばと多くの方々の祈りに支えられて、平安の内に手術を終えることができました。弱い者ですからイエス様から目を離すとすぐに思い煩いにとらわれてしまいますが、祈り支えてくださる集会の皆さま方によってみことばに立ち返ることができるのはほんとうに感謝です。

喜びの集い

私はその後の検診のためにたびたび日本に帰り、日曜日の礼拝や、家庭集会、祈り会でキリスト集会の方々にかこまれ、支えていただくことができましたが、主人は忙しく、そのような機会がありませんでした。夫婦で二人だけの家庭礼拝を続けていくことは、救われたばかりの主人にとって重荷となっているようでした。主人のために、バンコクにキリスト集会の方々が来てくださればどんなにいいだろうと願っていましたが、バンコク出張のおりに寄ってくださるというお話が何度かもちあがり、そして駄目になりました。

あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐

です。（ヘブル　10・36）

このみことばが与えられ、イエス様はいちばんいい時に必ずキリスト集会の方を日本から送ってくださることを信じました。しかし主人が救われて一年になるころには、主人の信仰がなくなってしまうのではないかという思いにとらわれ、絶望しそうになることもありました。ファックスや国際電話を使って、キリスト集会の方々に主人のために祈ってくださるようにお願いしました。このことを聞いたまりさんはすぐにベックさんに手紙を書いてくださり、それからバンコク「よろこびの集い」が開かれることになったのです。主人の信仰のためにという願いがイエス様に聞かれたばかりか、バンコクの日本人のためにイエス様のことが伝わっていく機会になったのです。それからは「よろこびの集い」に一人でも多くの方々に来ていただきたいと思い、祈りの輪が次々と広がっていきました。待ちに待った「よろこびの集い」の当日、たくさんの方々が集われ、バンコクに来ていた私の母も娘も参加させていただきました。主人も心から喜び、皆さまとイエス様のことを語り合う喜びであふれました。また、これを機に、私たちが祈っている方々がイエス様のところに集われ、ほんとうに「よろこびの集い」となりました。そして次の年にもバンコク「よろこびの集い」が開かれることが決まりました。

主人が救われてからの一年間というもの、祈っても祈ってもバンコクに来られる方がなかったのに、それからはベックさんはじめ多くの方々が来てくださり、暖かい家庭集会も開けるようになりました。わが家での日曜礼拝には、一人また一人と参加する方が増え、「よろこびの集い」で

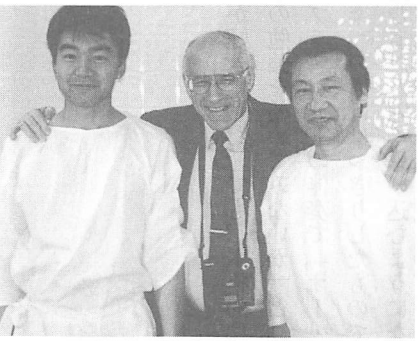
は三人の方が洗礼を受けられました。イエス様に支えられ、養い、育てられて主人と同じ会社にいらっしゃる中上さんもイエス様を信じ、救われました。

かつて、キリスト集会の方々と語ることができず、日本に帰ってお話したいという思いが強くなることが何度もありましたが、このイエス様のご栄光を私たちに見せてくださるために必要な時であったことを知りました。私自身はあいかわらずどうしようもないみじめな者ですけれど、イエス様が愛の御手をのばして導き続けてくださることを感謝しながら、一日一日を歩みたいと願っております。

主人は一九九八年一月に、中国に赴任しました。中国の地にもイエス様が新しいご計画を持っていらっしゃることを考えると、期待に心が踊ります。海外で暮らしたことによって、異なった文化の中で今までの人生、今までの信仰をあらためて考えるきっかけの時になりました。海外におられる多くの日本の方々が、イエス様に出会うことができますように心から祈っております。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。（詩篇　103・2～5）







（写真上）左、奥様の道子さん、右、堅太さん。スイスにて。
（写真左）右、堅太さん、左、康之さん。洗礼を受けて。
（写真下）国立音大新人演奏会で。

賛美する身へと変えられて

堤　堅太

一九四〇年福岡県八女郡水田村（現筑後市）に生まれる。水田小、中、県立八女高校卒。国立音楽大学声楽学科卒、同大学院音楽研究科修了。都立東大和高校勤務。家族は妻道子さん、長女里香さん、長男太郎さん。

音楽への道

私は小さいときから歌を歌うことが好きでした。でも、本格的に歌を勉強したいと思い出したのは、中学校の音楽の先生から「歌の勉強を始めてみないか」と勧められてからだったと思います。そして中学生の時の学芸会で、ブラスバンドの伴奏で「オー・ソーレ・ミーオ」を歌いました。中学校卒業の段階では、まだ音楽への道ははっきりしたものではありませんでしたが、高校に入学してからは、この道が僕の進む道だと固く思い込むようになっていました。

高校に入ってからは、声楽とピアノの先生に師事し、本格的な勉強を始め、一日中音楽漬けの毎日が続きました。私の家は、私立の音楽大学に行かせて貰えるほど裕福な家ではなかったので、お金があまりかからない国立の東京芸術大学に行くしか方法がないと思いました。高校の三年間の勉強の後、一大決心をして、高校を卒業するとすぐ、当時新宿に住んでいた叔母と、先に上京していた姉を頼りに上京しました。

覚悟はしていたのですが、現実はきびしく、受験は不合格でした。でも、私は内心では、自分の浪人生活は相当長いものになると思っていました。ひょっとしたら十年ぐらいかかるかも知れないが最後までがんばるぞ…と。東京での生活は、叔母と姉に厄介になりながら、アルバイトと寸暇を惜しんでの練習の毎日でした。間もなく叔母の家では手狭なので、姉と天沼のアパートに引っ越すことになりました。練習は当時、阿佐ヶ谷に「貸し練習室」があり、毎日そこでピアノを弾いたり歌ったりして練習をしていました。

妻、道子との出会い

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

（伝道者　4・9、10）

引っ越した先のアパートには、道子の上のお姉さんである綾子さんが住んでいました。たまたまそこに遊びにきていた道子に出会ったわけです。しばらくして道子はそのアパートに住むようになり、日本橋の会社に勤めるようになりました。私は姉と同居しながら、池袋の歌声喫茶や酒場でバーテンのアルバイトをしながら音楽の勉強をするという生活をしていました。私にとってアルバイトは音楽を勉強するのに必要な生活の資金かせぎであり、受験の時期が来ると数カ月は休まなければなりません。それで受験が終わると、アルバイト先はいつも変わっていました。製紙会社の経理事務員、浅草橋のクリスマスカードや浮世絵を売る店の店番、池袋駅付近でのプラカードマン、日本橋の商事会社の経理事務、阿佐ヶ谷駅のそばのフルーツパーラーのカウンターなど、転々と仕事が変わりました。私の浪人生活は、五年間も続いたからです。

道子と出会ってしばらくすると、姉が結婚することになり、いったん九州に帰って準備をし、結婚していきました。もともと淋しがりやだった私は、いつもいっしょにいた姉がいなくなったので、淋しさに耐えられず、何か非常に苦しい時期だったことを思い出します。

そんな時、私の話をほんとうに親身になって聞いてくれ、よく笑う明るい道子にひかれ、この

人と一生を共にしようと思うようになりました。そして無謀かも知れないが、結婚しようと二人で話しあいました。

一九六〇年九月二十三日、四谷のイグナチオ教会に二人で行き、二人だけで誰に相談もしないで今日が結婚する日だと決め、固く誓いあってきました。神父さんとかに相談したわけでもなく…。私が二十歳、道子は十九歳の秋のことでした。

それからは楽しいこともたくさんあったけれども、貧しく、つらく、苦しい日もたくさんありました。このことは私の実家には当分の間知らせなかったのですが、道子の信州の実家には知らせました。道子のご両親は私に会い、そして私たちを理解してくれ、私を自分の子供のように可愛がってくれました。陰になり日向になって、いろいろと助けてくださいました。当時、私はただ若く、未熟なだけでなく、何といってもいまだ浪人中の身の上だったのですから。今にして思えば、ご両親は私たちのことが心配で、はらはらのしどうしだったのではないかと思います。それでも温かい気持で信頼し、一生けんめい我慢して見守ってくれていたんだなあと、同じ年頃の子供を育ててみて改めて思っています。

それから四年後に、長女の里香が生まれました。とても嬉しいことでした。しかし私はいまだに音楽大学への進学の途上にあり、大変なことになってしまったわけです。信州の実家でしばらくは預かって育ててくれるという言葉に甘えて、それから二年二ヵ月もの間、里香は信州の伊那で育ったのです。実はほんとうに大変だったのは私たちではなく信州のおじいさん、おばあさんであり、誰よりも里香自身であったのです。私たちは行けるときはできるだけ里香の所に行くよ

うにしていましたし、特に道子は可能な限り長い間いるようにしていました。しかし、里香自身は、幼児期に両親の愛情を一身に受けて育ててもらえなかったことを、ものごころついてからずっと心に引きずっていたようです。

私の十年計画の浪人生活も、できるだけ短くすることを迫られました。国立音楽大学に奨学資金の制度があることを知りました。国立音楽大学も受験したところ、奨学生として合格することができました。授業料は卒業まで心配しないでもよくなり、やっと音楽大学での歌の勉強への道に踏み出すことができたのです。九州を出てきて五年目の春のことでした。

それから私は、大学での勉強に、そしてアルバイトにとけんめいにがんばりました。しかし学校優先だったので、アルバイトはかなり不定期となり、収入も大したことはありませんでした。何といっても大変だったのは道子の方だったと思います。里香のことも気にしながら、仕事を捜しては働いていましたが、専念して仕事だけにうちこむわけにも行かず、いろいろと迷いながらもがんばり続けました。

初めての「キリスト教」との出会い

私たちは天沼のアパートから、荻窪の四面道のそばの清水町に引っ越しました。音楽を勉強するにつれて、歌曲の歌詞の中に聖書の言葉がよく出ること、また、音楽史の講義で音楽とキリスト教との深い繋がりを教わったりしているうちに、聖書を勉強する機会が欲しいと思うようになりました。

そのころの私は、無神論者であると公言してはばからない者でしたが、一方では、キリスト教というものに何かひかれるものを感じていました。そんなある日、四面道の近くの杉並公会堂で福音クルセードの大会があることを知り、私はおずおずと覗いてみたのです。

外国の伝導師らしい人が大きな声で早口で話すと、かんぱつを入れず、そばにいる人が同じような調子で通訳します。話の内容は忘れましたが「キリストを信じなさい！」と圧倒するような迫力で連呼していたように思います。

そんな話が終わったあと、「皆さん目をつぶりなさい。現在キリスト教に入っていない人は手を上げなさい」ということになりました。そして「その人たちはステージに上がってきてください。まわりの人はその人たちを導いていっしょに上がってきてください」と言われました。私は手を上げたので、いやおうなく壇上に上がらされました。そこでいろいろな人々が、かわるがわる「キリスト教に入りましょう。キリスト教はすばらしいですよ」と語りかけてくるのです。

私は優柔不断で、ぐずぐずしているほうですが、自我が強く、人に強制されることはとても我慢できないタイプですので、こんなふうにいやおうなくベルトコンベアーのようなものに乗せられてステージに上っている自分の姿に納得できず、むくむくと反発する気持ちが強くなりました。その時、いっぺんで覚めた、嫌な気持ちになったことを覚えています。これがいわゆる「キリスト教」に出会った初めでした。まだ、「イエス様と直接出会う」時と所が備えられていなかったのです。

音楽大学時代

大学では、同じ学年の同級生にとって、私は五歳も年上で、結婚していて、子供もいる学生ということで、つきあいにくくもあり、またかなり目立ったのではないかと思います。もっとも同じ声楽学科のクラスには、私よりさらに二歳年上のテノールの人がいましたし、他にも結構同じような仲間もいましたので、さほどの違和感もなく学校生活を送ることができました。

勉強に、そしてアルバイトにとけんめいにがんばりました。最初は歌のほうの勉強も順調で、学校で決められた女性の教授ともうまくいっていましたし、とても可愛がっていただきました。同門のクラスの遠足には道子も呼んでいただき、御岳にキャンプに行ったこともありました。ただこの先生は、「あまり男性は教えたことがない」と言っておられたことだけが不安でした。

二年生になってしばらくすると、先生とうまくいかなくなり、先生の要求される細かいテクニックをこなすことができず、歌が歌えなくなってきました。私は焦ってきましたし、先生のほうはもっと焦って、ため息ばかりつかれるようになりました。私も歌を歌うのがだんだんと辛くなってきました。いろいろ考えたすえ、思い切って先生を代えていただくように学校にお願いしました。スムースではなかったけれど、何とか別の先生につくことができました。

代わって教えていただくことになった横田教授は、それまでの先生とは対照的で、あまり細かいことは言われない先生で、それぞれの者がかなり自由に、のびのびと歌っていました。そこで私もふたたび歌う意欲をとりもどし、なんとか危機を脱することができました。

この教授のもとで学んだ者八人で、のちに「ムジカ・ドルチェ」という声楽の音楽会を一九六

九年から開くようになりました。この「ムジカ・ドルチェ」も今年、二十六回を迎えますが、それぞれがかなり個性的な歌い方をするのは、この教授の指導方針の、よい影響が残っているせいかもしれません。

さて、私たちの生活は、清水町から国分寺の本多町のアパートに引っ越して、そこで学生時代の大半を過ごしました。私はピアノの出稽古にいって子供を教えたり、テレビやステージで歌謡曲のバックコーラスや、映画音楽のトラなどのアルバイトをしていました。トラとはエキストラのことで、臨時にかき集められて歌う仕事をするのです。しかし収入は大したことはなく、いつもいつも大変でした。特に大変だったのは道子で、一生けんめいにあれこれと仕事をし、里香を引き取ってからは育児の仕事も増えて、夢中で一日一日を生きているありさまでした。

このようにして、夢中で過ごした四年間でしたが、何とか卒業するところまでたどり着くことができました。卒業式には道子も出席して、同級の皆さんと喜びを共にすることができました。

その後、大学院に進み、あと二年間、勉強を続けることができるようになりました。私は大学としての第一回の大学院生でしたから、かなりぜいたくな勉強の機会をいただいたことを幸せだったと思っています。夏季には、ウィーン市立音楽院から大挙して教授陣が引っ越してきて、大学で夏期講習会が開かれ、それに参加することができました。この講習会はかなり長期にわたって開かれ、その中で三日に一度くらいのレッスンを受けられたのです。特に当時ドイツリートの第一人者と言われたゲルハルト・ヒュッシュ先生から、一年間にわたってレッスンを受けられたことは、私の音楽人生の宝だと感謝しています。

やがて卒業がせまり、道子の協力で修士論文も何とか書き上げ、大学院を修了することができました。それからは、都立瑞穂農芸高校に時間講師として勤務しながら、二期会というオペラを中心に活躍する団体の研究生として勉強を続け、二年後に準会員になりました。しかし、音楽大学でのオペラ研究室や、二期会でのオペラの勉強を通して、私の声はオペラには向かないことを感じていました。ドイツリート、ドイツの歌曲を自分のライフワークとして勉強しようと思うようになりました。

そして、五年間時間講師をした後、もう少し勉強を続けて母校の大学からのお誘いが来るまで待つかどうか迷いましたが、いろいろな事情から都立東大和高校に正規の教員として勤務するようになりました。住まいも都営住宅の武蔵村山市にある村山団地に引っ越しました。里香より九歳離れて、長男の太郎が誕生しました。やっと私たちの家族も、普通に近い生活が送れるようになってきたわけです。

道子の発病

涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。（詩篇 126・5）

私たちは、村山団地に十年ほど住んでいましたが、集合住宅での毎日の音出しは、近所の方々にとって大迷惑だったと思います。私も気がねをして、練習も思うようにはできず、いつもほんとうに困っていて、思いっきり音の出せるところに引っ越したいという思いが強くありました。

いろいろなところを物色していましたが、現在の川越のこの場所に決め、家を建てて引っ越しました。当時この一角にはまだあまり家が建っていなかったので、思う存分練習ができるようになりました。

それから一年ほどたった時、道子が身体の不調を訴えるようになりました。「めまいがして、何か身体の具合がおかしい」と。それですぐ近くの日生病院で診てもらいました。最初は「自律神経失調症か何かで心配はいらないでしょうが、念のため血液検査をしておきましょう」ということで安心していました。それが、「検査の結果は膠原病のようだが、まだはっきりしないところがあるので入院して調べましょう」とのことで、埼玉大学毛呂病院に入院しました。

やがてある日のこと、担当の原田先生から別室で申し渡されました。「検査の結果、多発性骨髄腫という珍しい病気で、現在治療の方法がない病気です。これは血液のがんであり、あと何年生きられるかもわからない」と。突然の宣告に私は気も動転してしまいました。その日、病院の道子の前では平静をよそおっていましたが、家に帰りついてから、私は「どうして？　こんなにこれまで苦労してきて、これからだというときなのに…私が苦労させてそんな病気になるようにしてしまったのではないか…」と涙が止めどなく流れました。

同僚から、その方面の権威で若杉先生という名医がおられると聞き、直接、当時勤務なさっていた防衛医科大学に行き、お願いして診ていただくことになりました。そしてその後、先生とのおつきあいは現在まで続いています。

また私は、自分は信仰を持ってはいませんでしたが、道子には、これからのほんとうに辛いと

き、苦しいときに信仰が助けになり支えになってくれるのではないかと思いました。退院してから、すぐ近くにある教会に、道子を誘って思いきって飛びこみました。

その後、道子は聖書を読むようになり、礼拝にも必ず行くようになり、順調に信仰の道を歩きはじめたようでした。私は何度も教会について行ったのですが、いつも、もう一歩が踏みだせないでいました。

子供たち

道子の発病当時、里香は小学校から中学校に行く年ごろでした。太郎はまだ小さく、保育園に通っていました。ですから子供たちも、淋しい思いをする時が多かったのではないかと思います。私の力のなさから、愛情豊かに育てるというようにはいかなかったことが悔まれます。道子は入、退院をくりかえしながら治療を続けました。そんな時は子供たちにかなりの負担がかかりました。今思い出しても、私がいかに駄目な父親であったか。自分ができないのに、里香にはかなりきびしい厳格さを求めていたようです。しかし、道子は、できるときは精一杯の愛情を子供たちに注いでいました。ただ、私たち夫婦は似た者同士のようで、同じような厳格さで子供にのぞんでいましたので、里香にとっては逃げ場がなく、辛い時期だったのかも知れません。

そんな中で、なによりも嬉しく、よかったことは、里香も太郎も道子の影響で教会に行くようになったことでした。ただ家族のなかで、私だけが取り残されていました。

「子どもたちを、わたし（イエス様）のところに来させなさい。止めてはいけません。神

の国は、このような者たちのものです。」（マルコ　10・14）

イエス様に従って

道子が八王子医療センターに何度目かの入院をし、具合がかなり悪かったとき、伊那の宮原さんという方が古田さん、ベックさんに紹介してくださいました。その後、私もキリスト集会の方々とおつきあいするようになりました。やがて私も、キリスト集会の西軽井沢福音センターへ、最初は道子のお供をしていき、そこでキリスト集会の皆さんの仲間に入るようになったのです。「この集会の方々は、今までの人たちとは何か違う」と思いました。

里香も成長するにつれていろいろな試練がありましたが、大島康之さんとめぐり会うことができ、結婚することが決まりました。私たち家族全員が里香の幸せを望んでいましたので、このことはまさに主がくださった恵みでした。私は嬉しくて嬉しくて、舞い上がっていました。あまり嬉しくて結婚式の帰り、接触事故を起こしてしまったほどでした。

私はベックさんとお目にかかり、今までの罪を告白し、これからはイエス様に従っていくことを決心し、いっしょに祈っていただきました。そしてイエス様に従っていくことを証しするため、康之さんが洗礼を受けるとき、私もいっしょに洗礼を受けたいと思いました。そして私の願いがかなって、一九九四年一月三日、康之さんと共に洗礼を受けることができました。

ふりかえってみると、道子といっしょになったときも、道子が病を得たときも、子供たちが信仰への道を歩きだしたときも、いつもイエス様は私たちを見つめてくださっていたのでした。そ

してちょうど一番良いときに、私はイエス様にぽんと背中を押されるようにして、おさまるべきところに自然におさまったような気がします。

賛美する喜びを持てる身に変えられて

まことに、われらの神にほめ歌を歌うのは良い。まことに楽しく、賛美は麗しい。
（詩篇　147・1）

私は歌の勉強を、どんな時も中断することなく続けてきました。しかしイエス様を知るまでは、人前で歌っていてもなぜか虚しさがあり、いつも演奏のまずさを何かのせいにして自分で弁解をしていたように思います。

救われたいま実感することは、演奏の後に残るのは虚しさではなく、ただただ喜びに変わってきたことでした。人に褒められるように歌いたいという気持はなくなり、主への賛美を感謝の気持をもって歌えるようになってきたのです。たとえ、演奏で失敗したとしても、以前のようにくよくよするようなことはなくなりました。

その後、私たちは数々の恵みをいただきました。若いときから憧れ、行ってみたいと思っていたドイツ、そしてスイスでのキリスト集会「よろこびの集い」に、道子といっしょに行けたこともその一つです。みこころであればもう一度、道子と共にドイツに行けますようにと、いつも祈っています。

そして、これからの人生の歩みも、道子と共にすべてを主におゆだねし、主のお導きの通りに歩み、ただ主にすがりながら歩みたいと祈っています。

朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。（詩篇　143・8）



愛里ちゃんの祝福式。上福岡家庭集会にて。

家族７人と、兄弟姉妹。　御代田にて。




右から道子さん、古田さん、ミンヘンさん。

麗しい天国への小道

堤　道子

一九四一年長野県伊那市に生まれる。伊那小、中、箕輪高卒業。十九歳で東京に上京、結婚する。家族は夫堅太さん、長女里香さん、長男太郎さん。

はじめに

「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）（マタイ　1・23）

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ　11・25）

この美しい春の日に、私の、またすべての人の罪のために十字架にかかり、死んで三日目によみがえり、天に上げられたイエス様の御名を心から賛美申しあげます。目の前の麗しい白ゆりの花は、イエス様の復活を香り立たせ、私の心に賛美の歌が清らかに流れます。イエス様の愛に強められ、支えられた十八年間の闘病生活。かつて私は絶望して、自分の死を願い、主に訴えました。「主よ、もう十分です。私の命を取ってください」。主は、聖書を通しておっしゃいました。

「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いのだから。」（Ⅰ列王記19・7）。また、イエス様のみことばに、こうあります。

（イエス様は）その子どもの手を取って、「タリタ、クミ。」と言われた。（訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい。」という意味である。）（マルコ　5・41）

「タリタ、クミ」。「道子よ、生きよ。恐れないで、わたしを信じてついてきなさい」。イエス様の御声に支えられた私は、今、天国を仰ぎ見て喜びでいっぱいです。

主は多くの試練を通して、私や家族の上に、人知ではかり知ることのできない永遠の救いと奇蹟をなしてくださいました。そのご栄光と愛に、心から礼拝せざるをえません。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。（ヨブ　1・21）

天国への道のりにおいて、主は、突然、思いがけない困難を次々と与えてくださいます。このたびも、主人の兄弟が病気になり、心を痛めることが続きました。その中で、「主よ、お語りください」とイエス様だけを信頼して祈っておりましたら、思いがけず「光よあれ」の証しの依頼をいただきました。「こんな罪人の私に、主よ…」と祈っておりますと、イエス様の慈しみの眼差しが感じられ、涙で胸がいっぱいになり、明るい光がさしこんできました。祈れることは、想像を絶した、驚くばかりの恵みです。

現実には、私は入院治療、モルヒネ使用中の身。地上に残されたきびしい時を、もはや自分の

欲望のためではなく、神のみこころのために過ごしたいと願っております。イエス様のためにささやかな、小さな実を結ぶ証しができますよう、どうか主よ、お導きくださいますように。

イエス様に導かれて

この身とこの心とは尽き果てましょう。…しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。

（詩篇　73・26、28）

思えば、イエス様は私と家族を深く憐れんで、時にかなって赦しと愛をくださり、そして永遠のいのちへと解放してくださいました。

私は、一九四二年七月十九日、信州伊那市の福沢家の三女として生まれました。道子という名前は、信仰の道という意味もあり、のちに大変大好きな名前となりました。イエス様とは、少女のころ、教会に通って初めて出会いました。それは、とっても心地よい思い出として、心に残っています。

十八歳まで、アルプスに囲まれた美しい自然の中で生活しましたが、高校を出て父母と離れて上京、姉のところで生活をするようになりました。父母は子供思いの優しい人で、草花や音楽を愛していました。母の歌った「美しき天然の美」は、いつも心に流れています。今も、鎮痛剤でぼうっとした私の目の前に浮かぶ畑一面の白ゆりの花。愛する方々が、送ってくださるかすみ草

の白い花々…白い衣への連想。やがて来る私の葬儀への憧れでしょうか。すべて主のみ旨がなりますようにと祈らずにはいられません。父母は、記念会、姉の福音を通して、天国のいのちの書に記されていることと確信しております。天国での再会が楽しみです。

上京早々、堤堅太と出会いました。彼は音楽への大きな情熱を秘め、大きな目標を持ち、何より音楽を愛する好青年でした。私も、彼の音楽の道に何か役に立ちたいと思うようになり、ともに愛が生まれ、一九五九年九月二十三日、結婚しました。教会で誓いあって、神様と主人と私の三つよりの糸の新生活が始まりました。主人が二十歳、私が十九歳のころです。主人は芸大浪人中。「人は、神が結び合わせたものを離してはならない。」と聖書にありますが、三十八年がたちました。最高に幸せでした。

やがて、国立音楽大学の育英会奨学資金の助けをいただいて、大学院を卒業しました。それから教職の道について現在まで、ずっとイエス様に守られています。今でもよく思い出す荻窪の三畳間の小さな部屋、そして、貧しくとも二人で肩を寄せあっての生活。ほんとうに貧しい生活でしたが目標があり、心は一つ、ほんとうに幸せでした。花嫁道具はピアノ。主人の生活に一番大切だったからです。父母を通して、主は必要を備えてくださいました。

一九六六年六月三十日、里香が誕生しました。伊那で出産しました。結婚四年目の妊娠に、父母は、神様からの授かりものだと全面的に養育を助けてくれました。一九七五年十月十七日、太郎が誕生しました。そのころには生活も安定し、川越に今も住んでいる家を与えられました。

生活は安定してきましたが、主人は音楽に夢中です。私は淋しさをまぎらすため、料理学校に

通ってみたものの、気持ちは中途半端なままでした。

父は一九七七年夏、脳溢血で倒れ半身不随となり、約十年後の一九八八年三月十四日、召されました。母は、父が倒れて後二年余り看病していましたが、多額の固定資産税が心の病の引き金となり、一九七九年六月十一日の早朝、父を残して天に帰りました。田舎の葬儀は三日間続きました。私は深い悲しみ、悔いの中にしずみこんでいました。

一年後、私は仕事を始めました。しかし体調が悪く、病名を知らされないまま緊急入院しました。私の病名は、多発性骨髄腫。十万人に一人という血液のがんで、骨の破壊により全身が大変痛む病気です。一九八〇年八月のことでした。私三十八歳、里香十二歳、太郎三歳でした。それから闘病生活が始まりましたが、二十年近くも生かされております。入退院を繰り返し、死の谷間を、何回歩んだことでしょう。あれこれと治療を試みました。中でもインターフェロンが効いたようで、長い間安定を保ちました。主治医の若杉先生は、イエス様に従っておられる方で、「信仰は生活の基盤だよ」と、心身ともに励ましてくださいます。本当に感謝です。また、古屋先生やスタッフの方々は愛にあふれ、私を支えてくださいます。天に至る私の小さな小道に、神様が備え、出会わせてくださったお一人お一人に、心から感謝いたします。

私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。

（Ⅱコリント　12・7）

病気は私の十字架です。私は母の死を通して自分の死というものを深く考えるようになり、人

間の死は終わりではないこと、すばらしい天国、永遠のいのちの救いのお約束など、イエス様のあわれみと恵みをいただく幸いを、身にしみてわかるようにと変えられていきました。

「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためのものです。」（ヨハネ　11・4）

母の葬儀を見るにつけても、私の葬儀は教会でひそかにやっていただきたいと思い、主人にもそう言いました。主人は家から数分のところにあるプロテスタントの教会に連れていってくれました。これが私たちの信仰生活の出発点です。

一九八二年七月十一日、洗礼を受けました。生まれ変わったことを証ししたい一心で、明るい希望に包まれて、熱と不調の中の受洗でした。イエス様への初めの愛は真に新鮮です。里香、太郎も教会に行くようになり、太郎は中学三年の時に受洗しました。私の心に、生きた聖句として愛、赦し、罪、弱い者などのみことばが響くようになりました。特にマタイの福音書5、6章は、イエス様の愛に心打たれます。今でも好きな聖書の章です。

周りの方々は私の病気のことを大変心配してくださいました。私はおかげさまで平安の日々で、不思議なことに生への執着心があまり感じられずに過ごしました。礼拝、婦人会、祈り会と、主にある方々の集いは私の信仰の基盤となり、イエス様の十字架の死、贖い、復活、罪の赦しなどについても、聖書に書かれてあることが自分のこととして受け取れ、主は後に来る試練に耐えられるように、信仰する心を養ってくださいました。

やがて時が過ぎ、わが家に人生の海の嵐がやってきました。十年目に入った私の病の悪化と、重い鬱病。そして娘もまたいろいろと悩むことが多くなりました。二重、三重の試みに会い、私たちはそれを通して少しずつ主のみもとに引きよせられていきました。

やがて、試みの中で、イエス様は私に、身体の束縛からの解放の道を備えてくださいました。車の免許の取得です。四十八歳、病気のさなかのことでした。主治医の先生は、「挑戦するのは良いけれど、お金は捨てると思ったほうがいいね」。たぶん無理でしょうということでしたが、イエス様に祈りましたら、ちゃんとパスさせてくださいました。父から贈られた赤い車はすぐに生活の手足となり、イエス様からのすばらしいプレゼントに感謝しました。

そのころ、病状が悪化し、八王子医療センターに入院することになりました。古田さんご夫妻がよく訪れてくださり、親しくおつきあいしてくださいました。また、キリスト集会の方々も次々とお見舞いに来てくださるようになり、新たな喜びの日々が始まりました。治療効果も上がり、四十日で退院。しかし、二週間後から日ごとに衰弱し、死の谷間を歩くような恐ろしい発作が続く日々でした。太郎は日曜礼拝のテープを持ってきてくれ、それを通して神の権威とサタンの権威の違い、勝利の主に信頼して祈ることを示してくださいました。そして、そのころの私の心を打った聖句は次のものでした。

…戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」（ヨハネ　20・19）

「聖霊を受けなさい。」　（ヨハネ　20・22）

一九九二年三月十日のこと、ベックさんが来てくださいました。ベックさんのことは、六年前に読んだリンデさんの「実を結ぶ命」を通して知っていました。その本に流れるまことのいのちに感動し、リンデさんの病気や誕生日が私と同じであることや、親として人知れぬ娘への思いに共感し、心からお会いしたかった方でした。私の葬儀のことで来られたのですが、試練の中にある里香がベックさんと親しくお話させていただき、心から自分の罪を悔いて救われました。あの時の笑顔は忘れません。すばらしい恵みの訪れの日々でした。

同じ年の二月十四日、私は主人への遺言として、「神様からいただいた声の賜物を、主への賛美として捧げてほしい」と、心からの願いとして書き送りました。一九九二年五月三日、里香は洗礼を受けました。福音センターの献堂式の日で、五月四日に子供たちは無事に帰宅。すっかり安心した私の身体は衰弱し、歩行困難になりました。しかし心は最高の喜びに踊り、主に、心から感謝しました。中でも里香の洗礼は、長年待ち望んだことでもあり、娘として一生かかってもできない親孝行だと感激でした。福音センターからのおみやげの聖歌のテープは、私の枕元でみながそろって聴きました。賛美はほんとに美しく、涙とともに小さな声でアーメンと言いました。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。　（ヨブ　1・21）

やがて五月六日、個室入院。重いうつ病が出てきて、点滴も拒否。私の心は自殺願望のみ。天

国のみが私の希望、永遠の救いでした。病室にいることができず、希望退院。家の中での恐ろしいひととき。何もかもが気が重く、不眠。食欲なし。そんな中での主人のこまやかな心配りは忘れられません。

夏も終わるころ、主治医の紹介で埼玉医大の心療内科で治療をしていただくことになり、主人につきそってもらっての通院が始まりました。主治医は「必ず治るから、死なないで」と言ってくださいました。

神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださるからだ。神は六つめの苦しみから、あなたを救い出し、七つめのわざわいはあなたに触れない。

（ヨブ　5・18、19）

病気のため、外部との連絡は身内だけになりました。孤独感の中で、「主よ、来てください」と叫びました。七つめのわざわいの時は、私は天国にいるんだと思いました。

このころ、里香も道に迷い苦しんでいたようですが、母親として何も心の配慮をしてあげられませんでした。

ああ、私は悲しい。この傷のために。この打ち傷はいやしがたい。そこで、私は言った。

「まことに、これこそ私が、負わなければならない病だ。」

（エレミヤ　10・19）

私は、このエレミヤの言葉のように、ほんとうに孤独でしたが、救い主イエス様は、私たちを

あわれんで赦し、助けてくださいました。

一九九二年十月十七日、イエス様は私をうつ病から完全に解放してくださいました。この奇蹟は忘れることができません。その日は太郎の誕生日。修学旅行に出発する朝まだきのことです。いつも家のすみで小さく暗くなっている私に、主人が声をかけてくれました。「気分転換に、乗っていかないか」。この一言に心が開いて、いっしょに太郎を見送り、「私が運転するから、パパ、サイドブレーキを握っていてね」と、朝まだきの静けさの中で、運転も車庫入れも軽やかにでき、ほんとうに驚きました。毎日願っていた主人へのお味噌汁の支度もできて、心から笑うことができたのです。解放された心は、小躍りして空高くかけ上がります。喜びいっぱいでみなさまにお電話しました。「主はすばらしい」。

すべてが美しく輝き、絶望から希望に変わり、体調もみるみる回復し、主のご栄光に心から礼拝をお捧げする日々となりました。

一九九三年一月、家族そろって初めて西軽井沢福音センターで開かれた「喜びへのコンサート」に参加することができ、ベックさんも喜んでくださいました。イエス様は、あわれみと恵み、そしてご栄光を、時を通して現わしてくださいました。

一九九三年二月、念願の八王子集会に集うことができました。三月は川越の家庭集会。四月は川越の日曜礼拝…。本当に、喜びの連続でした。イエス様の愛と恵みで、祈り会も五月から始まり、愛する川越の方々とともに、喜びも悲しみもともに一つになって祈ることのできる幸いに、心から感謝いたします。

時も過ぎ、愛する里香も、聖書によって主に従うようになり、解放されてきました。ほんとうに人間の力では何一つできません。

「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたし（主）があなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」…「主の山の上には備えがある。」（創世記　22・2、14）

ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。（Ⅱコリント　1・9）

そのころ、親しい方から、次のみことばをいただきました。

見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。

（イザヤ　43・19）

すると、一九九三年十二月、人の思いをはるかに越えて、里香の上にすばらしいことが起こりました。昔、里香と仲がよかった康之さんという方と、五年ぶりに再会できたのです。康之さんの友人が、里香を見かけて連絡を取ってくださり、康之さんからお電話をいただいて、お話することができました。お互いに心配していたようで、家族で再会を喜びあいました。康之さんは、二年前、お父様を亡くされていました。一日も早く幸せに、と結婚を申し込んでくださいました。

里香の心にイエス様が生きて働いて、康之さんに福音をお伝えできたことも感謝でした。一九九四年の元旦に先方のお母様にも申し上げたところ、すべて堤家にお任せしますとの温かいお心遣いをいただきました。主はこの結婚を祝福してくださり、整えてくださいました。

一九九四年一月には、全員で西軽井沢の福音センターで開かれた「よろこびへのコンサート」に集うことができ、康之さんがベックさんといろいろとお話でき、イエス様を信じ受け入れ、翌日の一月三日早朝、主人と康之さんが洗礼を受けることができました。まことに主のなさることはすばらしく、喜びが私たちを満たしました。一九九四年一月十六日、里香と康之さんの結婚式が決まりました。再会から一カ月、洗礼から半月後のことでした。神様ありがとうございます。

あなた（主）には、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。…私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

（ヨブ　42・2、5、6）

わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。

（詩篇　40・5）

今では主にいただいた長男勇輝も、長女受里も元気に育ち、幼いながらも康之さん、里香とと

もにお祈りをするようになりました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

主人の心にもイエス様はいのちを注いでくださり、イエス様に心から従い、感謝と賛美をささげる者へと変えてくださいました。さらに私の父母もイエス様を信じ、イエス様に従う私たち家族は十三人に増えました。「わが家とわれは、主に仕えん」という聖歌の通りになりました。

主に不可能はありません。どうか世界中で祈られている、それぞれの家族の救いの祈りが、天に届きますように。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。…主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。

（詩篇　40・1、3）

私は、病身でもあり、海外などへ出かける日がくるとは夢にも思いませんでしたが、イエス様はロサンゼルス、ドイツ、スイスで開かれた「よろこびの集い」に参加するという恵みをくださいました。ドイツは、主人が若いころからドイツリートを勉強し、歌ってきた憧れの地でした。また、リンデさんの「実を結ぶ命」がイエス様に用いられ、救われた大ぜいの方々が参加なさいました。ドイツの大自然は美しく聖らかで、天国にいる心地でした。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽し

さであろう。

（詩篇　133・1）

「東洋のスイス」といわれる諏訪湖の美しい地に育った私にとって、スイスは憧れの国でした。宿泊のゲストハウスの五階テラスから、主人と眺めた山々の一日の移り変わりの景色。トゥーン湖に浮かぶ真っ白な雲。山々の紅葉。ハイジを思い出させる高原。美しい星空。主は虹をも二重にして祝福してくださいました。アイガー、ヨッホ、メンヒの山々。主の創造された大自然に圧倒されました。登山電車に乗り、アルプスにも登りました。イエス様は、隣の部屋に女医さんを備えてくださり、守ってくださいました。その女医さんが、私の主治医の遠縁の方であったことも、驚きでした。また、ベックさんが語られた多くの聖句は、今も私の心に生きていて、忘れることができません。また、ドイツ、スイスのよろこびの集いを通して八十二人もの方がイエス様を知り、受け入れられたそうで、主のみわざのすばらしさを心からほめたたえます。今、主の愛の静けさの中で、喜びを新たにしています。

一切れのかわいたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。

（箴言　17・1）

ある時には、「主人は音楽、私は信仰」と、主人が救われることをあきらめたこともあった私でしたが、主がくださった旅路、そして愛する方々との出会いを通して、朝の光がさしてくるように家族を満たしてくださいました。イエス様は永遠の救い主であり、あわれみのお方であり、圧

倒的な勝利者です。そのイエス様の子供として愛され、日々生かされている…。その恵みに、感謝でいっぱいです。

「しっかりしなさい。わたし（イエス様）だ。恐れることはない。（マタイ　14・27）

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マタイ　16・24）

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」（マタイ　5・3、4）

主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。…最も小さい者も氏族となり、最も弱い者も強国となる。時が来れば、私、主が、すみやかにそれをする。（イザヤ　60・20、22）

永遠への道

生ける水は川のように、イエス様から流れ出てきます。私たちは近づいて自由に飲むことが許

されています。生ける水は愛の川です。大雨のように、永遠まで、恵みを降り注いでくださるイエス様、心から、ありがとうございます。

すばらしかったスイスでの思い出を胸に、これが最後の証しになろうかと吉祥寺キリスト集会で証しをさせていただいてから早、数年がたちました。イエス様のみこころは計り知れません。この身も末期となり、きびしい十字架を背負って主についていく日々となってきました。一昨年十月に入院し、昨年四月に再入院し、きびしい治療も増えてきて、心身ともに戦いの日々です。

そんなとき、「イエス様、助けてください。主よ。主よ」という、幼な子のような祈りが、ひとときをイエス様のもとに安らがせてくださいます。自分では何もできなくなり、孤独感、悲しみ、貧しさの中で、主の時を待っている私。なんと、か弱い者でしょうか。でも、イエス様は、不思議な力で私を助けてくださいます。

「生きるのも主のため、死ぬのも主のため、この身も心もあなたのものです。たとえ死の蔭の谷を歩むことがあっても、わざわいを恐れません…」と、主を愛し誓った私の信仰も、ゆるがされる時があります。でも、どんな苦しみの時にも最善の道を備えてくださり、静かに御手の中に包んでくださるイエス様。その永遠の救いを、心からほめたたえます。病を負ってイエス様の貴い十字架の愛を知り、十九年間も生かされた十字架の小道は、私、そして家族を、暗闇からご栄光の中へと導き、移してくださいました。

この後、許される日数の間、イエス様のために実を結ぶことができますように。今日か明日かと祈る私に、イエス様は語られます。

御霊も花嫁も言う。「来てください。」…渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。
（黙示　22・17）

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。
（黙示　21・3、4）

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。
（黙示　22・20、21）

ハレルヤ。たとえこの身は朽ち果てようとも、私は天国への小道をたどりながら、大いなるイエス様のご栄光をたたえ、そしてすべてをイエス様の御手におささげいたします。
イエス様をまだご存じない方々、どうか、愛であるイエス様の永遠の救いを求めてください。
イエス様はお一人お一人を愛し、いつくしんで、心から待っておられます。
「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」
（マタイ　11・28）

最後になりましたが、イエス様はすばらしい方々を私のそばに備えて支えてくださり、励ましや助けをいただき、言葉では表わせない感謝と喜びです。ほんとうにありがとうございました。また、入院中ご家族でお世話してくださった金子さんご一家の方々、ほんとうにありがとうございました。イエス様の祝福を、心からお祈りしております。そして、里香、太郎…。母親らしいこともできず、ほんとうにごめんなさい。親族の方々にもお世話になり、ありがとうございました。そして、ともに主にある主人堅太さんには、ほんとうにご苦労をおかけしました。永遠の都天国でも、愛する夫婦として出会える日々を、楽しみにしております。

イエス様、すばらしい小道をありがとうございました。イエス様のあわれみと恵みを感謝し、日々果てしなく祈っております。

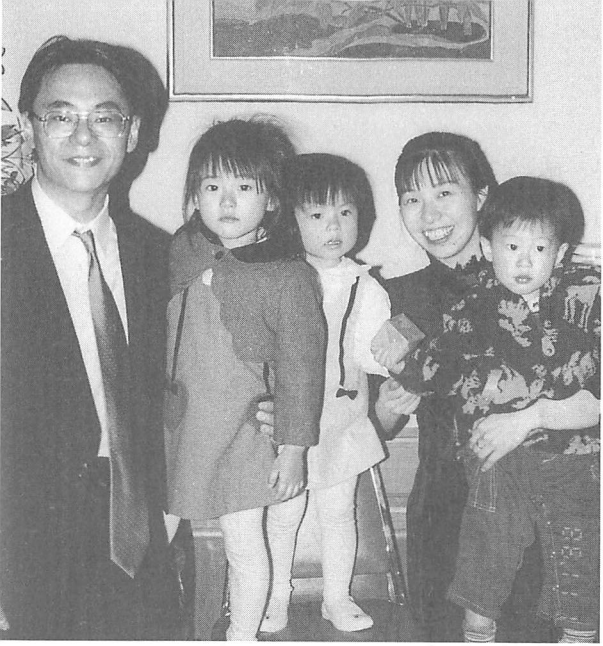
病院で。キリスト集会の方々がお見舞いに来てくださって。



主によって練られ、建て上げられる

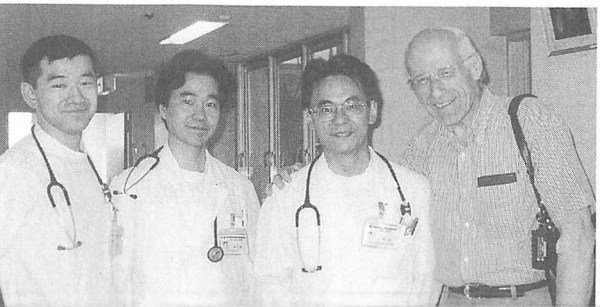
辻陽一郎

一九六四年神奈川県に生まれる。練馬区立八坂小、学芸大付属竹早中、付属高校、東京医科歯科大卒。小児科医として同大学付属病院、墨東病院、武蔵野赤十字病院勤務。一九九三年、純さんと結婚。家族は妻純さん、長女真理恵さん、次女百合香さん、長男光一さん。



ご家族そろって、西軽井沢で。





(写真中) 洗礼の日。お母様と弟さんと。
(写真下) 桜井さん、野口さん、ベックさんと。
武蔵野日赤病院で。

はじめに

最近、妻が買ってきた医学関係の本に、次のような興味深い記事が出ていました。最近は自己チェック形式の採点をするのがはやっているようですが、そこには心筋梗塞になりやすい性格を自己診断するチェック表が出ていたのです。心筋梗塞になりやすい人の行動パターンをタイプAといい、以下がそのタイプAの特徴です。

1　いったん始めたことは最後まで仕上げないと気がすまない。2　約束の時間には絶対遅れない。3　競争心が強い。4　他人の話を予測して口をはさむことが多い。5　いつも急いでいる。6　待っているのは苦手。7　いつも全力でことを進める。8　一度にいくつものことをこなすのが好きで、次にすることをいつも考えている。9　精力的で力強くゼスチャーをまじえて話す。10　仕事のでき映えについていつも他人からの承認がほしい。11　食べるのも歩くのも早い。12　運転が乱暴だ。13　感情を内に押し殺してしまうことが多い。14　仕事以外のことには関心がない。15　つねに何ごとにも責任を感じてしまう。16　「どのくらい」とか「いくつ」とかいった数量を表わす言葉で成果を評価することが多い。17　週末に仕事をしたり、家に仕事を持ち帰ることが多い。18　きわめてきちょうめんで、細かいところまで気がつく。（以上原文のまま）

妻の評価によると、私は十八項目中十六項目があてはまるそうです。私の自己採点では自分で言うのも何ですが、ほぼ全項目があてはまるように思います。この気質は、この世で生きていく上では役に立つ気質なのですが、イエス様に従って歩むためには非常にやっかいな気質なのです。

そしてこの気質が私の持って生まれた気質そのものであり、妻の評価が私の自己診断とほぼ一致するという事実は、私の信仰の証しとしてとても意味深いことなのですが、その意味はこの後の証しで少しずつおわかりいただけると思います。

生い立ち

私は一九六四年五月、父正靖、母陽子の間に長男として生まれました。私の両親は再婚同士で、それぞれの前の配偶者との間に娘がいます。つまり父親違いの姉と、母親違いの姉が一人ずつることになります。さらに私の一歳下には弟がいます。私は二人の姉とはいっしょに暮らしたことはありません。両親と弟の四人で育ちました。父は元は新聞記者だったそうですが、私が生まれた当時はすでに退職しており、いろいろな仕事を自分で手がけてはいつもうまく行かない、ということを繰り返していたようです。そのため貧しかったそうですが、私はあまり記憶にありません。三歳からは東京の練馬に住んでいました。小さい頃から私はいつも弟と喧嘩をし、いじめていました。小学校でも同じで、手に負えないくらい乱暴だったようです。自我の目覚めと共に、私は次第に冒頭で述べたような気質が自分の内に宿っているのに気づき、悩み始めました。そしてこの気質が父親によく似ていることにも気づいたのです。なんとか自分を変えたいと努力しましたが、長続きしませんでした。十一、二歳くらいの頃だったと思います。

その頃、父親が離れて暮らすようになりました。仕事で単身赴任ということでしたが、後にその時両親が離婚していたということを知りました。以後、家族は母と弟の三人となりました。母

は自宅で塾をして生計を支えながら私たちを育ててくれました。私たちはあまり不自由した記憶もなく、普通に中学、高校生活を送っていました。母は折を見て私たちの生い立ちを知らせてくれました。その当時の私は、一見普通の学生でしたが、大きく分けると二つの問題に悩んでいました。ひとつは、自分の気質を変えることができず、それが父親から受け継いだものだという思いでした。父は相変わらず仕事がうまくいかず、借金を抱えていたようでした。私は社会に出ても、この気質がある限り父と同じように失敗するに違いないと思うようになりました。人とうまくつきあうことができず、粗暴な性格が自分の将来できっと災いすると思ったのです。

もう一つの悩みは、自分の複雑な家庭環境を誰にも打ち明けられなかったということです。今でこそ離婚家庭は少なくありませんが、当時はまわりに同じような家庭の子はほとんど見あたりませんでした。私はこの事実がいつも頭の隅に残っていて、心から友だちとつきあうことができず、次第に孤独になりました。自分自身を極力表現しないで人と接するようになりました。まわりからも、なにを考えているかわからない、というのが私に対する印象であり、私自身もそれでいいのだと思うようになりました。悪友はたくさんいましたが、親友はいませんでした。

高校二年の頃から次第に授業をさぼったりたばこを吸ったりしてまわりを困らせるようになりました。しかし冒頭の気質は生きていく上で役に立つこともあります。勉強や仕事をするのには、むしろこういった気質は必要なものでした。要領がよく、無駄を省き、短時間で能率を上げるには、私の気質は非常に役に立ちました。授業をさぼっても、成績は意外と下がらず、浪人を一年しましたが、持って生まれた気質により、無事に医学部に入学することができました。医者にな

ろうと思ったのは、いくつか理由がありますが、今思えば最も大きな理由は、やはり悩みの種を解決したいという思いでした。医者になれば、自分の気質が災いしてうまくいかなくなっても仕事を失うことはなかろうという、単純かつ不純な動機でした。

救い

私が高校生の頃から母は近所の教会に行っていました。一九八八年、私が大学四年の時、母はそれまでの教会をやめ、吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。以前から私たちはキリスト集会のことは知っていました。父の姉の小山さんがすでに集っており、父も十年以上前に一時集っていたことがあります。私と弟も父につれられて小学校の時に夏の軽井沢のバイブル・キャンプに行ったことがありました。母はキリスト集会に移り、とても喜んでおり、私にも一度来てみるように勧めるようになりました。私は当時それなりに楽しく過ごしていましたが、すでに述べたような心の中のどうすることもできない問題もありましたので、一度行ってみようという気持ちになり、一九八九年一月八日、大学五年の時、吉祥寺キリスト集会の礼拝に初めて集いました。

この日はちょうど昭和天皇が亡くなり、平成という新年号になって初めての日でした。集会のメッセージの後、二階のベックさんのお宅でお話していただくことになりました。この日のキリスト集会でのメッセージやお話も印象的で、一言でいえば非常に天的なものを感じました。さらにとても印象に残ったことがありました。この日は平成になった最初の日ということで、世間はその話題でもちきりでした。しかしキリスト集会では神様の話ばかりで、まったくその話題を口

にする人がいないのです。私は日本ではなくどこか他の国にでも来たような気持ちになりました。もっとも、キリスト集会はこの世とは違う所、天国に近い所ですから、年号などどうでもいいのだということも間もなくわかりました。

そして、その後私たちの導き手となってくださり、私たち家族のことを祈ってくださった野口修さんにもその時お目にかかりました。野口さんは私の通っていた大学の三年先輩にあたり、当時すでに内科医になっておられ、現在は同じ病院でごいっしょに仕事をしています。

その後、毎週キリスト集会に集うようになりました。そして福音に触れ、自分のこれまで抱えていた悩みは一気に解決しました。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

（詩篇　32・3～5）

いつも隠すことを重荷に思い、この世の快楽に逃げていた私には、ほんとうに慰めとなるみことばでした。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもい

ない。

（ローマ　3・10～12）

私はそれまでずっと、自分だけが特殊な性質を持ち、自分だけが人よりも罪を犯す性質をより多く受け継いでいると思っていました。しかし聖書は、すべての人が等しく罪人であり、ただ神のあわれみによってのみ赦される、と言っています。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

（ローマ　3・23、24）

主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましょう。しかし、あなたが赦してくださるからこそあなたは人に恐れられます。

（詩篇　130・3、4）

そしてさらに、古い自分は葬り去られ、全く新しいいのちによって、新しく歩むことが許されています。自分の力ではどうすることもできない気質を主が取り去ってくださり、新しい性質を与えてくださるのです。もはや努力して自分を取り繕う必要はないのです。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ　2・20）

父のこと

一九九〇年、父はその頃京都に住んでおり、何か仕事をしていたようですが、うまくいっていないようでした。父はなぜか私と母がキリスト集会に集うことに猛烈に反対するようになりました。私が神戸キリスト集会で証しをしたことが気に入らなかったようでした。そして私が何度か集った神戸キリスト集会を妨害しようとまでするようになったのです。神戸のキリスト集会の方々は文字どおり体を張って毎週集会を守ってくださいました。私はこのことで一時は非常に落ち込み、悩みました。しかしある日、今週もキリスト集会を守れるだろうかと気が落ちつかないときに、父は突然、心筋梗塞で倒れてしまったのです。そして集中治療室に収容され、一命はとりとめましたが、以後二度と起きあがることができず、寝たきりになってしまったのです。私は主に打たれたのだと思いました。主は愛に満ち、あわれみに富んでおられるお方であると同時に、真に畏るべきお方だと心から思いました。しかし主は、父をも愛していてくださり、覚えていてくださって、そのまま滅びに至らせることはなさいませんでした。

「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」（ヨハネ　11・4）

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたし（イエス様）は言ったではありませんか。」（ヨハネ　11・40）

一九九一年春、父が倒れて一年ほどたった頃、私と母は父を見舞いに京都へ行きました。父は寝たきりで京都の病院に入院中でしたが、ほとんど口もきけず、文字盤で言葉のやりとりをするような状態でした。ベックさんにもいっしょに来ていただきました。そのとき父は「苦労をかけた、すまない」、「またやり直したい」、「早く天国に行きたい」と、文字盤を通して言ったのです。父は悔い改め、新しくされ、救われました。キリスト集会に迷惑をかけないでいてくれればそれだけでもいいと思っていた父が、ほんとうに思いがけないかたちで一気に救われたのです。これは、長年父を見てきた家族の者にとっては、まさに奇蹟でした。祈りはほんとうに私たちの想像をはるかに越えた形で聞かれる、主は生きておられる、と心から思いました。

主は私の切なる願いを聞かれた。主は私の祈りを受け入れられる。（詩篇　6・9）

「わたし（主）の思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。」（イザヤ　55・8）

その後、私と母に、父を東京に引き取る気持ちが自然に芽生え、父が倒れて一年以上経ったある日、父を東京へ転院させていただきました。そして父を看病し、時にはキリスト集会へ連れていくこともできました。約十五年間離れていた家族を、主が一つにしてくださいました。

「わたし（主）は、すでに集められた者たちに、さらに集めて加えよう。」（イザヤ　56・8）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

一九九二年九月、父は静かに天に召されました。主のご計画は私たちの考えの遠く及ばない完全なものであり、必ず主の栄光を見させてくださり、また家族の救いは主の約束である、ということをはっきりと知らされました。

医者になる

話が前後しますが、一九九〇年、私は学生生活を終え、医者として社会に出ていくことになりました。何科の医者になるかは卒業までに決めればよいので、すでに救われていた私は祈った結果、小児科医になることになりました。以前の私なら、自分で考え、悩み、おそらく違う科、自分を最も自己実現できる科を第一に考えていたと思います。自分の思いとは多少違いましたが、平安でした。主は完全で、必ず最善の道を与えてくださるという確信がありました。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。
（ピリピ　2・13）

そこで、イエスは小さい子共を呼び寄せ、彼らの真中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決し

て天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。」（マタイ　18・2～5）

聖書は、子供のようにならないと天国には行けないと言っています。聖書をよく学んだり、勉強したり、何か良いことをしなければ行けない、とは言っていません。病気の子が治れば、医者としてうれしいですし、もし生命を失ったとしてもその子は天国に行けるのです。これはすばらしいことだと思いました。と同時にこのすばらしい事実を病気の子供たちやそのご家族にも知っていただけたらいいと思いました。

一九九〇年から、母校の東京医科歯科大学の附属病院で小児科研修医として仕事を始めました。一年間同病院で研修しましたが、この一年は非常に仕事がハードで、月曜から土曜は朝八時頃から夜十一時頃まで、日曜日も八時間ぐらい働き、一年を通して休みは一日もありませんでした。礼拝も二週間に一回程度出るのがやっと、という状態が続きました。信仰的にも弱り、つらい一年間でした。学生の時の、あちこちのキリスト集会に出て満たされて帰ってくる、という私にとってはあたりまえだった集会生活が一変しました。このとき強く感じたのは、体は疲れていて家で寝ていたいのですが、キリスト集会に行くと必ず行ってよかったと感じ、後悔することが一度もないのです。行くまでは多少おっくうなのですが、行ってみるといつも元気になって帰ってくることができるのです。それに気づき、この一年は這ってでも集会に出る、という生活になってき

ました。共に集い、礼拝し、語り合うということが、キリスト者にとってこんなにも大切なことなのかということがよくわかりました。

二年目になると多少余裕もできてきて、それまでのような肉体的につらいことはなくなってきました。一度つらい思いをしたので、以後はほとんど礼拝にも出席できるようになり、少し余裕があれば家庭集会にも出られるようになりました。今も相変わらず休みは少なく、あまり余裕はありませんが、集会にはなんとか出られるようにしていただいています。

実際の仕事の現場では、冒頭のような気質はむしろ役に立ち、速やかにこなしていくことはできるのですが、それを自分の力に頼りがちになってしまうことが問題であることにも気づき始めました。主にしていただくということが、私のように自分に頼りがちな者には難しく、日々祈って、霊的に元気な状態でないと、仕事がうまくいっても平安がありません。

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ　9・16）

また、医者というのは、若い時からまわりからちやほやされる環境に置かれるため、ごう慢になりやすいのです。私もいつもごう慢になった自分に気づかされては悔い改める、ということの繰り返しです。

だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配し

ませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。（詩篇　19・12、13）

仕事で証しをしていくということも大きなテーマで、悩んでいる人々は職場には大勢いらっしゃいますから、その方々に福音を伝えていくことが使命と思っています。現実にはなかなか実を結びませんが、何人かの患者さんがキリスト集会に導かれたことはほんとうに大きな喜びです。主の祝福がなければなにをしても実を結ばないことが明らかですから、主の祝福をいただけるように働く、ということが第一だということを学ばされました。

結婚

また話は少し戻りますが、今度は結婚のことについて書かせていただきます。

現在の妻である純は旧姓は飽戸で、よくキリスト集会でバイオリンを弾いていましたので、集会に集い始めてまもなく知りました。はじめは私よりもっとずっと年下だと思っていましたが、同じ大学生であることを知りました。当時、吉祥寺キリスト集会では、礼拝の後、二階の子供部屋でギデオン会という若い信者の集いが毎週あり、私たちはそこで毎週会うことになりました。信仰的にとても尊敬できる人だと思っていました。

一九九一年の夏、ある方から彼女を結婚相手としてどうかというお話をいただき、とても驚き、うれしく思いました。祈ってみて、お返事をし、つきあい始めました。すぐに結婚の話もまとま

り、同年十二月に婚約式、一九九二年三月に結婚式を吉祥寺キリスト集会であげさせていただきました。私は優柔不断で、何をするにも万全の準備をしておかなければ気が済まないという性格ですから、結婚はかなりの期間考えてからするのだろうと漠然と考えていましたが、実際はあまりに早く進んでしまいました。それを見て逆に、自分自身でことを進めているのではないことがわかり、とても平安でした。結婚は自分でするものではなく、主がさせてくださるものです。主が必要なときに、必要と思われるふさわしい相手を与えてくださいます。

神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」（創世記　2・18）

すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。（ヤコブ　1・17）

妻はまさに私の助け手です。主は私にこれまでもたくさんのプレゼントをくださいましたが、私にとって妻はその中で最高の主からのプレゼントであると思いました。結婚指輪には、主を共に見上げて歩めるようにとの願いを込めて次のみことばを刻みました。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。（ヘブル　12・2）

母のこと

母は一九八八年、私が集う半年ほど前から吉祥寺キリスト集会に集い、翌年七月にいっしょに受洗しました。母の人生は波乱に満ちた歩みで、休む間もなく駆け足で過ごしてきた人生だったと思います。信仰の導き手として、多くのことを母を通して学びましたし、幼いころから片親でしたので、ほとんど母に育ててもらったという思いが強くありました。

私にとっては偉大な、尊敬すべき親でした。キリスト集会ではみことばの朗読という奉仕をさせていただき、とても喜んでいました。子育ても終わり、ようやく母にも平安な日々が訪れ、私もうれしく思っていました。しかしそれまで全く病気をすることのなかった母が体調の不良を訴え、一九九三年六月、病院で受診し胃がんと診断されました。すでに進行したものであり、あまり長く生きられないこともわかりました。主治医は胃潰瘍と本人に告げましたが、いよいよ翌日入院という夜に私と妻は実家を訪れ、母に進行性胃がんであることを告げました。そして当時母と共に住んでいた弟ともいっしょに、皆で祈ることができました。一九九三年七月、当時私が勤めていた武蔵野赤十字病院で、胃の全摘手術を受けました。八月に退院し、以後は体調がすぐれない日々でしたが、集会の皆さまにも助けられ、各地の「よろこびの集い」にも行くことができ、恵まれた日々でした。しかし術後一年半ほどたった一九九五年二月、再び体調が悪化し、再入院しました。日赤の消化器内科におられたキリスト集会の野口さんに主治医になっていただきました。以後はいわゆる末期がんの状態で、肉体的には苦しみましたが、主を証ししながら六月に天に召されました。五十九歳でした。召される前日、すでに意識のない母の病室で、弟と共に祈る

ことができました。

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。（ヘブル　13・7）

母は最期まで主を証ししてくれました。そして弟や姉の救いを最期まで望みながら召されていきました。弟と母の姉にも、母を通して確かに主が働いてくださったことを見ることができました。慌ただしいこの世の生活を終え、喜びの集会生活をもう少し長くできたらよかったのに、とも思いましたが、主が「もういいでしょう」と、早めにもっとすばらしい天国に引き上げてくださったのだと思います。

妻と子供たち

一九九二年三月に結婚した私たちは、霊的にも恵まれ、楽しく過ごしていました。妻は私と正反対の性質で、全く裏表がなく、明るく、社交的で、純粋な人ですが、私と正反対ということは、つまり冒頭のタイプAでないということになります。ちなみに私が妻のタイプA度を評価すると、一項目もあてはまりません。結婚する前はわからなかったお互いの性質が結婚後にわかって驚くというのはよく聞く話ですが、私たちはあまりつきあう期間もなく、いわばよくわからないままに結婚したようなものでしたから、結婚後は互いに驚きの毎日であったとも言えます。妻は私の外見からは、冒頭のような、よく言えば実務的な、悪く言えば短気で怒りっぽい性格は想像できなかったようで、驚き、悩んだのではないかと思います。私の方も、バイオリンと同じように家

事もすばやくこなすようなイメージが少しはありましたが、実際は想像と現実のギャップに驚きました。それでも互いに主を見上げている時はそんなことはあまり気にならなかったのです。

一九九四年一月、長女の真理恵を授かりました。そして一九九五年二月に次女の百合香、一九九六年三月に長男の光一を授かりました。十三カ月ごとの三人年子というのは、十年小児科医をやっていても一度も見かけたことはありませんし、産もうと思ってもなかなかできないことです。私たちは次々に生まれる子供たちに驚き、次第に振り回されるようになりました。

当時、私の方も仕事が猛烈に忙しく、ほとんど家を顧みることがなくなっていました。仕事の場でも家庭に帰ってもいつも子供が泣いていて、落ちつかず、共に祈ることもなくなりました。共に常に寝不足で不機嫌となり、喧嘩が絶えなくなりました。私は、仕事を含めた自分の領域、自分のペースを侵されるのがただいやだったのです。子供は自分の思い通りにはならず、時間通りにことが進むはずもなく、そのためにいつもいらいらし、感情のままに子供を叱っていました。もともと正反対の性格の私たちは、主にあって一致しないと完全にうまくいかないようにできており、実際にそうなると家庭は悲惨となりました。結婚当初の喜びの生活はまったくなくなり、愛情もなくなってしまっていました。忙しい妻をしり目に、私はますます仕事に逃げ込むようになっていきました。

もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。

（Ⅰテモテ　5・8）

さらに、三人の相次ぐお産のため、妻は三年間で半年以上も実家にお世話になってしまいました。その間、私は一人暮らしとなったのです。元来私は一人でいるのが好きで、気ままに過ごせるのを悪く思いませんでした。しかし、一人で暮らすということがまたさらに信仰的にも落ち込むこととなり、暗闇に入っていきました。妻なしで信仰を保つということが、ほんとうに私にはできないということがわかりました。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

（伝道者　4・9、10）

もうひとつ、子育てで気づかされたことがありました。それは私の妻に対するそれまでの愛情は主にあってのものではなかったということです。この世の恋愛感情とあまり変わりがなかったのです。子育てで極限状態に追い込まれたとき、私たちは自分自身をようやく見せあうことになりました。自分にとって都合の良くない部分を見たとき、相手が自分にとって都合が良い時は愛し、自分に都合が悪いと愛せなくなる、という自己中心的な愛は消えてしまいました。主にあって互いに愛するということがなければ、相手のすべてを愛するということは不可能です。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

（エペソ　5・25）

単に愛するということでなく、主の愛によって愛するとはどういうことか、このことを通して知らされたと思います。

そのような中、妻の必死の祈りによって光が照らされ、ようやく私たちは回復させられました。互いに祈り、悔い改め、回復されました。そして主にあって一致し、主にあって愛するという、キリスト者としてあたりまえの家庭がようやく建てられはじめたのです。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。

（黙示　2・4、5）

現在は、相変わらず子育ては大変ですが、主によって一致することの大切さ、主から離れたときの悲惨さを体験しましたので、以前とは違う家庭となったと思います。少しずつ子供も手がからなくなり、私の仕事も少し余裕ができてきました。ここまで立ち直るのには、妻の実家の飽戸ご夫妻をはじめ多くのキリスト集会の方々に子育てを助けていただき、また多くの方々の祈りによって守られてきました。

主はこう仰せられる。「見よ。わたしはヤコブの天幕の捕われ人を帰らせ、その住まいをあわれもう。町はその廃墟の上に建て直され、宮殿は、その定められている所に建つ。彼らの中から、感謝と、喜び笑う声がわき出る。わたしは人をふやして減らさず、彼らを尊くして、軽んじられないようにする。」

（エレミヤ　30・18、19）

今でも主から離れると、妻に重荷を負わせたり、子供を自分の感情で叱ったりしてしまいますが、主に立ち返ることができるから感謝です。

肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

（ヘブル　12・10）

私はまだまだこの肉の父のような者です。子供たちが主を知り、畏れ、喜ぶ者となるように彼らに主を伝えていくということが、親として与えられた義務だと思っています。

入院

一九九八年四月、私は熱と嘔気が続くため、自分の外来の仕事中に自分の血液検査をしてみました。結果は思いがけず、肝機能が正常値の五十倍ぐらいまで上昇していました。すぐに勤務している病院の消化器内科の野口さんに相談し、その場ですぐに入院となってしまいました。親子そろって野口さんにお世話になることになりました。結局A型肝炎だったのですが、A型肝炎は慢性化することはありませんが、劇症化することがあります。私の肝機能はA型肝炎にしては重い方で、劇症化の危険がないわけではありませんでした。その時、私は心の隅で死を思いました。しかしなにがなんでも生きたい、という気持ちにはならなかったのです。天国の確信が主によって与えられていましたので、突然の病にも不思議とまったく動じませんでした。自分のようなタ

イプAの性格でしたらきっと慌てるはずなのですが、不思議な体験をさせていただきました。最終的には一カ月ほど入院し、完治しました。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。（ローマ　14・8）

常にこのように歩む、というわけにはいかない私ですが、いざというときの霊的な備えは主がしてくださっていることを知りました。

義母の入院

妻の母である飽戸安子さんが一九九九年六月に頚椎の椎間板ヘルニアのため入院しました。私は義母が元気なのをいいことに、子育てをほとんど任せっきりにしてきましたので、その無理が出てしまったのかもしれません。初めは私の勤めている病院に入院なさったので、よくお話をしに病室を訪れました。義母は寝たきりで、つらい中でもいつもにこにこされていて、共に祈るといつも私の方が慰められました。苦しみは常に主がご存じであられ、共に担ってくださるということを、身近に見て体験することができました。幸いにも手術をせずに退院でき、感謝でした。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。（イザヤ　63・9）

姉と弟のこと

すでに書きましたように、私には二人の姉と一人の弟がいます。私の母方の姉は、共に暮らしたことはなく、幼いころは遠い親戚とされてきました。今は横浜に住んでおり、時々会うことができます。私の婚約式や母の葬儀などで何度かキリスト集会にも来てくれました。身内のことで恐縮なのですが、なんでもできる、とても尊敬できる姉です。家族の救いは主の約束ですから、いつか必ず共に「主にある姉妹」となることを信じ、その時をなによりも楽しみにしています。

弟は共に育った唯一の兄弟です。幼いころとはいえ、いつもいじめてきたことをほんとうに申し訳なく思っています。今は浦和に住んでおり、たまに会ったりします。再び恐縮なのですが、私などよりずっと多くの賜物をもっている愛すべき男です。「共に主にある兄弟」となれる日を待ち望んでいます。

父方の姉は、父の実の姉に育てられました。つまり以前は従姉（いとこ）という関係で育ち、時々会っていました。今は心の病のため、入退院を繰り返していますが、すでに主に救われており、体調のいいときは吉祥寺キリスト集会にも集っています。精神的にはつらい日々が続いていますが、霊的には主のあわれみにより守られています。

私の両親はすでに天国ですので、近しい肉親は以上の三人の姉弟です。いつか共に集える日を確信し、待ち望んでいます。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽し

さであろう。（詩篇　133・1）

終わりに

先月は一九九九年の七月、巷ではノストラダムスの予言が取りざたされていました。その七月のある日、私は仕事中に急に胸の痛みと息苦しさを覚えました。タイプAが災いし私もこの年で心臓をやられたかと思いましたが、数分でおさまりました。この世の終わり、自分のこの世での終わり、ということを少し考えさせられました。しかしイエス様を信じる者は、むしろそれを待ち望むことができるのでほんとうに感謝です。私もいろいろなことを救われる前後に体験しました。多少はもって生まれた性質も変わってくるといいのですが、身近にいる妻に典型的なタイプAだと言われているようではまだまだです。身近なところでイエス様を証ししていくことは大切で難しいことですが、逆にそれができるようになれば本物かもしれません。しかしいくら自分で努力しても自分の性質を変えることはできないことは、自身の経験上よくわかっています。古い自分の性質はどうすることもできないのです。主の新しいいのち、新しい霊によって、少しでも変えられていくことが信仰の歩みが進んでいるということなのだと思います。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。（Ⅱコリント　3・18）

聖書の創世記にヤコブという人物が出てきますが、ヤコブは典型的なタイプAだと思います。そもそも生まれて来るときに、双子の兄に一歩先んじようと、兄のかかとをつかんで生まれてきたという我の強い人物です。胎内にいるときからすでに彼の性質は決まっていました。私もすでにもって生まれた性質はどうすることもできません。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。

（エレミヤ　17・9）

ところがこのヤコブは主に非常に愛された者でした。主に何度も試みを受けましたが、彼の性質はかたくなに変わらず、相変わらず策略をめぐらし、人をだます性質が一向に変わらないのです。しかし長年にわたって主に訓練を受けることによって、彼の性質は次第に変えられ、ついには穏やかな人となり、主に祝福された人となるのです。

私のような生まれながらの性質の者にさえ、いや、私のような性質だからこそ、主はこれまでさまざまな訓練を与えてくださり、何とか主に近い形に練り上げようとしてくださっているのです。主に特に深く愛されていることを覚えざるをえません。

わたしは、あなたがきっと裏切ること、母の胎内にいる時からそむく者と呼ばれていることを、知っていたからだ。わたしは、わたしの名のために、怒りを遅らせ、わたしの栄誉のために、これを押えて、あなたを断ち滅ぼさなかった。

見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試

みた。わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行なう。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。

（イザヤ　48・8～11）

私のこの世での歩みが、あとどのくらいかはわかりませんが、平均的な寿命だとすれば、まだ半分に達していないことになります。これからさらに主が練り上げ、整えてくださると確信しています。もう少しましな形で天国に行ければいいと思っています。召される時、再臨の時はいつかわかりません。いつもその時に備えて目を覚ましていたいものだと思います。

「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたし（イエス様）はあなたにいのちの冠を与えよう。」

（黙示　2・10）

「わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。」

（黙示　3・11）



尽きることのない主の憐れみ

辻　純

一九六七年千葉県に生まれる。浜田山小、東田中、東京芸術大学付属音楽高、東京芸術大学音楽部卒、同大学院中退。家族は夫陽一郎さん、長女眞理恵さん、次女百合香さん、長男光一さん。

私の母は今年三月ごろから、手の痺れや、肩や背中の痛みが日を追うごとにひどくなり、病院にかかっておりましたが、五月二十六日に、全身の痺れと歩行困難に陥り、入院しました。頸椎症ということで、頸椎の骨と骨の間の椎間板が三カ所潰れており、ヘルニヤとなっていました。これまで重いものを持ったり無理をした結果だと思われますが、私の子供たち三人と私は、今までさんざん母に世話になっていましたので、ほんとうに心苦しい思いでした。しかし、母は、「いつ、こうなってもおかしくなかったのに、純に一番助けが必要な間は、主は待っていてくださって、三人が幼稚園に入った今、この病気が与えられるなんて、主のご計画は、完全ね」と言ってくれました。入院して、頭蓋骨に穴を開け、金具をつけ、重りをつけて牽引する、というつらい治療を三週間しましたが、その間、全国のキリスト集会のみなさまのお祈りに支えられ、喜びと感謝のうちに、過ごさせていただきました。母も、「祈りのハンモックに寝ているようだ」と、支えられておりました。しかし、三週間の治療を終えて退院しますと、その日の夕方から、また全身に激痛が出て、かなり苦しみましたが、手術することとなりました。もう一度、頭に穴を開けて牽引しながらの手術です。この病気を通して、主のご栄光が現わされますように。また、母は

痛みに弱いので、どうぞ痛みからも守られますようにと祈っております。

母が入院しても、すべてのことが主から来ていると思うととても平安で、今までになかなか母と話す機会の少なかったまだイエス様を知らない姉が看病してくれたりと、主はすべてを益に変えてくださると皆で喜んでいました。しかし、一度退院しても治らず、長引くうちに、私は、母のことで次第に感情的になり、不安になり、私と同じ気持ちにならない主人に対して腹が立ち、入院中、主人がどれほど母のために尽くしてくれたか、また、祈ってくれたかをそっちのけにして、主人にあたりちらしました。子供にもあたりちらしました。また、自分がいろいろなことで、悩み、落ち込むと、今度は一番弱っている母にまで愛のない態度をとって傷つけてしまいました。そのほかにもいろいろなことが起こり、私はまったくイエス様に従う者とはとても言えない者であることを見せつけられました。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。（詩篇 73・21、22）

私は、自分がいかに妥協に満ちた信仰の者であり、また、いかになまぬるい信仰で自分中心の生活を送っている者であり、主に頼らずに自分の感情や自分の思いに従おうとする者であるかがはっきりとわかりました。しかしそれと同時に、このような私に対して、主がどれほどの愛をもって、誠実を尽くし続けてきてくださったかが同時に思い起され、そのことを証しさせていただき

たいと思うようになりました。

「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。（ルカ　8・39）

私とイエス様との最初の出会いは、教会付属の幼稚園に入ったときでした。母はその教会でイエス様を信じ、私も当時は毎週日曜学校に通い、神様といえばイエス様と思っていました。けれども、小学校に入ってからバイオリンを習いはじめ、次第にバイオリニストになりたいという夢を抱くようになってからは、練習も忙しく、だんだんと日曜学校には行かなくなりました。

子供時代の私は、とても感情に起伏があり、激しい性格でした。小学校のころはよく男の子と取っ組みあいのけんかをして、まわりに人垣ができたり、放送で呼び出されたりしました。

とても積極的で、気が強い反面、ものすごく臆病で、泣き虫で、神経質な面もありました。また、明るく活発で元気がよいと言われる反面、とても虚弱体質で、しょっちゅう欠席したりしていました。また学校では、勉強ができることが自慢で、いつもいばっていて、自己主張と自惚れが強い、めだちたがりやでしたが、バイオリンの先生のところでは口もきけないほどおとなしく、家ではいい子いい子と言われていました。

そのような、両極端の二面性があり、アンバランスな気質の私の、全面的な支えとなってくれたのは母でした。私は母にとても可愛がられ、愛されて育ちました。その陰で姉は淋しい思いを

していたのですが、当時の私はそんなことにも気づかず、ただただ母を独り占めして、バイオリンのレッスン、発表会と、いつも、母といっしょにいました。

何か不安なことがあればすべて母に相談し、母の言うとおりにすれば必ずうまくいく、という安心感がありました。とても依存心が強く、母がいなければ生きては行けない、と高校生になるころまで思っていました。

ほんとうにごう慢な学生時代でしたが、主はこんな私をその当時から恵んでくださり、友達を与えてくださいました。中学校の三年間を通して家族のように仲よくなった親友は石黒まりさんで、六年前に救われて今も同じ駅に住んでいて、毎週ごいっしょにキリスト集会に集っています。また、高校、大学を通しての二人の親友のうちの一人が私を吉祥寺キリスト集会へと導いてくださった清水詠美子さんで、もう一人の親友の町田倫代さんもいまでは救われて、ごいっしょに集わせていただいていますし、また、昨年は、やはり高校で同級生だった西沢綾さんが救われて、今では主にあって、ほんとうの親友にしていただきました。このように、現在も、中学、高校、大学の友人に囲まれて、キリスト集会に集わせていただいている現実を思いますと、学校もすべて主が決めてくださり、友達もすべて主がえらんでくださったのだと、改めて感謝の気持ちでいっぱいになります。特に高校は、一学年四十一人しかいない音楽学校でしたが、そのうちの四人がともにキリスト集会に導かれ、今も悩みや重荷を負っている他の同級生たちのために、心を一つにして祈らせていただけることは、主からのすばらしい恵みだと思います。バイオリンを習って

いたことも、すべてがご計画のうちだったことがわかります。

さて、話は戻りまして、私は高校三年の時に、音楽学校での親友とのライバル意識の問題、また母が絶対的な存在ではなかったことに気づいたことによる不安感、そして生きることの真の意味を考えた時に感じる虚しさなどから、教会に通うようになり、神様の存在を実感し、自分は信仰を持って救われた、と思いました。その時はほんとうにうれしくて、それまで、自分が自分を神として生きてきていたこと、自分で勝手に正義だと思い込んで貫いてきていたことこそが、ごう慢で、罪そのものであったことに気づかされました。そして、まさしく眼が開かれたかのようなうれしさがありました。それ以来、教会には熱心に通い、いろいろな本を読みました。

しかし、神様の存在は信じても、イエス様の十字架の意味がまったくわからなかった私は、いくら努力しても、いい人間になることができず、次第に偽善者である自分の存在に苦しくなってきました。

そんなとき、親友の清水詠美子さん、当時は河辺詠美子さんが、ご両親と三人で洗礼を受けられるということで、私と母とを吉祥寺キリスト集会に呼んでくださいました。大学一年の時でした。

それまで、教会生活で疲れはててなんの喜びもなくなっていた母は、それから喜んでキリスト集会に通うようになり、どんどんと変えられていきました。私はキリスト集会が特別いいと思いませんでしたが、母が喜んで通っているので、私だけ教会に通うわけにもいかず、親友の詠美子もいるし、ということで、キリスト集会に通い始めました。しかし、他の方々のように、イエス様、イエス様とはなれないのに、主にある姉妹と呼ばれ、詠美子といっしょにバイオリンのご奉

仕をしていても、心に喜びはありませんでした。ただ、良く生きたいという思い、神様を知っており、信仰を持っているのだから悪いことをしてはいけない、という思いだけが強く、それでもますます自分が良くなることはできない、というジレンマに苦しみ、自分はまわりを欺いて、仮面をかぶっているのではないかというような罪悪感にいつも襲われていました。キリスト集会にも集ったほうがよいのか、集わない方が正直なのか、悩んでいました。よく言われるように、イエス様だけではなく、すべての宗教を総括するような、また、理論的に納得できるような真理はないものか、と求め、大学時代には次第にルドルフ・シュタイナーの思想に傾倒していきました。

大学時代に、結婚するつもりで付きあっていた人がいました。大学四年のころには、それまで母親に依存していた分をすべてその人に依存するようになりました。そして、私にとって、その人がすべてとなっていきました。しかし母からは、「結婚するなら相手の人も救われないと駄目だ」と言われ、私も自分は信仰を持っていると思っていましたので、救われなければ結婚はできないと思い、彼を導いていました。彼はベックさんともお話をして祈ったりしていましたので、私はてっきり彼がみこころの人だと信じていました。

しかし、卒業を前にして、彼が、結婚するために信仰を持つことはできない、と言いだして、自分と信仰とどちらを取るんだ、と言いだしました。そして、実はそれが、彼の心変わりの口実だったことがわかり、彼と別れる決心をしました。

していたのですが、当時の私はそんなことにも気づかず、ただただ母を独り占めして、バイオリンのレッスン、発表会と、いつも、母といっしょにいました。

何か不安なことがあればすべて母に相談し、母の言うとおりにすれば必ずうまくいく、という安心感がありました。とても依存心が強く、母がいなければ生きては行けない、と高校生になるころまで思っていました。

ほんとうにごう慢な学生時代でしたが、主はこんな私をその当時から恵んでくださり、友達を与えてくださいました。中学校の三年間を通して家族のように仲よくなった親友は石黒まりさんで、六年前に救われて今も同じ駅に住んでいて、毎週ごいっしょにキリスト集会に集っています。また、高校、大学を通しての二人の親友のうちの一人が私を吉祥寺キリスト集会へと導いてくださった清水詠美子さんで、もう一人の親友の町田倫代さんもいまでは救われて、ごいっしょに集わせていただいていますし、また、昨年は、やはり高校で同級生だった西沢綾さんが救われて、今では主にあって、ほんとうの親友にしていただきました。このように、現在も、中学、高校、大学の友人に囲まれて、キリスト集会に集わせていただいている現実を思いますと、学校もすべて主が決めてくださり、友達もすべて主がえらんでくださったのだと、改めて感謝の気持ちでいっぱいになります。特に高校は、一学年四十一人しかいない音楽学校でしたが、そのうちの四人がともにキリスト集会に導かれ、今も悩みや重荷を負っている他の同級生たちのために、心を一つにして祈らせていただけることは、主からのすばらしい恵みだと思います。バイオリンを習って

し私のためにご自身をお捨てになった、神の御子を信じる信仰によっているのです。
（ガラテヤ　2・20）

これらのみことばによって、私は、もうイエス様がいらっしゃらなければ生きていくことはできないと思い、これからはほんとうにイエス様のために生きたいと思うようになり、洗礼を受ける決心をしました。卒業を間近に控えた二十二歳のクリスマスでした。

イエス様を受け入れてから、心は軽やかに、また、喜びでいっぱいになりました。

失恋の痛手から完全に解放されるには、ずいぶん長い時間がかかりましたが、それでもイエス様を信じてから、彼が主のみこころではなかったことがはっきりと示され、別れられたことは主の憐れみであったことがわかりました。そして私は、イエス様を信じていると思いながら、実は彼を偶像としていたこと、また私のうちには恐ろしい罪の根があり、私はどんな罪でも犯すことのできる者であったことも示されました。そして「神様、神様」と言いながら主を無視するような私を、主は一方的に愛し憐れんでくださり、私にほんとうの救いを与えてくださったこと、そして救いは私の努力や良い悪いに関係なく、ただイエス様の十字架の贖いによるものだったことがやっとわかるようになりました。幼稚園のころから聞かされていたことが、このとき、はじめて私のものとなったのでした。

それからは、私は偽善者だ、という苦しみから解放されて、イエス様にある自由と喜びの中に置いていただきました。またとても平安で、安らかな毎日となりました。

受洗してから、私は八カ月以上も不明熱が続いてすっかり体が衰弱し、結婚もできないのではないかというような体になっていました。大学院も休学したりしましたが、その間に七年間もイエス様の前に態度を明らかにしなかった父が救われ、私にとってはすばらしい霊の充電期間でした。その後、父と、母の妹である叔母の柿原さんとご主人三人揃って洗礼を受け、イエス様に従うことを証しすることができました。

受洗してから、私は、当時吉祥寺キリスト集会の一階で開かれていた、大学生のための集いであるギデオン会に出席するようになっていました。集い始めて一年あまりたったころでしょうか、今の主人と出会いました。最初は何とも思いませんでしたが、ぽつりぽつりと話すうちに、すてきな人だと思うようになりました。とても信仰的に尊敬できる人だなと思い、こんな人と結婚できれば私のような者でも夫に従えるのではないか、などと思いました。けれども、別に感情的に、好き、というわけでもなく、まったく現実味のないことでした。ところがある夏の日に、いきなり母から、「彼が結婚を前提としてお付きあいしたいということなんだけれど…」と聞かされ、びっくりしてしまいました。実は間に入ってくださる方がおられて、主人の方は一カ月も祈ったあげくのことだったらしいのですが、私にとっては突然のことでした。とてもうれしくて、私には夢

のようなことでした。

憧れの人とお付きあいをして、すぐに結婚が決まりました。双方ともに信者ですし、双方の両親も救われており、なんの問題もなく、ベックさんも喜んでくださって、七カ月後に結婚しました。私は、「主は取られたけれど倍にして与えてくださった」という喜びでいっぱいでした。けれども、以前、好きな人を偶像にしてしまった苦い経験がありましたので、いつも感情が信仰に先走らないようにと祈っていました。主人とのお付きあいでは平安があり、いつも祈りを中心としていたので安心でした。電話で話をするときにも必ずいっしょに祈りあいました。

結婚式の直前にはまた体を壊して新婚旅行はキャンセルし、体重も三十七キロしかないという状態でしたが、無事に結婚生活が始まりました。一九九二年の三月、二十四歳の時のことでした。

結婚してみると、ますますすてきな人に思えました。私は、それまでは感情的に好きにならないようにととても気をつけていましたが、結婚すると急に安心してしまい、のめり込みやすい、依存しやすい性質が出てきて、主人のことをものすごく好きになってしまいました。でも、結婚したんだからいいだろう、という思いがありました。

主人とは毎日いっしょに聖書を読み、いっしょに祈り、とても充実しているように思えました。主人はなにごとにもきびしい人で、きちんとしていて、時間に正確な人でした。ですから、なにごとにも、ルーズでだらしなく、いつも遅刻ばかりの私にはたびたび腹をたてましたが、最後には主にあってともに祈り、一つにもどしていただけました。毎日が楽しくて、こんなに仲のいい

夫婦はめったにないだろう、と思っていました。

私は毎日、ただ主人に気に入られたい、という思いで働いていました。

独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。

（Ⅰコリント　7・34）

まさしく、このみことばの通りでした。

結婚して半年後に、主人の父が召されました。私たちは、子供をすぐにでも欲しいと思いましたが、一年たっても与えられず、やはり体が弱いので無理なのか、と思っていました。しかし、その時与えられなかったのは主の憐れみで、私は家事だけでふうふういっていましたので、子供などとても無理だったのです。私は、家事というものを学生時代に一切したことがなく、バイオリンさえしていれば母が全部やってくれていましたので、家事がまったくできませんでした。私は家事となると、人並みはずれて手がのろく、また、だらしなくて、いい加減で、すぐにものを忘れたり、なくしたり、こわしたりしてしまい、ものすごく要領が悪くて、何をしたらよいのか、よくわからず、朝六時に起きても、その日の仕事が終わるのは夜の十時過ぎでした。ですから、専業主婦になったのに、ものすごく忙しい毎日でした。主人はやさしくて、「純は主婦で忙しいんだから、いいよ」とよく言ってくれましたが、今考えると、ほんとうに恥かしいような話です。

結婚後一年と二カ月後に、妊娠がわかりました。それと時期を同じくして、主人の母辻陽子さんのがんの発病がわかりました。最初の妊娠は、私にとって大きな喜びであり、主からのプレゼントに思われました。長女が生まれて五カ月のころ、二人めの妊娠がわかりました。そして、次の年に次女が生まれ、それから四カ月後に、主人の母が、天に召されました。

年子を持つことになったので、それまで続けていたバイオリンの生徒さんのレッスンや、キリスト集会でのバイオリンのご奉仕は一切できなくなりました。自分の時間というものはまったくなくなりました。睡眠不足も二年目に突入すると、体力的にもきつくなっていました。しかし、次女が生まれて五カ月のころ、またしても妊娠がわかりました。主から来ている、ということはわかっていましたが、物理的に、年子二人を育てているだけでもまったく余裕がないのに、これ以上どうやってもうひとり子供を育てられるのか、まったく自信がありませんでした。しかも、家事をてきぱきとこなせるほうならまだしも、子供がいなくても家事でふうふういっていた私は、もう家の中のことには手が回らなくなっていました。「イエス様、もう私には無理です」と、いつも主に訴えていました。苦しいつわりの中で、上の子のご飯をつくり、下の子の離乳食をつくり、いつも泣いていました。最初は子供を与えてください、与えてください、と祈っていたのに、たった三人続けて与えられると、うろたえてしまうような、ほんとうに情けない母親でした。

そのころ、子供が生まれてから、主人といっしょに祈る時間は取れなくなっていました。私は何とかいっしょに祈りたいと思いましたが、赤ちゃんがいつも泣いているので無理でした。でも、お母さんの病気のことは時々いっしょに祈ることができました。

主人の母が召された時、主人は母一人で育てられたようなものでしたので、そのかけがえのない導き手のお母さんを失ってしまって主人は大丈夫だろうか、と心配しました。二カ月ほどたったころから、主人は少しずつ、たぶん自分でも気づかないうちに荒れていきました。三番目の子は、そんな中、妊娠七カ月で前期破水となり、私は検診に行き、一歳十カ月の長女と、九カ月の次女を母にあずけたまま、一カ月の入院となりました。退院しても、起きているのは無理だと言われて、実家でさらに三カ月世話になったまま、三番目の長男が生まれました。母には大変な無理がかかったことと思います。母はこの時、ぎっくり腰にもなってしまいました。三年続けて、一月、二月、三月と毎年お産でした。病院の看護婦さんからは「来年は四月ですね。またお待ちしています」と言われてしまいましたが、さすがにそれはありませんでした。

私は、どうやって育てたらいいのか、とそればかり心配して暗い気持ちの妊娠期間をおくりましたが、それは私の不信仰であったことがわかりました。私が育てることは、実際に不可能なことでしたが、主は私以上にそのことをご存じで、必要な助けを備えてくださったのでした。考えられないほど多くの方々に助けていただき、子供たちを育てていただきました。私の両親をはじめ、私の姉、叔母、親友が助けに来てくれ、そして浜田山に住むキリスト集会の皆さんが、交代で子供を散歩に連れ出してくださったりしました。

その当時、長女は二歳二カ月、次女は一歳と十一カ月で、まだ誰一人として、自分でご飯を食べられず、着替えもできず、手をつながずには歩けませんでした。赤ちゃんがミルクを飲むと、

みんな哺乳瓶で飲みたがり、おむつのとれていた長女までおむつをしたがり、三人でベビーベッドに乗っかって、三人で哺乳瓶でミルクを飲んで、三人でおむつをして、外に出かけるときは二人乗りベビーカーに三人乗っけて歩きました。三人が同時に泣きだすと、私まで泣きたくなりました。とにかく、ご飯を食べさせ、おむつを代えて、おふろに入れるだけで一日が終わりました。ほんとうにそれだけでした。三番目の子には、座っておっぱいをあげることはほとんどしたことがなく、いつも何かしながら立ってあげていました。そのため、途中からは立ったままでないと飲まなくなってしまいました。寝るときは、一番上と二番目が両脇に寝て、三番目はお腹の上でうつ伏せ寝でした。夜中は三人が交代で何回も起きるので、いつも寝不足でした。

礼拝に行っても、お祈りもメッセージも何も聞こえませんでした。ただただ子供が同時に泣きださないように祈っていました。けれどもそんな中で、集会のご婦人がたが家まで来てくださって、手伝ってくださりながらいろいろとお話ができました。また、当時まだイエス様を知らなかった母の妹である叔母の保立さんが毎週お手伝いに来てくださり、イエス様を知り、救われました。そして、「私が救われたのは、この三人のお陰よ。三人年子で生まれていなかったら、私は必要なかったから、救われなかったわよ」と言ってくださり、私はほんとうにうれしくて、主はすばらしいと、心から主に感謝することができました。

このように大変な子育てでしたが、主がすべて備えてくださり、私は、主に背負われていることを実感する毎日でした。またあれほど虚弱体質だったのに、子供を生んでから体重も増え、体力がつき、熱もめったにでなくなりました。必要なものはすべて十分すぎるほど与えられており

ました。

しかし、このような主の恵みのただ中に生活させていただいていながら、私は、そのことで満足せずに、夫婦の問題で悩んでいました。

小児科医だった主人は、この時、忙しい大学に勤務が変わり、朝早くから夜遅くまで、土日もなく働いていました。今思えば、息つく間もなく三人の子供の父親になってしまい、仕事でも朝から晩まで子供の泣き声を聞いているのに、帰ってきても子供は寝ついていなくて泣いており、狭いマンションで一人になれる部屋もなく、逃げ出そうにも、両親を亡くしている主人には実家もない、というかわいそうな状況でした。仕事は人の命のかかったストレスの多いもので、疲れはてて帰ってきても休む場所のなかった主人はどれほどつらかったことだろうと思います。しかし、その時の私には、そんな主人の側の立場になってものごとを考えることはまったくできませんでした。

私はただ、「自分は大変なんだ。こんなに大変だということを主人に理解してほしい。新婚のころのように話をいっぱい聞いてもらいたい。そしてやさしくいたわってもらいたい」と、自分のことばかり考えていました。

しかし、帰ってきた主人はいつも不機嫌で、その原因は必ず私のいたらない家事でした。私は

そんな主人の要求に、いつも「私にはもうこれ以上できない」と泣いて言いかえしました。夜になると、いつも家の中は、争いと泣き声の渦の中でした。なんとか、主人を怒らせまい、と主人に注意されたことは紙に書いて冷蔵庫に貼り、主人から、今から帰る、という電話がなると、子供のことはすべてなげうって部屋を片付け、チェックリストで確認するのですが、もとができていない私は必ず別のことを注意され、問題を解決することはできませんでした。

私は、学生時代にはむしろ得意なことの方が多かったのですが、そのどれもが、結婚生活ではなんの役にも立ちませんでした。私は、なぜ、よりによって私が一番苦手な家事を、主人がこれほどまでに要求するのか、その時にはわかりませんでした。ただ主人があまりにも完璧なお母さんに育てられてしまったからだ、としか思えず、私とはあわなかったのだ、としか思えなくなりました。主人はいつも仕事で疲れはてて帰ってきて、育児と家事にはまったく関与しませんでした。私は、ご主人がいつも家事を手伝ってくれる、子供を面倒見てくれる、家族でいっしょにどこかに出かける、などという友達のご主人の話を聞くたびに、うらやましくてうらやましくてたまりませんでした。しかし、他のどの奥さんを見ても、私のように家事のできない人はいなくて、私は家事のできる人に対して妬みで一杯になってしまいました。私にもう少し家事の能力さえあれば、家庭はうまくいったのに、と思い、劣等感のかたまりになっていきました。主人は土日も仕事で、礼拝の時以外はほとんどいっしょにいることもなく、夫婦の間に、祈りも会話もなくなりました。

病院には、死にそうな子供たちがいて、私たち家族よりも、主人を必要としているのだ、と考

えて、何とか自分を納得させようとしましたが、何の役にも立ちませんでした。

信仰を持った者同志が結婚すれば、どんな問題が起きても、ともに祈りあい、苦しみの中でも喜んでいられるだろう、と想像していましたが、こんな風にいっしょに祈りあえず、一致のない苦しみが続くのだったら、なんのための信仰なのだろう、と思いました。なぜ、信仰を持っているのにこんなことが起こるのだろう、これでは未信者と同じなのではないか、もしかして、この結婚はみこころではなかったのかもしれないと思いました。どの方の証しを聞いても、救われる前はこんなにひどかったのに、今はこんなにすばらしくなった、というものばかりで、私の家にはもうこれ以上の解決はないのだろうか、私たちはほんとうは救われていなかったのではないか、とさえ思いました。また、未信者でも仲のいいご夫婦の話を聞くと、その方がうちよりはましのようにさえ思えてしまいました。礼拝には集っていましたが、集会の方から「しあわせそうね」なんて言われると、とても後ろめたく、また苦々しい気持ちになりました。他の人から立派な家庭のように誤解されていることが苦しくて、叫びだしたい思いでした。私は、とにかく争いのない、平和な家庭がほしいと思い、自分では必死に祈っているつもりでしたが、ほんとうは主のことを第一としているのではなく、ただ、自分の思い通りになってほしい、新婚のときのように主人に愛されて、優しくしてもらいたい、とそのことばかりを求めていました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

ベックさんのメッセージを聞くと、「自分が幸せになりたい、と思うものは、不幸になります。自分はどうでもいい、相手に幸せになってもらいたい、と願う者は、おのずから幸せになります」と言っておられました。私はまさに、「自分の幸せ」しか考えていない、と思わされましたが、どうしたらそこから抜け出せるのかわかりませんでした。私はイエス様を知っているにもかかわらず、毎日淋しくて淋しくてたまりませんでした。私はこんなに主人のことを愛しているのに、主人は私を愛してくれなくなった、と思っていました。そして、主人に愛されたい、愛されたいと思いながら、主人のことを裁き、イエス様に対してつぶやいていました。そして、聖書を開くといつも与えられるみことばが、「裁いてはいけません。裁かれないためです。」でした。

私たちのそむきの罪は、私たちとともにあり、私たちは自分の咎を知っている。私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。（イザヤ　59・12、13）

そのころ、子供の問題でも夫婦の問題でも一番大変な時に、「メサイアのバイオリンを弾いてほしい」という話がもち上がりました。私はとても不可能なことに思えました。しかし、中西さんが私の母に直接頼んでくださり、ここでまた母の世話になるのですが、主人も「自分は手伝えないけれども手伝ってくださる方があるならやってもいいよ」ということで、母をはじめ、叔母たちや浜田山の皆さんに助けられ、メサイアで弾かせていただくことになりました。このことは、私にとってとても大きな恵みとなり、それまで主のために演奏するということは、信仰的な何か

を自分で表現することだと思っていましたが、そのメサイアを通して、賛美とは造り上げるものではなく、ただ空になって自分自身を明け渡すことだ、ということを体験させていただきました。そして、音楽のみならず、このメサイアは、私たち夫婦が根本的に変えられるきっかけともなったのでした。

一九九六年の十二月、メサイアの第一回公演の三日前に、私はぎっくり腰で動けなくなりました。私はてっきり、このことはメサイアの祝福に対する、サタンの攻撃だと思いました。当日は、なんとか車椅子を借りて出演することができましたが、メサイアが終わってもぎっくり腰は治らず、くしゃみをしてしまったことにより、さらに悪化し、寝込んでしまいました。そして、とう実家にまたまた世話になることになったのです。このようなことが起こっても、私たち夫婦は、まだいっしょに祈ることができませんでした。

そして実家に帰っている時に問題が起き、主人との間に一致がなくなり私の中にあった主人に対する愛情も尊敬も信頼もそのすべてが音をたてて崩れていきました。そしてはじめて、もう主人を愛することはできない、また愛されたくもないと思いました。もういっしょに暮らすことなど不可能だと思いました。結婚生活はおしまいだ、と思いました。

私は今まで主人のことを愛しているつもりでいましたが、それは、自分にとってつごうのいいとき、つごうのいい主人を愛していたに過ぎなかったことを始めて知りました。私のうちには人を愛する愛はなく、ただ自己愛だけがあったのでした。また信仰以外でも、主人のうちで魅力的

だと思っていた数々のことが、こんな状態になってしまったらもはや何の意味もないことがわかりました。そして、実家に帰っていたことを機会に、二人がもう一度いっしょに祈れるようになるまで、もう会うのはやめましょう、ということになりました。事実上の別居でした。

主の憐れみによって、その別居期間はわずか一週間で終わらせていただきました。けれども私にとっては恐ろしく長い時でした。私の人生の中で二度目の闇でした。でも、イエス様が片時も離れずともにいてくださるという実感があり、絶望とはなりませんでした。そしてひたすら聖書を読むことしかできない時でした。しかし、みことばはずっと私を支えてくださり、イエス様がすべてを解決してくださるという、不思議な安心感がずっとありました。

一九九七年の一月二日に、私は主人に言われて家に戻りました。そしてその夜、主人に悔い改めが与えられ、いっしょに祈ろう、と言ってくれました。そしてその瞬間にすべてのわだかまりが溶けてしまったようになり、二人で久しぶりに、心を一つにして祈ることができました。それは考えられない奇蹟でした。この日が私たちのほんとうの結婚記念日だと思いました。

それから私たちの家庭は、主にあって少しずつ建て直していただきました。そして、主にある新婚生活が与えられました。また私の父から、夫婦が助けあって一つの家庭を作るために、自分たちでできることは親を頼らずやりなさい、どうしてもできないときだけお願いしなさい、という話があり、それ以来、今に至るまで、メサイアもコンサートも、練習の時はほとんどすべて主人が子供たちを見てくれるようになりました。どうしてもだめな時だけ両親に頼みました。そのことによって、子供たちも主人になつく時間が増えて、とても主人を慕うようになったのです。

私も、主人のうちに主が生きておられることを見せていただくようになりました。主人がすばらしいのではなく、主人のうちに働いていらっしゃる主だけがすばらしいのだ、ということがやっとわかりました。最初は主人が一方的に悔い改めて解決したかのように思われましたが、その後で、このような夫婦の問題は、私が主人を偶像とし、主よりも主人を求めている、その罪の結果として、主が私を主のみもとに立ち返らせてくださるために与えられたことがわかり、悔い改めました。私は、そのような所を通らなければ、主人を求めることから解放されませんでした。主はすべてご存じであられ、そのような方法をとられたのでした。私は主人に、主の方を向いてほしい、と望んでいるようなふりをして、実は、自分の方を見てほしかったに過ぎなかったのです。けれどもそれからは、私の方は見ないでほしい、ただ主だけを見てほしいと思えるようになりました。私を幸せにしてくださるのは主であって、主人ではなかったのでした。

しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。（詩篇　73・28）

「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れるものはのろわれよ。そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。」

（エレミヤ　17・5～7）

私はその昔、つきあっていた人を偶像とする罪をおかし、悔い改めていたのに、また同じ罪を

おかしていたのでした。そしてその罪に、自分ではどうしても気づくことができなかったのです。しかしイエス様は、それでも私を見捨てずに、イエス様のみもとに立ち返らせてくださいました。それほどまでに、主が私のことを愛してくださっておられて、すべてを綿密にご計画してくださったことを知ることができ、私は感謝でうれしくてうれしくてたまらず、それは、救われた時の喜び以上でした。何もしていなくても顔が笑ってしまって、聖歌が口から流れ出てきてしまうのでした。こんな喜びをくださるために、イエス様は私に苦しみをくださっておられたのです。私にとってはこれだけは嫌だ、と思うような苦しみでしたが、でも、それこそが私にとって必要であり、またそれは、このようにすばらしい解放と喜びをくださるためだったと知り、ますますうれしくなるのでした。

主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。　（哀歌　3・33）

そして、信仰的に落ちこんでいた私たちがみもとに立ち返ることができたのは、私たちのために祈ってくださっていたキリスト集会の皆さま方の祈りによるものだったことも示され、心から感謝いたしました。

その時以来、主人が仕事でずっといなくても、淋しいということがなくなりました。また、主人が忙しくても、必要な夫婦の会話の時間も与えられるようになりました。すべてのことは私にとって必要であり、主はすべてを益としてくださいました。

しかし、それからも問題がなくなったわけではなく、今度は自分自身に絶望することになりました。もはや人に頼ることができなくなった私は、主から眼を離したとたんに不安になり、ヒステリックになったり、ものすごく落ちこんで家事が手につかなかったりと、精神的にとても不安定になってしまいました。しかし、そのことによって、私は私自身のほんとうの姿を知ることができました。私は救われて、まわりから変わった、変わったと言われ、自分でも変わったような気持ちでいましたが、実はあいかわらずごう慢で、自分の思いどおりにものごとを進めたい、と思っている人間だということがわかりました。また、以前は自分の正義を振りかざしていたのが、救われてそうでなくなったと思っていましたが、実は、聖書を使って自分の正義を振りかざしており、主を利用して自分を正当化し、主人を裁いている者であったことなど、次から次へと示されました。また、私は、主よ主よ、と言っているつもりでしたが、実は子供が三人も生まれてから、忙しいのを理由に、祈りの時間をきちんと取らず、聖書もすぐ手の届くところに置いておきながら、実際にはめったに開くことがなくなってしまっていたのでした。私は、夫の助け手であるべきだったのに、私が夫を追い詰め、私の不信仰が夫を苦しめていたことがわかりました。

恥をもたらす妻は、夫の骨の中の腐れのようだ。　（箴言　12・4）

私はこのみことばの通りの者です。しかし、主人に愛されたいという思いが消えてから、主人に愛されていた、ということを感じられるようになりました。主人は、このような私を許し、受け入れてくれていたのでした。

それからは、祈りの時間をとらないと、自分がめちゃくちゃになってしまうことがわかりました。また、すべての敗北の原因が、私の足りない祈りにあることも知りました。でも今でも、全然足りません。

三人年子というのは、私にとっても、主人にとっても、ほんとうに負いきれない重荷でしたが、そのことを通して、自分ではなく、主にしか頼れない、また、人には頼れない、ということを学ばせていただき、私のために三人年子はどうしても必要だったということを身をもって知り、またしても感謝でいっぱいになりました。

また、家事についても、私は主人がどうして私にこのようなことを要求するのか、というようにしか考えられないでいましたが、家事についてのみことばを読み、ベックさんのメッセージから、妻の仕事は徹頭徹尾家事である、ということを聞くうちに、主が私に家事の大切さを教えてくださろうと、主人の口を通して語っていたことがわかりました。

私は学生時代、家事を馬鹿にしていました。信仰を持って、家事は妻の仕事である、と思うようにはなりましたが、それでも、まあ、生活できればいいではないかという思いがありました。私の家事の原動力は、最初のうちは、主人に好かれたい、後半は、主人に怒られたくない、というそれだけのものでした。しかし、主が、家事をすることを望んでおられる、ということを知らされたとき、自分の考えがまちがっていたことがわかりました。そしてそれからは、主に喜んでいただくために、また、主のために家事をしたいと思うようになりました。そう思うだけで、私の家事の腕はちっとも上がらず、また私は怠け者で、家はあいかわらず乱れていますが、不思議

なことに、そのことを示されてから、主人は私の家事についてほとんど何も言わなくなりました。このことを通して、私は、主人がとる態度というのは、主人がとっているのではなく、主が私に対して与えておられるのだ、ということを知らされました。夫婦の問題と思っていたことは、すべて私と主との信仰の問題だったということがわかりました。このことも感謝でした。

その後も、主の訓練はくりかえし与えられ、子育ても、最近はまた別の意味で難しく大変になり、イエス様に頼らなくなったとたんに、がみがみと怒ってばかりの嫌な母親になってしまいます。しかし、いろいろな問題に思えることは、実はすべてまわりの問題ではなく、私のうちに住む罪が原因であることを知りました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

（ローマ　7・18～20）

毎日が、この罪との戦いです。

また、救われていても、少しでもこの世に妥協すると、私の心はすぐに主の支配からサタンの支配へと変わってしまい、恐ろしい、めちゃくちゃな悪にそまってしまうことがわかりました。私は他の方々よりも肉の性質が強く、また肉の性質が聖書的なものと極端にかけ離れていること

もわかり、そのために、主から離れるとすぐにわかります。私が若いうちに救っていただいていたことは、もし、主を知らないでいたら、私はとっくに身を滅ぼしていたからだ、といつも思わされます。主は私を滅びの穴から助け出してくださいました。バイオリンのご奉仕をさせていただく時の前には、なぜかいつもいろいろなことが起こり、直前までぼろぼろの状態にさせられます。証しの前も同じでした。ほんとうにバイオリンを弾かせていただく資格のないもの、証しさせていただく資格のないものですが、主がそんな私をそのまま赦してくださり、受け入れてくださり、決して見捨てずに愛し続けてくださっておられるのは夢のようなことです。主がそんな風に一つ一つ罪を示してくださることがほんとうは主のご愛であることが実感できて、うれしくてうれしくてたまりません。自分自身で気づく罪は、私を自己嫌悪と、罪悪感のとりこにしますが、主に示していただいた罪は、悔い改めとともに私を解放し、喜びと感謝へと導いてくれます。そして、私のうちには、良いものは一つもありませんが、主はすべてを持っておられ、主の御霊に満たしていただいたとき、家庭は、主の愛と平和と一致と喜びと笑いと楽しさで満たしていただけます。あるいは、家庭の状況はそのままでも、心に平安と喜びが与えられます。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

（マタイ　6・33）

私たちの結婚指輪に刻まれているのは、ヘブル12章2節です。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。（ヘブル12・2）

私はこのみことばを決めた時、どうしてこのみことばなのか、いまひとつぴんときませんでした。しかし、いろいろなことを経るにつれ、このみことばがどれほど大切であるかを実感するようになりました。そして、このみことばを選んでくれた主人に、心から感謝しております。

主とともに生活することは、創造主であられる主に、毎日個人レッスンを受けているようなすばらしい充実感があります。どんな有名な先生のレッスンよりもすばらしく、しかもただです。私のように精神的に不安定でわがままのかたまりのようなものが、平安に、喜びの中に日々を過ごせるということは、私にとっては奇蹟です。このすばらしい主をすべての人に知っていただきたいと、心から祈っております。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

（Ⅰテモテ　1・15）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

（ローマ　7・24、25）

すべてを主から

飽戸安子

一九三八年東京に生まれる。平井東小、小松川第二中、都立小松川高校、不二服装専門学院卒。家族は夫弘さん、長女千弘さん。次女純さんは辻陽一郎さんと結婚。辻ご夫妻の証しはこの前にあります。

病院で。左はご主人の弘さん。



このたび、頸椎症という病気を通して主がくださいましたすばらしい愛のみわざについて、お伝えしたいと思います。もう二度と帰れないと思っていましたわが家に、一九九九年七月三十日に帰ることができました。

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」（マタイ　5・4）

このたびのイエス様のみわざを通して、「悲しむ者は幸いです。」とのみことばを、まことの真理として深く味わい知ることができましたことを心から感謝しております。

私は今年の三月頃から、少しずつ体の調子がおかしくなってきたので、近くの医院で見ていただいたところ、首の骨がつぶれているためだとわかりました。五月二十五日の明けがた、突然、ひどい痺れに体を襲われ、初めはどうなってしまうのかと大きな不安に襲われましたが、とにかく、夜の明けるのを待って、富山で整形外科医をしておられる仲井間さんに電話をしました。「全身が痺れておかしいのですが、どうしたらいいでしょうか」とお話している間にも痺れはどんどんひどくなり、身体の自由が奪われていくのがわかりました。私は「もうだめです。身体が動きません」と言いますと、仲井間さんは電話の向こうで「ゆっくりと深呼吸して、大丈夫ですから、あわてないで一一九番にかけてすぐ救急車を呼び、病院に行ってください。祈っています」と言ってくださり、おかげで私はパニック状態に陥ることなく救急車で病院に向かうことができました。運ばれる救急車の中で、「恐れるな。わたし（主）はあなたとともにいる。たじろぐな。わたしはあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守

る。」（イザヤ41・10）のみことばと、聖歌六五一番「主が私の手を取ってくださいます。どうしてこわがったり逃げたりするでしょうか。やさしい主の手にすべてをまかせて、旅ができるとは何たる恵みでしょう」が頭の中をかけめぐり、不思議な平安が私の心を支配し、すべてを主におゆだねしようと思いました。

後で知ったのですが、実はこの頃から、仲井間さんご夫妻が、たくさんのキリスト集会の方々に電話をかけてお祈りをお願いしてくださっていらしたことがわかりました。ほんとうに感謝なことでした。

思えばことの始めから、すべてのことが主の御手の中にあり、主が起こされたことだと確信できました。救急車で病院に運ばれるとすぐ、頭がい骨に四本のボルトがさしこまれ、頭がい骨の牽引療法が施されました。痛み苦しみの中にある時は、ただ「イエス様助けてください、憐れんでください」と心で叫び続けていました。そしてこの苦しみを通して、主の十字架上での苦しみが、どんなにつらいものであったかを想い、またイエス様が今、私の痛みさえも共に担っていてくださっておられることを思うと、心はただ感謝でふるえるほどでした。そして、少しずつ痛みから解放された時の嬉しさと喜びは、言葉に尽くせません。病院での日々はこんな私のそばに主が共にいてくださることの喜びと確信でいっぱいでした。聖歌六〇四番「数えてみよ主の恵み」のように、私のようなわがままで、自分勝手で、あわて者、粗忽者が、六十年間も無事生かされたこと、ただそれだけでも大きな恵みでした。そして何よりもイエス様にお会いでき、救われたこと、三人の孫たちの世話も楽しくさせていただけたこと…。今年は三人目の孫も幼稚園に入園

しました。そしてイエス様はこの時まで待っていてくださったのです。ほんとうに数えきれない恵みばかりですが、その中で最高の恵みは、ルカ10章にある、「もてなしのために気が落ち着かなかった」マルタ役ばかりしていた私が、頭がい骨牽引で自分の頭すら動かすことができない状態の中で、今度は「主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた」マリヤ役に徹することができたことです。そしていつも賛美とメッセージと聖書朗読のテープに慰められていました。聖書を手に持って読む力がないので、みことばを耳から聞いていたのです。そして病院で私に必要な言葉は、「すみません。お願いします。ありがとうございます」の三つだけで、ベッドからすべての方々を見上げ、ほんとうにごう慢だった私に、主の御前にへりくだり、ひれ伏すことを学ばせていただきました。

何一つできない状態になって初めて、すべてのことをイエス様に頼り、感謝と祈りの時を過ごすことができました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

このみことばは、私の座右の銘として一番好きなみことばでしたが、病院ではいつもこのみことばが心の中に満ちていました。この大きな恵みをいただいたのは、見舞ってくださる皆さまの賛美と祈りとお話を通してでした。私は「ベッドの上の植物だから、いのちの水をかけにきてくださいね。さもないと枯れてしまうから」とお願いしました。ほんとうにキリスト集会の方々と

のお話は楽しく、力と喜びを与えられました。

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。（Ⅱコリント　6・10）

このみことばのほんとうの意味を知りましたのも、イエス様へのたくさんの方々のお祈りに支えられてのことでした。また日赤病院での一カ月の入院では、いつも多忙でめったに会うことのない娘の夫の辻陽一郎さんと毎朝病室で二人だけでお祈りする静かなときをいただき、うれしくて、ほんとうの母子になれたようで、すばらしいイエス様のプレゼントでした。また、日頃多忙な長女も仕事を休んで看病に専念してくれました。お見舞いに来てくださったたくさんの方々に会い、賛美や祈りの中においていただいたことも、大きな恵みでした。そして三週間の牽引が終わり、やっとベッドから解放された喜びも束の間、牽引を外すとたった四時間ですぐ痺れが戻り、起きられない状態に戻ってしまいました。先生には手術をすすめられましたが、三週間寝たきりですっかりなえてしまった足をひきずって、ともかく一度退院しました。そして今度は仲井間さんのご紹介で、手術のため、東京女子医大に救急車で入院しました。

私は、自分の病が頸椎症とわかった時から、「手術だけはしたくない。手術をしないで良くなりたい」と思っていましたが、牽引を外して痺れが戻ってしまった時から、「もう早く手術をしてほしい。早く治りたい」と、そればかりを願っていたのです。すべてを主の御手からと祈っているようで、心の深い所では癒されたいという思いがあり、そのことを思った時、心の中に平安がな

くなることを知りました。すべてを主の御手にお任せし、「どうぞイエス様のみこころのままにしてください」と祈った時、ほんとうの平安が与えられることを経験し、自分のごう慢さ、ずるさ、偽善を思い知らされました。

しかし、入院してから手術の予定日までの十日間の間に、痛みと痺れが日毎に激しくなり、私の病状はどんどん悪くなる一方でした。私の病気は、首の骨の三カ所のヘルニアなのですが、少しでも頭を上げると、全身に痺れが起こり、首に激痛が走るのです。体中が針のむしろの上に寝かされているようにチクチクと痛み、最後の痛みはまるでのこぎりで首を切られるようで、弾丸が首と頭がい骨の間に撃ちこまれたような、そして最後は、槍の先に寝かされているような激しい痛みの中に置かれました。あまりの苦しさに、イエス様に「天に召してください」と祈りたいほどでした。

このような状態になった時、主治医は、「ヘルニアだけではなく、他の原因も考えられる」とのことで、突然手術が中止になりました。そして骨ずい液の検査をすることになりました。

二度とベッドから起き上がれることもなく、天に召される日も遠くないかも知れないと思いました。この痛みはただごとではない、と思ったからです。そしてイエス様と直接お目にかかれるうれしさと、先に天に召された多くの方々と会えることのうれしさを思う一方で、残される家族のことを思うと、心は重く沈みました。特に主人のことは、仕事以外ほとんど私にまかされておりましたので、突然の私の入院が主人にとって極めてきびしい訓練の時となったことを思うと、申しわけなく、気の毒でなりませんでした。また、このまま私がずっと寝たきりになったら、主

人はどうなるのだろうと、そんなことを考えると、とても不安になりました。しかしイエス様が主人と共にいてくださり、すべてをご存知で最善をなしてくださる方であると思うと、また平安になりました。

次の日、家族が見舞いに来てくれた時、私は思わずこんなことを言っていました。「ねえねえ、母のために用意してあるご葬儀用のパネルあるでしょ。あれ、私用に入れ替えて、写真はベックさんに写していただいたあの大きなの。みことばは私の好きなⅠテサロニケの「いつも喜んでいなさい…」のところ。そして絶対に延命処置と抗がん剤は使わないで。でも痛みにだけには弱いから痛み止めだけはたくさん使ってね。できれば八月だといいな。「よろこびの集い」があるから西軽井沢でできるもの」。

家族はげらげら笑いながら、「残念ながら首だけでは天国へ行けないよ」と軽く言われてしまいました。

しかし私は心の中で、「きっと何かおそろしい病気がひそんでいるに違いない」「もう家に帰ることはできないだろう」と思っていました。

このようにわが家に帰ることはないと思っていましたのに、主は憐れんでくださり、ステロイドの治療が功を奏し、やがて少しずつ起きられるようになり、退院へとこぎつけました。私がもう一度自分の足で立って帰ることなど、とても信じられないことでした。

病気の原因はまだはっきりとわかってはいませんが、すべてを主が起こされたことだけははっきりと確信しています。そして、すべてのことを主から受け取らせていただけた喜びは、救われ

ていなければいただくことのできないものでした。この喜び、このすばらしさは、何ものにも代えられません。この世にいのちを与えられ、救っていただいたことは、私にとって、私の人生の意義そのものでした。このことを思う時、一人でも多くの方に主イエス様を知っていただきたいとの思いでいっぱいになります。二カ月あまりの入院で、これらのことをほんとうに体験することができたことを心から感謝いたします。こんな者の罪のために十字架にかかり、私の罪を真っ白くしてくださいましたイエス様にただ感謝です。そして私がこの試練に耐えることができましたのは、その陰でたくさんのキリスト集会の皆さま方が祈ってくださったからです。深く感謝申しあげます。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。（ヤコブ　1・12）

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ
　ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰
　Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス
　イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24、25　Iヨハネ1・7　エペソ1・7　Iペテロ1・18、19
黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17
詩篇103・12　ヘブル13・5、6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25〜32　ピリピ4・6、7　Iペテロ5・7〜9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7、8　Iコリント10・13　Iペテロ5・8〜10
Iペテロ1・5〜7　IIコリント12・9、10　ローマ5・3〜5　ローマ8・28
イザヤ40・29〜31

すぐに起こるはずのこと「ヨハネの黙示録」第1・2巻のおすすめ

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の婦人のための学び会で、約1年半ほどの間に行なわれたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の第1、2、3章が、第2巻には黙示録の4、5、6、7章が収められています。この「すぐに起こるはずのこと」は、引き続いて次々に刊行されていく予定です。



すぐに起こるはずのこと
「ヨハネの黙示録」

ゴットホルド・ベック著

第1巻　価三〇〇円
第2巻　価二五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180―0004武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（8本1組）があります。



ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

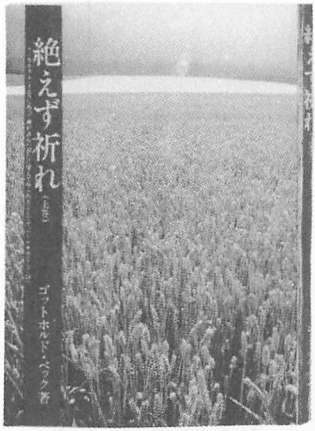
価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒１８０―０００４武蔵野市吉祥寺本町４―９―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

絶えず祈れのおすすめ

ゴットホルド・ベック著

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそそごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージがおさめられています。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

上巻価四〇〇円・下巻価二五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180―0004武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック編著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180－0004武蔵野市吉祥寺本町4－9－11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

第1集
25人の証し
価三三〇円

山本幸子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

第2集
25人の証し
価三五〇円

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのぼりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

第3集
42人の証し
価三三〇円

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、薛畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

第4集
66人の証し
価三五〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。

第5集
67人の証し
価二八〇円

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

第6集
70人の証し
価二八〇円

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

第7集
69人の証し
価四〇〇円

神竹孝至・礼子夫妻の「真理への道」「神様のご計画」、飽戸弘教授・安子夫妻の「奇蹟コミュニケーションで回心」「目を開かれて」、友野雅志・和子夫妻の「私のすべてであられる主」「主だけを見上げて」、岡本雅文、恵子夫妻の「弁解の余地はない」「生きよと言われた主」など。

第8集
88人の証し
価四〇〇円

がんで召された小川泰徳さんの「主とひとつになって」、道川勇雄・節子ご夫妻の「神はすべてのことを益としてくださった」「冷えた信仰から熱い信仰へ」、須藤辰郎・セツ子ご夫妻の「薬物依存からの解放」「主の憐みゆえに」、死に直面した方々の証し「希望にあふれて」など。

日本とドイツの出会い「ドイツよろこびの集いの記録」 価300円
1994年秋の「ドイツよろこびの集い」のカラー写真集。世界中から集まった約400人の方々のよろこびにあふれた写真と証し、ドイツ各地で行なわれた集会やメサイアの演奏会などの写真を通して、主のご臨在とご栄光が輝いています。B4変形で100ページです。

キリスト集会のご案内

・**牧師制度がありません**……キリスト集会には牧師制度はありません。いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

・**組織も、会則もありません**……キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

・**会員制度がありません**……会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

・**献金制度がありません**……月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行なわれ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

・**日曜礼拝**……祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

・**家庭集会**……家庭でひらかれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くの所で日曜礼拝が行なわれます。

・**よろこびの集い**……西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。快適で経済的な宿泊設備を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

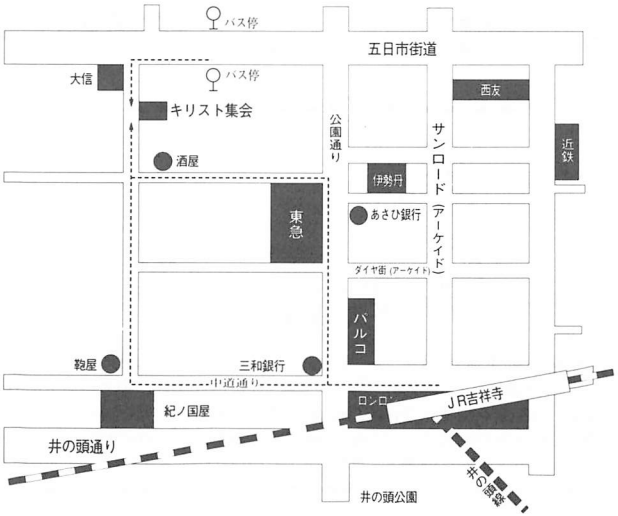
吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G．ベック　０４２２—２２—２０１６　東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 〒180-0004

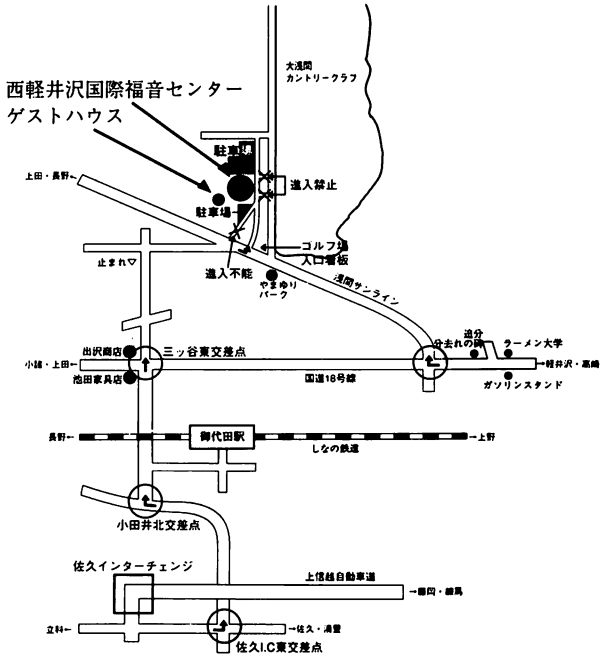
日曜礼拝	10:30	14:00	19:00	火曜学び会	11:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00	木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00				
中高生日曜クラス	9:00				



西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター
0267—32—6400（代） 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
0267—32—6444 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-33 〒389-0201



・上信越自動車道で佐久インターチェンジから出て上図を参考にしてください。
・しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分＝1000円程度。徒歩約45分＝3㎞。
御代田へは東京駅から長野行新幹線「あさま」で軽井沢乗りかえ、しなの鉄道3つ目御代田下車。
・国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5㎞先、2つ目の追分宿の信号を越え、左にESSOのガソリンスタンドを越えて浅間サンラインに右折して入ります。そこから約3㎞です。
・道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



















「光が、やみの中から輝き出よ。」と
言われた神は、私たちの心を照らし、
キリストの御顔にある
神の栄光を知る知識を
輝かせてくださったのです。

(Ⅱコリント 4:6)

定価 400円(本体381円)